

石丸遺跡 II

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2025

大府市
株式会社アコード



石丸遺跡周辺の遺跡（垂直写真：上方が北）



1区北半部全景（北東から） 左奥に普門寺と藤井神社を望む



1区南半部全景（西から） 境川対岸の西三河（刈谷市域）方面を望む



調査区全景（垂直写真：上方が北 1・2区合成写真）



楓（かえで）の意匠が線刻された山茶碗の小皿



木棺土壙墓 ST001 埋葬人骨・副葬品出土状況（北西から）

例　　言

1. 本書は、愛知県大府市横根町石丸地内に所在する石丸遺跡（愛知県遺跡番号 440010）の発掘調査報告書Ⅱである。
2. 発掘調査は、石丸遺跡における宅地造成工事に伴う事前調査として、事業者である有限会社 AT HOME（エーティーホーム）の委託を受けた株式会社アコード名古屋営業所が実施したもので、三者協定書に基づき大府市歴史民俗資料館が指導・監督を行った。調査面積は 1,160m² である。
3. 現地調査は、令和 5 年 9 月 15 日から令和 6 年 1 月 30 日まで行った。整理作業のうち一次整理作業は現地調査に並行して行い、その後の二次整理作業と報告書作成作業を令和 7 年 1 月 30 日まで行った。
4. 調査体制は、以下の通りである。

監督員：塚野真帆（大府市歴史民俗資料館 学芸員）

土木施工管理技術員：星 英司・吉井啓二（株式会社アコード名古屋営業所）

調査員：島軒 満（同上）

測量技術員：星 英司（〃）

調査補助員：原 進（〃）

発掘作業員：都築正夫 松本 萌 小崎哲也 白崎章裕 後呂香理 関 敦子 森山瑞恵 鈴木三津子
大西信成 中神京子 佐々木隆夫 信太淳英

吉田真優（南山大学大学院生） 上野 楓 安達友隆 加藤智大（以上、南山大学学生）

水野領介（愛知学院大学学生） 永井未歩（名古屋大学大学院生）

整理作業員：吉田真優 加藤智大 稲垣耕作 福井露子 清水千絵 田中保孝 谷口真理子 西田 楓
青木 香

5. 本書に掲載した自然科学分析のうち、出土人骨の分析を新美倫子氏（名古屋大学博物館）、出土炭化物の年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託した。

6. 本書の執筆は、第 1 章と第 2 章 第 1 節を塚野真帆、第 4 章 第 1 節と付論を青木 修（公益財団法人瀬戸市文化振興財団）、第 4 章 第 5 節を吉田真優（南山大学大学院生）・加藤智大（南山大学学生）、第 5 章 第 1 節を新美倫子（名古屋大学博物館）、第 5 章 第 2 節を株式会社パレオ・ラボ年代測定チーム（伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・三谷智広）が、他を島軒がそれぞれ行った。本書の編集は、塚野の指導・監督のもと島軒が行った。

7. 本書に掲載した遺構・遺物写真のうち、縄文土器・石器は吉田真優・加藤智大が撮影し、他を島軒が撮影した。空中写真撮影は有限会社ウイング（ドローン撮影）に委託した。

8. 現地調査及び出土遺物の整理・報告書の刊行にあたっては、下記の方々や関係機関から御指導、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。

青木 修 新美倫子 上峯篤史 太田輝夫 相木国男 加納邦郎 安藤巨富 安藤吉富 安藤和則
塚本市夫 久野一弘 吉川裕幸 門田哲侍 後藤完二 嘉納和之 白樺 淳 菅原章太 西村匡広
中村 毅 前田哲典 南山大学 名古屋大学博物館

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

公益財団法人瀬戸市文化振興財団 (敬称略、順不同)

9. 調査の成果は『あいちの考古学 2024』などで一部が紹介されているが、本書の記載内容がそれに優先する。

10. 発掘調査の記録及び出土遺物は、大府市歴史民俗資料館で保管している。

凡　　例

1. 本書に記載された測量成果は、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標（平面直角座標）第VII系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
2. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）に基づく。
3. 本書で使用した図面・写真的うち、巻頭図版1は国土地理院撮影の空中写真画像データを使用・加筆したものである。第2図の石丸遺跡周辺の遺跡分布図は、大府市発行の「大府市都市計画基本図」(1/5,000)と「大府市字図」(1/10,000)を使用・加筆したものである。第3図の大府市の遺跡分布図は、国土地理院発行の電子地形図(1/25,000地形図)と大府市教育委員会発行の「大府市遺跡等分布図」を使用・加筆したものである。
4. 本遺跡の土層に示した土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
5. 個別遺構平面図・断面図の縮尺は、1/60、1/100を基本とし、遺物出土状況図は1/20で掲載した。
6. 遺物実測図の縮尺は1/4を基本とし、縄文・弥生土器は1/3、石器は2/3の縮尺で掲載した。なお、遺物写真の縮尺は任意である。
7. 遺構種別の略記号は、以下のとおりである。

SA：掘立柱塀・柵 SB：掘立柱建物 SD：溝・堀 SE：井戸 SK：竪穴状遺構・土坑
SP：柱穴・ピット ST：墓・埋葬施設 SX：性格不明遺構

8. 掘立柱建物の方位は、東西棟は梁（短辺）の方位、南北棟は桁（長辺）の方位を基準とした。掘立柱塀・柵及び溝の方位は、東西方向に限り柱筋・溝に直交する方位を基準とした。
9. 今回の調査で出土した遺物の型式や年代観は、基本的に以下の『愛知県史』に拠った。なお、註と参考文献は章末に掲載した。

愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』愛知県

愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』愛知県

愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県

愛知県史編さん委員会編 2015『愛知県史 別編 窯業1 古代・猿投系』愛知県

愛知県史編さん委員会編 2017『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』愛知県

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 既往の調査	7
第3節 調査の方法	8
第4節 調査の経過	9
第3章 遺構	11
第1節 周辺の地形と基本層序	11
第2節 遺構の概要	14
第3節 掘立柱建物	14
第4節 掘立柱塀・柵	30
第5節 溝	37
第6節 土坑	46
第7節 土壙墓	52
第8節 性格不明遺構	55
第4章 遺物	56
第1節 土器・陶磁器	56
第2節 土製品	68
第3節 石製品	70
第4節 金属製品・鍛冶関連遺物	70
第5節 繩文・弥生時代の遺物	70
第6節 人骨・動物遺体	71
第5章 自然科学分析	72
第1節 土壙墓 ST001・002 出土の人骨	72
第2節 放射性炭素年代測定	73
第6章 遺構の変遷と総括	75
第1節 遺構の変遷	75
第2節 まとめ	81
付 論 第2次発掘調査の出土遺物について	83
出土遺物計測表	88

挿図目次

第 1 図 大府市の位置	1	第 39 図 土坑 SK001 平・断面図	46
第 2 図 石丸遺跡周辺の遺跡分布図	3	第 40 図 土坑 SK001 遺物出土状況図	47
第 3 図 大府市の遺跡分布図	4	第 41 図 土坑 SK002・007・008・010・011・ 015・016・018 平・断面図	48
第 4 図 確認調査トレーンチ配置図	6	第 42 図 土坑 SK019～021・024・026・028～ 031 平・断面図	50
第 5 図 調査区配置図	7	第 43 図 土坑 SK033・034・039・040・042 平・ 断面図	51
第 6 図 調査区地区割図	8	第 44 図 土坑 SK009・027 平・断面図・遺物出土 状況図	52
第 7 図 基本層序柱状図	11	第 45 図 土壙墓 ST001 平・断面図・遺物出土状 況図	53
第 8 図 1 区北壁・東壁土層断面図	12	第 46 図 土壙墓 ST002 平・断面図	54
第 9 図 調査区全体遺構平面図	13	第 47 図 性格不明遺構 SX002 平・断面図・遺物 出土状況図	55
第 10 図 掘立柱建物 SB01 平・断面図	15	第 48 図 SB04・05・07・12、SA03・13 出土遺物 実測図	56
第 11 図 掘立柱建物 SB02 平・断面図	17・18	第 49 図 溝 SD001 出土遺物実測図①	57
第 12 図 掘立柱建物 SB04 平・断面図	19・20	第 50 図 溝 SD001 出土遺物実測図②	58
第 13 図 掘立柱建物 SB03 平・断面図	21	第 51 図 溝 SD008 出土遺物実測図①	59
第 14 図 掘立柱建物 SB05 平・断面図	22	第 52 図 溝 SD008 出土遺物実測図②	60
第 15 図 掘立柱建物 SB06 平・断面図	23	第 53 図 溝 SD010 出土遺物実測図	60
第 16 図 掘立柱建物 SB07 平・断面図	24	第 54 図 溝 SD025 出土遺物実測図	61
第 17 図 掘立柱建物 SB08・09 平・断面図	25	第 55 図 溝 SD003・004・020・030 出土遺物 実測図	62
第 18 図 掘立柱建物 SB10 平・断面図	26	第 56 図 土坑 SK001 出土遺物実測図①	63
第 19 図 掘立柱建物 SB11 平・断面図	27	第 57 図 土坑 SK001 出土遺物実測図②	64
第 20 図 掘立柱建物 SB12 平・断面図	28	第 58 図 土坑 SK001 出土遺物実測図③	65
第 21 図 掘立柱建物 SB13 平・断面図	29	第 59 図 土坑 SK009・010・020・026・027・ 033 出土遺物実測図	66
第 22 図 掘立柱塀・柵 SA01・02 平・断面図	30	第 60 図 各ピット出土遺物実測図	67
第 23 図 掘立柱塀・柵 SA03 平・断面図	31	第 61 図 包含層出土遺物実測図	69
第 24 図 掘立柱塀・柵 SA04 平・断面図	31	第 62 図 試掘調査に伴う出土遺物実測図	69
第 25 図 掘立柱塀・柵 SA05 平・断面図	32	第 63 図 繩文・弥生時代の出土遺物実測図	71
第 26 図 掘立柱塀・柵 SA06・07 平・断面図	33	第 64 図 土壙墓 ST001 人骨等出土状況図	72
第 27 図 掘立柱塀・柵 SA08 平・断面図	34	第 65 図 曆年較正結果	74
第 28 図 掘立柱塀・柵 SA09・10 平・断面図	35	第 66 図 V期の遺構分布	76
第 29 図 掘立柱塀・柵 SA11・12 平・断面図	36	第 67 図 VI～VII期の遺構分布	80
第 30 図 掘立柱塀・柵 SA13 平・断面図	36		
第 31 図 区画溝 SD001・002・008、溝 SD006・ 007・009・010 平・断面図	39・40		
第 32 図 区画溝 SD001 遺物出土状況図	41		
第 33 図 区画溝 SD008 遺物出土状況図	41		
第 34 図 溝 SD025 平・断面図	42		
第 35 図 溝 SD025 遺物出土状況図	42		
第 36 図 溝 SD029・030・031 平・断面図	43		
第 37 図 溝 SD003・004・005 平・断面図	44		
第 38 図 溝 SD020 平・断面図	45		

挿入写真目次

- | | | | |
|------|-----------------------|------|--------------------|
| 写真 1 | 調査前風景（南から） | 写真 5 | 1 区北半部遺構掘削作業（東から） |
| 写真 2 | 1 区北半部表土掘削作業（北西から） | 写真 6 | 1 区南半部遺構掘削作業（南東から） |
| 写真 3 | 1 区北半部遺構掘削作業（南東から） | 写真 7 | 2 区遺構検出作業（北西から） |
| 写真 4 | 1 区北半部全景撮影前清掃作業（北東から） | 写真 8 | 出土遺物洗浄作業（南から） |

写真図版目次

- | | | | |
|--------|---|---------|------------------------------------|
| 写真図版 1 | 空中写真・全景写真① | 5 | SB02-SP300 断面（南から） |
| | 1 第1・2次調査区全景 | 6 | SB02-SP233 断面（南西から） |
| | 合成写真（垂直写真） | 7 | SB02-SP221 断面（南西から） |
| 写真図版 2 | 空中写真・全景写真② | 8 | SB02-SP584 断面（北東から） |
| | 1 1区北半部全景（南から） | 写真図版 10 | 掘立柱建物・塀・柵④ |
| | 2 1区北半部全景（垂直写真） | 1 | SB05-SP330 断面（北東から） |
| 写真図版 3 | 空中写真・全景写真③ | 2 | SB05-SP335・334 断面（南東から） |
| | 1 1区北半部全景（垂直写真） | 3 | SB05-SP312・313 断面（北西から） |
| 写真図版 4 | 空中写真・全景写真④ | 4 | SB05-SP327・326 断面（南から） |
| | 1 1区南半部全景（北から） | 5 | SB05-SP237 断面（南西から） |
| | 2 1区南半部全景（垂直写真） | 6 | SB05-SP684 断面（南西から） |
| 写真図版 5 | 空中写真・全景写真⑤ | 7 | SA03-SP521 断面（南西から） |
| | 1 1区南半部全景（南から） | 8 | SA03-SP566 断面（南から） |
| 写真図版 6 | 空中写真・全景写真⑥ | 写真図版 11 | 掘立柱建物・塀・柵⑤ |
| | 1 2区全景（北から） | 1 | 掘立柱建物 SB03、掘立柱塀・柵
SA03・04（北西から） |
| | 2 2区全景（北から） | 2 | SB03-SP513 断面（南西から） |
| 写真図版 7 | 掘立柱建物・塀・柵① | 3 | SB03-SP612 断面（南西から） |
| | 1 掘立柱建物 SB01、掘立柱塀・柵
SA01（南から） | 4 | SB03-SP619 断面（北東から） |
| | 2 SB01-SP026 断面（西から） | 5 | SB03-SP627・628 断面（南西から） |
| | 3 SB01-SP027 断面（西から） | 写真図版 12 | 掘立柱建物・塀・柵⑥ |
| | 4 SB01-SP028・051 断面（西から） | 1 | 掘立柱建物 SB04（垂直写真） |
| | 5 SB01-SP031 断面（東から） | 2 | 掘立柱建物 SB04（垂直写真） |
| 写真図版 8 | 掘立柱建物・塀・柵② | 3 | SB04-SP134 断面（北西から） |
| | 1 掘立柱建物 SB02・05、掘立柱塀・
柵 SA02（垂直写真） | 4 | SB04-SP334 断面（東から） |
| | 2 掘立柱建物 SB02・03・05、掘
立柱塀・柵 SA03・04（垂直写真） | 写真図版 13 | 掘立柱建物・塀・柵⑦ |
| 写真図版 9 | 掘立柱建物・塀・柵③ | 1 | SB04-SP230・231 断面（西から） |
| | 1 SB02-SP191 断面（南西から） | 2 | SB04-SP235 断面（南西から） |
| | 2 SB02-SP188 断面（南西から） | 3 | SB04-SP612 断面（南西から） |
| | 3 SB02-SP226 断面（南西から） | 4 | SB04-SP658・659 断面（南から） |
| | 4 SB02-SP253 断面（南西から） | 5 | SB04-SP627・628 断面（南東から） |
| | | 6 | SB04-SP683 断面（南西から） |
| | | 7 | SB04-SP710 断面（南西から） |
| | | 8 | SB04-SP307 断面（南西から） |

- 写真図版 14** 掘立柱建物・塀・柵⑧
- 1 掘立柱建物 SB06・07・12・13
掘立柱塀・柵 SA06・07 (南から)
 - 2 掘立柱建物 SB06・07・12・13、
掘立柱塀・柵 SA06・07 (北から)
- 写真図版 15** 掘立柱建物・塀・柵⑨
- 1 掘立柱建物 SB06・07、掘立柱塀・
柵 SA06・07 (東から)
 - 2 掘立柱建物 SB07・12・13、掘
立柱塀・柵 SA06・07 (東から)
- 写真図版 16** 掘立柱建物・塀・柵⑩
- 1 SB06-SP059 断面 (南から)
 - 2 SB06-SP347 断面 (南から)
 - 3 SB06-SP073 断面 (南から)
 - 4 SB07-SP088 断面 (南西から)
 - 5 SB07-SP144 断面 (南から)
 - 6 SB07-SP890 断面 (南から)
 - 7 SB12・13-SP108・107 断面(南西から)
 - 8 SB12-SP159 断面 (南西から)
- 写真図版 17** 掘立柱建物・塀・柵⑪
- 1 SB13-SP145・142 断面
(南東から)
 - 2 SB13-SP340 断面 (北西から)
 - 3 SB12・13-SP116・117 断面(東から)
 - 4 SB13-SP122-2 断面 (南東から)
 - 5 SA06-SP055 断面 (北西から)
 - 6 SA06-SP056 断面 (北西から)
 - 7 SA07-SP042 断面 (北西から)
 - 8 SA07-SP115 断面 (南西から)
- 写真図版 18** 掘立柱建物・塀・柵⑫
- 1 掘立柱建物 SB08・09、掘立柱塀・
柵 SA08・13 (南から)
 - 2 掘立柱建物 SB08、掘立柱塀・
柵 SA08 (南から)
- 写真図版 19** 掘立柱建物・塀・柵⑬
- 1 SB08-SP111 断面 (北から)
 - 2 SB08-SP762 断面 (北西から)
 - 3 SB09-SP133 断面 (北から)
 - 4 SA08-SP109 断面 (南西から)
 - 5 SA08-SP773 断面 (南西から)
 - 6 SA08-SP783 断面 (北から)
 - 7 SA13-SP744 断面 (南西から)
 - 8 SA13-SP718 遺物出土状況
(西から)
- 写真図版 20** 掘立柱建物・塀・柵⑭
- 1 掘立柱建物 SB10、掘立柱塀・柵
SA05 (東から)
 - 2 SB10-SP847 断面 (北西から)
 - 3 SB10-SP834 断面 (北西から)
 - 4 SB10-SP601 断面 (南西から)
 - 5 SB10-SP827・826 断面(南東から)
- 写真図版 21** 掘立柱建物・塀・柵⑮
- 1 掘立柱建物 SB11 (南西から)
 - 2 SB11-SP429・428 断面(北西から)
 - 3 SB11-SP389 断面 (北西から)
 - 4 SB11-SP391 断面 (東から)
 - 5 SB11-SP423 断面 (北西から)
- 写真図版 22** 掘立柱建物・塀・柵⑯
- 1 掘立柱建物 SB11、掘立柱塀・柵
SA09・10・11・12 (南から)
 - 2 掘立柱塀・柵 SA09・10 (南から)
 - 3 SA09-SP430 断面 (南西から)
 - 4 SA12-SP375 断面 (南東から)
- 写真図版 23** 溝①
- 1 区画溝 SD001・002 (北東から)
 - 2 区画溝 SD001 (南西から)
 - 3 区画溝 SD001 断面 (北東から)
 - 4 区画溝 SD001 遺物出土状況
(東から)
- 写真図版 24** 溝②
- 1 区画溝 SD002 断面 (東から)
 - 2 区画溝 SD008 遺物出土状況
(南東から)
 - 3 区画溝 SD008 遺物出土状況
(南東から)
 - 4 区画溝 SD008 遺物出土状況
(南から)
 - 5 区画溝 SD008・010 (東から)
 - 6 区画溝 SD008・010 (東から)
- 写真図版 25** 溝③
- 1 溝 SD003・004・005 (南から)
 - 2 溝 SD003・004・005 (南東から)
 - 3 溝 SD003 遺物出土状況
(北西から)
 - 4 溝 SD003・004・005 断面(東から)
 - 5 溝 SD003・004 断面 (東から)
- 写真図版 26** 溝④
- 1 溝 SD025 遺物出土状況 (南東から)

- 2 溝 SD025 遺物出土状況（南から）
 3 溝 SD025 断面（南東から）
 4 溝 SD025（南東から）
 5 溝 SD031（西から）
 6 溝 SD031 断面（東から）
- 写真図版 27 溝⑤**
- 1 溝 SD020（南から）
 2 溝 SD020 断面（南から）
 3 溝 SD030・029 断面（東から）
 4 溝 SD029・030（西から）
- 写真図版 28 土坑①**
- 1 廃棄土坑 SK001 断面（南から）
 2 廃棄土坑 SK001 遺物出土状況
 （北東から）
- 写真図版 29 土坑②**
- 1 SK002 断面（南から）
 2 SK002（南から）
 3 SK009 遺物出土状況（南から）
 4 SK009（南から）
 5 SK010 断面（東から）
 6 SK010（南から）
 7 SK016（南西から）
 8 SK018 断面（南から）
- 写真図版 30 土坑③**
- 1 SK019 断面（南西から）
 2 SK019（南西から）
 3 SK020・021 断面（東から）
 4 SK020・021・041（東から）
 5 SK024 断面（南から）
 6 SK024（南から）
 7 SK026 断面（東から）
 8 SK026（東から）
- 写真図版 31 土坑④・土壙墓①**
- 1 SK027 断面（北東から）
 2 SK027（南西から）
 3 SK028・ST002 断面（南から）
 4 SK028・ST002（南から）
 5 SK028・ST002（東から）
 6 SK029 断面（南から）
 7 SK030 断面（南から）
 8 SK030（南から）
- 写真図版 32 土坑⑤**
- 1 SK031 断面（南から）
 2 SK031（南から）
- 写真図版 33 土坑⑥・性格不明遺構**
- 3 SK033 断面（南から）
 4 SK033（南から）
 5 SK034 断面（西から）
 6 SK034（南から）
 7 SK039 断面（西から）
 8 SK039（東から）
- 写真図版 34 土壙墓②**
- 1 土壙墓 ST001 遺物出土状況
 （垂直写真：上方が北東）
 2 土壙墓 ST001 遺物出土状況
 （東から）
 3 土壙墓 ST001 断面（北東から）
 4 土壙墓 ST001（南西から）
- 写真図版 35 壁断面**
- 1 1区北半部中央西壁土層断面
 （東から）
 2 1区南半部南側東壁土層断面
 （北西から）
 3 2区北半部東壁土層断面
 （南西から）
- 写真図版 36 土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗類①**
- 写真図版 37 山茶碗類②**
- 写真図版 38 山茶碗類③**
- 写真図版 39 中国産青磁・中世陶器①（瀬戸・美濃窯産・常滑窯産）**
- 写真図版 40 中世陶器②（常滑窯産）・近世陶磁器・土製品・石製品・鍛冶関連遺物**
- 写真図版 41 繩文・弥生時代の遺物・動物遺体（貝類）・藤井宮御酒瓶子（参考資料）**

挿表目次

表1 大府市内の遺跡一覧	5	表7 V期の遺構変遷表	77
表2 掘立柱建物一覧	15	表8 SD025 出土遺物点数表	84
表3 掘立柱塀・柵一覧	37	表9 SD001 出土遺物点数表	86
表4 縄文・弥生土器、石器觀察表	71	表10 SD008 出土遺物点数表	86
表5 測定試料および処理	73	表11 SK001 出土遺物点数表	87
表6 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果		表12 出土遺物計測表	88
	74		

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

石丸遺跡は、大府市横根町石丸から北崎町城畠にかけて所在し、市域東部を流れる境川右岸の丘陵縁辺部（標高 10～14 m）に立地する。

遺跡が所在する大府市は知多半島の基部に位置し、北は名古屋市、西は東海市、北東は豊明市、東は刈谷市、南は知多郡東浦町に隣接している。市域は主に丘陵地からなり、北部の尾張丘陵と南部の大府丘陵に分かれる。丘陵を分ける谷地形の低地部には、名古屋市緑区に所在する水主ヶ池を分水嶺として、天白川水系の大高川、境川水系の鞍流瀬川が流れる。

市域東部は、標高 10～20m の河岸段丘と境川・逢妻川の支流が造り上げた低地が見られる。境川はその名前の通り、尾張国と三河国の国境を示す歴史的に重要な河川であり、みよし市、日進市、豊田市の 3 市境の三峯峠を源とし、豊明市、本市を南流して、刈谷市、東浦町付近で逢妻川と併流しつつ、知多湾最奥部の衣ヶ浦湾に流れる。

知多半島の丘陵部は、主に砂、シルト、粘土および砂礫層からなる第三紀鮮新世の常滑層群により構成され、このような地質的条件は本遺跡近くにも分布する山茶碗窯をはじめとした窯業生産の成立基盤となっている。

第2節 歴史的環境

大府市域では現在 180 か所の遺跡が確認されている（表 1）。そのうちのほとんどが丘陵上に展開する窯業遺跡である。ここでは、石丸遺跡周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡には、共栄遺跡（共栄町六丁目）がある。

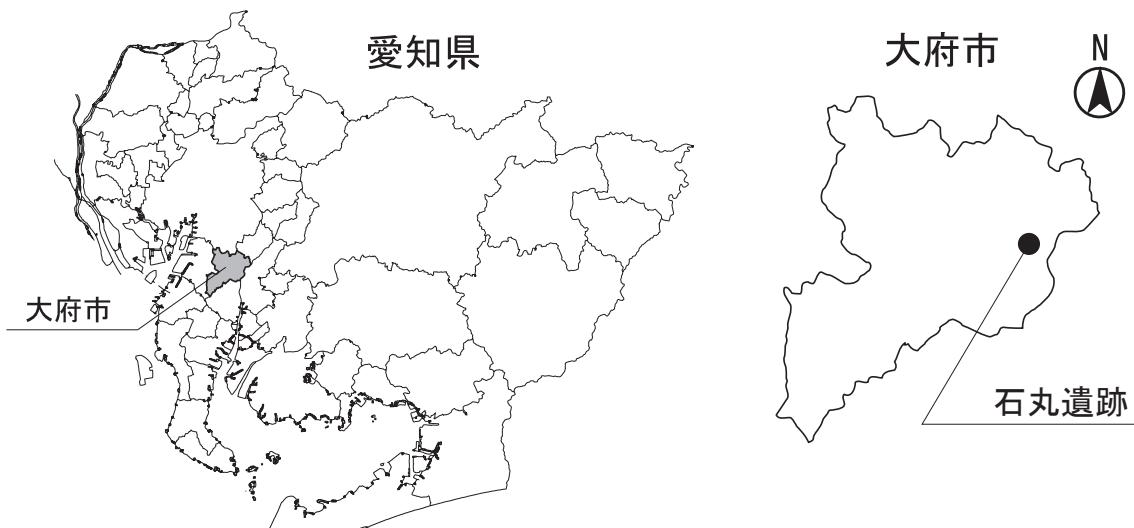
共栄遺跡では、後期旧石器時代のナイフ形石器や角錐状石器などが採取されている。また、縄文時代に属する石鏃も出土していることから、旧石器時代から縄文時代にかけて、既に市域において人々が暮らしていた様子がうかがえる。

縄文時代 縄文時代の遺跡には、桟敷貝塚（朝日町五丁目）がある。

桟敷貝塚では、縄文土器、石器、貝類が出土しており、令和元年度に実施された発掘調査において、縄文時代晩期に属する条痕文土器や黒曜石の剥片、弥生土器などが出土している。

弥生時代 弥生時代の遺跡には、子安神社遺跡（共和町子安）、惣作遺跡（横根町惣作）などがある。

子安神社遺跡では、弥生時代後期から終末期にかけての溝が検出され、環濠が築かれていた可能性が指摘されている。また、高环形や甕形などの弥生土器が多数出土しており、子安神社遺跡は弥生時代の集落遺跡と考えられている。惣作遺跡は、弥生時代中期前葉の土器が出土しているほか、古代



第1図 大府市の位置

の須恵器、土師器、灰釉陶器の他、多量の製塙土器が出土しており、旧衣ヶ浦湾西岸域では最奥部に位置する土器製塙遺跡として知られている。

古墳時代 古墳時代の遺跡には、源吾遺跡（森岡町八丁目）、高山古墳（中央町四丁目）などがある。

このうち源吾遺跡では、土師器が採集されているものの遺跡の全容は分かっていない。高山古墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳と推定されている。出土遺物としては、鏡、鉄鎌、山茶碗が大府市歴史民俗資料館へ寄贈されているが、いずれも古墳時代に属する遺物ではない。

古代から中世 愛知県は古代以降、窯業地帯としての性格を帶び始める。特に尾張東部から三河西部に展開する「猿投窯」、知多半島に展開する「常滑窯」は、日本有数の窯業地帯として知られており、大府市はこれら二つの窯業地帯が重複する地域であることが特徴的と言える。

現在確認されている市内最古の窯業遺跡は、平安時代中期初頭の灰釉陶器を生産した高根山C古窯群（北崎町六丁目）で、これに続く窯跡として、平安時代中期の灰釉陶器を生産した野々宮古窯（宮内町四丁目）が確認されている。

平安時代後期から鎌倉時代（12世紀～13世紀）の窯業遺跡には、吉田第1・第2号窯（吉川町七丁目）、ハンヤ古窯（吉田町四丁目）、神明古窯群（半月町二丁目）、海陸庵古窯群（森岡町五丁目）、深廻間A・B古窯群（柊山町四丁目）、深廻間C古窯群（柊山町三丁目）、砂原古窯（共和町四丁目）、瀬戸B・C古窯群（共和町七丁目）、奥谷古窯（共西町一丁目）、久分古窯群（共西町四丁目）、別唄古窯群（共和町別唄）、森岡第1号窯群（森岡町四丁目・九丁目）、森岡第2号窯（森岡町九丁目）、鴨池東古窯群（桃山町一丁目）、川池西古窯（桃山町四丁目、若草町一丁目）、石龜戸古窯群（横根町石龜戸）、上入道古窯（共和町上入道）、ガンジ山A古窯群（桃山町三丁目）、羽根山古窯群（横根町羽根山）、立合池西A・B古窯群（追分町五丁目）などがある。それぞれ、大府丘陵と尾張丘陵に点在しており、窯体に加え多くの中世陶器が出土しており、いずれも山茶碗・小碗・小皿を主要器種に生産したことが明らかになっている。

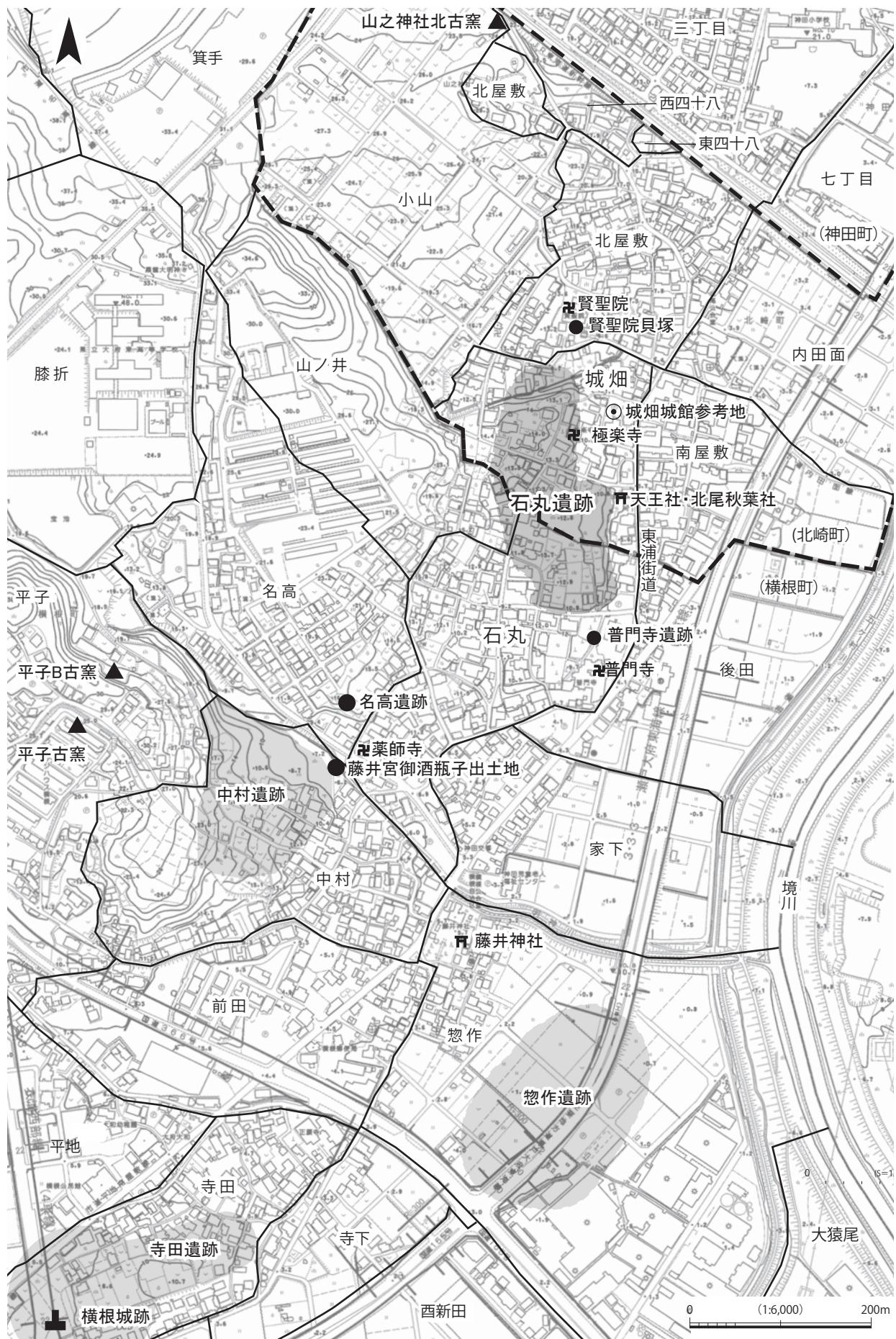
市域の窯業については、平安時代末期から鎌倉時代に至るまでの約200年間にその生産活動が集中し、13世紀後葉以降になると窯業遺跡が廃絶することが特徴と言える。

石丸遺跡に近接した窯業遺跡としては、平子B古窯（横根町平子）、平子古窯（横根町平子）、山之神社北古窯（北崎町北屋敷）が挙げられるが、いずれも石丸遺跡からは距離がある場所に所在している。窯業遺跡以外の遺跡としては、賢聖院貝塚（北崎町北屋敷）、普門寺遺跡（横根町石丸）がある。賢聖院貝塚は石丸遺跡の北に位置しており、ハイガイ、シジミなどの貝層と共に戦国時代に属する土師器内耳鍋や天目茶碗などが採集されている。普門寺遺跡は石丸遺跡の南に位置しており、石丸遺跡と同時期の中世の遺物が散布していることが確認されている。

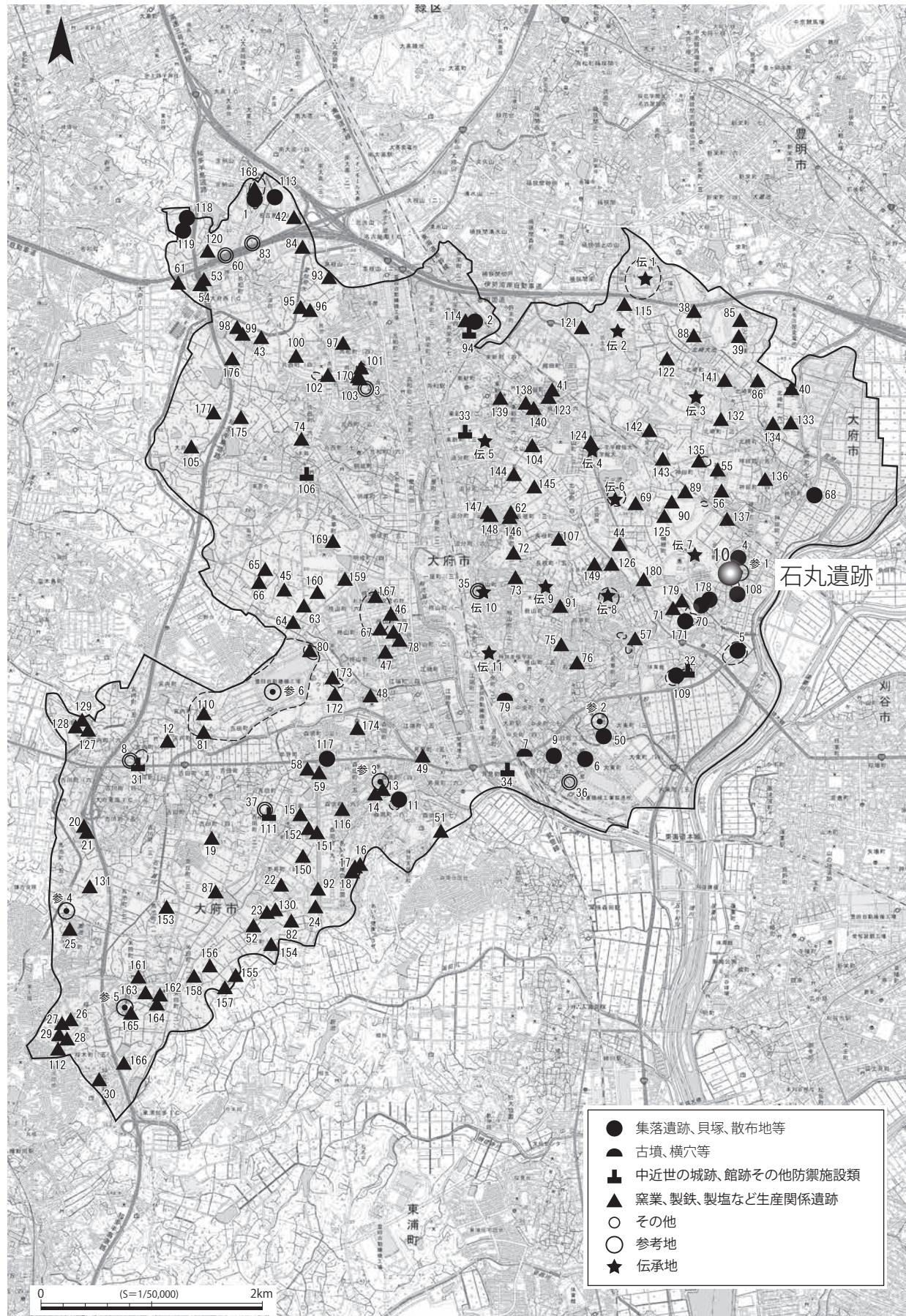
石丸遺跡に近接した横根町中村からは、愛知県指定文化財である「藤井宮御酒瓶子」が発見されている。「藤井宮御酒瓶子」は、藤井宮大明神御酒瓶子とヘラ書きが施されている12世紀後半の短頸壺（写真図版41-246）である。藤井宮大明神とは、横根町惣作に鎮座する藤井神社のことであり、「藤井宮御酒瓶子」は、藤井神社の社宝として大府市歴史民俗資料館に寄託されている。

室町時代末期の戦乱の時代を迎えると、市域では横根城跡（横根町寺田）、吉川城跡（宮内町四丁目・五丁目）、追分城跡（東新町三丁目）などの城館や砦などが市内各所に築かれるようになる。

近世 近世に属する遺跡としては、円通寺古墓（共和町神戸）、円通寺経塚（共和町小仏）、東光寺経塚（共和町五丁目）がある。円通寺古墓と円通寺経塚は市内に所在する円通寺に関連した遺跡であり、前者は近世墓地、後者は享保5（1720）年銘の経碑に近い場所から大般若経の経典に見立てた墨書の礫石が多数出土している。東光寺経塚からも大量の墨書の礫石が出土している。



第2図 石丸遺跡周辺の遺跡分布図



第3図 大府市の遺跡分布図

表1 大府市内の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡番号	時代
1	子安神社遺跡	弥生～中世
2	共栄遺跡	旧石器・縄文
3	東光寺経塚	近世
4	賢聖院貝塚	中世
5	惣作遺跡	弥生～中世
6	棟敷貝塚	縄文
7	高山古墳	古墳
8	正官墳（正官塚）	中世
9	南島貝塚	不明
10	石丸遺跡	中世
11	源吾遺跡	古墳
12	野々宮古窯	平安
13	森岡第1号窯群	中世
14	森岡第2号窯	中世
15	北向古窯	中世
16	旧中部病院第1号窯	中世
17	旧中部病院第2号窯	中世
18	旧中部病院第3号窯	中世
19	ハンヤ古窯	中世
20	吉田第1号窯	平安
21	吉田第2号窯	平安
22	律粉古窯	中世
23	籠染第1号窯	中世
24	籠染第2号窯	中世
25	大日古窯	中世
26	外輪第1号窯	不明
27	外輪第2号窯	不明
28	外輪第3号窯	不明
29	外輪第4号窯	不明
30	骨田未古窯	中世
31	吉川城跡	中世
32	横根城跡	中世
33	追分城跡	中世
34	石ヶ瀬古戦場跡	中世
35	大清水井戸跡	中世
36	おしも井戸跡	不明
37	芦沢井戸跡	中世
38	福池古窯	中世
39	大根古窯	中世
40	高根山古窯群	平安～中世
41	梶田古窯	中世
42	別唄古窯群	中世
43	権兵衛池古窯	中世
44	名高山古窯群	中世
45	立根A古窯群	中世
46	深廻間A古窯群	中世
47	柊山A古窯群	中世
48	石ヶ瀬古窯	中世
49	江端古窯	中世
50	延命寺貝塚	不明
51	割木A古窯跡	中世
52	東端古窯	中世
53	才田A古窯	中世
54	才田B古窯	中世
55	山手A古窯	中世
56	山手B古窯	中世
57	羽根山古窯群	中世
58	神明古窯群	中世
59	海陸庵古窯群	中世
60	円通寺古墓	近世
61	上入道古窯	中世
62	長根山A古窯群	中世
63	立根B古窯群	中世
64	立根C古窯群	中世
65	立根D古窯群	中世
66	立根E古窯	中世
67	深廻間B古窯群	中世
68	西浜田遺跡	平安
69	二ッ池東古窯	中世
70	藤井宮御酒瓶子出土地	中世

遺跡番号	遺跡番号	時代
71	平子古窯	中世
72	鴨池北古窯群	中世
73	鴨池東古窯	中世
74	下北山古窯群	中世
75	川池西古窯	中世
76	石龜土古窯	中世
77	柊山B古窯	中世
78	柊山C古窯	中世
79	雨兼池西古墳	奈良
80	山口古窯群	中世
81	大高山古窯	中世
82	籠染第3号窯	中世
83	円通寺経塚	近世
84	大廻間古窯	中世
85	みどり公園古窯	中世
86	高根山西古窯	中世
87	口無池西古窯	中世
88	北崎大池北古窯	平安
89	箕手A古窯	中世
90	箕手B古窯	中世
91	ガンジ山A古窯群	中世
92	律粉東古窯群	中世
93	上徳古窯群	中世
94	丸根城跡	中世
95	大深田古窯	中世
96	荒池古窯群	中世
97	砂原古窯	中世
98	木根A古窯群	中世
99	木根B古窯群	中世
100	久分古窯群	中世
101	瀬戸B古窯群	中世
102	奥谷古窯	中世
103	瀬戸A古窯	中世
104	北山古窯	中世
105	石原古窯群	中世
106	長草城跡	中世
107	長根山B古窯	中世
108	普門寺遺跡	中世
109	寺田遺跡	中世
110	大高山西古窯群	中世
111	景清屋敷跡	中世
112	外輪南古窯	中世
113	炭焼遺跡	弥生～中世
114	上り戸古窯	中世
115	井田古窯群	中世
116	池之分古窯	中世
117	山中遺跡	奈良～中世
118	児子廻間A遺跡	奈良～中世
119	児子廻間B遺跡	古墳～中世
120	下入道古窯	中世
121	坊主山A古窯群	中世
122	井田B古窯	中世
123	梶田B古窯群	中世
124	石龜戸古窯群	中世
125	箕手C古窯群	中世
126	古井戸A古窯	中世
127	長峰北A古窯	中世
128	長峰北B古窯	中世
129	長峰北C古窯	中世
130	籠染西古窯	平安
131	井戸場古窯群	中世
132	西定保根A古窯群	中世
133	高根山B古窯群	平安～中世
134	高根山C古窯群	平安
135	山手C古窯群	中世
136	上り坂古窯	中世
137	山之神社北古窯	中世
138	八代山A古窯	中世
139	八代山B古窯	中世
140	八代山C古窯	中世

遺跡番号	遺跡番号	時代
141	西定保根B古窯群	平安～中世
142	箕手D古窯	中世
143	箕手E古窯群	中世
144	上東山A古窯	中世
145	上東山B古窯	中世
146	立合池東古窯群	中世
147	立合池西A古窯群	中世
148	立合池西B古窯群	中世
149	古井戸B古窯	中世
150	脇ノ畑A古窯	中世
151	脇ノ畑B古窯	中世
152	脇ノ畑C古窯	中世
153	馬池東古窯	中世
154	東端B古窯	中世
155	毛分田A古窯	中世
156	毛分田B古窯	中世
157	家下古窯	中世
158	上家下古窯	中世
159	車池A古窯	中世
160	車池B古窯	中世
161	森東古窯	中世
162	前田A古窯	中世
163	前田B古窯	中世
164	前田C古窯	中世
165	森前古窯	中世
166	骨池南古窯	中世
167	深廻間C古窯群	中世
168	子安古窯	平安～中世
169	上田ノ松古窯	中世
170	瀬戸C古窯群	中世
171	中村遺跡	古墳～中世
172	ウドA古窯	平安
173	ウドB古窯	平安
174	森岡平子古窯	中世
175	笛山古窯	中世
176	木根C古窯	中世
177	西忍場古窯	中世
178	名高遺跡	奈良～中世
179	平子B古窯	中世
180	午池東古窯	中世

参考地・伝承地一覧

番号	名称
参1	城畠城館参考地
参2	延命寺城館類似遺構
参3	猪伏村城館参考地
参4	尾張藩吉田屯所
参5	米田古城参考地
参6	大府飛行場跡
伝1	井田地区古窯跡群伝承地
伝2	鉄工団地内古窯跡群伝承地
伝3	西定保根地区古窯跡群伝承地
伝4	至学館大学内古窯跡群伝承地
伝5	阿部屋敷
伝6	ニッ池地区古窯跡群伝承地
伝7	沢井丹後屋敷
伝8	いきいきタウン内古窯跡群伝承地
伝9	ガンジ山地区古窯跡群伝承地
伝10	大清水館伝承地
伝11	七津大夫屋敷伝承地

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、有限会社 AT HOME(以下、事業者)が大府市横根町石丸地内で計画する宅地造成工事に伴う案件であり、計画地には周知の埋蔵文化財包蔵地である石丸遺跡が所在していた。

石丸遺跡（愛知県遺跡番号 440010）は、昭和 32（1957）年に発見され、平成 9（1997）年に大府市教育委員会（以下、教育委員会）により現地踏査が実施された。現地踏査では、横根町石丸から北崎町城畠地内にかけて中・近世の遺物が採集されたことから、石丸遺跡は比較的広範囲におよぶ遺跡であると考えられてきた。

平成 23（2011）・25（2013）年には、教育委員会により個人住宅建設に伴う確認調査が実施され、山茶碗、片口鉢 I 類、土師器内耳鍋などの遺物を伴う土坑や溝を検出し、石丸遺跡は鎌倉時代から室町時代に属する周知の遺跡として登録されることとなった。その後の令和 3（2021）年に宅地造成工事に伴う発掘調査（石丸遺跡 I）を実施しており、鎌倉時代から室町・戦国時代を中心とした遺構・遺物が検出された。

今回の発掘調査は、令和 3 年 3 月 30 日に事業者から事業対象地での宅地造成工事を実施する旨の相談があったことを端緒とし、この後の令和 4 年 4 月 21 日に事業者より埋蔵文化財包蔵地の照会があ

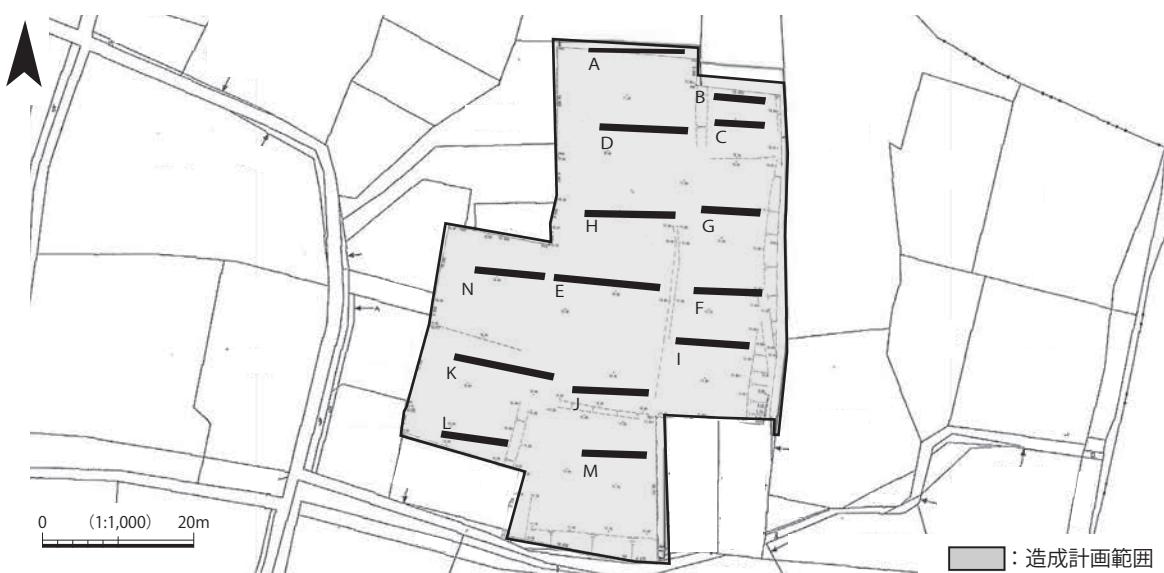
り、大府市より対象地での開発行為を実施するにあたり、事業対象地での確認調査による遺構・遺物の残存状況の把握が必要となった。そこで確認調査の実施に先立ち、令和 5 年 3 月 17 日に確認調査依頼書と地権者承諾書を受け取り、調査へ向けての準備を進めることとした。

確認調査は、大府市が令和 5 年 3 月 28 日から 3 月 30 日までの計 3 日間で実施した。確認調査では、事業対象地において計 14 箇所のトレント（第 4 図 A～N）を設定して調査を実施し、そのうち 11 箇所で遺構・遺物が検出された。

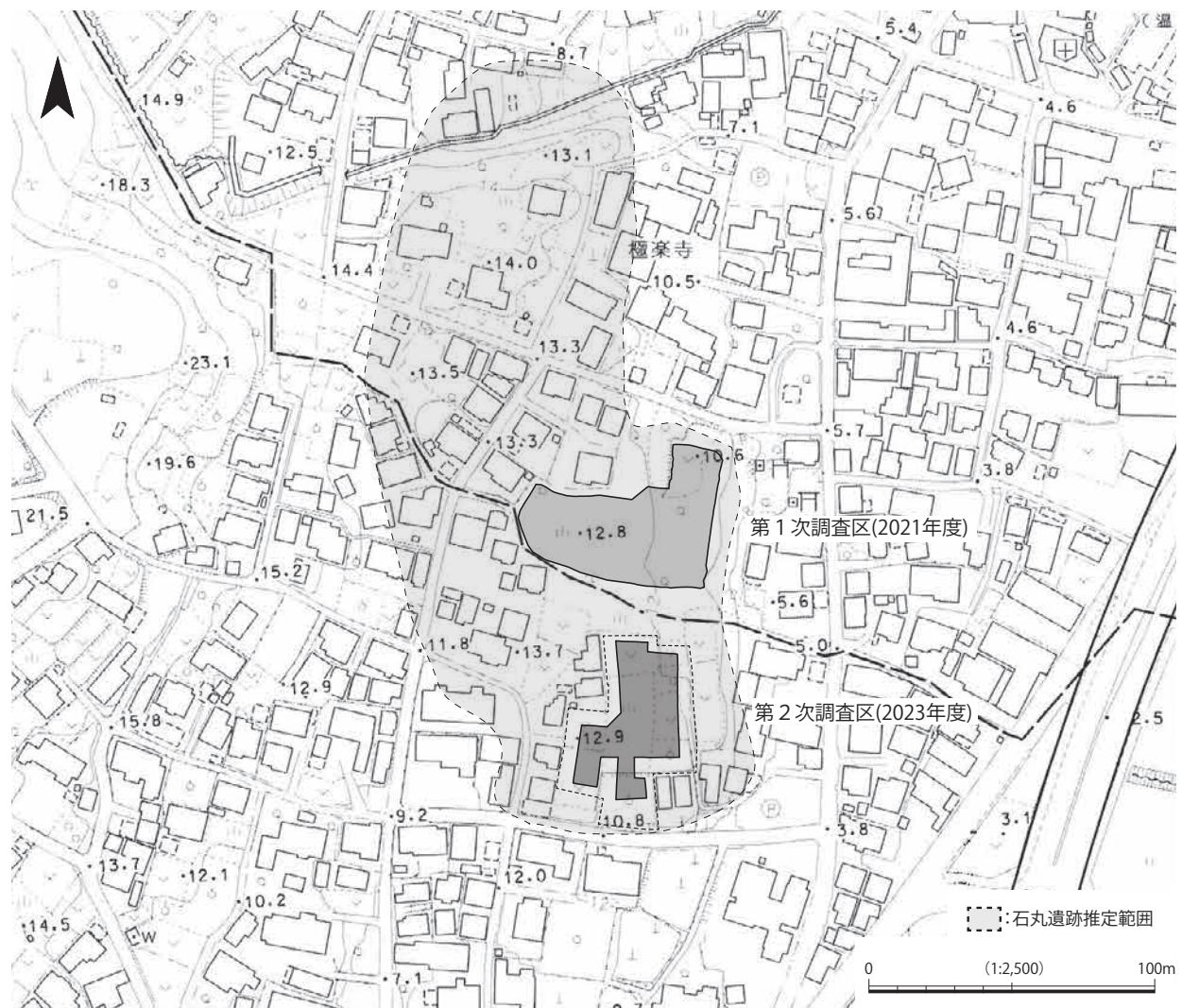
確認調査の結果を踏まえ、事業者、民間調査会社、大府市の三者で協議を行い、事業対象地の約 2,200 m²で記録保存を目的とした発掘調査が必要であるとの結論に至った。

発掘調査は、事業者より民間調査会社である株式会社アコード名古屋営業所（以下、アコード）が委託を受け、大府市の管理・監督のもと実施することとなり、令和 5 年 7 月 1 日付で契約を締結した。

その後、令和 5 年 7 月 14 日に事業者より文化財保護法第 93 条第 1 項に伴う発掘の届出が、令和 5 年 8 月 31 日にアコードより文化財保護法第 92 条第 1 項に伴う発掘の届出が提出された。提出された届出は合わせて愛知県へ進達した。愛知県からの通知を踏まえ、令和 5 年 9 月 15 日より現地での発掘調査を開始した。



第4図 確認調査トレント配置図



第5図 調査区配置図

第2節 既往の調査

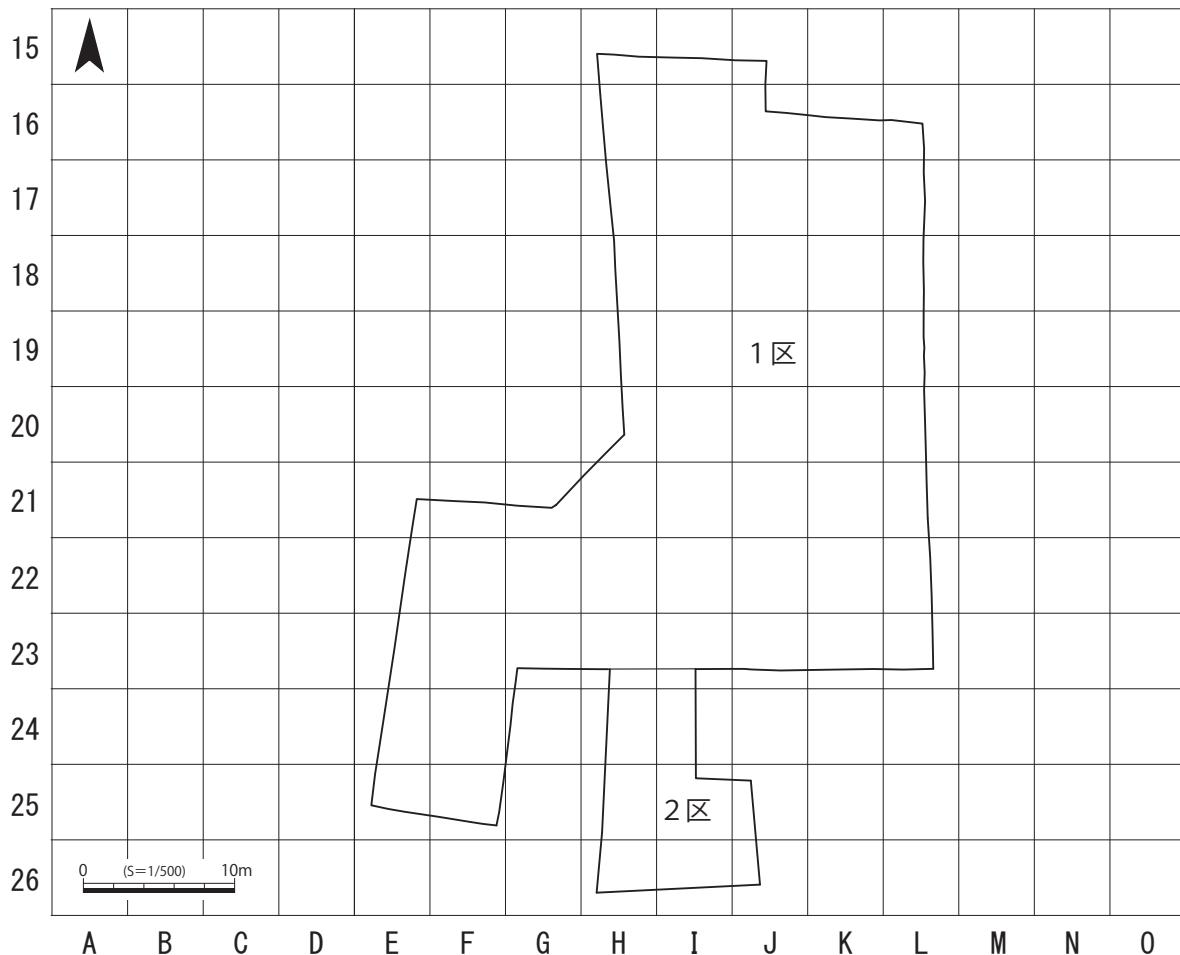
既往の確認調査については先述の通りである。ここでは、令和3（2021）年に実施した第1次調査について概要を記述する。

第1次調査では、宅地造成工事に伴う事前調査として、遺跡の東縁約2,200m²の範囲で発掘調査を実施した。調査の結果、溝で区画された中世の屋敷地が複数検出された。屋敷地内からは主に鎌倉時代から戦国時代にかけての掘立柱建物10棟、掘立柱塀・柵3条、竪穴状遺構・土坑129基、井戸3基、堀2条、溝115条、道路状遺構、柱穴・ピット等、総数1,100基を超える遺構が検出され、石丸遺跡が方形状区画の屋敷地を伴う中世集落遺跡であることが明らかとなった。

出土遺物には、土師器、須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、山茶碗、中国産青磁・白磁、瀬戸・美濃

窯産陶器（水注・瓶子・天目茶碗・燭台・平碗・皿・合子）、常滑産陶器（壺・甕・擂鉢・羽釜）、瓦質土器（風炉・火鉢）、墨書き土器、製塩土器、山茶碗融着資料、土製品（加工円盤・陶丸・土錘・土製支脚）の他、石製品（硯・砥石）、金属製品（銭貨・鉄滓・鉄釘等）、中世瓦、近世陶磁器、また、曲物等の木製品、オキシジミ・マガキ等の食物残滓が出土した。

石丸遺跡の位置する横根は、室町期の文献史料に記載された英比荘横根郷と同一名であるため、石丸遺跡で発見された中世集落は、文献史料に見る中世横根郷の集落の一部と想定されるに至った。また、室町期の出土遺物に一般的な中世集落では出土しない瓦質土器の風炉・火鉢、また、石硯や花押のある墨書き土器が含まれることから、第1次調査区域は室町期に横根郷を管理した有力者層（地頭クラス）の屋敷地ではないかと推定されている。



第6図 調査区地区割図

第3節 調査の方法

調査区は北側に1区、南側に2区の計2ヶ所設定した(第6図)。なお、1区南西部と2区の間は、後世の削平により地山が1m以上削られた段地となっており、遺構が残存する可能性が極めて低いと判断されたため、今回の調査範囲から除外した。

表土掘削は0.4m³級バックホウを使用し、表土以下の遺物包含層の掘削は基本的に人力で行った。

調査における測量は2級基準点を基点とし、世界測地系座標を用いた。水準は東京湾平均海面(T.P)を用いた。遺構記録や遺物の取り上げは、平面直角座標系第VII系に即した最小グリッドを5mに設定して実施した。グリッド名は既往の第1次調査区の北西隅を起点として、東西方向にA～O、南北方向に1～26で示し、アルファベットとアラビア数字の組み合わせで、H17、J22などと表示した。

遺跡の略記号は、石丸遺跡2023年度調査として「ISHM23」とした。遺構の略記号は、SA(掘立柱塀・

柵)、SB(掘立柱建物)、SP(柱穴・ピット)、SK(土坑・竪穴状遺構)、SD(溝)、ST(墓・埋葬施設)、SX(性格不明遺構)を使用した。番号は、SA・SBは01からの2桁、他は001からの3桁で表記した。

遺構の図面記録は、測量機械であるトータルステーションと電子平板を使用した測量を基本とし、状況により三次元写真測量を併用した。

出土遺物の収納は、耐水性ユポ紙に遺跡略記号、グリッド番号、遺構略記号・番号、出土層位、出土年月日を記載して、チャック付袋や収穫ネットに収納した。出土遺物は、連番で遺物登録番号を追加し、遺物登録台帳と対応させた。

遺構の写真撮影は、35mmサイズのデジタル一眼レフカメラを使用し、重要遺構や全景写真撮影においては、6×7フィルムサイズ相当のフルサイズデジタル一眼レフカメラを使用した。遺構完掘後の空中写真撮影は、フルサイズデジタルカメラを搭載したドローンを使用した。

第4節 調査の経過

調査地の現況は畠地・果樹園であった。現地調査は令和5年9月15日から開始した。調査はまず、樹木の伐採・除草、安全柵の設置、基準点・水準点測量、調査区設定などの準備作業を行なったのち、1区北半部の表土掘削から開始した。なお、調査区設定に際しては、確認調査の結果及び隣接する宅地・耕作地との境界に十分配慮しつつ、調査地北側に1区、南側に2区の計2箇所の調査区を設定した。このうち1区では、十分な廃土置場を確保できなかったため、調査区を北と南の2つに分けていわゆる打って返しで調査を行った。表土掘削に並行して、仮設事務所・トイレの設置、備品・資機材類の搬入及び電気・水道を敷設した。

表土掘削が完了した9月25日から1区北半部の搅乱掘削と遺物包含層の掘削を開始した。北半部は基本的に近・現代の耕作土層直下で地山が露出し、標高の低い調査区東側と南側の一部に遺物包含層が薄く残存するのみであった。近・現代層を除去したのち調査区北側から遺構検出を開始した。なお、調査開始時期は9月も半ば過ぎであったが、季節外れの猛暑日が続いたため、常時遺構面に散水して湿潤な状態を保ちつつ検出と掘削を進めた。

調査の結果、主に平安時代末期から鎌倉時代にかけての区画構、掘立柱建物、掘立柱塀・柵、土坑などを検出し、第1次調査で検出された溝で区画された屋敷地を伴う中世集落が今回の調査区まで広く展開することが確認された。これらのうち、掘立柱建物を構成する柱穴は、深さが50cmを超える大型の柱穴も多く見られたが、深さに比べて掘形規模が小さく通常の半裁作業が困難だったため、検出写真撮影後に柱穴の片側半分をトレンチ状に断ち割り、断面写真撮影と図化後に完掘した。掘削深度が深いことに加えて締まりの強い粘質土であったため、遺構掘削は非常に困難を極めた。

遺構掘削が終了した11月10日にドローンによる空中写真撮影を行った。撮影後は補足調査と埋戻しを行ない、北半部の調査を終えた。

11月13日から1区南半部の表土掘削と遺物包



写真1 調査前風景（南から）



写真2 1区北半部表土掘削作業（北西から）



写真3 1区北半部遺構掘削作業（南東から）



写真4 1区北半部全景撮影前清掃作業（北東から）



写真5 1区北半部遺構掘削作業（東から）



写真6 1区南半部遺構掘削作業（南東から）



写真7 2区遺構検出作業（北西から）



写真8 出土遺物洗浄作業（南から）

含層の掘削、遺構検出を開始した。北半部に比べて遺構面の標高が低いことから、中世の遺物包含層が削平されずに良好に残る箇所が見られた。遺構検出の結果、北半部と同様に屋敷地を囲む区画溝、掘立柱建物、掘立柱塀・柵、土坑、土壙墓などを検出した。遺構掘削は12月19日までに終了し、翌20日にドローンによる空中写真撮影を行った。その後は補足調査と埋戻しを行ない、12月25日に南半部の調査を終えた。

12月26日から2区の表土掘削と遺物包含層の掘削を開始した。2区南半部は近・現代の宅地造成に伴う削平・搅乱が著しく、遺構はほぼ皆無に近い状態であったが、北半部は削平を免れていたため、掘立柱建物や柱穴等を検出した。翌27日に遺構検出と検出写真撮影を行ない、年内の調査を終えた。

翌令和6年1月5日から遺構掘削を開始した。検出した遺構が少なかったこともあり、遺構掘削は1月10日には終了し、翌11日にドローンによる空中写真撮影を行なった。補足調査と埋戻しを終え、1月15日に2区の調査を終了した。その後は、仮設事務所、資機材類の撤去・搬出を行ない、1月30日に全ての現地作業を終了した。なお、作業の安全上、宅地等の隣接地及び段丘崖と十分な距離を確保した結果、調査面積は1,160m²となった。

整理作業のうち、出土遺物の洗浄・注記・接合等の一次整理作業は現地調査に並行して行い、遺物実測・図面編集・遺物写真撮影等の二次整理作業は県内外の自社施設で行なった。遺物注記作業は、非接触自動遺物注記機「ジェットマーカー」を使用した。その後は、土壙墓から出土した人骨や出土炭化物の年代測定等の自然科学分析、調査報告書の原稿執筆・編集を行ない、翌令和7年3月10日に調査報告書を刊行、同月中に成果品の納品と検査を終えて本業務を終了した。

なお、諸般の事情により調査期間中に現地説明会を開催できなかつたが、令和6年2月18日に大府市歴史民俗資料館において、「石丸遺跡II - 発掘調査完了報告会 -」と題して調査報告会を開催し、市内外から多数の参加者があつた。

第3章 遺構

第1節 周辺の地形と基本層序

石丸遺跡は、市域東部を流れる境川右岸の丘陵縁部（標高10～14m）に立地する。調査地周辺の地形は、丘陵の先端部で発達した段丘の緩斜面が北西から南東方向に連続し、調査地東縁にはこの緩斜面を切断する形で高さ2m程の段丘崖（断層崖）が南北に延びている。今回の調査はこの段丘崖の西側に隣接した遺跡の南端部で実施した。

現在、遺跡が立地する丘陵の東側には、境川と逢妻川が形成した沖積低地が広がるが、江戸時代に大規模な干拓工事が行われるまでは、知多湾奥の衣ヶ浦湾が遺跡周辺まで入り込む海浜地であった。

これを示すように、石丸遺跡の南約400mに位置する惣作遺跡では、知多式製塙土器（古墳時代～平安時代）が多量に出土している他、石丸遺跡の第1次調査や石丸遺跡の北に隣接した賢聖院貝塚では、近隣の干潟で採取されたとみられるマガキ・シジミ等の貝層が見つかっており、かつて遺跡の東側一帯が旧衣ヶ浦湾の沿岸部であったことを物語っている。石丸遺跡の南に隣接した普門寺付近には、かつて知多湾や対岸の刈谷市域に行き来するための船着き場があったとされ、さらに石丸遺跡の東には、旧衣ヶ浦湾西岸沿いの旧街道である東浦街道が隣接するなど、石丸遺跡は水陸交通の要衝に位置した遺跡と言うことができる。

調査区内の基本層序（第7図）は概ね次の5層に大別することが可能であり、第1次調査における基本層序にほぼ一致する。

【基本層序】

I層：表土・現耕作土層（近～現代）

II層：旧耕作土層（近世）

III-1層：遺物包含層（近世整地層）

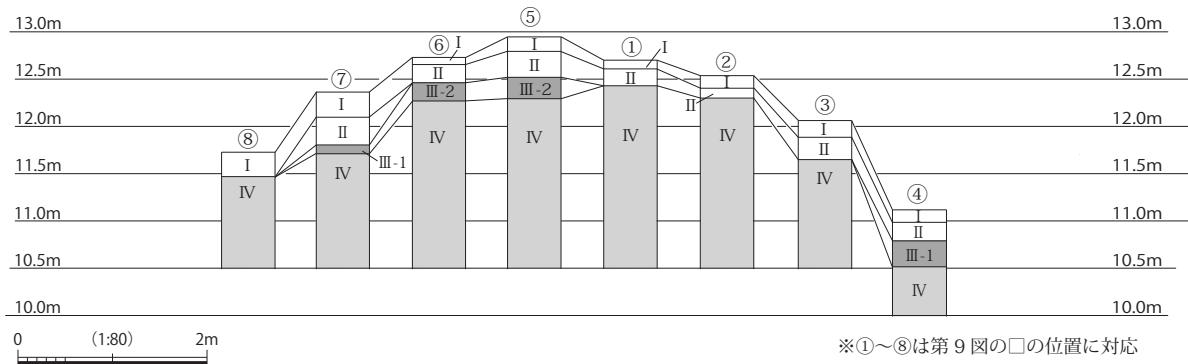
III-2層：遺物包含層（中世）

IV層：地山（遺構検出面：1面）

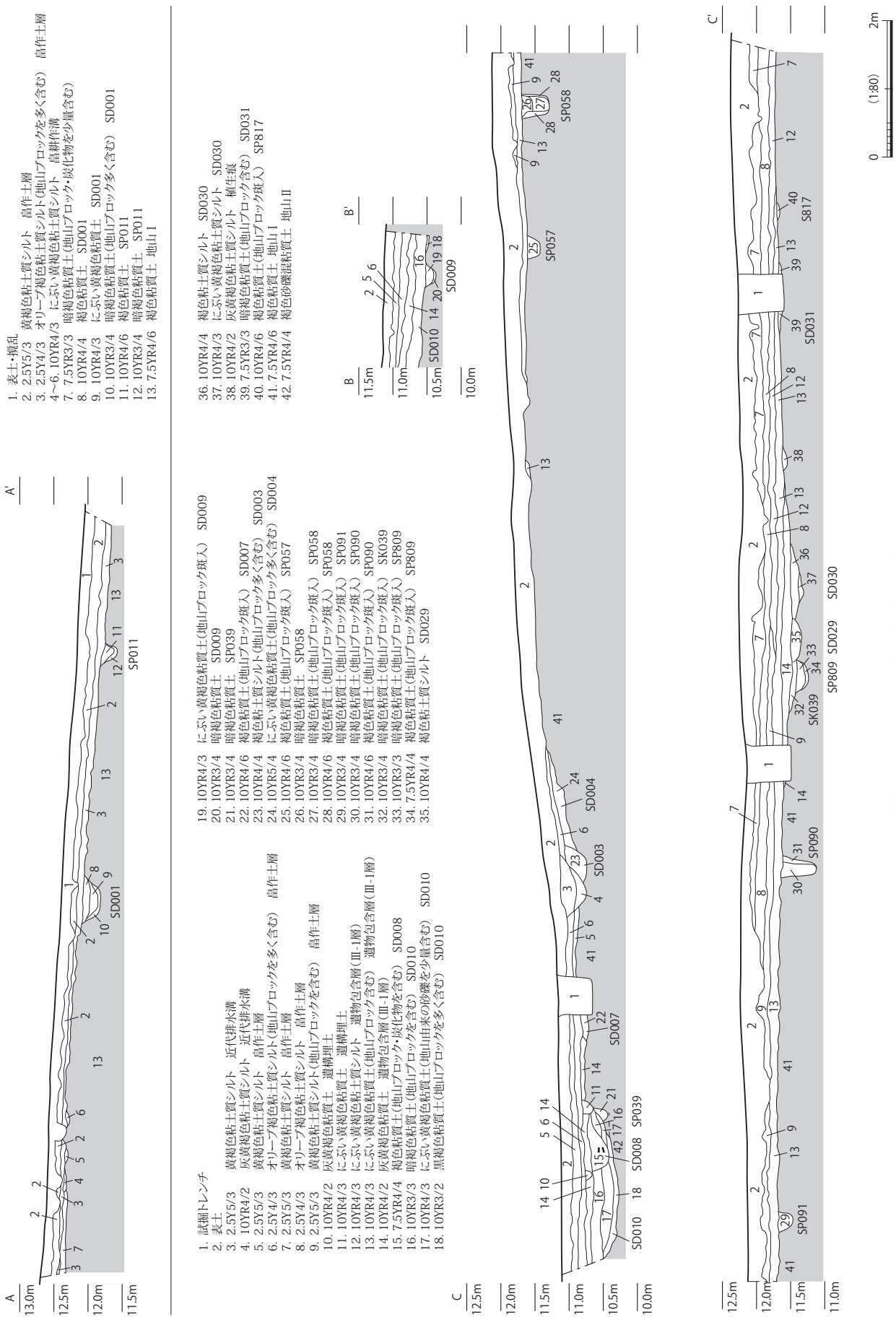
基本層序は場所によって層厚に違いが見られるものの、基本的に地山面の標高が高い1区中央部から西側（第9図①・②）にかけては、I・II層直下、地表面下約0.3～0.4mでIV層の地山が露出するのに対し、これより地山面の標高が低い1区東側から南側及び2区の北側（第9図④・⑤～⑦）にかけては、I・II層以下にIII層の遺物包含層が比較的良好に残存しており、地表面下約0.5～0.6mでIV層の地山に至る。

III層の遺物包含層は、主に灰黄褐色あるいは、にぶい黄褐色粘質土～シルトを基調としたIII-1層とその下部に堆積する暗褐色粘質土を基調としたIII-2層に大別でき、層厚はいずれも10～20cmを測る。III-2層は出土遺物からみて中世の遺物包含層と考えられ、調査区南西部にのみ堆積する。その上部のIII-1層は、地山ブロックと近世の遺物を含むことから近世の整地土層と考えられ、調査区のほぼ全域に分布する。IV層は褐色粘質土あるいは褐色・にぶい黄褐色砂礫混粘質土～シルトの地山である。遺構はこのIV層の地山上面で検出した。

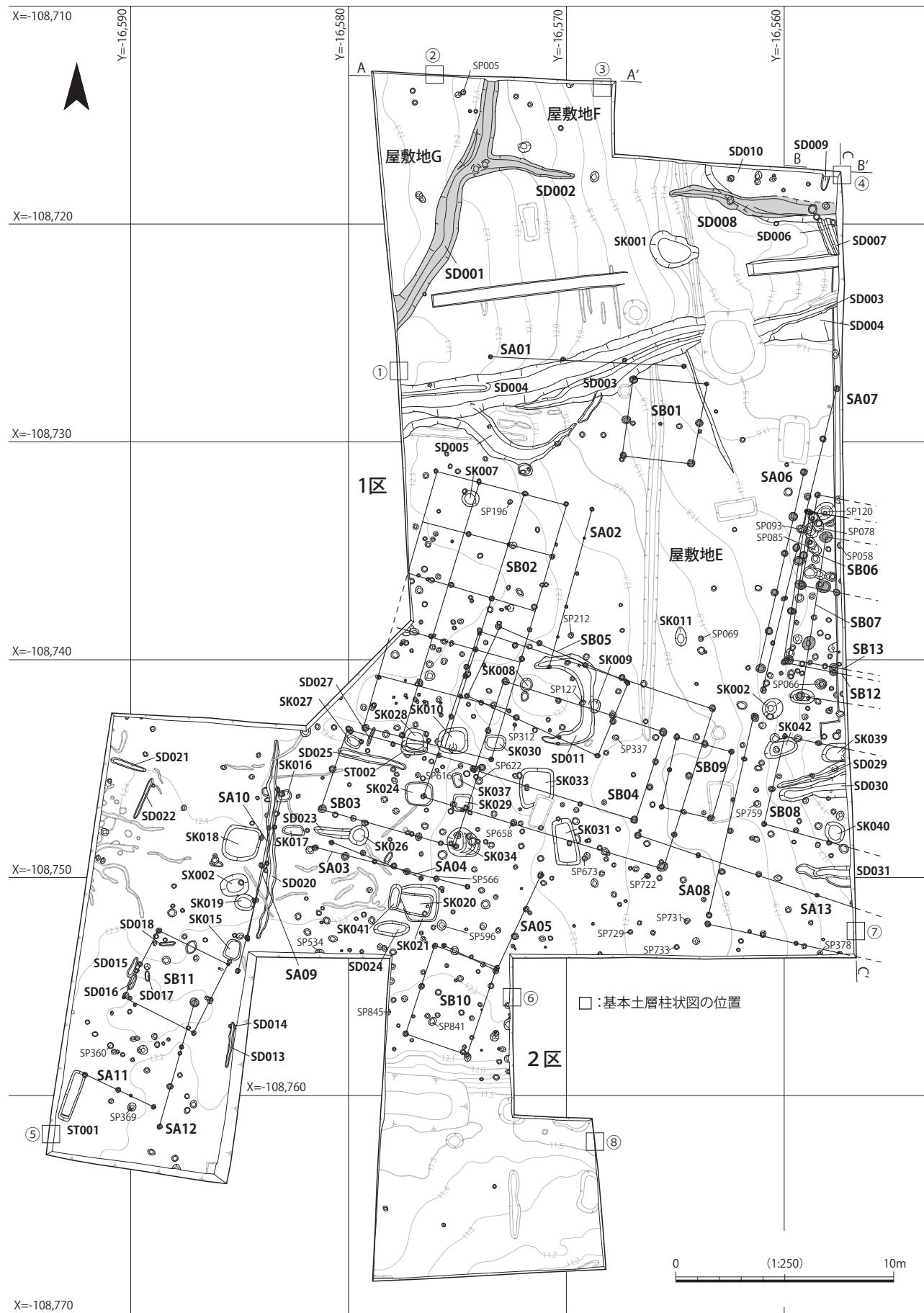
地山面の標高は1区中央部で12.4m前後と最も高く、段丘崖に近接した1区北東部が10.5mと最も低い。中央部と北東部の比高差は最大で1.9mを測る。なお、2区の南側（⑧）は地山面が50cm以上削られているため、本来の地形を留めていない。



第7図 基本層序柱状図



第8図 区北壁・東壁土層断面図



第9図 調査区全体遺構平面図

第2節 遺構の概要

検出した遺構は、溝で区画された屋敷地3区画、掘立柱建物13棟、塀もしくは柵と考えられる掘立柱列13条、溝27条、土坑28基、土壙墓2基、性格不明遺構2基、柱穴・ピット532基である。

遺構の総数は600基以上に及ぶが、埋土の特徴や出土遺物からその大半が中世（平安時代末期から室町時代）の遺構と考えられる。なお、今回の調査で井戸は検出されなかったが、第1次調査区域では調査区東縁の段丘崖沿いで素掘り式の井戸（第67図-SE003）を検出しており、調査区東側の未調査区域に分布する可能性も考えられる。

中世の遺構は縦横の直線的な溝で区画された屋敷地内に配されており、先述のように全部で3区画の屋敷地を確認した（屋敷地記号は第1次調査で検出したA～Dに続くアルファベットを付した）。

屋敷地E（第9図） 今回の調査区のほぼ全域にわたる屋敷地である。屋敷地の西辺を南北方向の溝SD001、北辺を東西方向の溝SD002・008に区画される。検出規模は東西17m×南北49mで、屋敷地の東辺と南辺は確認できなかったが、東辺を調査地東縁の段丘崖（断層崖）、南辺を調査地南側の傾斜変換点に想定した場合、屋敷地の規模は東西36～52m×南北50m程の歪な方形状の屋敷地（推定面積約2,200m²）になると推定される。

屋敷地F（第9図） 屋敷地Eの北側で検出した屋敷地で、西辺をSD001、南辺をSD002・008に区画される。屋敷地の大半が調査区外に位置するため詳細は不明だが、区画内に中世に属する柱穴が展開することから中世の屋敷地と判断した。検出規模は東西17m×南北4mを測る。

屋敷地G（第9図） 屋敷地Eの西側で検出した屋敷地で、屋敷地東辺をSD001に区画される。詳細は不明だが、区画内に中世に属する柱穴・ピットが展開することから中世の屋敷地と判断した。検出規模は東西5m×南北11mを測る。第1次調査区域で検出した道路状遺構のほぼ真南に位置することから、道路状遺構の可能性も考えられる。

各屋敷地の遺構から出土した遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器（H-72号窯式～百代寺窯式）、山茶碗（初期山茶碗第3型式から尾張型第10型式）、

瀬戸・美濃窯産陶器（古瀬戸～大窯期）、常滑窯産陶器、中国産青磁、近世陶磁器、製塩土器、土製品（土錘・土製支脚・土鈴）、石製品（砥石）、金属製品（鉄釘）、鍛冶関連遺物（鉄滓・炉壁）、繩文・弥生土器、石器、人骨及び貝類などの動物遺体がある。

第3節 掘立柱建物

掘立柱建物は13棟検出した（表2）。いずれも出土遺物や建物方位などから平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物と考えられる。建物の内訳は、側柱建物が8棟（SB01・03・04・05・08・09・10・11）、総柱建物が1棟（SB02）、調査区外に連続するため詳細な構造が不明なものが4棟（SB06・07・12・13）ある。

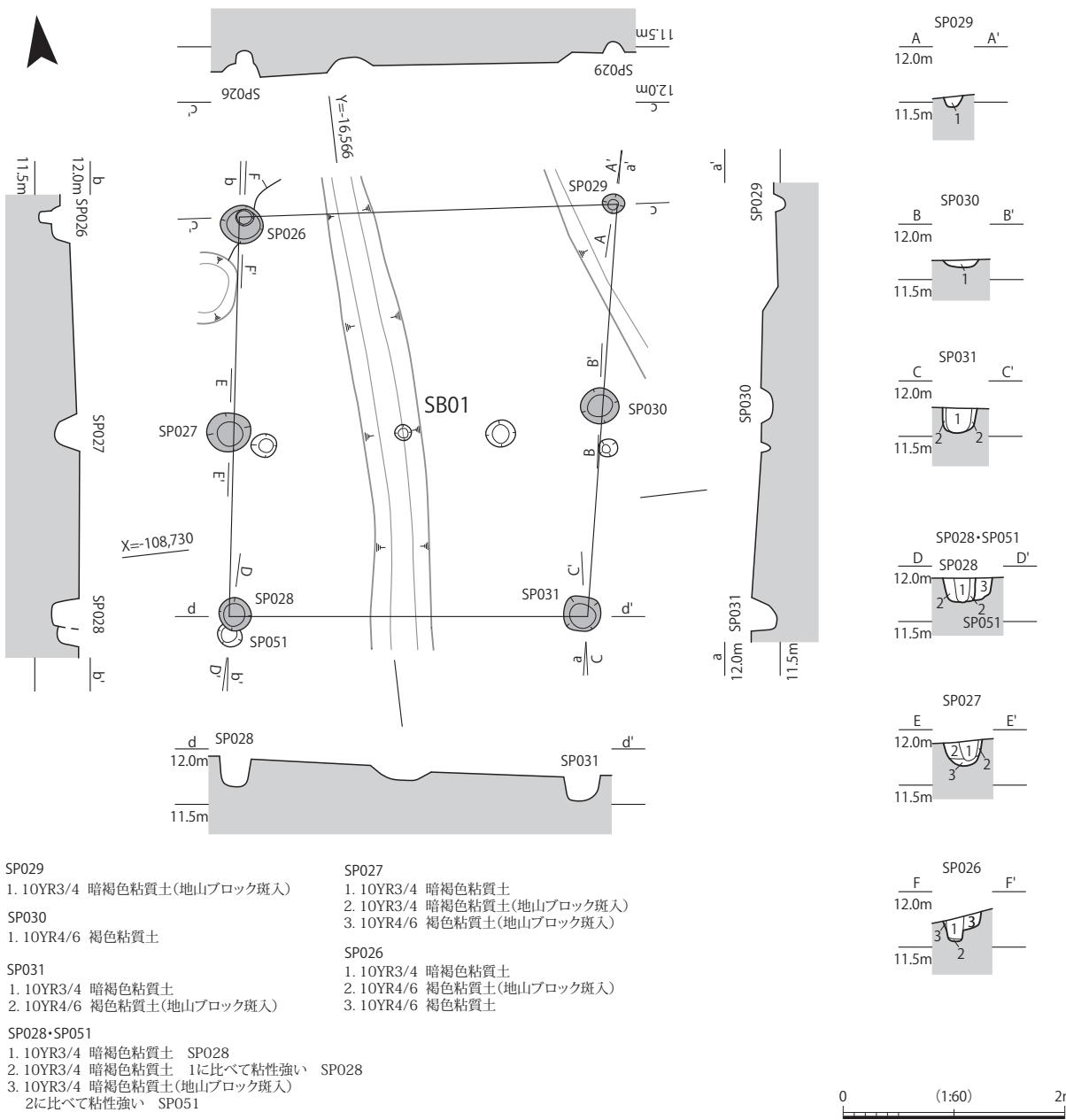
これらの掘立柱建物のうち、東西棟の掘立柱建物SB04は、東西南北の四辺に庇が取り付く、いわゆる四面庇付の掘立柱建物と考えられ、建物規模が一辺11mを超える大型の建物に復元できることから、屋敷地内の中心的な建物であったと考えられる。この他、復元した掘立柱建物以外に、現段階で掘立柱建物や塀・柵に復元できない柱穴・ピットが532基あり、屋敷地内には本来さらに多くの建物が存在したと考えられる。

SB01（第10図） 屋敷地Eの北側で検出した桁行2間（3.6～3.7m）×梁行1間（3.2～3.4m）の南北棟の側柱建物である。建物方位はN-8～10°-Eで、床面積は約12.2m²を測る。

柱間寸法は、桁行が1.7～1.9m、梁行が3.2～3.4mを測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で、規模は直径0.2～0.4m、検出面からの深さは0.1～0.3mを測る。柱痕跡はSP026・027・028・031で検出した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、径約15～20cmを測る。丸柱と考えられる。柱抜取り穴は確認できなかった。

細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から尾張型第5型式に相当する山茶碗、常滑窯産の甕などが出土した。後述の掘立柱塀・柵SA01に並行しており、出土遺物の帰属時期も一致することから、塀・柵SA01に伴う建物の可能性が高い。

SB02（第11図） 屋敷地Eの中央西寄りで検出した南北棟の大型掘立柱建物である。調査区西



第10図 掘立柱建物 SB01 平・断面図

表2 掘立柱建物一覧

遺構番号	構造・方向	方位	規模(m)	柱間(m)		構成する柱穴	平面積m ²
				桁行	梁行		
掘立柱建物 SB01	側柱建物(南北棟)	N8°~10° E	2間(3.6~3.7)×1間(3.2~3.4)	2間(1.7~1.9)	1間(3.2~3.4)	SP026-027-028-029-030-031	12.2
掘立柱建物 SB02	総柱建物(南北棟)	N16.5° E	5間(12.2)×3間(6.2)	5間(2.3~2.6)	3間(1.9~2.2)	SP188-189-253-226-264-233-275-273-300-580-584-174-185-186-187 SP191-221-238-314-620	74.3
掘立柱建物 SB03	側柱建物(東西棟)	N16° E (N74° W)	3間(6.4)×2間(3.9)	3間(1.7~2.5)	2間(1.9~2.0)	SP586-582-612-619-628-801-561-517-513-510	24.4
掘立柱建物 SB04	側柱建物(東西棟) 四面庇	N17° E (N73° W)	身舎:3間(7.7)×2間(4.3) 庇:5間(11.5)×4間(8.0)	3間(2.2~2.6) 5間(1.8~2.7)	2間(1.8~2.4) 4間(1.7~2.4)	SP307-316-334-134-704-707-710-683-701-618-308 SP230-235-344-328-114-745-746-743-739-700-658-627-604-612-295-296	92.0
掘立柱建物 SB05	側柱建物(東西棟)	N26° E (N64° W)	3間(6.5~6.6)×2間(3.5~3.6)	3間(1.9~2.5)	2間(1.6~1.9)	SP209-237-326-330-335-684-687-312-301-299	23.2
掘立柱建物 SB06	不明	N10° E	2間(4.2)×1間(1.7)以上	2間(2.0~2.2)	1間(1.7)以上	SP059-086-073-347	6.8
掘立柱建物 SB07	不明	N9° E	3間(7.4)×?	3間(2.2~2.7)	-	SP144-890-088-891	10.8
掘立柱建物 SB08	側柱建物(東西棟)	N13° E (N77° W)	2間(3.0)×2間(4.2)以上	2間(1.4~1.6)	2間(1.9~2.3)以上	SP111-784-757-762-792-796	15.5
掘立柱建物 SB09	側柱建物(南北棟)	N12° E	2間(3.2~3.3)×1間(2.4~2.6)	2間(1.6~1.7)	1間(2.4~2.6)	SP133-751-749-709-706	8.1
掘立柱建物 SB10	側柱建物(南北棟)	N17° E (N73° W)	2間(4.2~4.3)×1間(3.0)	2間(2.0~2.4)	1間(3.0)	SP601-826-870-866-847-834	12.8
掘立柱建物 SB11	側柱建物(東西棟)	N27° E (N63° W)	2間(3.5~3.6)×1間(3.6)	2間(1.7~1.8)	1間(3.6)	SP417-428-389-391-352-423	12.5
掘立柱建物 SB12	不明	N9° E	3間(7.0)×1間(2.4)以上	3間(2.3~2.4)	1間(2.4)以上	SP121-1-159-108-340-116	16.3
掘立柱建物 SB13	不明	N8° E	3間(6.9)×1間(2.1)以上	3間(2.0~2.6)	1間(2.1)以上	SP121-2-160-107-145-117	14.4

※掘立柱建物の方位は、東西棟は梁(短辺)の方位、南北棟は桁(長辺)の方位を基準とした。

側の未調査区域に延びる可能性もあるが、建物南西隅の柱穴 SP584 の西側に柱穴が確認できないことから、桁行 5 間 (12.2m) × 梁行 3 間 (6.2m) の南北棟の総柱建物に復元した。建物方位は N -16.5 ° -E で、床面積は約 74.3m²を測る。

柱間寸法は、桁行が 2.3 ~ 2.6 m、梁行が 1.9 ~ 2.2 m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.2 ~ 0.4m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.5m を測る。柱痕跡は SP186・188・221・226・233・264・300・584 で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径 15 ~ 20cm を測る。丸柱と考えられる。明確な柱抜取り穴は確認できなかった。

細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から尾張型第 6 型式に相当する山茶碗、伊勢型鍋、常滑窯産羽釜、中国産青磁蓮弁文碗（写真図版 39-236）などが出土した。

建物の東辺に並行する掘立柱塀・柵 SA02、掘立柱建物 SB03、また、掘立柱塀・柵 SA03 などと建物方位がほぼ一致することから、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。重複関係から後述の掘立柱建物 SB04 に後出する。

S B 0 3（第 13 図）屋敷地 E の中央西寄りで検出した桁行 3 間 (6.4m) × 梁行 2 間 (3.9m) の東西棟の側柱建物である。建物方位は N -16 ° -E (N-74 ° -W) で、床面積は約 24.4m²を測る。

柱間寸法は、桁行が 1.7 ~ 2.5 m、梁行が 1.9 ~ 2.0 m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.2 ~ 0.6m、検出面からの深さは 0.3 ~ 0.6m を測る。柱痕跡は SP513・517・582・612・619・628 で確認した。柱痕跡の平面形は円形で直径 10 ~ 15cm を測る。丸柱であろう。明確な柱抜取り穴は確認できなかった。

細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から尾張型第 5・6 型式に相当する山茶碗、伊勢型鍋などが出土した。掘立柱建物 SB02、掘立柱塀・柵 SA02・03 などと建物方位が近似しており、これらの建物と同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

S B 0 4（第 12 図）屋敷地 E の中央部で検出した桁行 5 間 (11.5m) × 梁行 4 間 (7.8 ~ 8.0m)

の東西棟の大型の掘立柱建物で、桁行 3 間 × 梁行 2 間の身舎の四辺（東西南北）にそれぞれ 1 間分の庇が付く、いわゆる四面庇付の掘立柱建物になると考えられる。建物方位は N -17 ° -E (N-73 ° -W) で床面積は約 92.0m²を測る。

柱間寸法は、身舎の桁行が 2.2 ~ 2.6 m、梁行が 1.8 ~ 2.4 m、庇の出は 1.7 ~ 1.9 m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.2 ~ 0.5m、検出面からの深さは 0.2 ~ 0.7m を測る。柱痕跡は SP230・612・658・683・710・307・334 で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で直径 10 ~ 20cm を測ることから、丸柱と考えられる。明確な柱抜取り穴は確認できなかった。

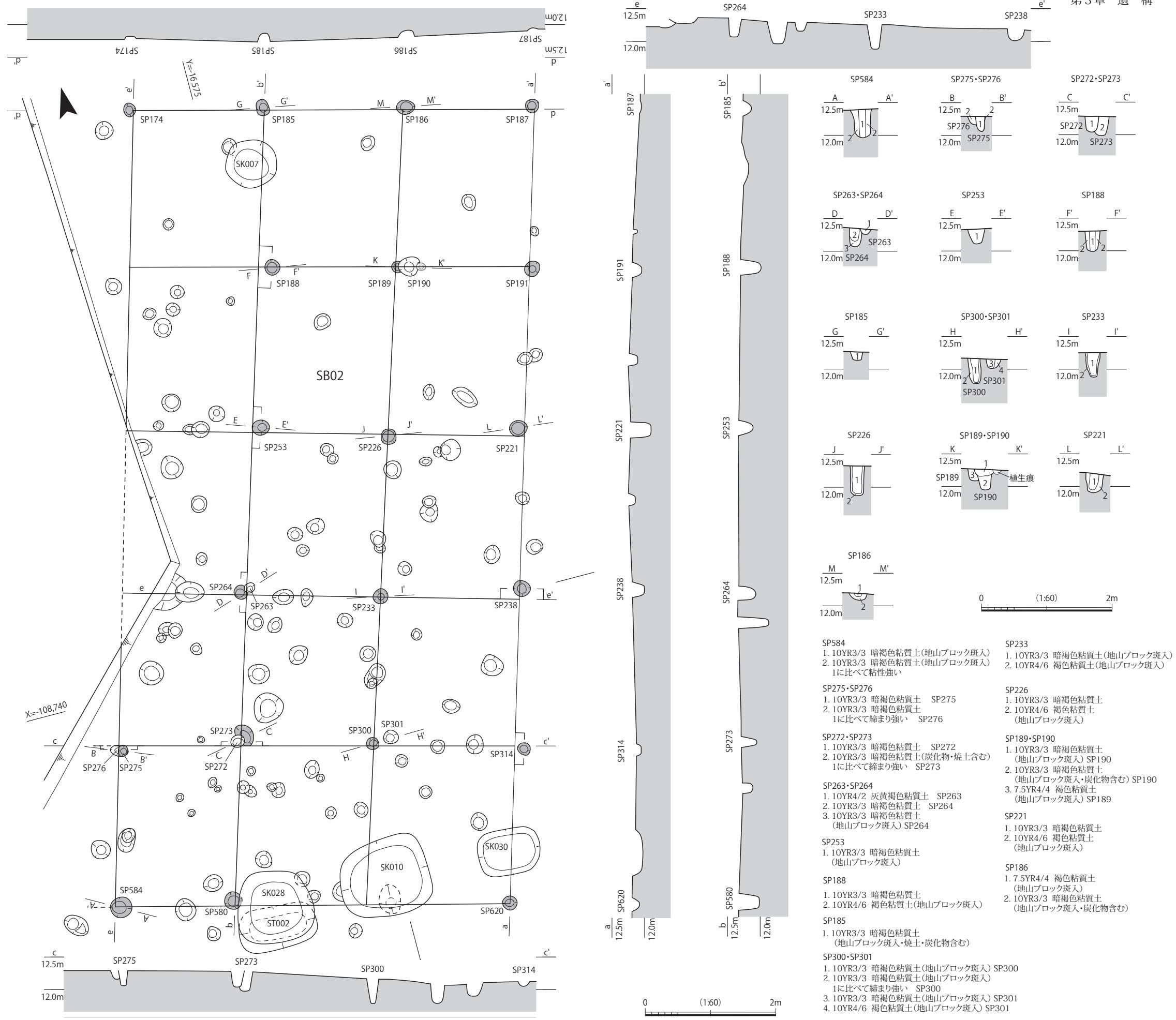
柱穴掘形から H-72 号窯式～百代寺窯式に相当する灰釉陶器碗（第 48 図 -1・2）、初期山茶碗第 3 型式に相当する山茶碗が出土した。また、混入品だが縄文・弥生土器や下呂石製の削器（第 63 図 -225・227）が出土した。

建物方位は掘立柱建物 SB10、掘立柱塀・柵 SA13、木棺土壙墓 ST001 などに一致しており、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。重複関係から掘立柱建物 SB02・05 に先行する。

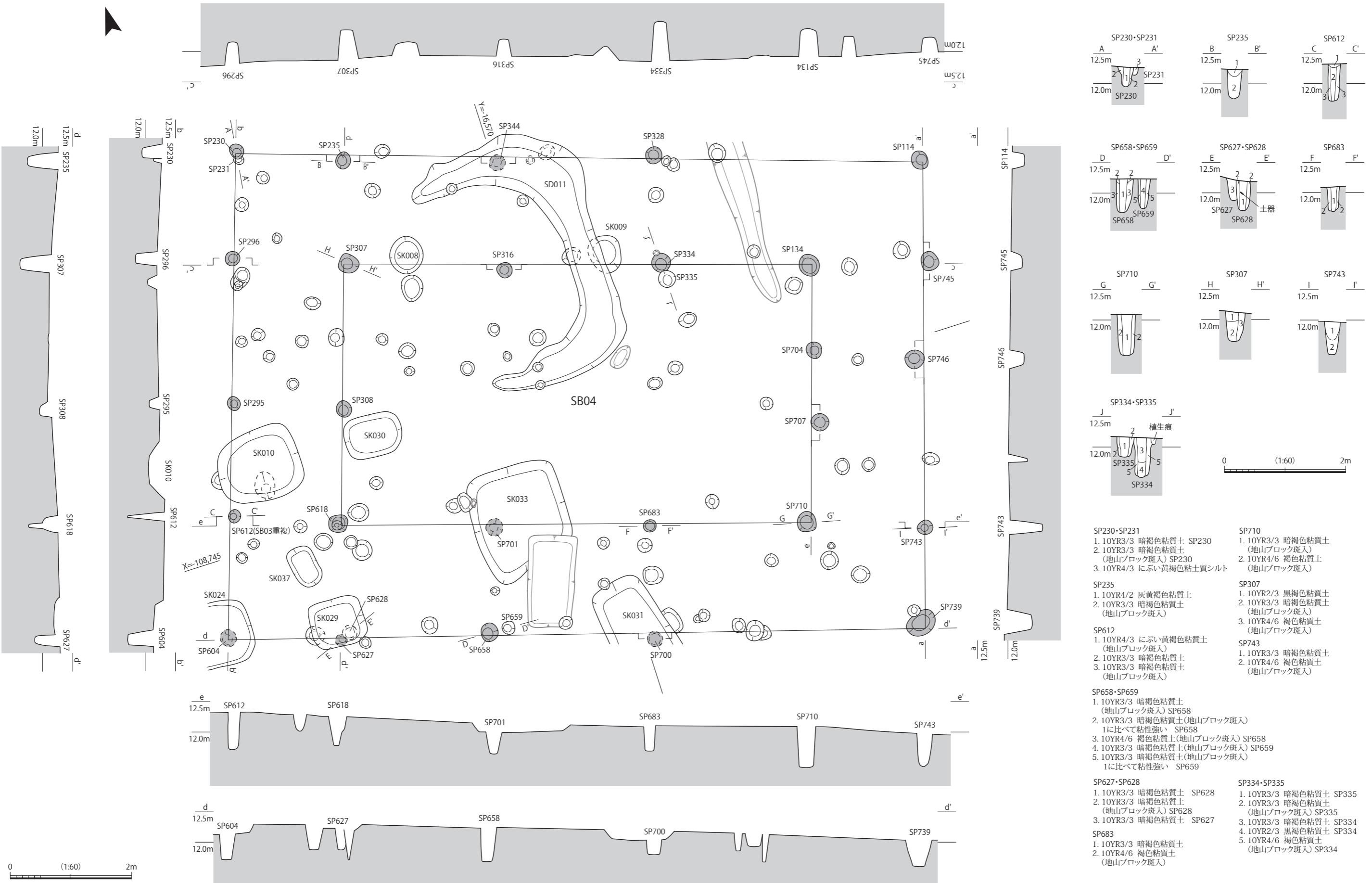
S B 0 5（第 14 図）屋敷地 E の中央部で検出した桁行 3 間 (6.5 ~ 6.6m) × 梁行 2 間 (3.5 ~ 3.6m) の東西棟の側柱建物である。建物方位は N -26 ° -E (N-64 ° -W) で、床面積は約 23.2m²を測る。

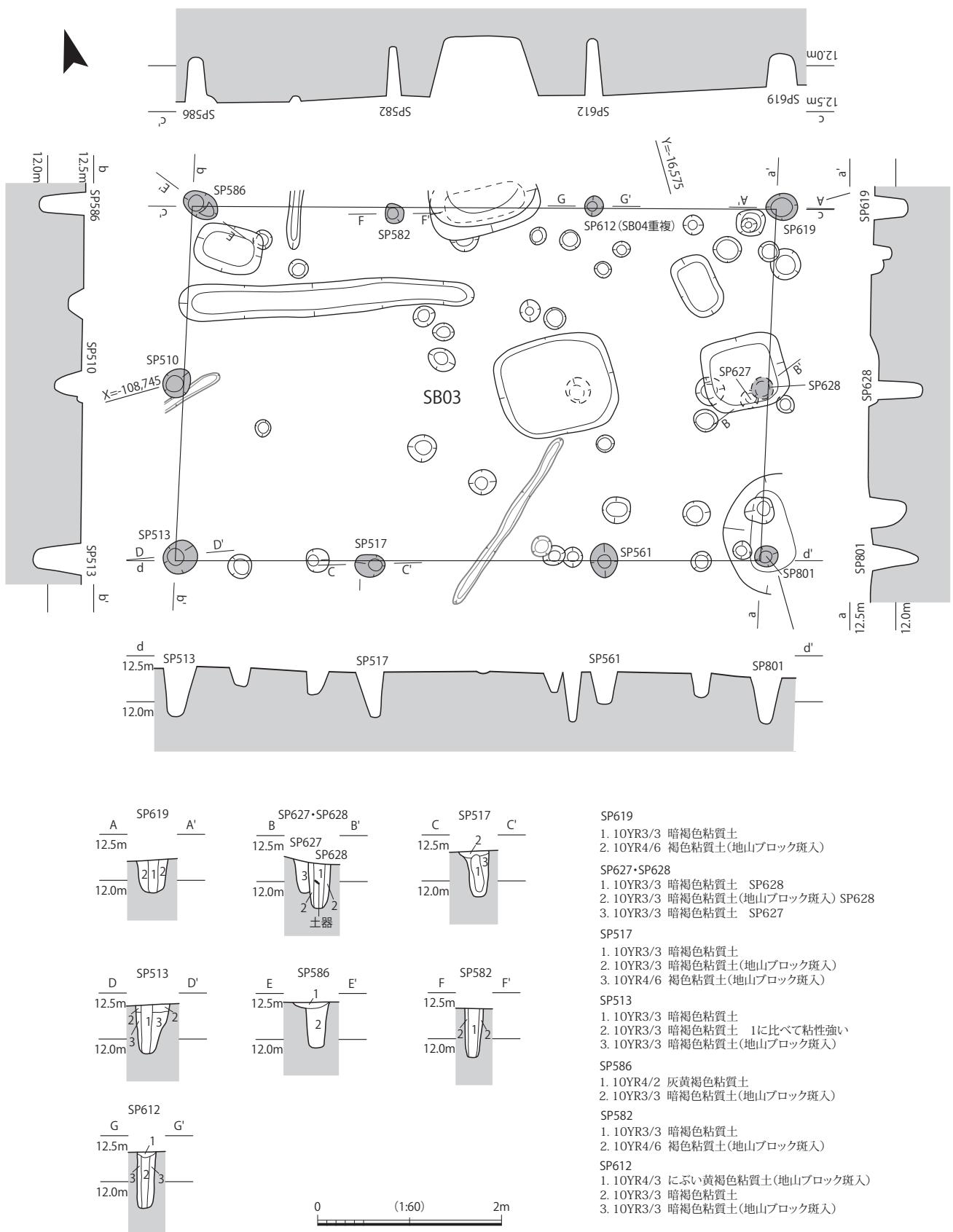
柱間寸法は、桁行が 1.9 ~ 2.5 m、梁行が 1.6 ~ 1.9 m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.2 ~ 0.3m、検出面からの深さは 0.15 ~ 0.6m を測る。柱痕跡は SP209・237・301・312・326・330・335・684 で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径 10 ~ 20cm を測る。丸柱と考えられる。明確な柱抜取り穴は確認できなかった。

柱穴掘形から尾張型第 5 型式に相当する小皿（3）、伊勢型鍋、また、混入品だが石器（229）が出土した。重複関係から掘立柱建物 SB04 に後出する。掘立柱建物 SB11、掘立柱塀・柵 SA05・11 などと建物方位が一致もしくは近似することから、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可

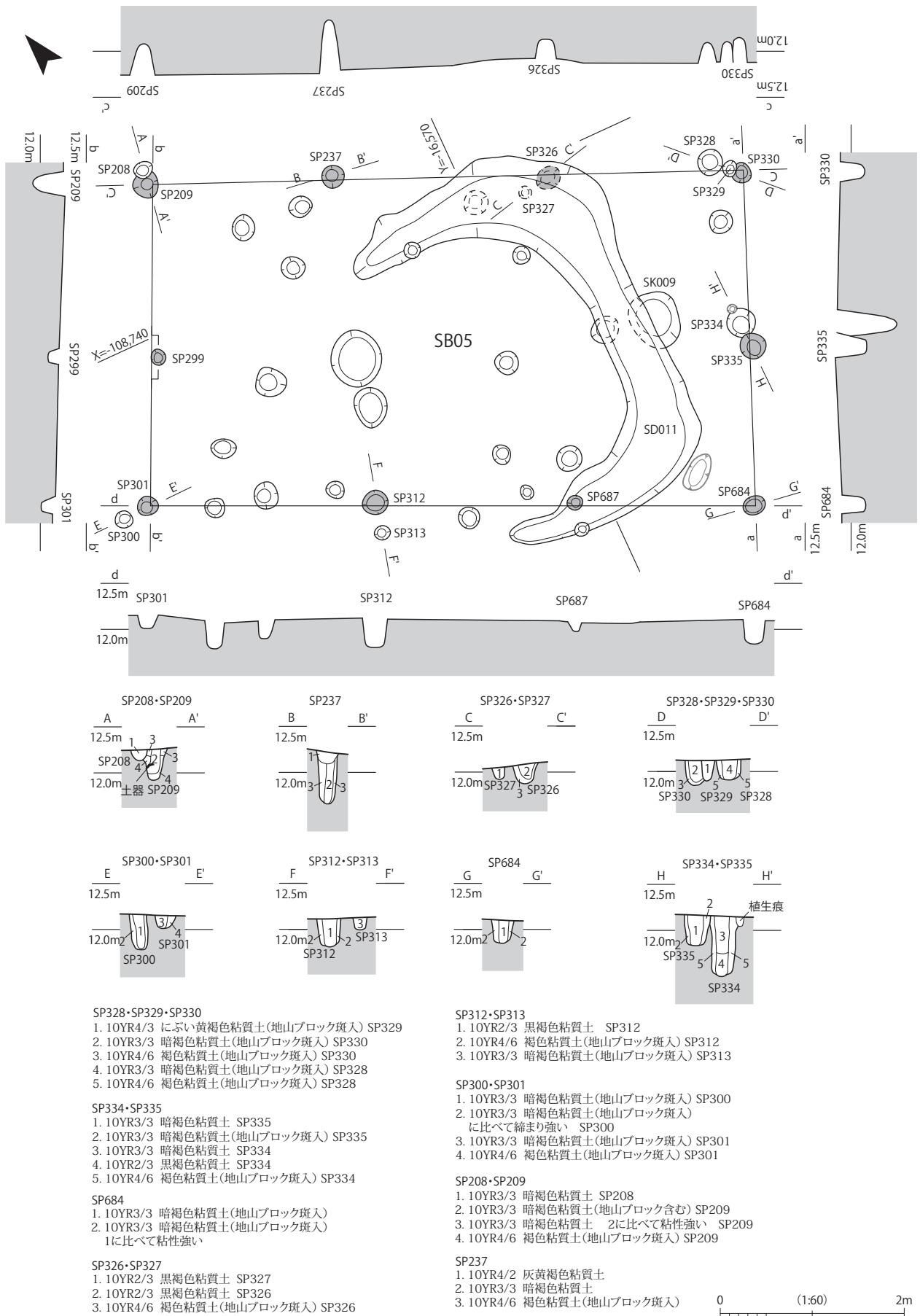


第 11 図 掘立柱建物 SB02 平・断面図

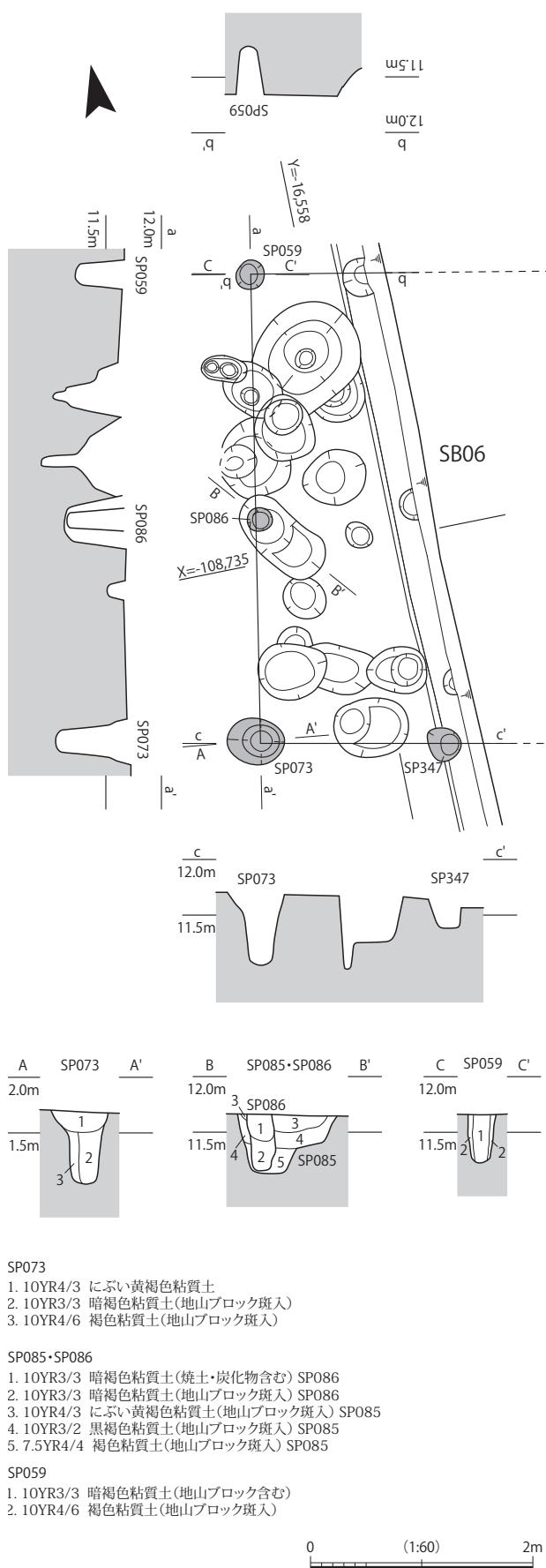




第13図 掘立柱建物SB03 平・断面図



第14図 掘立柱建物SB05 平・断面図



第15図 掘立柱建物 SB06 平・断面図

能性が高い。

S B 0 6 (第15図) 屋敷地Eの中央東寄りで検出した掘立柱建物である。調査区外に連続するため詳細な規模・構造は不明だが、南北2間(4.2m)×東西1間(1.7m)以上の掘立柱建物になると考えられる。建物方位はN-10°-Eで、床面積は6.8m²以上を測る。

柱間寸法は、南北方向が2.0~2.2m、東西方向が1.7mを測る。柱穴掘形の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は径0.2~0.5m、検出面からの深さは0.3~0.7mを測る。柱痕跡はSP073・059で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径10~15cmを測る。丸柱と考えられる。明確な柱抜取り穴は確認できなかった。

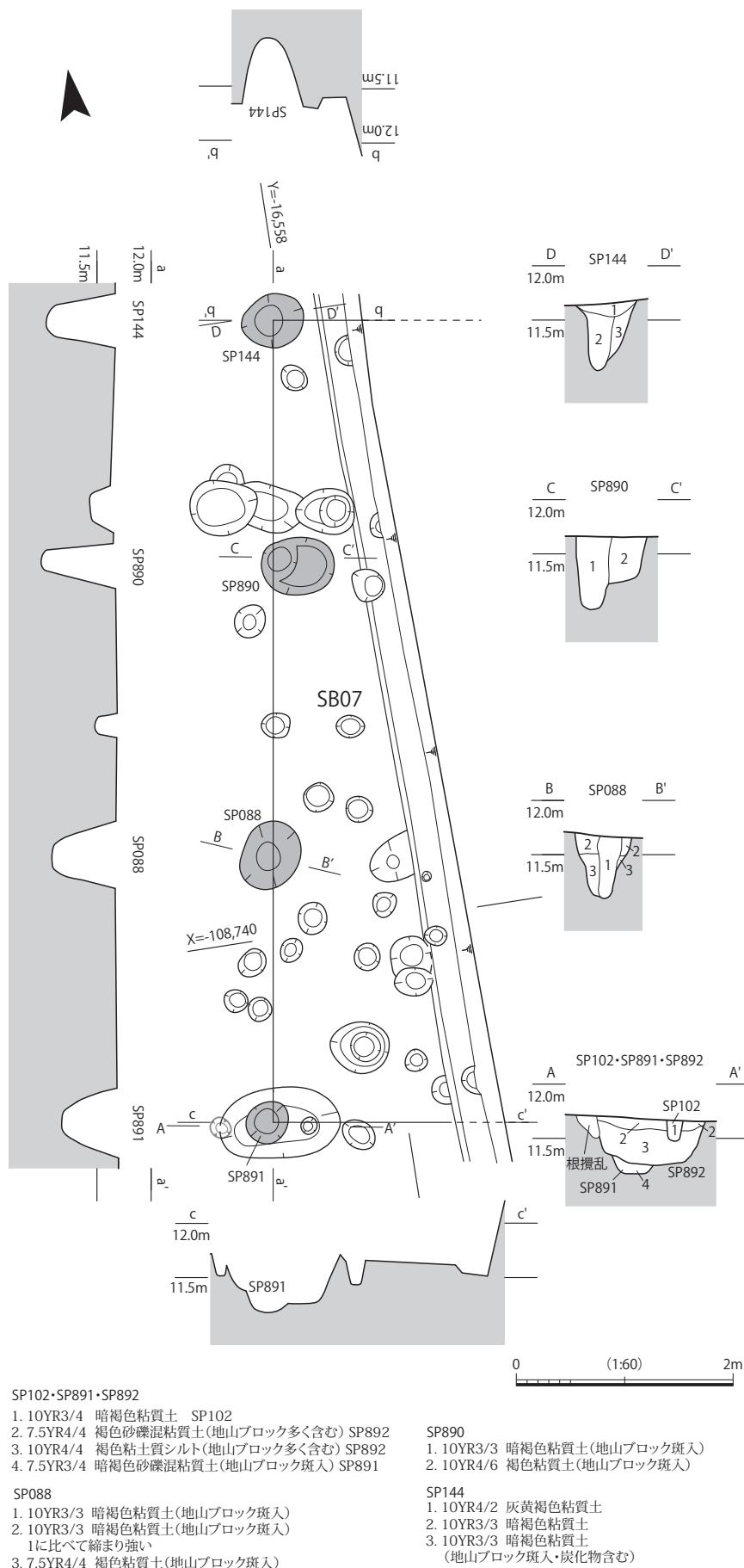
細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から尾張型第5・6型式に相当する山茶碗が出土した。建物方位は掘立柱塀・柵SA06・07に近似しており、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

S B 0 7 (第16図) 屋敷地Eの中央東寄りで検出した南北3間(7.4m)の掘立柱建物である。詳細な規模・構造は不明だが、他の掘立柱建物に比べて柱穴の掘形規模が大きく、掘削深度も深いことから、塀や柵ではなく倉庫等の大型掘立柱建物になると考えられる。調査区外にさらに連続する。建物方位はN-9°-Eで、床面積は10.8m²以上を測る。

柱間寸法は北から2.2~2.7mを測る。柱穴掘形の平面形は円形あるいは楕円形で、規模は径0.5~0.7m、検出面からの深さは0.6~0.7mを測る。柱痕跡はSP088・890・144で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で直径約20cmを測る。丸柱と考えられる。なお、SP892はSP891の柱抜取り穴の可能性が高い。

柱穴掘形から尾張型第7・8型式に相当する山茶碗の小皿(4)が出土した。建物方位は掘立柱建物SB01・12・13などにほぼ一致するため、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

S B 0 8 (第17図上) 屋敷地Eの南東部で検出した東西棟の掘立柱建物である。調査区外に連続するため詳細な規模・構造は不明だが、南北2間



第16図 掘立柱建物 SB07 平・断面図

(4.2 m) × 東西 2 間 (3.0m) 以上の掘立柱建物になると考えられる。建物方位は N-13°-E (N-77°-W) で、床面積は約 15.5m²以上を測る。

柱間寸法は、南北方向が 1.9 ~ 2.3m、東西方向が 1.4 ~ 1.6m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.2 ~ 0.3m、検出面からの深さは 0.15 ~ 0.4m を測る。柱痕跡は SP111・762 で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で直径 10 ~ 15cm を測る。丸柱であろう。柱抜き取り穴は確認できなかつた。

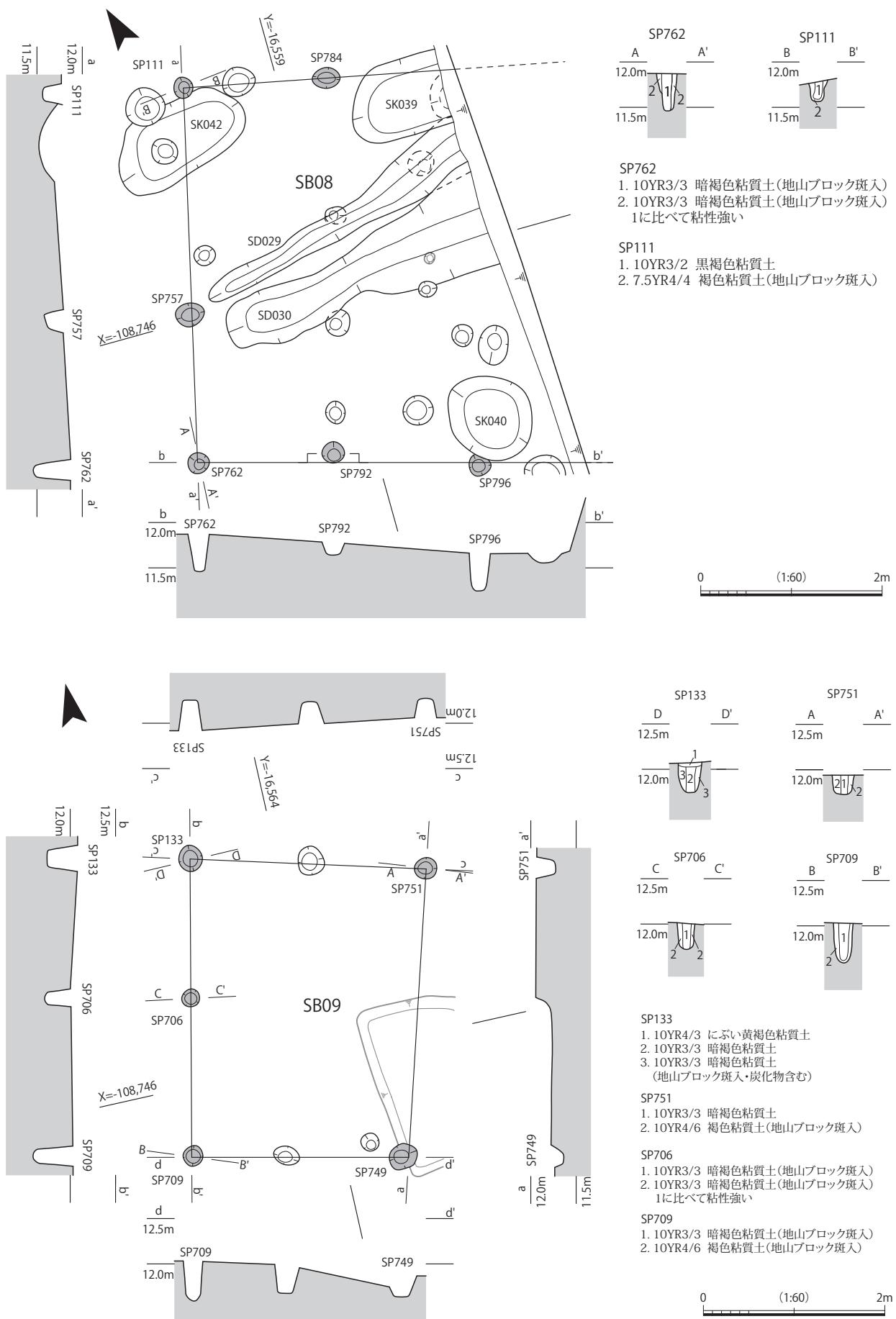
細片のため図化できなかつたが柱穴掘形から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。建物方位は掘立柱塀・柵 SA08 などに一致するため、これらは同時期か近接した時期の建物の可能性が高い。

SB09 (第17図下)

屋敷地 E の中央部で検出した桁行 2 間 (3.2 ~ 3.3m) × 梁行 1 間 (2.4 ~ 2.6m) の南北棟の側柱建物である。建物方位は N-12°-E で、床面積は約 8.1m²を測る。

柱間寸法は、桁行が 1.6 ~ 1.7m、梁行が 2.4 ~ 2.6m を測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で規模は径 0.2 ~ 0.3m、深さは 0.2 ~ 0.4m を測る。

柱痕跡は SP133・706・



第17図 掘立柱建物SB08・09 平・断面図

709・751で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で直径15~20cmを測る。丸柱と考えられる。柱抜き取り穴は確認できなかった。

細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から初期山茶碗第3・4型式に相当する山茶碗が出土した。建物方位は掘立柱塀・柵SA10などにほぼ一致するため、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

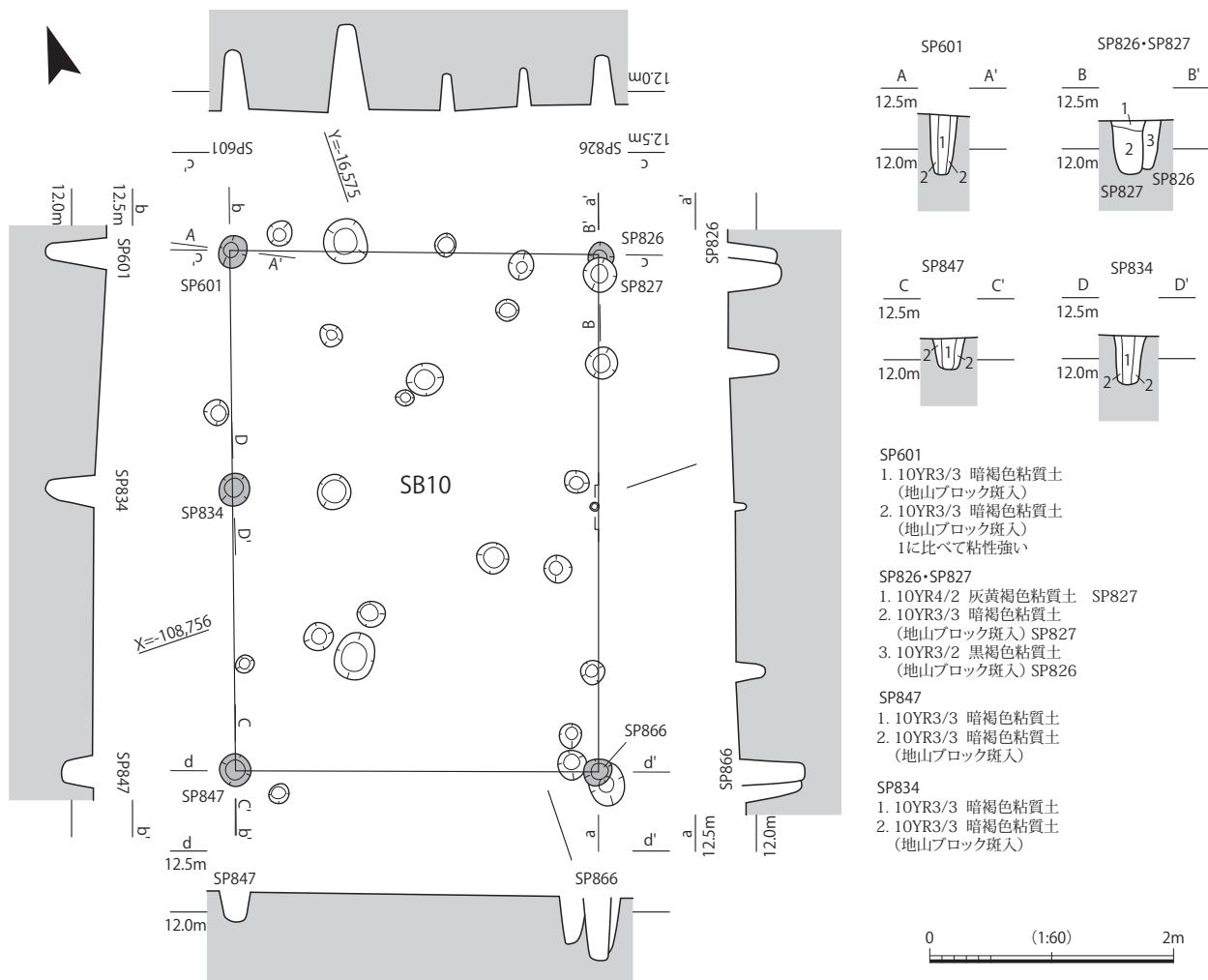
S B 1 0 (第18図) 屋敷地Eの南側(2区北端)で検出した桁行2間(4.2~4.3m)×梁行1間(3.0m)の南北棟の側柱建物である。建物東辺中央において西辺と相対する位置に柱穴が確認できないことから、調査区東側に連続する可能性もある。建物方位はN-17°-Eで、床面積は約12.8m²を測る。柱間寸法は、桁行が2.1~2.4m、梁行は3.0m

を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径0.1~0.3m、深さは0.1~0.5mを測る。柱痕跡はSP601・834・847で確認した。柱痕跡の平面形は円形で直径約20cmを測る。丸柱と考えられる。柱抜き取り穴は確認できなかった。

細片のため図化出来なかつたが、柱穴掘形から初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。掘立柱建物SB04と建物方位が一致するため、SB04と同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

S B 1 1 (第19図) 屋敷地Eの南西部で検出した桁行2間(3.5~3.6m)×の梁行1間(3.6m)の東西棟の側柱建物である。建物方位はN-27°-Eで、床面積は約12.5m²を測る。

柱間寸法は、桁行が1.7~1.8m、梁行が3.6m



第18図 掘立柱建物SB10 平・断面図

を測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で、規模は径 0.15 ~ 0.3m、検出面からの深さは 0.3 ~ 0.4m を測る。柱痕跡は SP389・391 で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で直径 20 ~ 30cm を測る。丸柱と考えられる。明確な柱抜き取り穴は確認できなかった。

細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。建物方位は掘立柱建物 SB05、掘立柱塀・柵 SA11 などにほぼ一致するため、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

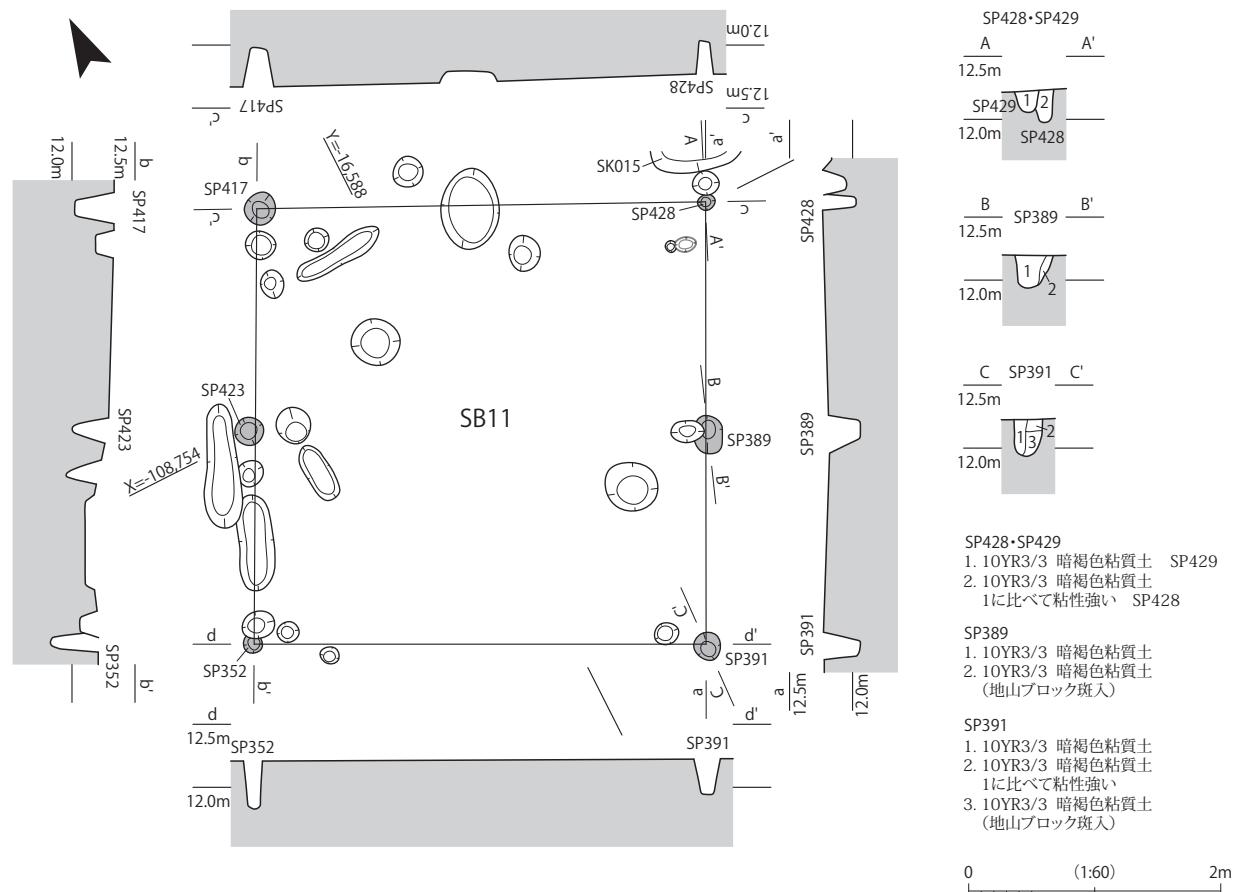
SB12 (第20図) 屋敷地Eの中央東寄りで検出した掘立柱建物である。調査区外に連続するため詳細な規模・構造は不明だが、南北3間(7.0m)×東西1間(2.4m)以上の掘立柱建物になると考えられる。建物方位は N-9°-E で、床面積は約

16.3m²以上を測る。

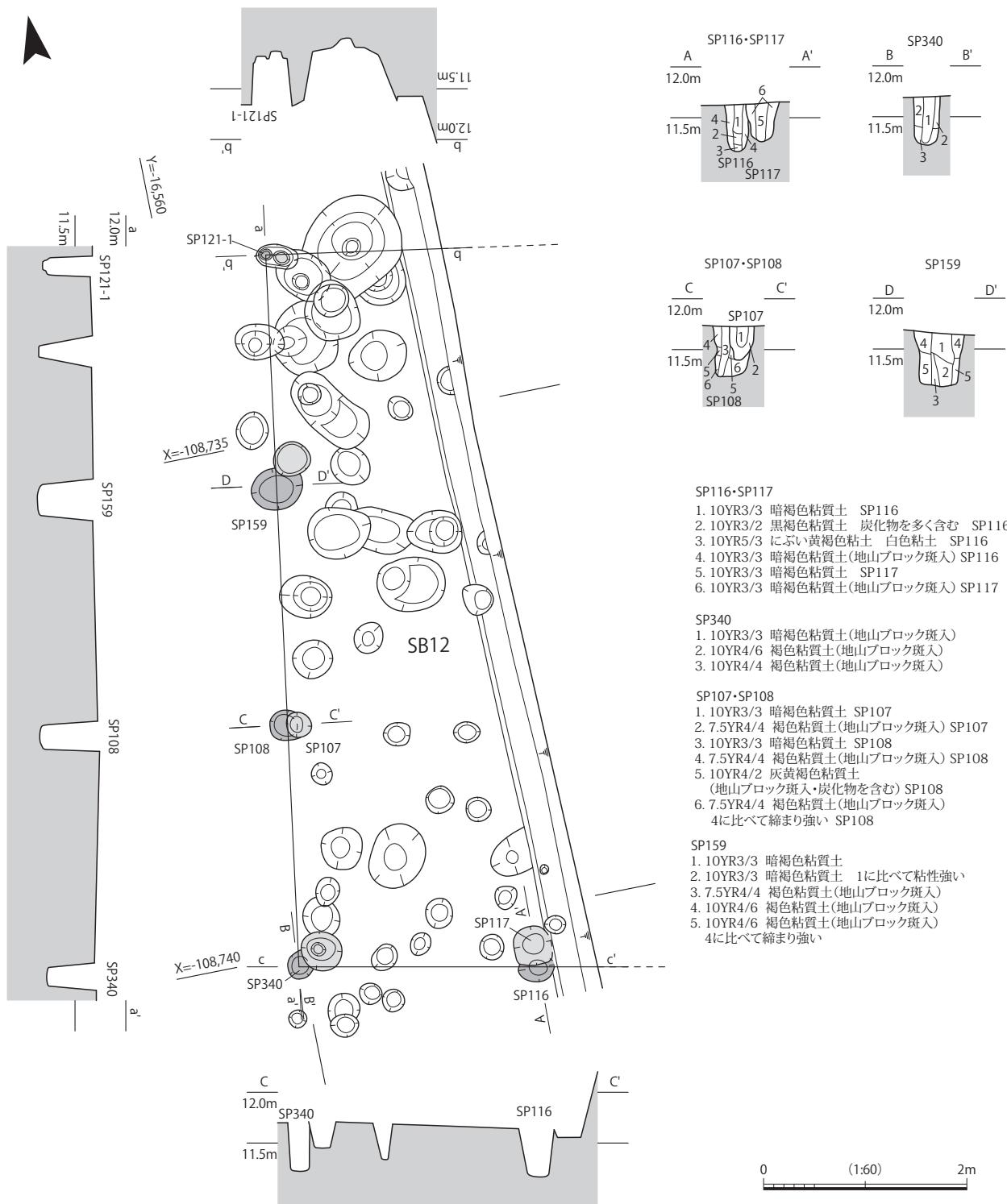
柱間寸法は、南北方向が 2.3 ~ 2.4m、東西方向が 2.4m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.3 ~ 0.5m、深さは 0.5 ~ 0.6m を測り、他の掘立柱建物に比べて柱の根入れが深い点が特徴的である。

柱痕跡は SP108・116・159・340 で確認した。柱痕跡の平面形はいずれも円形で、直径 10 ~ 15 cm を測る。丸柱と考えられる。明確な柱抜き取り穴は確認できなかった。柱穴掘形から尾張型第8型式に相当する山茶碗(5)が出土した。

後述する掘立柱建物 SB13 と同規模・同位置に建てられており、重複関係から SB13 に先行することから SB13 建替え前の建物と考えられる。建物方位は掘立柱建物 SB07・13 にほぼ一致するため、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。



第19図 掘立柱建物 SB11 平・断面図

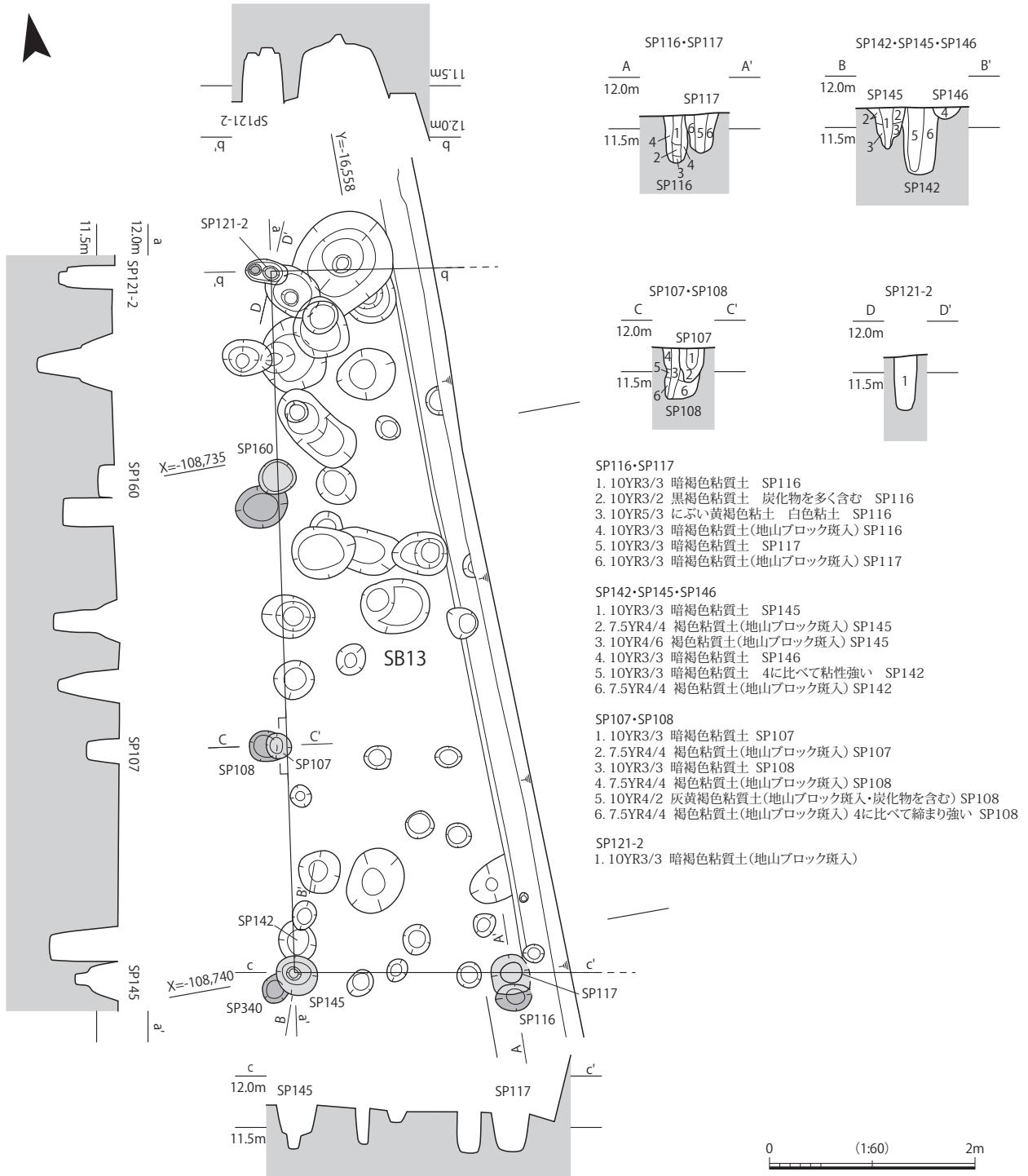


第20図 掘立柱建物 SB12 平・断面図

SB13 (第21図) 屋敷地Eの中央東寄りで検出したSB12に重複する掘立柱建物である。調査区外に連続するため詳細な規模・構造は不明だが、南北3間(6.9m)×東西1間(2.1m)以上の掘立柱建物になると考えられる。建物方位はN-8°-Eで、

床面積は約14.4m²以上を測る。

柱間寸法は、南北方向が2.0~2.6m、東西方向が2.1mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径0.25~0.4m、深さは0.2~0.5mを測る。柱痕跡はSP107・117・145で確認した。



第21図 掘立柱建物 SB13 平・断面図

柱痕跡の平面形はいずれも円形で直径 10 ~ 20cm を測る。丸柱であろう。

細片のため図化しなかったが、柱穴掘形から尾張型第5型式に相当する山茶碗の小皿が出土した。重複関係から掘立柱建物 SB12 に後出する。先述

のように、SB12 と同規模・同位置に建てられていることから、SB12 を建て替えて SB13 が建てられたと考えられる。建物方位は掘立柱建物 SB001・07・12 などにほぼ一致しており、これらは同時期もしくは近接した時期の建物の可能性が高い。

第4節 掘立柱塀・柵

塀もしくは柵と考えられる掘立柱列は13条検出した。

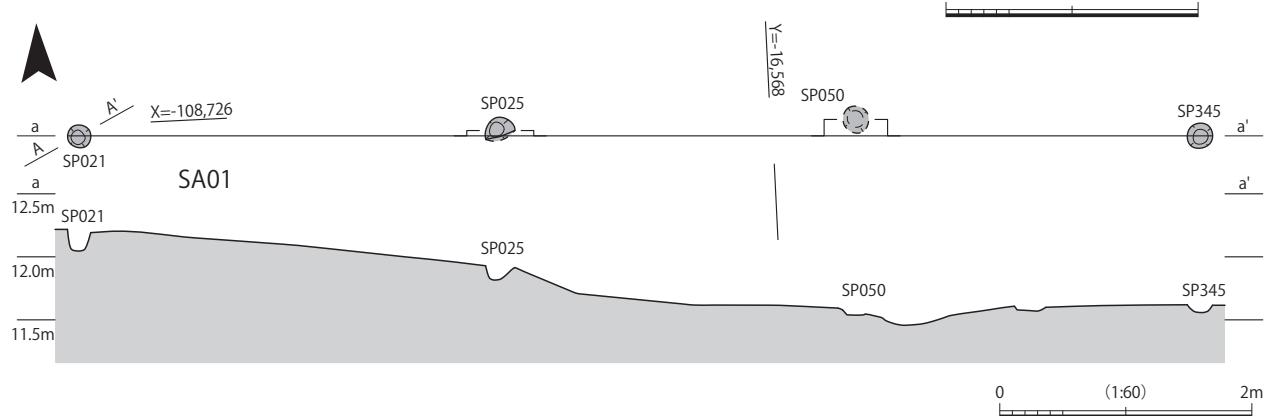
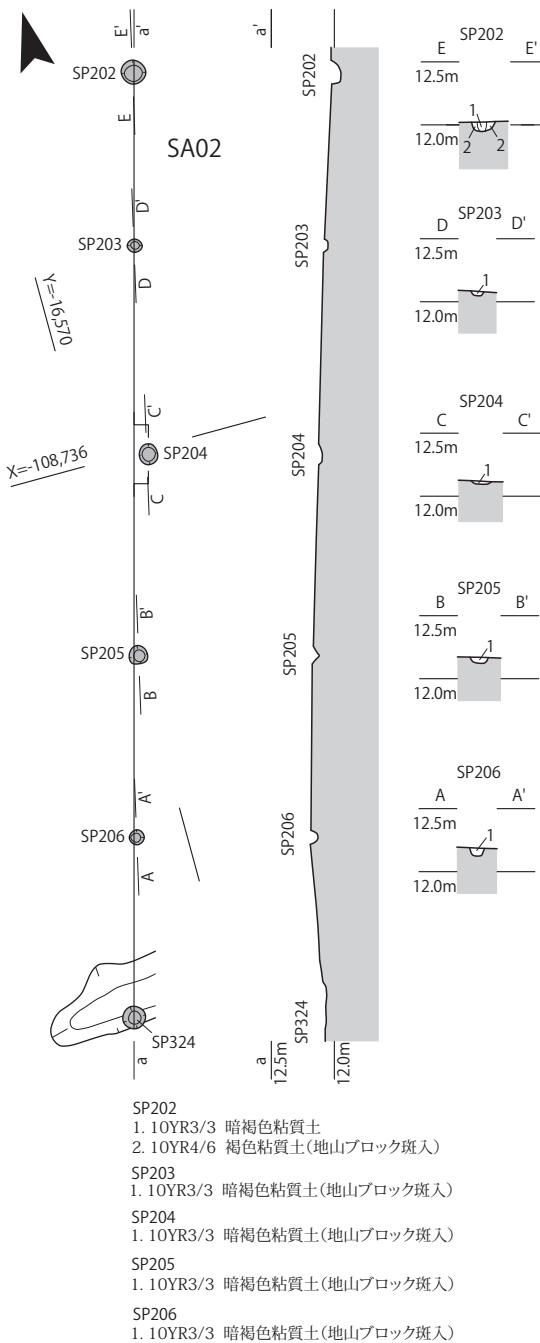
S A 0 1 (第22図下) 掘立柱建物SB01の北側で検出した東西方向の掘立柱列で、3間分(約9m)を検出した。柱間寸法は2.8~3.3mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は径0.2~0.3m、検出面からの深さは0.05~0.2mを測る。柱筋方位はN-2°-E(N-88°-W)である。

細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から尾張型第5型式に相当する山茶碗、常滑窯産羽釜などが出土した。掘立柱建物SB01の北辺に並行しつつ隣接することから、SB01に伴う掘立柱塀・柵と考えられる。

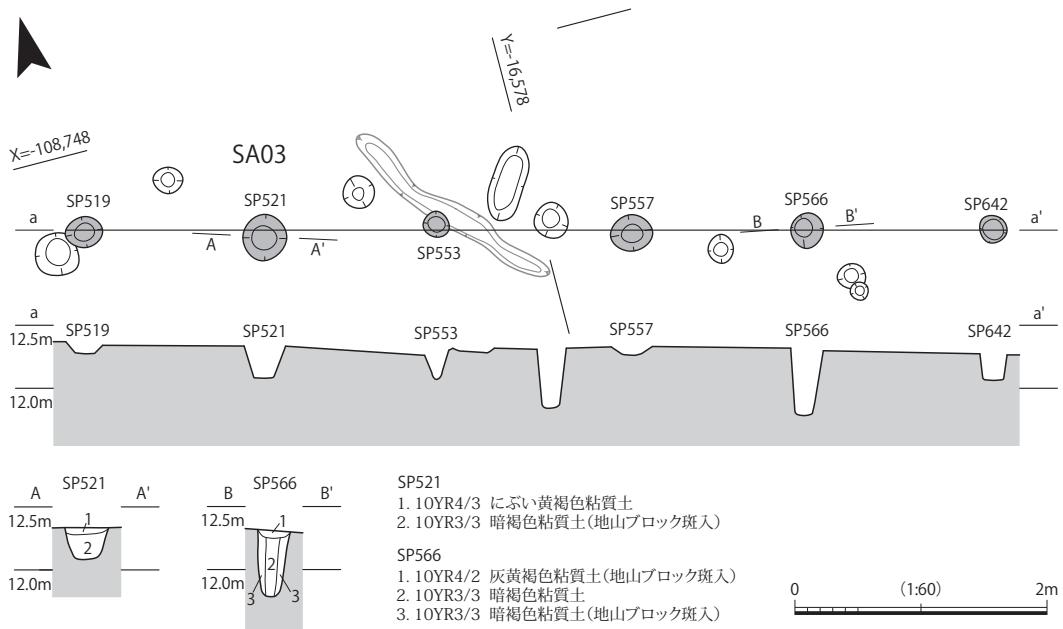
S A 0 2 (第22図右上) 掘立柱建物SB02の東辺に並行した南北方向の掘立柱列で、5間分(7.5m)を検出した。柱筋方位はN-16°-Eである。柱間寸法は1.4~1.7mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は径0.1~0.2m、検出面からの深さは0.05~0.1mを測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から尾張型第5型式に相当する小皿が出土した。掘立柱建物SB02の東辺に並行しつつ隣接するため、SB02に伴う掘立柱塀・柵と考えられる。

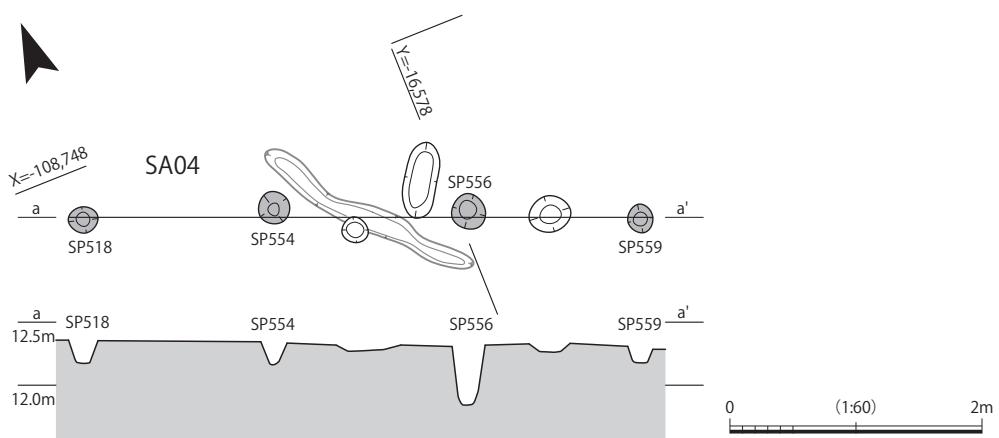
S A 0 3 (第23図) 掘立柱建物SB03の南辺に並行する東西方向の掘立柱列で、5間分(7.2m)を検出した。柱間寸法は1.4~1.6mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、規模は径0.2~0.4m、検出面からの深さは0.1~0.5m



第22図 掘立柱塀・柵 SA01・02 平・断面図



第23図 掘立柱塀・柵 SA03 平・断面図



第24図 掘立柱塀・柵 SA04 平・断面図

とばらつきがある。柱筋方位はN-15°-E (N-75°-W)である。柱穴掘形から尾張型第5型式に相当する山茶碗(6)、常滑窯産の羽釜などが出土した。掘立柱建物SB03の南辺に並行しつつ近接することから、SB03に伴う掘立柱塀・柵と考えられる。

S A 0 4 (第24図) 掘立柱柵SA03に重複する東西方向の掘立柱列で、3間分(4.4m)を検出した。柱筋方位はN-22°-E (N-68°-W)である。柱間寸法は1.4~1.5mを測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で、規模は直径0.2~0.3m、検出面からの深さは0.1~0.2mを測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。柱筋方位は掘立柱建物SB05・11などに近似しており、これらは同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

S A 0 5 (第25図) 掘立柱建物SB10に重複する東西-南北方向の掘立柱列で、東西2間(2.7m)×南北3間分(4.8m)を検出した。南北方向の柱筋方位はN-25°-Eである。柱間寸法は、南北方向が1.3~1.8m、東西方向が1.3~1.4mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模

は径 0.2 ~ 0.3m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.2m を測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。柱筋方位は掘立柱建物 SB05・11、掘立柱塀・柵 SA11 に近似しており、これらと同時期もしくは近接した時期の塀・柵の可能性が高い。重複関係から SB10 に後出する。

S A 0 6 (第26図左) 掘立柱建物 SB06 の西側で検出した南北方向の掘立柱列で、5間分 (9.2m) を検出した。柱筋方位は N-14° - E である。柱間寸法は 1.8 ~ 2.0 m を測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で、規模は直径約 0.3 ~ 0.45m、検出面からの深さは 0.2 ~ 0.6m を測る。

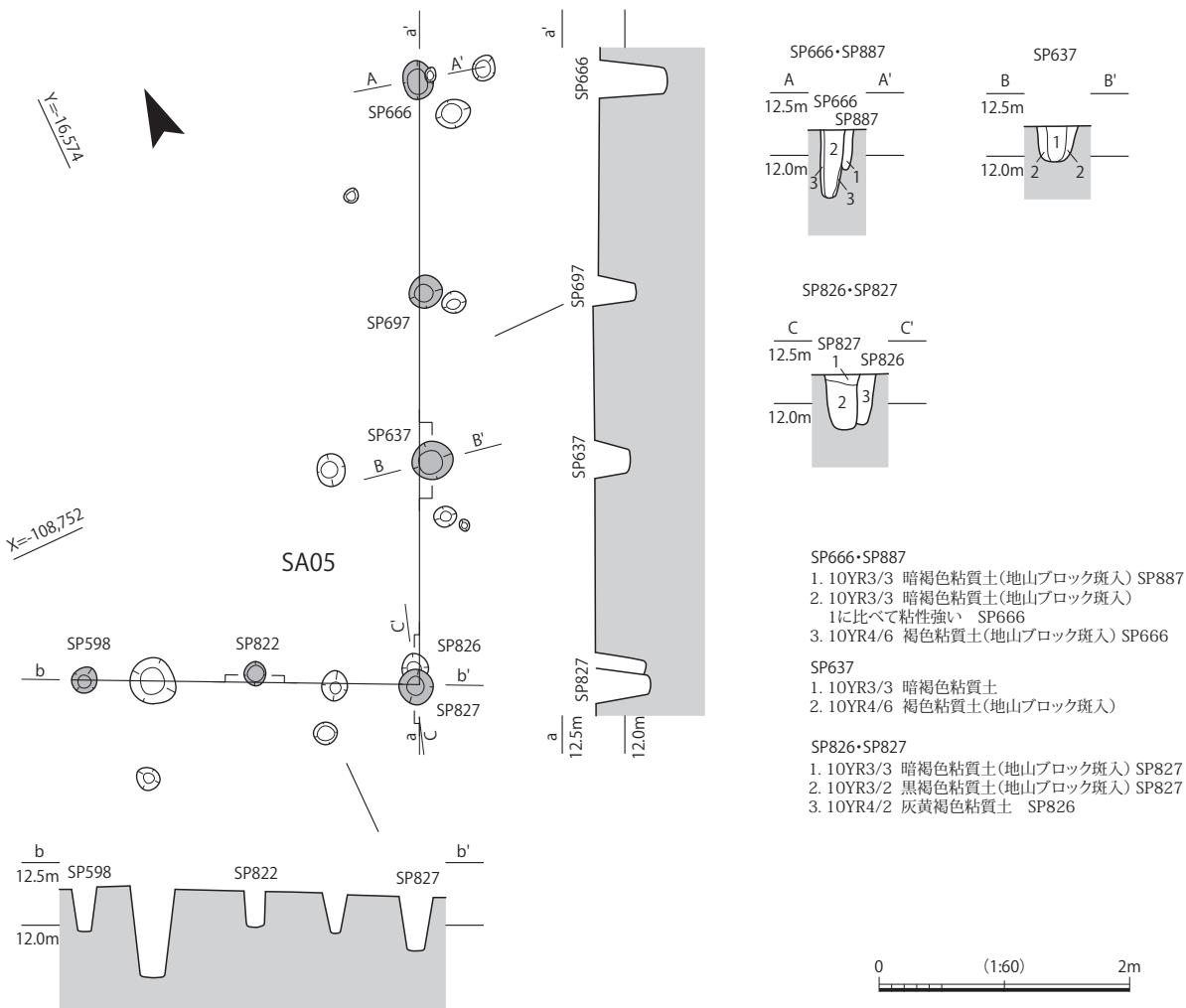
細片のため図化できなかったが、柱穴掘形から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。柱筋方位は掘立柱建物 SB08、掘立柱塀・柵 SA07・

08 などにほぼ一致しており、これらと同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

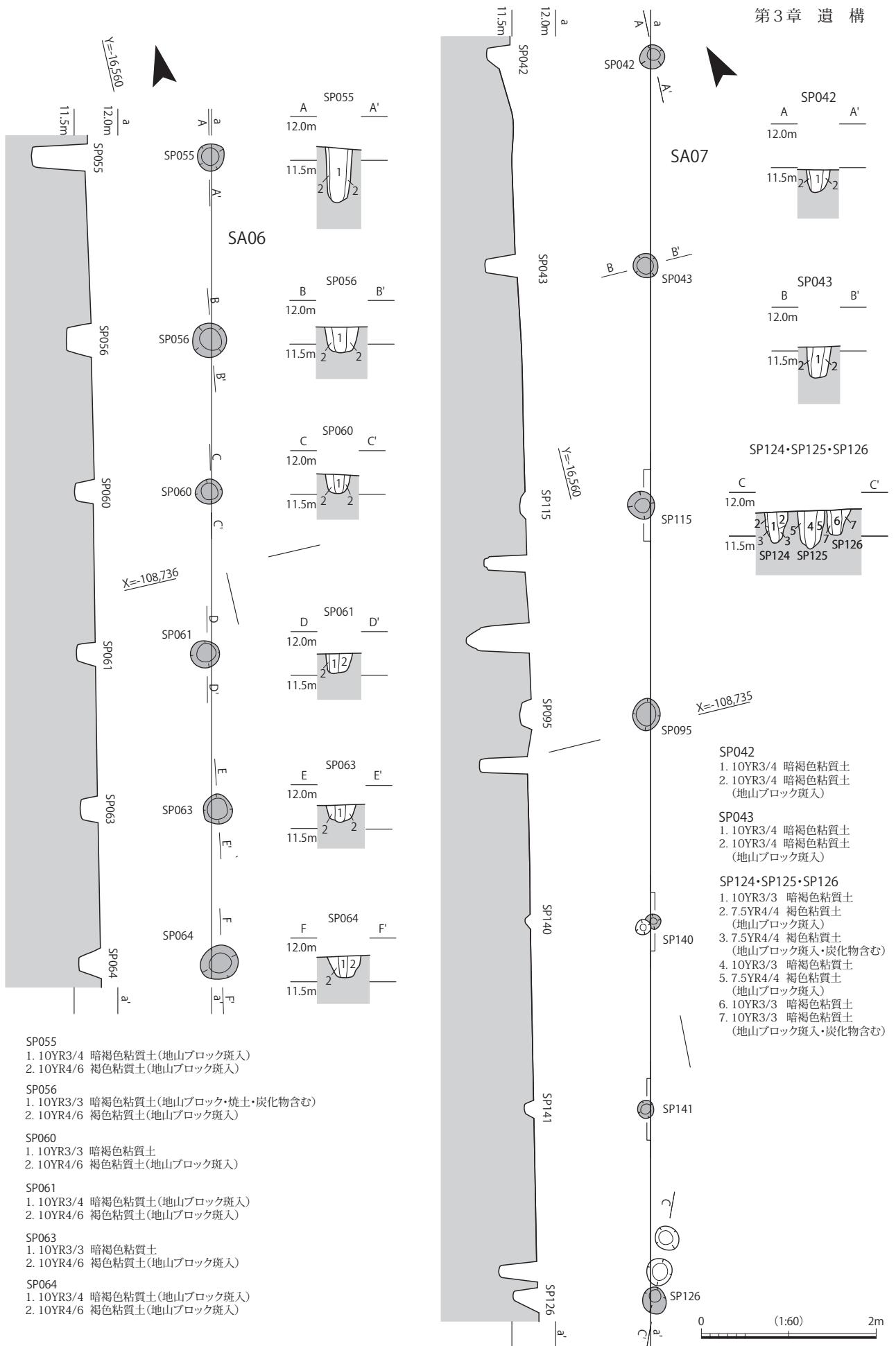
S A 0 7 (第26図右) 掘立柱建物 SB06 の西側で検出した南北方向の掘立柱列で、6間分 (14.2m) を検出した。柱筋方位は N-14° - E である。柱間寸法は 2.1 ~ 2.8 m を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径 0.2 ~ 0.3m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.2m を測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から初期山茶碗第3・4型式に相当する山茶碗が出土した。柱筋方位は掘立柱建物 SB06・08、塀・柵 SA08 などに近似しており、これらと同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

S A 0 8 (第27図) 掘立柱建物 SB08 の西側で検出した南北-東西方向の掘立柱列で、南北5間 (9.8m) × 東西3間分 (6.3m) を検出した。南北方向の柱筋方位は N-13° - E である。柱間寸法は、



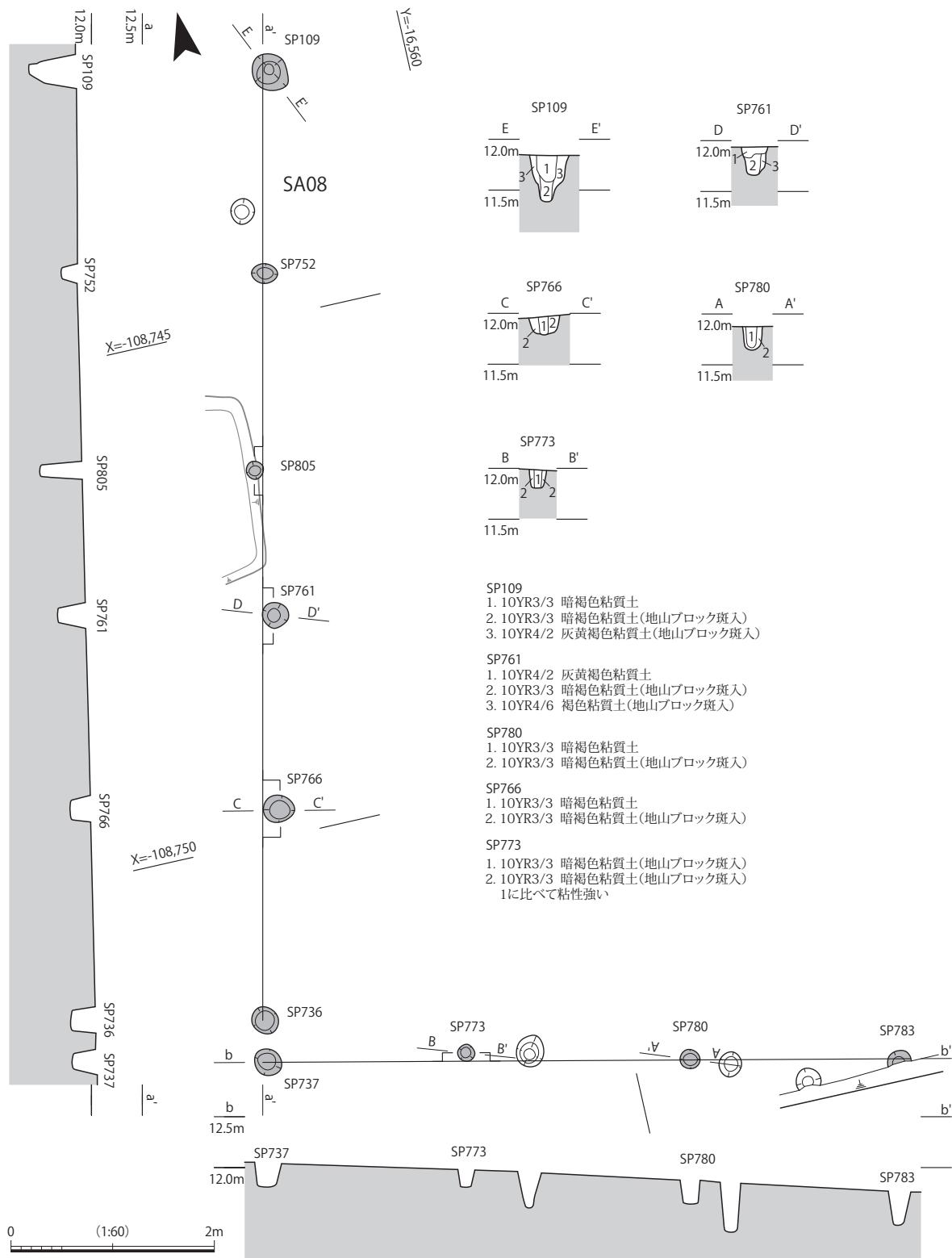
第25図 掘立柱塀・柵 SA05 平・断面図



第26図 掘立柱塀・柵 SA06・07 平・断面図

南北方向が1.4～2.1m、東西方向が1.9～2.2mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径約0.2～0.4m、検出面からの深さは0.2～0.45mを測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から尾張型第5型式に相当する山茶碗、常滑窯産甕などが出土した。柱筋方位は掘立柱建物SB08、塀・柵SA06・07、SD031などに近似しており、これらと



第27図 掘立柱塀・柵 SA08 平・断面図

同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

S A 0 9 (第28図) 掘立柱建物SB03の南西で検出したSA10に重複する南北方向の掘立柱列である。5間(8.5m)分を検出した。柱筋方位はN-14°-Eである。柱間寸法は1.6~1.8mを測る。柱穴掘形の平面形は円形で、規模は直径0.2~0.3m、検出面からの深さは0.1~0.2mを測る。

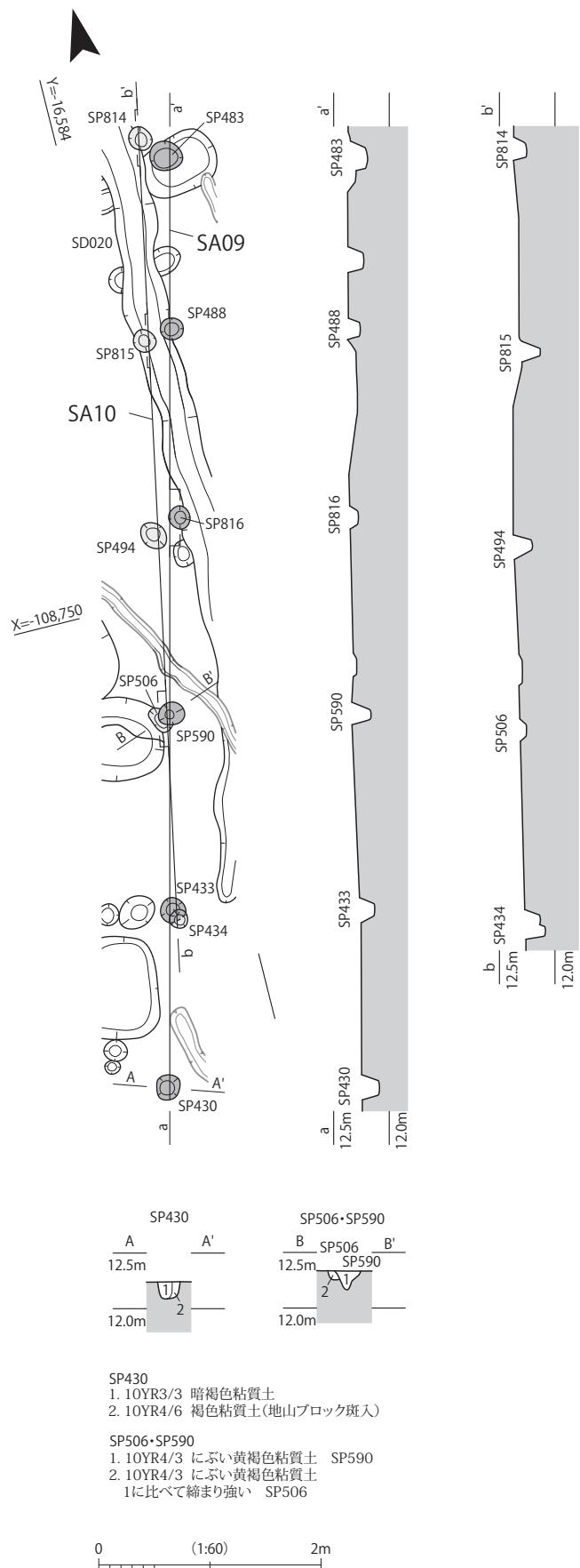
細片のため図化できなかったが、柱穴内から尾張型第5型式に相当する山茶碗などが出でた。柱筋方位は掘立柱建物SB08、塀・柵SA07・08などに近似しており、これらと同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。重複関係からSA10に後出する。

S A 1 0 (第28図) 掘立柱列SA09に重複する南北方向の掘立柱列で、4間分(7.0m)を検出した。柱筋方位はN-11°-Eである。柱間寸法は1.7~1.8mを測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径約0.2m、検出面からの深さは0.1~0.2mを測る。

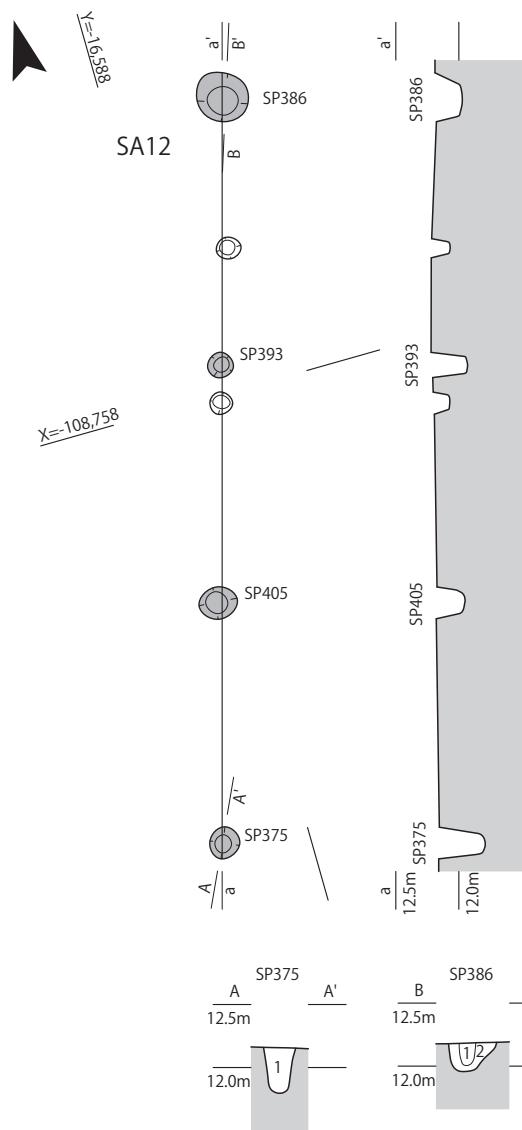
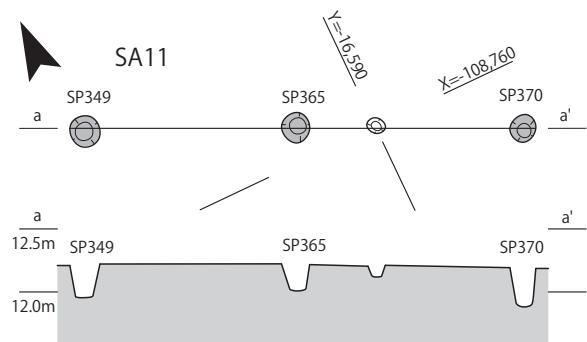
細片のため図化できなかったが、柱内内から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出でた。柱筋方位は掘立柱建物SB01・07・09、塀・柵SA01に近似しており、これらと同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

S A 1 1 (第29図上) 掘立柱建物SB11の南側で検出した東西方向の掘立柱列で、2間分(3.5m)を検出した。柱筋方位はN-25°-E(N-65°-W)である。柱間寸法は1.7~2.0mを測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で、規模は直径0.2~0.25m、検出面からの深さは0.2~0.3mを測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出でた。柱筋方位は掘立柱建物SB11、掘立柱塀・柵SA04・05などに近似しており、これらと同時期もしくは近接した時期の掘立柱

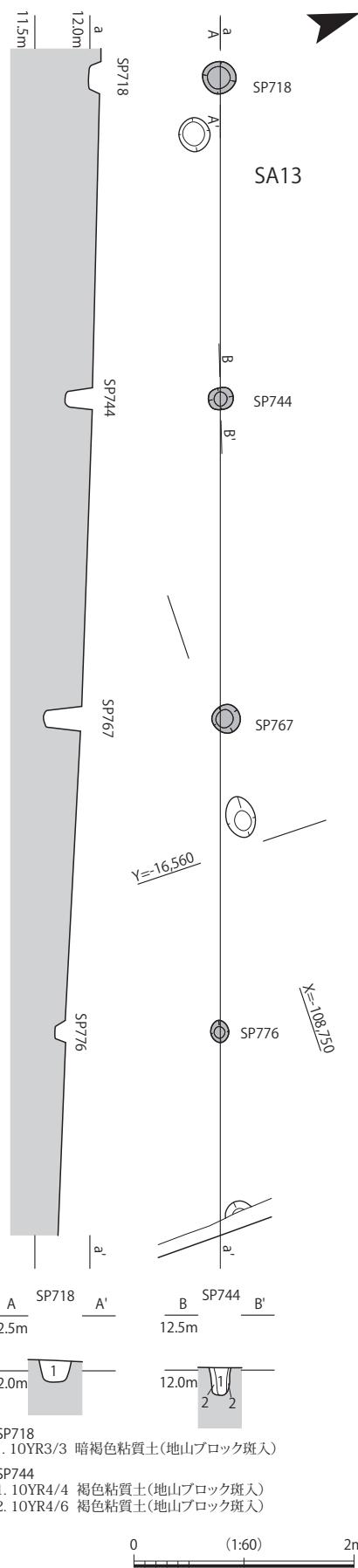


第28図 掘立柱塀・柵SA09・10 平・断面図



- SP375 A 12.5m
SP386 B 12.5m
- 12.0m 12.0m
1. 10YR3/3 暗褐色粘質土(地山ブロック斑入)
2. 10YR4/3 にびい黄褐色粘質土(地山ブロック斑入)
1に比べて粘性強い

0 (1:60) 2m



第29図 掘立柱塀・柵 SA11・12 平・断面図

表3 掘立柱塀・柵一覧

※掘立柱塀・柵の方位は、東西方向に限り柱筋に直交する方位を基準とした。

遺構番号	構造・方向	方位	規模(m)	構成する柱穴・柱間(m)
掘立柱塀・柵 SA01	東西	N2° E (N88° W)	東西3間 (9.0)	SP021 (3.3) -025 (2.9) -050 (2.8) -345
掘立柱塀・柵 SA02	南北	N16° E	南北5間 (7.5)	SP202 (1.4) -203 (1.7) -204 (1.6) -205 (1.4) -206 (1.4) -324
掘立柱塀・柵 SA03	東西	N15° E (N75° W)	東西5間 (7.2)	SP519 (1.4) -521 (1.4) -553 (1.6) -557 (1.4) -566 (1.4) -642
掘立柱塀・柵 SA04	東西	N22° E (N68° W)	東西3間 (4.4)	SP518 (1.5) -554 (1.5) -556 (1.4) -559
掘立柱塀・柵 SA05	南北・東西	N25° E-N65° W	南北3間 (4.8)	SP666 (1.7) -697 (1.3) -637 (1.8) -827
			東西2間 (2.7)	SP598 (1.4) -822 (1.3) -827
掘立柱塀・柵 SA06	南北	N14° E	南北5間 (9.2)	SP055 (2.0) -056 (1.8) -060 (1.8) -061 (1.8) -063 (1.8) -064
掘立柱塀・柵 SA07	南北	N14° E	南北6間 (14.2)	SP042 (2.4) -043 (2.8) -115 (2.4) -095 (2.3) -140 (2.1) -141 (2.2) -126
掘立柱塀・柵 SA08	南北・東西	N13° E-N77° W	南北5間 (9.8)	SP109 (2.0) -752 (1.9) -805 (1.4) -761 (1.9) -766 (2.1) -736
			東西3間 (6.3)	SP737 (1.9) -773 (2.2) -780 (2.1) -783
掘立柱塀・柵 SA09	南北	N14° E	南北5間 (8.5)	SP483 (1.6) -488 (1.7) -816 (1.8) -590 (1.8) -433 (1.6) -430
掘立柱塀・柵 SA10	南北	N11° E	南北4間 (7.0)	SP814 (1.8) -815 (1.7) -494 (1.7) -506 (1.8) -434
掘立柱塀・柵 SA11	東西	N25° E (N65° W)	東西2間 (3.5)	SP349 (1.7) -365 (1.8) -370 (2.0)
掘立柱塀・柵 SA12	南北	N16° E	南北3間 (5.9)	SP386 (2.1) -393 (1.9) -405 (1.9) -375
掘立柱塀・柵 SA13	東西	N18° E (N72° W)	東西3間 (8.7)	SP718 (2.9) -744 (2.9) -767 (2.9) -776

塀・柵の可能性が高い。重複関係から木棺土壙墓 ST001 に後出する。

S A 1 2 (第 29 図下) 掘立柱建物 SB11 の南側で検出した南北方向の掘立柱列で、3 間分 (5.9 m) を検出した。柱筋方位は N-16° -E である。柱間寸法は 1.9 ~ 2.1 m を測る。柱穴掘形の平面形はいずれも円形で、規模は直径約 0.2 ~ 0.4m、検出面からの深さは 0.2 ~ 0.4m を測る。

細片のため図化できなかったが、柱穴内から初期山茶碗第 3・4 型式に相当する山茶碗が出土した。柱筋方位は掘立柱建物 SB02・03、掘立柱塀・柵 SA02・03・09 などに近似しており、これらと同時期あるいは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

S A 1 3 (第 30 図) 掘立柱建物 SB08 の南側で検出した東西方向の掘立柱列で、3 間分 (8.7 m) を検出した。柱筋方位は N-18° -E (N-72° -W) である。柱間寸法は 2.9 m 等間を測る。柱穴掘形の平面形は円形もしくは橢円形で、規模は径約 0.2 ~ 0.3m、検出面からの深さは 0.1 ~ 0.5m を測り、ややばらつきがある。

柱穴内から灰釉陶器の椀、初期山茶碗第 3 型式に相当する小碗 (7)、尾張型第 5 型式に相当する山茶碗などが出土した。柱筋方位は掘立柱建物 SB04・10、木棺土壙墓 ST001 に近似しており、これらの遺構と同時期もしくは近接した時期の掘立柱塀・柵の可能性が高い。

第5節 溝

溝は全部で 27 条検出した。いずれも石組みや杭列などの護岸施設を持たない素掘りの溝である。溝には幅が 1.0m 以上で中世の屋敷地を分ける区画溝 (SD001・002・008)、中世の屋敷地内の小区画溝や建物に伴うと思われる溝 (SD025・031)、これ以外の区画溝 (SD004・029・030・020) や近世以降の耕作関連の溝 (SD003・006・007) などがある。

以下、主要な溝について報告する。

区画溝 S D 0 0 1 ・ 0 0 2 ・ 0 0 8 (第 31 ~ 33 図) 1 区北端で検出した屋敷地 E の北辺と西辺を画す区画溝である。溝は南西から北東方向に直線的に延びる SD001 とこれに T 字状に接続して東西方向に直線的に延びる SD002・008 で構成される。SD002 と SD008 の間に溝が途切れる箇所がみられるが、この部分は近世の耕地段差が地山深くまで及んでいたため削平されたとみられ、本来は途切れることなく連続していたと考えられる。

SD001 の規模は、検出長 12.3m、最大幅 1.1m、深さは最大で 0.4m を測り、横断面形は碗形を呈する。溝底のレベルは南西から北東に向けて徐々に低くなり、比高差は約 0.3 m を測る。雨水や汚水は南西から北東に向けて流れたと考えられる。主軸方位は N-25° -E である。

SD002・008 の規模は、検出長 16.5 m、最大幅 1.1 m、深さは最大で 0.3 m を測り、横断面形は碗形あるいは皿状を呈する。溝底のレベルは地形に

沿って西から東に向けて低くなり、比高差は約 0.8 m を測る。主軸方位は N-9° -E (N-81° -W) である。

埋土は主に地山ブロックを含む暗褐色・褐色粘質土である。SD001 と SD008 の断面観察で掘り直しの痕跡を確認した。埋土から H-72 号窯式から百代寺窯式の灰釉陶器の椀・短頸壺、初期山茶碗第 3 型式から尾張型第 6 型式にかけての小碗・山茶碗・小皿・短頸壺・托・片口鉢 I 類、融着山茶碗、12 世紀後半から 13 世紀代の常滑窯産の甕・羽釜、15 世紀代の古瀬戸縁釉小皿、常滑窯産甕などが出土地 (第 49 ~ 52 図)。出土状況としては、底部付近で 11 世紀代から 13 世紀代までの製品が多くみられ、掘り直し後の中・上層付近では遺物量が少なく、15 世紀代の遺物を少量含む程度であった。

先述の掘立柱建物群の構築時期を踏まえた上で溝の帰属時期を推定すると、屋敷地を分ける区画溝は概ね 12 世紀代に開削され、13 世紀代にかけて使用された後に埋没し、その後、15 世紀代に再掘削され使用されたと推測される。

SD006・007 (第 31 図) 1 区北東隅で検出した南北方向の直線的な溝で、検出長 1.7 ~ 1.9 m、幅 0.3 ~ 0.4 m、深さは 0.15 ~ 0.16 m を測る。横断面形は碗形を呈する。溝底のレベルに顕著な高低差は認められなかった。

埋土は地山ブロックを斑状に含む褐色粘質土で、細片のため図化しなかったが、時期不詳の山茶碗が出土した。後述の近世溝 SD003 に直交する方向に掘られていることから近世の耕作関連の溝と考えられる。

SD009 (第 8・31 図) 1 区北東隅で検出した南北方向に延びる溝で、検出長 0.7 m、幅 0.35 m、深さは 0.15 m を測る。横断面形は碗形を呈する。溝底のレベルに顕著な高低差は認められなかった。

埋土は暗褐色粘質土を主体とする。細片のため図化しなかったが時期不詳の山茶碗が出土した。重複関係から SD010 に先行する。

SD010 (第 31 図) 1 区北東隅で検出した東西方向に延びる溝状遺構で、検出長 6.1 m、最大幅 2.4 m、深さは最大で 0.4 m を測る。横断面形は逆台形あるいは皿状を呈する。溝底のレベルは西側に比べて東側が約 0.5 m 低い。

断面観察から数度の掘り直しの痕跡を確認した。埋土から初期山茶碗第 3・4 型式、尾張型第 5 型式に相当する小皿、12 世紀後半から 13 世紀初頭の常滑窯産の甕・羽釜・三筋壺、15 世紀代の古瀬戸鉄釉合子蓋、大窯期の天目茶碗などが出土した (第 53 図)。なお、断面観察から区画溝 SD008 に先行するため、15 世紀代の遺物については SD010 上面から掘り込まれた遺構の遺物が混入した可能性が考えられる。溝の性格は不明である。

SD025 (第 34・35 図)

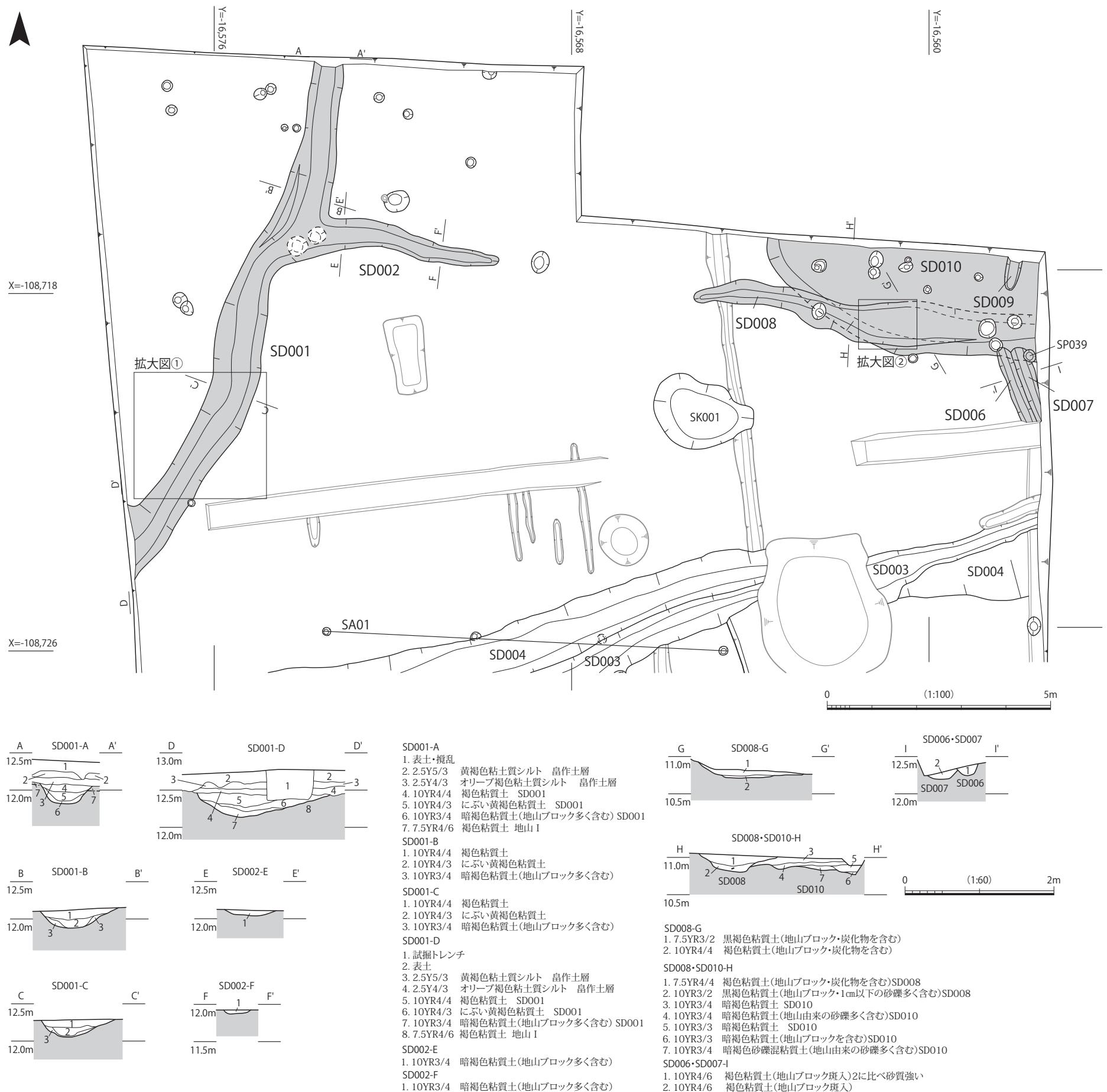
屋敷地 E の中央部で検出した東西方向に延びる直線的な溝である。規模は検出長 3.2 m、幅 0.4 m、深さは最大で 0.18 m を測り、横断面形は逆台形を呈する。溝底のレベルに顕著な高低差はみられなかった。主軸方位は N-16° -E (N-74° -W) で、掘立柱建物 SB02・03・04 にほぼ並行する。

埋土は地山ブロックを斑状に含む暗褐色粘質土である。埋土から初期山茶碗第 4 型式から尾張型第 5 型式に相当する山茶碗・小皿・片口山茶碗、融着山茶碗、常滑窯産羽釜 (第 54 図) などが 100 点近く出土した。出土遺物の内訳は表 8 の通りであるが、山茶碗類は初期山茶碗第 4 型式から尾張型第 5 型式の製品に限定でき、周辺の建物などを片付ける際に一括廃棄された遺物群と思われる。出土遺物から遺構の帰属時期は 12 世紀後半と考えられる。

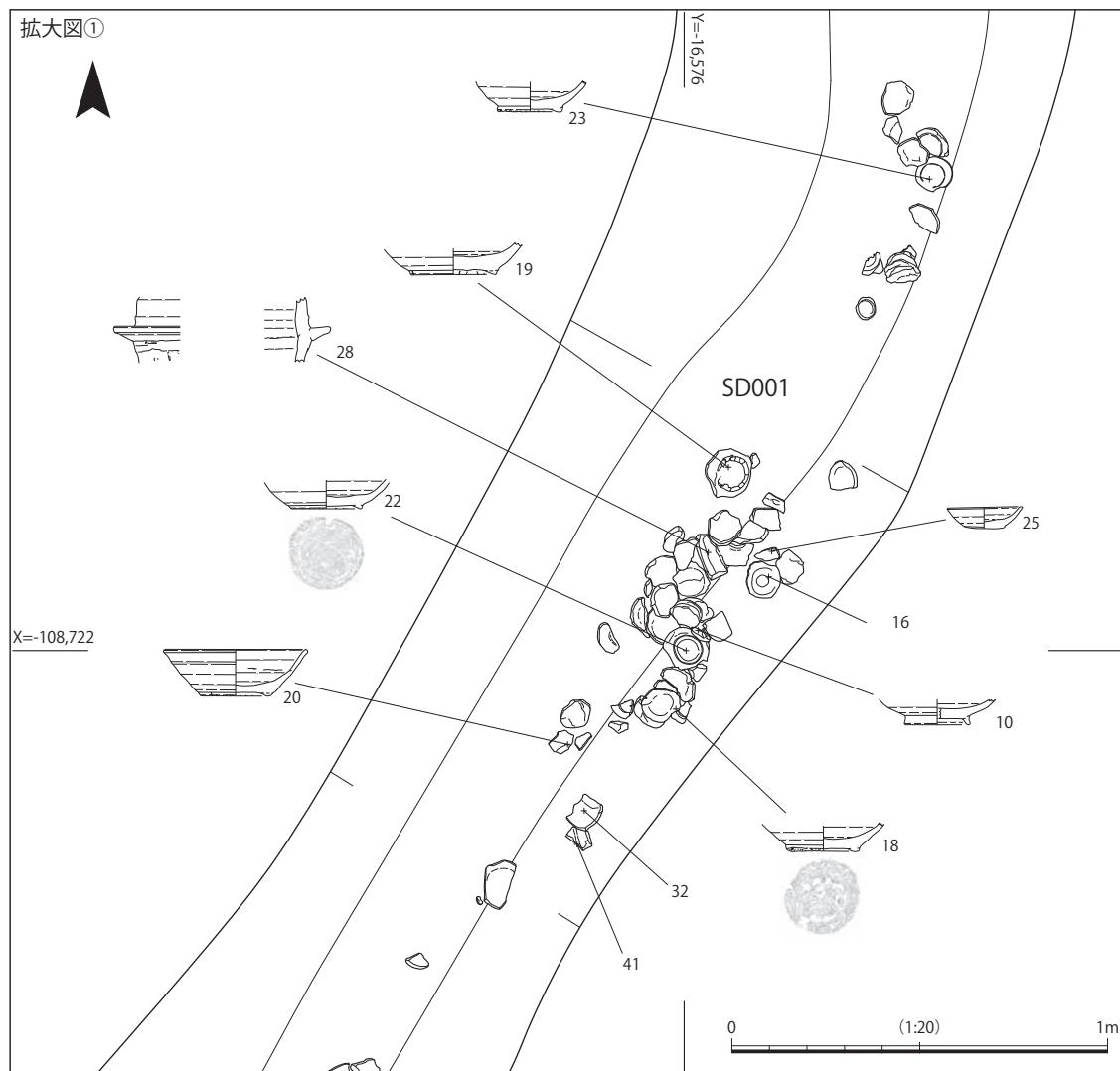
重複関係から掘立柱建物 SB03 に先行する。溝の性格は不明である。

SD031 (第 9・36 図) 屋敷地 E の南東部で検出した東西方向の直線的な溝である。規模は検出長 2.6 m、幅 0.5 ~ 1.0 m、深さは最大で 0.1 m を測り、調査区外に連続する。横断面形は片側が緩やかな碗形を呈する。溝底のレベルは西側に比べて東側が約 5 cm 低く、雨水や污水は西側から東側に向けて流れたと考えられる。主軸方位は N-13° -E (N-77° -W) で掘立柱建物 SB08 に並行する。

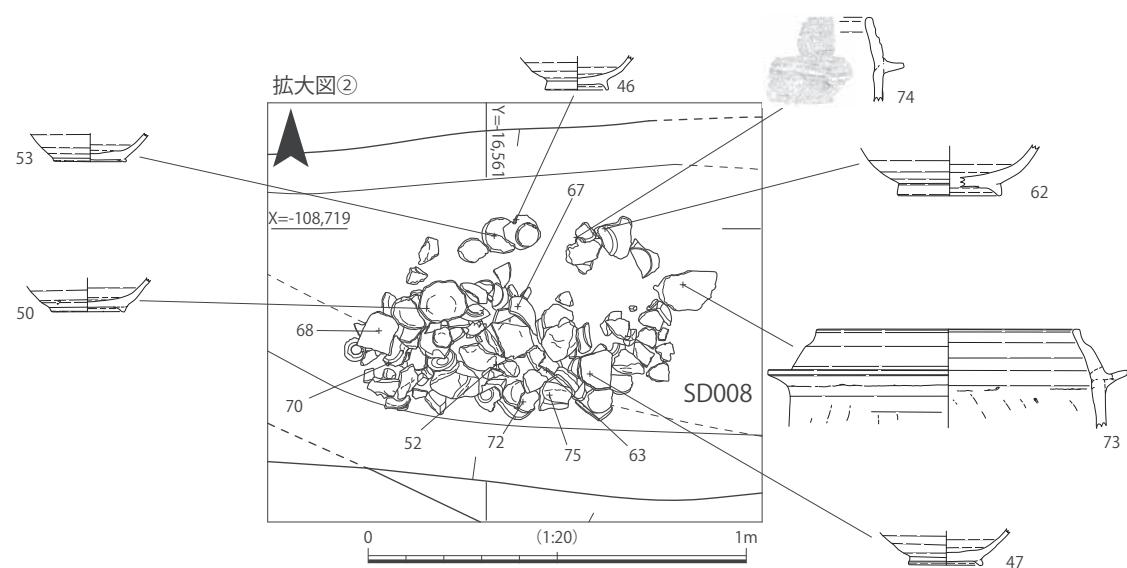
埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土である。細片のため図化できなかったが、尾張型第 5 型式に相当する山茶碗が出土した。掘立柱建物 SB08 に並行しつつ近接することから、SB08 に伴う溝の可能性が高い。



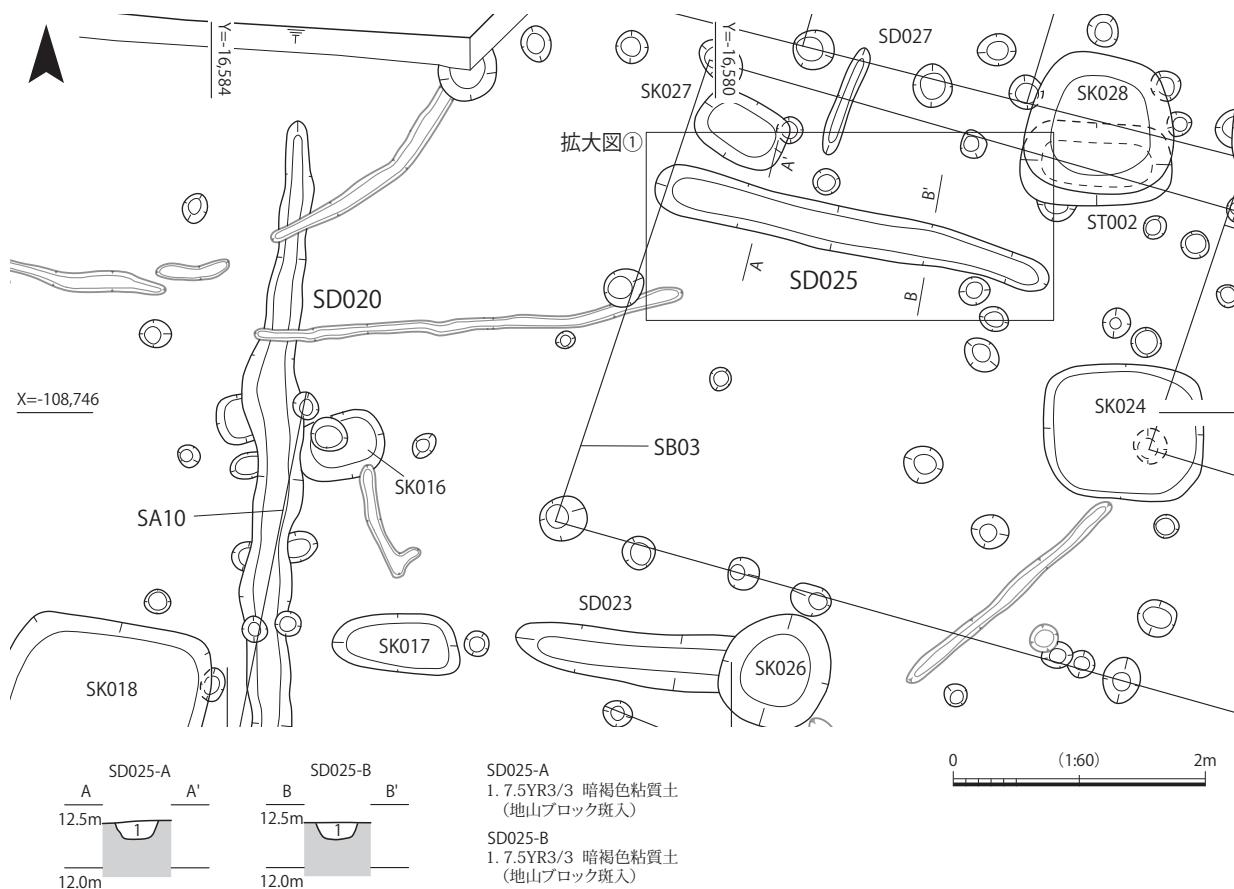
第31図 区画溝 SD001・002・008、溝 SD006・007・009・010 平・断面図



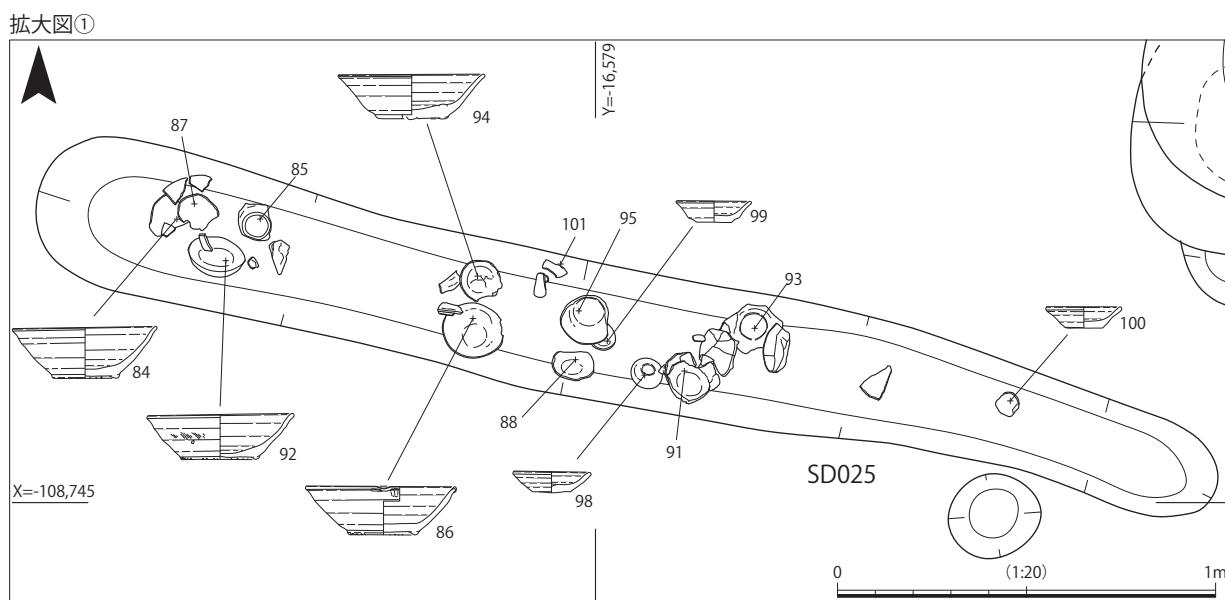
第32図 区画溝SD001 遺物出土状況図



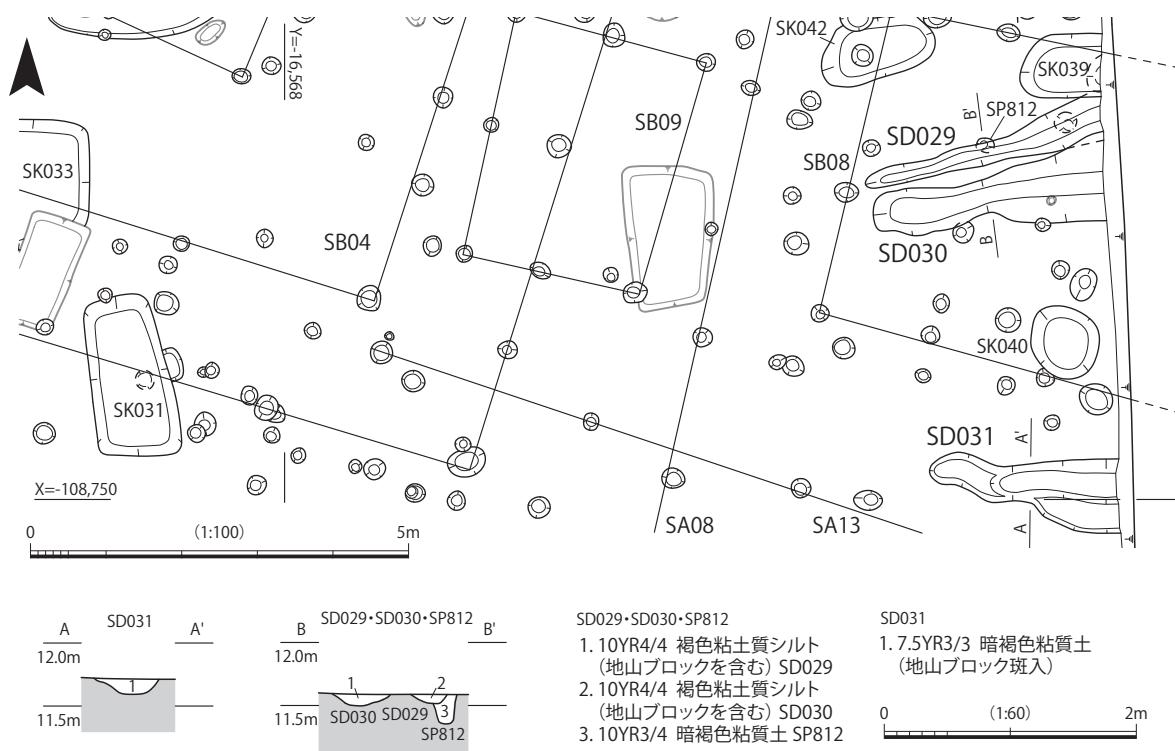
第33図 区画溝SD008 遺物出土状況図



第34図 溝SD025 平・断面図



第35図 溝SD025 遺物出土状況図



第36図 溝 SD029・030・031 平・断面図

S D 0 0 3 (第37図) 1区北側で検出した南西から北東方向に延びる直線的な溝である。規模は検出長 20.6m、最大幅 1.1m、深さは約 0.2m を測る。横断面形は浅い碗形もしくは皿形を呈する。溝底のレベルは西側に比べて東側が約 1.0 m 低い。溝方位は N-74°-E である。

埋土は地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルトで、瀬戸登窯第1・2小期に相当する擂鉢、初期山茶碗第3型式に相当する山茶碗（104）、12世紀後半の常滑窯産甕（105）などが出土した。

後述の溝 SD004 に重複し、調査前の耕地段差に並行することから、SD004 埋没後に掘削された耕作関連の溝と考えられる。出土遺物から帰属時期は 17世紀前半と考えられる。

S D 0 0 4 (第37図) 1区北側で検出した南西から北東方向に延びる直線的な大型の溝である。規模は検出長 20.6m、最大幅 1.8m、深さは最大で約 0.4m を測る。横断面形は片側が緩やかな碗形を呈する。溝底のレベルは西側に比べて東側が約 1.1 m 低く、雨水や污水は西から東に流れたと考えられる。溝方位は N-78°-E である。

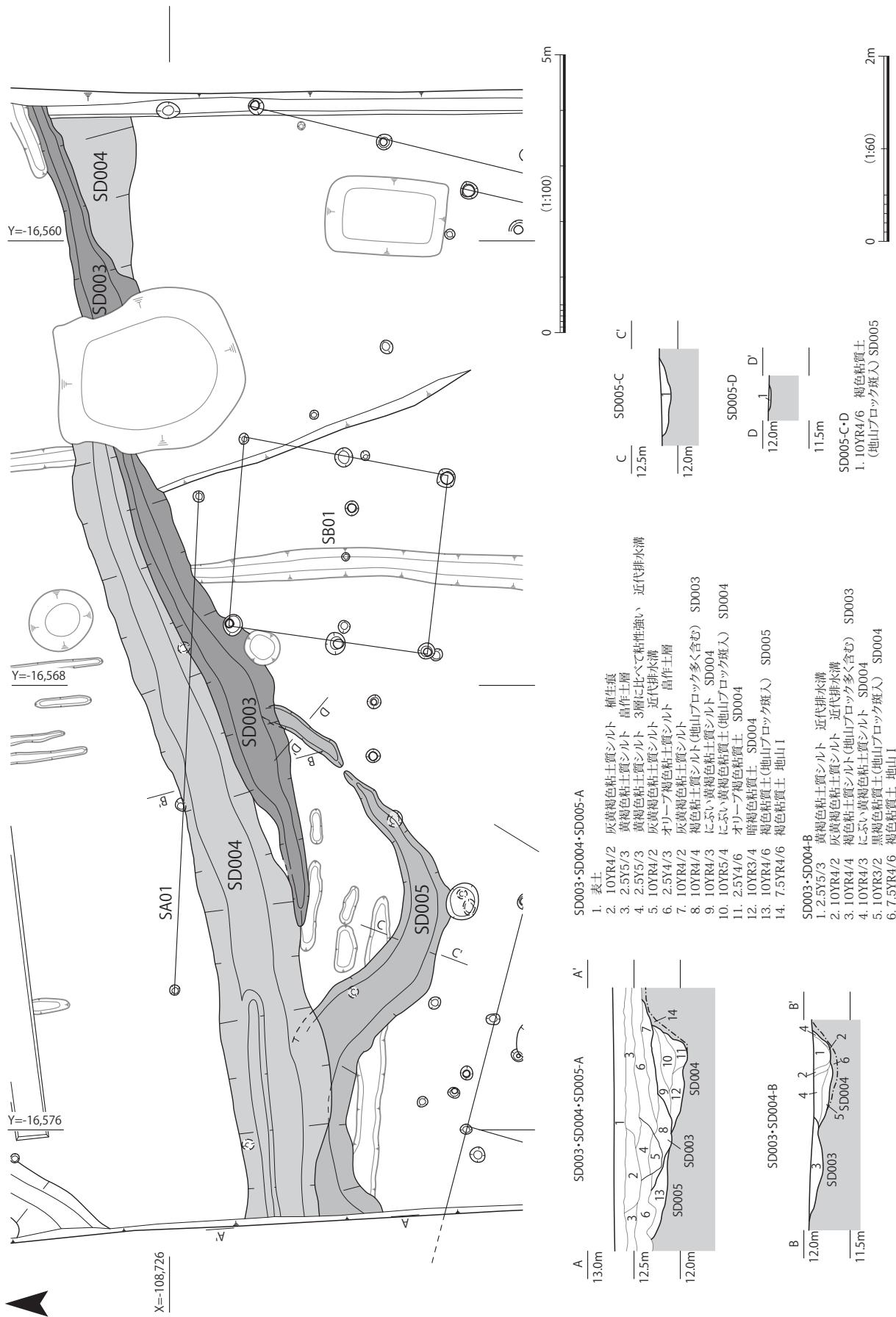
埋土は下層が暗褐色・オリーブ褐色粘質土、上

層がにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする。断面観察から数度の掘り直しが行われたと考えられ、掘り直し後の溝底面から土師器半球形内耳鍋（113）、中・上層から瀬戸大窯期の鉄釉大皿（112）、土鈴（237）、初期山茶碗第3・4型式に相当する片口鉢I類（106）、常滑窯産の甕・羽釜（107～111）などが出土した。出土遺物などから、溝は 16世紀代に開削され、その後に数度の掘り直しが行われつつ 16世紀末頃まで使用されたと推測する。

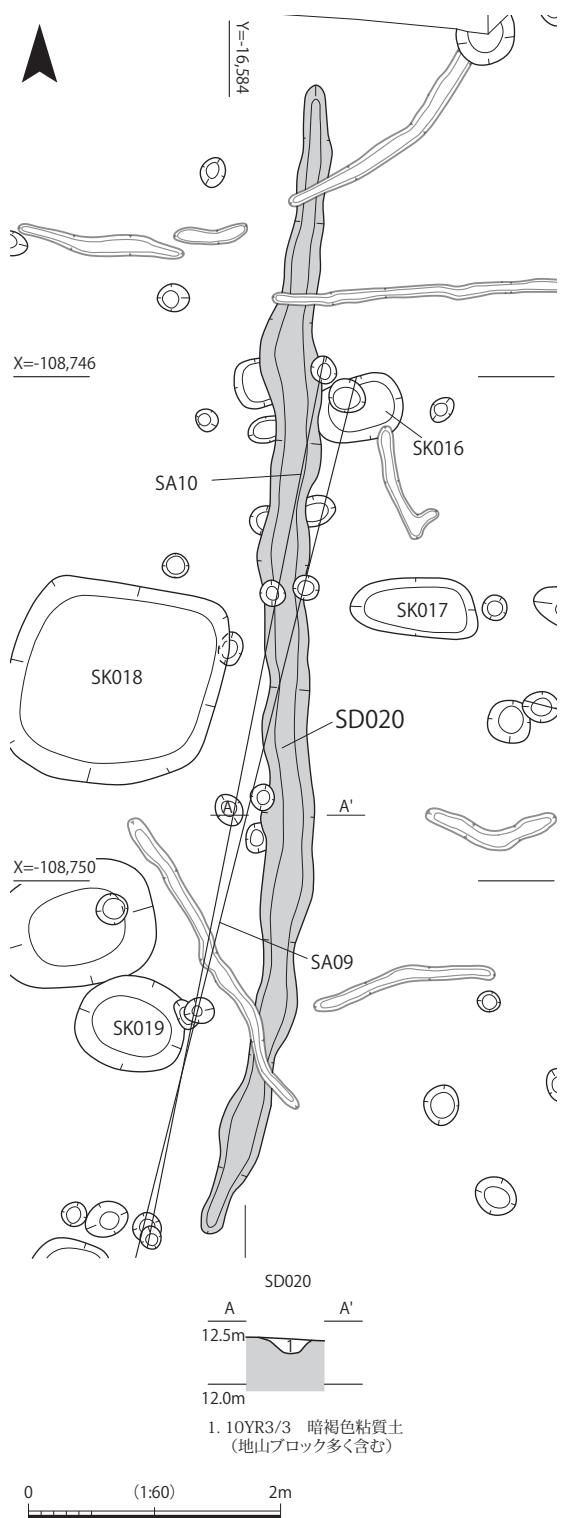
なお、第1次調査区域で検出した堀 SD120 もこれとほぼ同時期に掘削され溝幅なども近似するが、SD120 に比較して掘削深度が浅いことから、防御性を意図した堀とは考えにくく、何らかの土地区画に伴う溝の可能性が高いと思われる。

埋没後は重複した位置に耕作関連の溝 SD003、その後に近代の耕作関連の溝が掘削されていることから、17世紀以降の土地区画の基準となった溝と考えられる（第67図）。

S D 0 0 5 (第37図) 1区北側で検出した SD003・004 に重複する溝で、蛇行しつつ東西方向に延び、調査区外に連続する。規模は検出長 9.2m、最大幅 1.2m、深さは最大で 0.2m を測る。溝底のレベルは西側に比べて東側が約 0.2 m 低い。



第37図 溝 SD003・004・005 平・断面図



第38図 溝SD020 平・断面図

横断面形は皿形を呈する。

埋土は地山に酷似した褐色粘土である。細片のため図化できなかったが、時期不詳の山茶碗が出土地した。平面形や埋土の特徴から自然流路の可能性が高い。重複関係からSD003・004に先行する。

S D 0 1 1 (第9図) 1区中央部で検出した平面「コ」字形に溝が巡る溝状遺構で、規模は南北4.2m、東西2.8m、溝幅は最大で0.9m、深さは最大で0.05mを測る。横断面形は皿形を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘質土で、溝方位は真北である。

検出当初は周溝を伴う塚墓のような遺構を想定したが、埋葬施設が確認できなかつたため遺構の性格は不明である。細片のため図化しなかつたが、古瀬戸の瓶子が出土した。出土遺物や溝方位から室町時代の遺構と考えられる。

S D 0 2 0 (第38図) 1区南西部で検出した南北方向に直線的に延びる溝である。規模は検出長9.2m、最大幅0.45m、深さは最大で0.15mを測る。横断面形は碗形を呈する。溝方位はN-4°-Eである。埋土から初期山茶碗第3型式に相当する小碗(114)、古瀬戸の瓶子などが出土した。

出土遺物や埋土の特徴、溝方位などから、遺構の帰属時期は室町時代と考えられる。

S D 0 2 9 · 0 3 0 (第36図) 1区南東部で検出した南西から北東方向に延びる直線的な溝である。SD029は検出長3.3m、最大幅0.6m、深さ0.1m、SD030は検出長3.0m、最大幅1.2m、深さ約0.1m、横断面形はいずれも碗形を呈する。溝方位はSD029がN-73°-E、SD030がN-79°-Eを測る。

埋土はいずれも地山ブロックを含む褐色粘土質シルトで、細片のため図化できなかつたが、SD029から鉄滓(写真図版40-239)、SD030から尾張型第8・9型式に相当する古瀬戸の入子(115)、常滑窯産の甕などが出土した。

埋土の特徴や主軸方位がSD004に近似することから、帰属時期は16世紀代と思われる。

小溝状遺構 S D 0 1 3 ~ 0 1 8 · 0 2 1 · 0 2 2 (第9図) 1区南西部で検出した小規模な溝状遺構である。規模は検出長0.5~2.1m、幅0.15~0.3m、深さは0.05~0.15mを測る。横断面形は碗形もしくは皿形を呈する。溝方位はN-22~25°-E前後とこれに直交する方向のものがある。

埋土から細片化した山茶碗が出土した。詳細な帰属時期は不明だが、溝方位が区画溝SD001やSD025に近似することから、畠などに伴う中世の耕作痕の可能性が高いと考えられる。

第6節 土坑

土坑は全部で27基検出した。大小様々な規模・形状の土坑があり、これらの中には土壙墓の可能性の高いSK009・027・031も含まれるが、人骨や副葬品が出土せず墓かどうか明確にし得ないものについては、文中で土壙墓の可能性を指摘するに留めた。以下、主要な土坑について述べる。

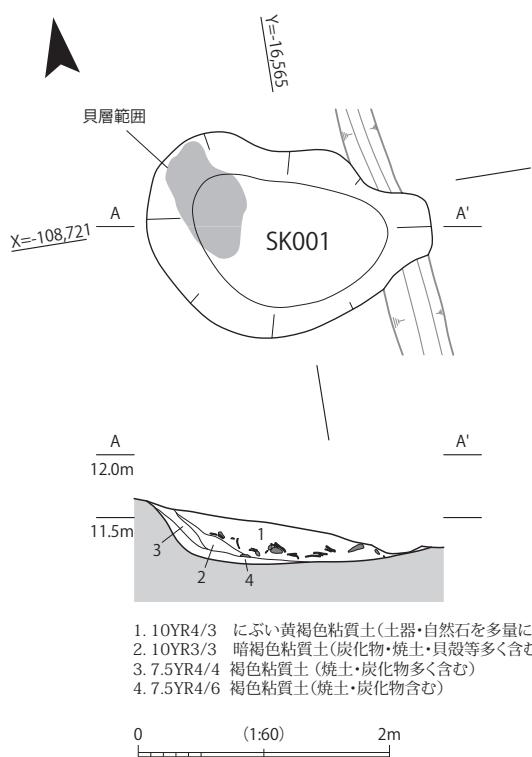
SK001 (第39・40図) 1区北側で検出した平面橢円形の土坑で、規模は長径2.3m、短径1.7m、深さは約0.5mを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土は上層(第1層)が土器類や自然石を多量に含む土器一括廃棄層(にぶい黄褐色粘質土)で、中・下層(第2～4層)はオキシジミ・マガキなどの貝殻類を含む食物残滓、焼土・炭化物を多く含む暗褐色もしくは褐色粘質土である。壁面や底面に被熱した痕跡は確認できなかった。

第1層の土器一括廃棄層からは、遺物コンテナ(34ℓ)にして約5箱分の土器・陶器、土製品(土錘・土製支脚)、石製品(砥石)の他、自然石約80点が出土した。土器類には清郷型鍋、初期山茶碗第3・4型式から尾張型第5～8・10型式に相当する山茶碗、小皿・片口鉢、短頸壺、山茶碗融着資料、12世紀から16世紀代にかけての常滑窯産の甕・広口壺・羽釜・片口鉢II類、古瀬戸後期の灰釉平碗・鉄釉仏供、大窯期の天目茶碗、最も新しい遺物に17世紀代の常滑窯産赤物鉢がある(第56～58図)。

土器一括廃棄層から出土した遺物は、古代の遺物を除けば、主に11世紀末から17世紀代にかけての時期幅のある遺物で構成されるが、これについては17世紀以降に周辺が耕地化されるに伴い、耕作に際して支障となる土器や自然石を土坑内に廃棄・集積することで形成された廃棄層と推測される。なお、出土遺物が少ないため中・下層の帰属時期は不明だが、上層の廃棄層と中・下層との間に間層を挟まないことから、周辺が耕地化される直前の16世紀末頃の廃棄土坑と考えておきたい。

SK002 (第41図) 1区中央東側で検出した平面円形の土坑で、規模は直径約1.0m、深さは約0.5mを測る。断面形は上方が開くU字形を呈する。



第39図 土坑SK001 平・断面図

埋土は地山ブロックを斑状に含む褐色粘質土である。細片のため図化しなかったが、尾張型第5型式に相当する山茶碗の小皿が出土した。

SK007 (第41図) 1区中央北側で検出した平面円形の土坑で、規模は直径約0.8m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。

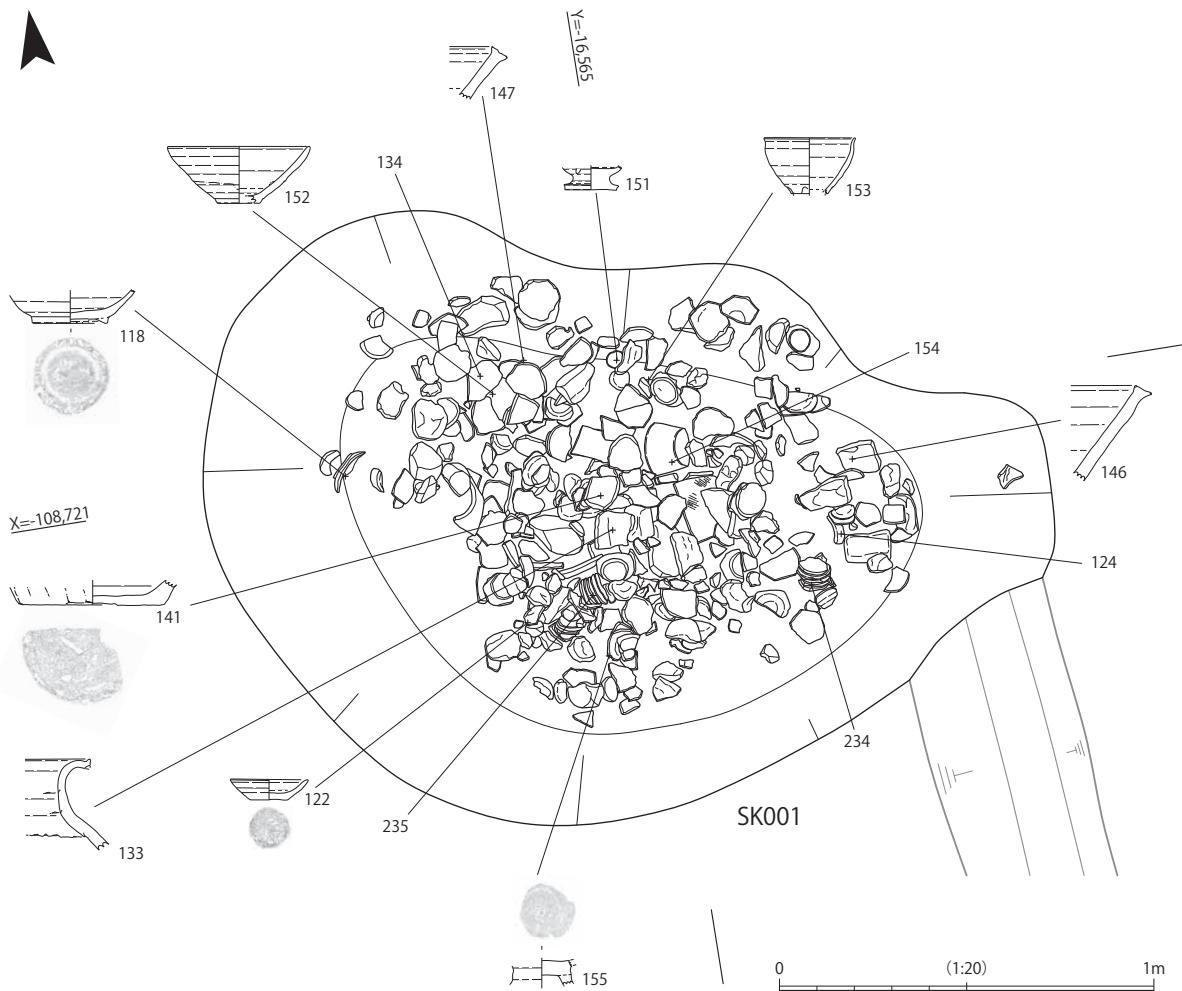
埋土は地山ブロックを多く含む褐色砂礫混粘質土である。細片のため図化しなかったが、尾張型第5・6型式に相当する小皿などが出土した。

SK008 (第41図) 1区中央部で検出した平面円形の土坑で、規模は直径0.6m、深さは約0.2mを測る。断面形は碗形を呈する。

埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土で、細片のため図化しなかったが、初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。

SK009 (第44図) 1区中央部で検出した平面橢円形の土坑で、規模は長径0.7m、短径0.5m、深さは0.2mを測る。断面形は碗形を呈する。

埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘質土で、埋土中位から正置した状態の完形の山茶碗(159)が出土した。出土状況から土壙墓の副葬品の可能性が高い。尾張型第8型式に相当する山茶碗で、遺



第40図 土坑SK001 遺物出土状況図

構の帰属時期は13世紀後葉から14世紀前葉頃と考えられる。

SK010 (第41図) 1区中央部で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺1.4m、短辺1.2m、深さは約0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-90°-W (N-0°-E)である。

埋土は地山ブロックを斑状に含むにぶい黄褐色粘質土で、K-90号窯式の灰釉陶器の椀(160)、時期不詳の土師器鍋などが出土した。出土遺物や埋土の特徴及び主軸方位からみて室町時代の遺構と考えられる。

SK011 (第41図) 1区中央部で検出した平面橢円形の土坑で、規模は長径0.9m、短径0.5m、深さは約0.4mを測る。断面形は碗形を呈する。

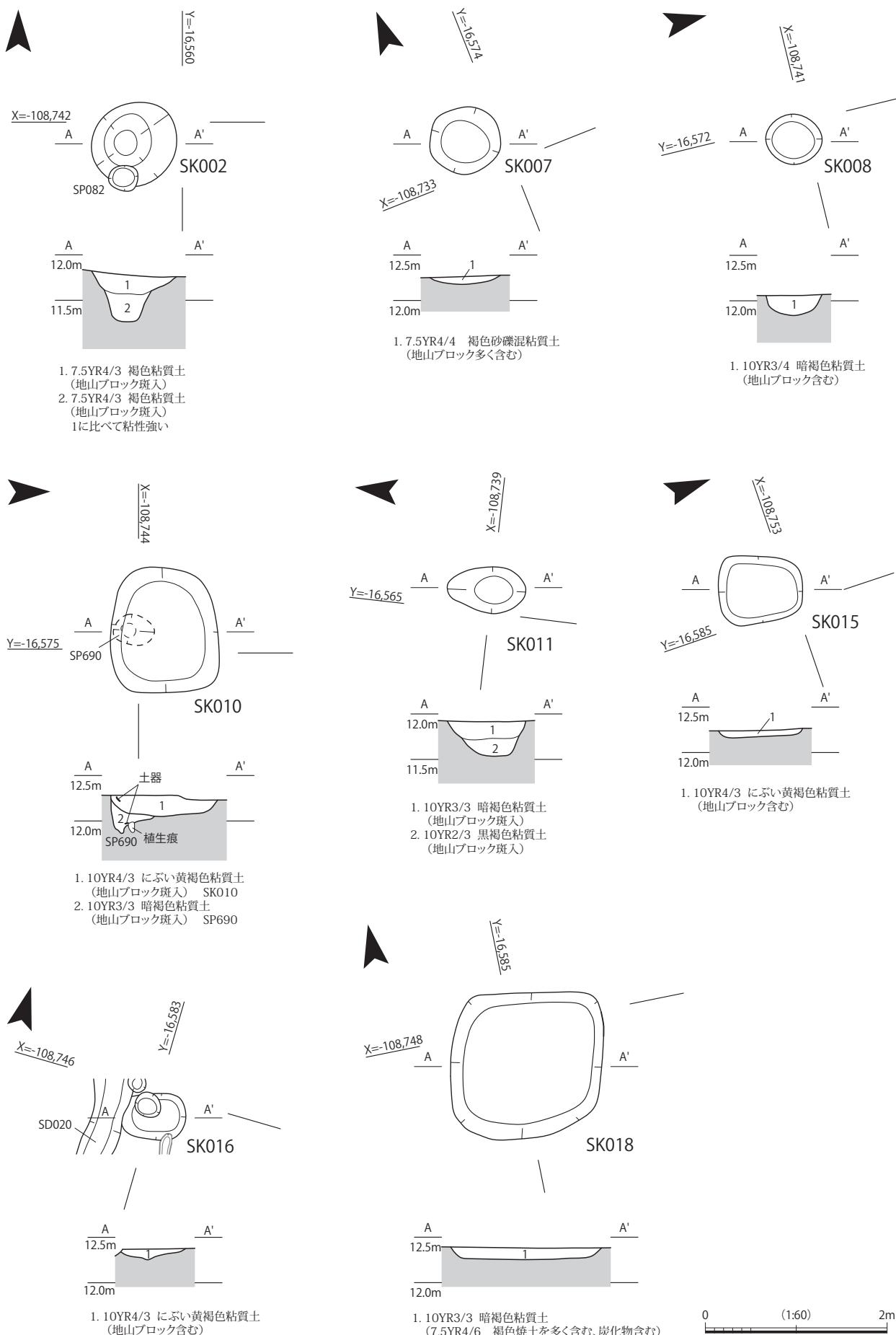
埋土は上層が地山ブロックを含む暗褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。遺物は出土しなかつたが、埋土の特徴から中世の遺構と思われる。

SK015 (第41図) 1区南西部で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺0.9m、短辺0.8m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。主軸方位はN-20°-Eである。

埋土はにぶい黄褐色粘質土である。細片のため図化しなかったが、尾張型第5型式に相当する山茶碗と土師器半球形内耳鍋が出土した。出土遺物や埋土の特徴から室町時代の遺構と思われる。

SK016 (第41図) 1区中央西側で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺0.7m、短辺0.5m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。重複関係からSD020に先行する。主軸方位はN-72°-Eである。

埋土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘質土である。細片のため図化しなかったが、時期不詳の山茶碗が出土した。埋土の特徴及び主軸方位からみて、室町時代の遺構と思われる。



第41図 土坑 SK002・007・008・010・011・015・016・018 平・断面図

SK018 (第41図) 1区南西部で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺1.7m、短辺1.6m、深さは約0.15mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-15°-Eである。

埋土は褐色焼土と炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。底面や壁面に被熱の痕跡は認められなかった。細片のため図化しなかったが、時期不詳の常滑焼の細片が出土した。

出土した炭化材の炭化物年代測定(AMS)を行った結果、15世紀中頃から17世紀前半の結果を得た(第5章第2節参照)。

SK019 (第42図) 1区南西部で検出した平面橢円形の土坑で、規模は長径0.9m、短径0.7m、深さは約0.15mを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土は上層がにぶい黄褐色粘質土、下層が地山ブロックを斑状に含む暗褐色粘質土である。図化しなかったが、古瀬戸後期の擂鉢が出土した。

SK020 (第42図) 1区南端で検出した平面長方形の土坑で、規模は長辺1.6m、短辺1.0m、深さは約0.1mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-78°-Wである。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、瀬戸大窯の天目茶碗(161)などが出土した。重複関係からSK021に後出する。

SK021 (第42図) 1区南端で検出した平面台形状の土坑で、規模は一辺約1.7m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。主軸方位は真北である。

埋土は上層が地山ブロックを斑状に含む暗褐色粘質土、下層がにぶい黄褐色粘質土である。図化しなかったが、時期不詳の山茶碗が出土した。埋土の特徴や遺構の主軸方位からみて、室町時代の遺構と思われる。重複関係からSK020に先行する。

SK024 (第42図) 1区中央部で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺1.3m、短辺1.0m、深さは約0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-90°-Eである。

埋土は地山ブロックを含む褐色粘土質シルトで、細片のため図化しなかったが、融着山茶碗、古瀬戸後期の擂鉢などが出土した。

SK026 (第42図) 1区南側で検出した平面円形の土坑で、規模は径約0.9m、深さは約0.4m

を測る。断面形は碗形を呈する。

埋土は上層が暗褐色粘質土、中・下層が地山ブロックを斑状に含む黒褐色粘質土である。埋土から初期山茶碗第4型式に相当する小碗、尾張型第5型式に相当する山茶碗(162・163)が出土した。重複関係からSD023に後出する。

SK027 (第44図) 1区中央西側で検出した平面隅丸長方形の土坑で、規模は長辺0.8m、短辺0.5m、深さは約0.3mを測る。断面形は箱形を呈する。主軸方位はN-56°-Wである。

埋土は上層が暗褐色粘質土、下層が地山ブロックを斑状に含む黒褐色粘質土である。上層から尾張型第5型式に相当する小皿(164)、常滑窯産の甕(165)、混入品と思われる古瀬戸後期の折縁深皿が出土した。遺構形状などから土葬土壙墓の可能性が高いと思われる。

SK028 (第42・46図) 1区中央部で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺1.2m、短辺1.1m、深さは約0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位は真北である。

埋土は上層が焼土、炭化物、地山ブロックを斑状に含むにぶい黄褐色粘質土、下層が地山ブロックと炭化物を含む褐色粘質土である。

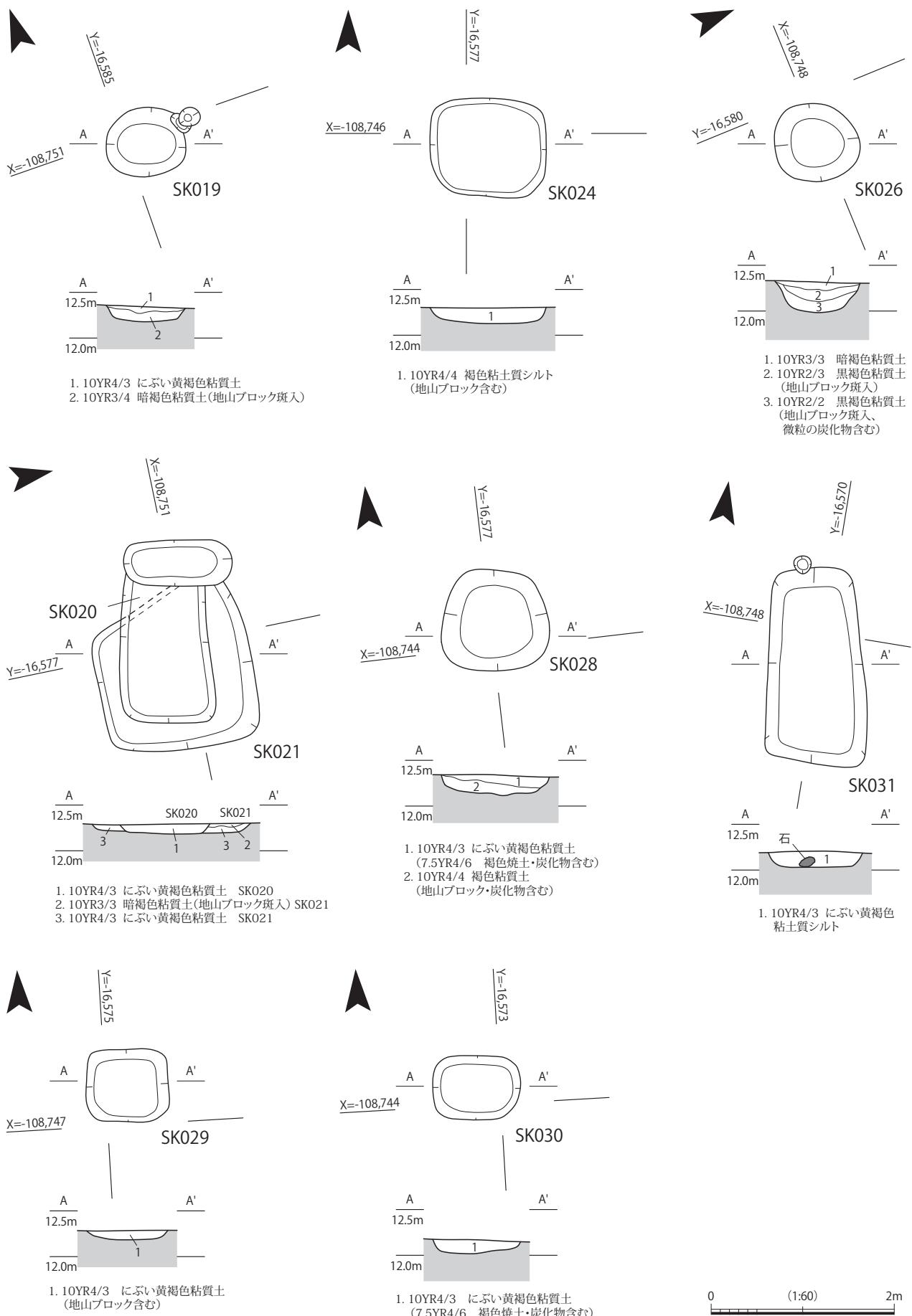
細片のため図化しなかったが、時期不詳の山茶碗と鉄滓の細片が出土した。埋土の特徴及び遺構の主軸方位からみて、室町時代の遺構と思われる。重複関係から土壙墓ST002に後出する。

SK029 (第42図) 1区中央部で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺0.9m、短辺0.8m、深さは約0.1mを測る。断面形は皿形を呈する。主軸方位はN-90°-Eである。

埋土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘質土である。細片のため図化しなかったが、時期不詳の山茶碗が出土した。埋土の特徴及び遺構の主軸方位から、室町時代の遺構と思われる。

SK030 (第42図) 1区中央部で検出した平面隅丸方形の土坑で、規模は長辺1.0m、短辺0.7m、深さは約0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-86°-Wである。

埋土は焼土と炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土である。埋土の特徴及び遺構の主軸方位から、室



第42図 土坑 SK019～021・024・026・028～031 平・断面図

町時代の遺構と思われる。

SK031 (第42図) 1区南側で検出した平面長方形の土坑で、規模は長辺2.2m、短辺1.1m、深さは約0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-10°-Wである。

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、底面から人頭大の礫の他、古瀬戸後期の天目茶碗が出土した。平面形や規模、人頭大の礫を伴うことなどから、土葬土壙墓の可能性が高いと考えられる。出土遺物から帰属時期は室町時代と考えられる。

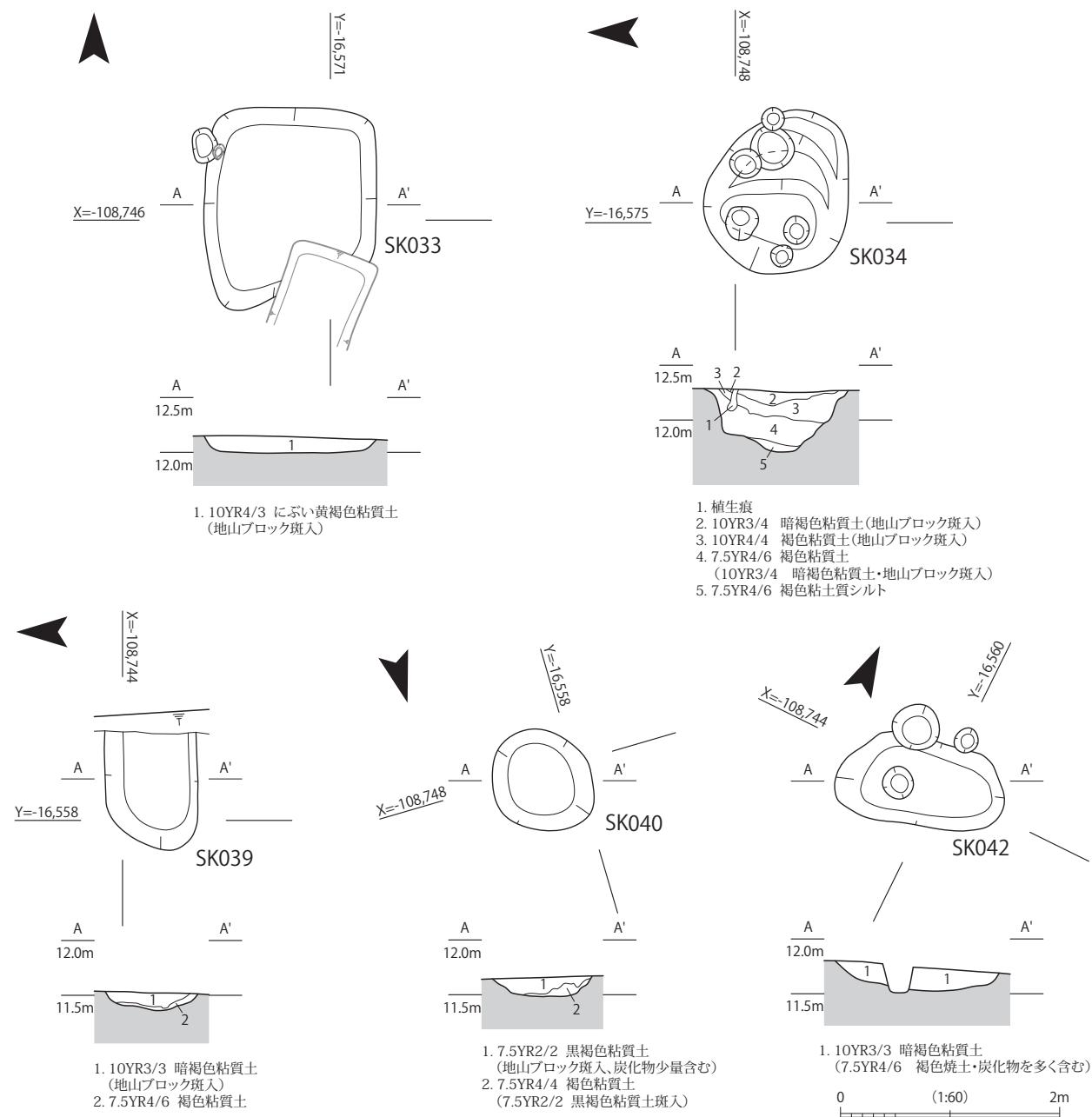
SK033 (第43図) 1区中央部で検出した平面方形の土坑で、規模は長辺1.9m、短辺1.6m、

深さは約0.2mを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方位は真北である。

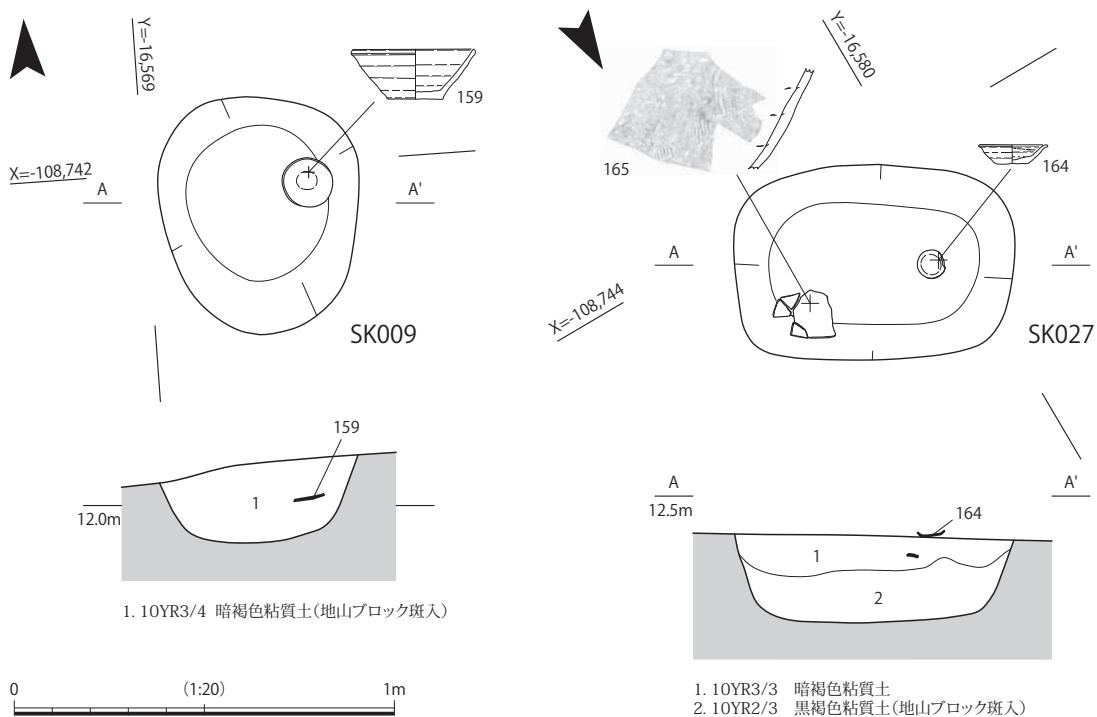
埋土は地山ブロックを斑状に含むにぶい黄褐色粘土で、K-90号窯式の灰釉碗(166)の他、図化しなかったが、古瀬戸後期の擂鉢が出土した。埋土の特徴や出土遺物、遺構の主軸方位からみて室町時代の遺構と考えられる。

SK034 (第43図) 1区南側で検出した平面橿円形の土坑で、規模は長径1.6m、短径1.3m、深さは約0.6mを測る。断面形は碗形を呈する。

埋土は主に地山ブロックを斑状に含む暗褐色粘土及び褐色粘土である。尾張型第5型式に相



第43図 土坑SK033・034・039・040・042 平・断面図



第44図 土坑SK009・027 平・断面図・遺物出土状況図

当する山茶碗の細片が出土した。

SK039 (第43図) 1区南東部で検出した土坑で、規模は検出長1.1m、幅0.8m、深さは約0.2mを測る。断面形は浅い碗形を呈する。

埋土は上層が地山ブロックを斑状に含む暗褐色粘質土、下層が褐色粘質土である。細片のため図化しなかったが、尾張型第8型式に相当する山茶碗などが出土した。重複関係からSD029に先行する。

SK040 (第43図) 1区南東隅で検出した平面円形の土坑で、規模は径約1.0m、深さは約0.2mを測る。断面形は浅い碗形を呈する。

埋土は上層が炭化物と地山ブロックを斑状に含む黒褐色粘質土、下層が褐色粘質土である。細片のため図化しなかったが、尾張型第5型式に相当する山茶碗が出土した。

SK042 (第43図) 1区南東部で検出した平面橢円形の土坑で、規模は長径1.6m、短径0.8m、深さは約0.3mを測る。断面形は浅い碗形を呈する。主軸方位はN-72°-Eである。

埋土は焼土と炭化物を多く含む暗褐色粘質土である。埋土中位から鉄滓（写真図版40-238）が出土した。底面や壁面に被熱した痕跡は確認できなかったため炉跡とは考えにくいが、SK042に近接

したSD029でも鉄滓が出土しているため、周辺で小鍛冶が行われた可能性が高い。埋土の特徴や主軸方位から室町時代の遺構と考えられる。

第7節 土壙墓

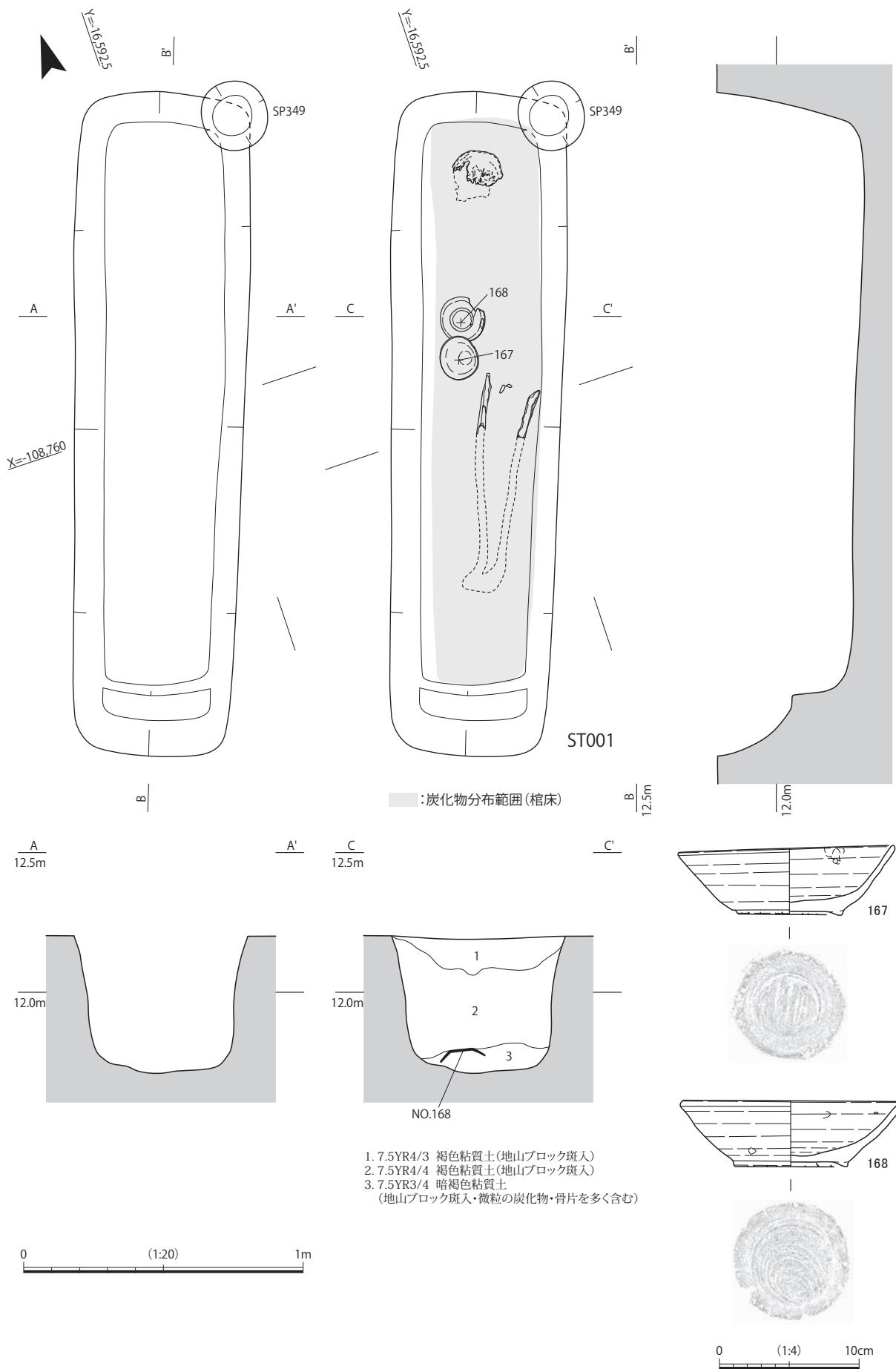
土壙墓は2基(ST001・002)検出した。このうちのST001から埋葬人骨が1体出土した。

ST001 (第45図) 1区南西部で検出した平面長方形の土壙墓で、規模は長辺2.4m、短辺0.6m、深さは約0.5mを測る。横断面形は箱形を呈する。主軸方位はN-17°-Eである。

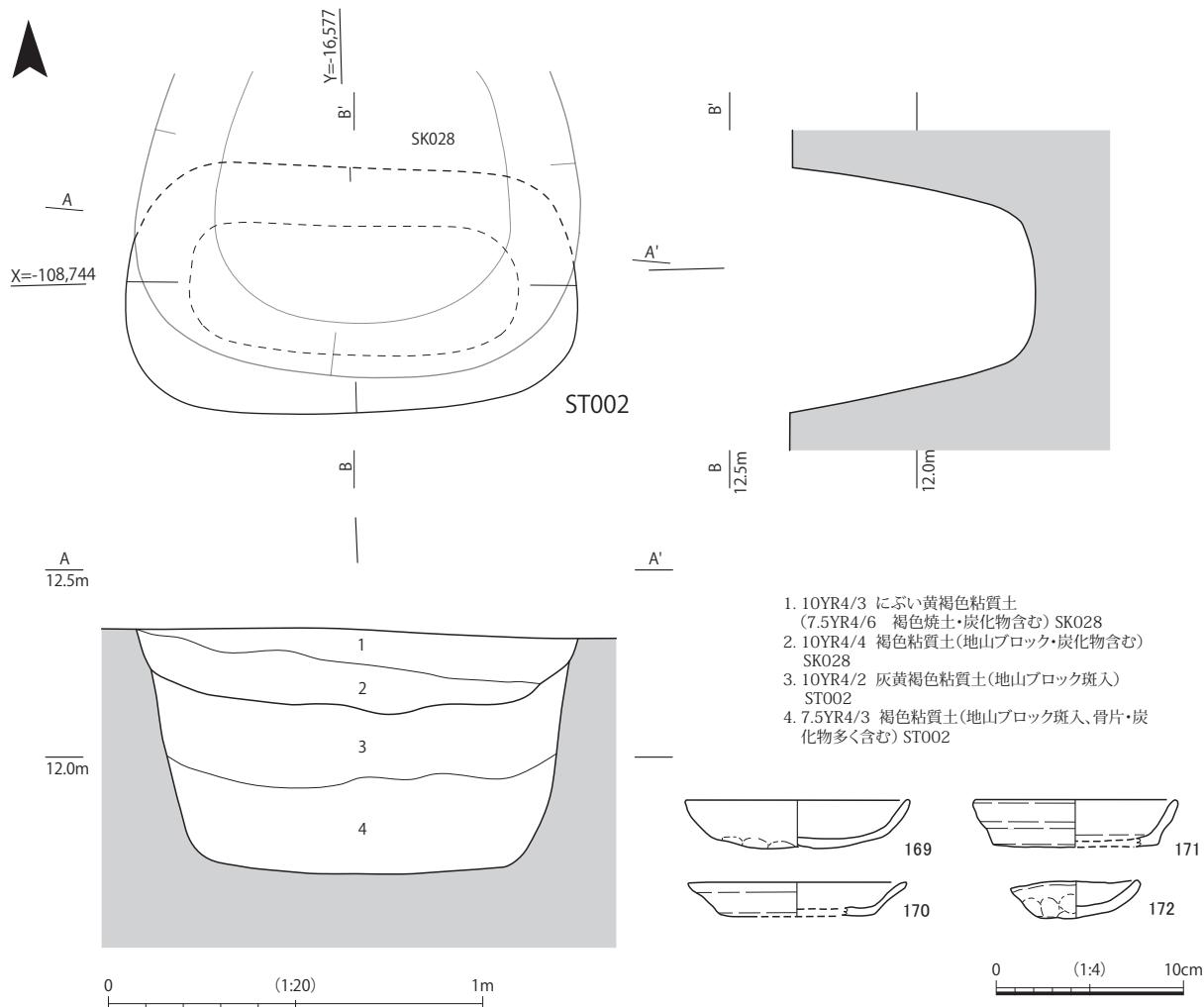
埋土は床面付近が微粒の炭化物と地山ブロックを斑状に含む暗褐色粘質土、それより上部の層は地山ブロックを斑状に含む褐色粘質土である。

墓壙床面で埋葬人骨1体が出土した。遺存状態は極めて悪く、全体に軟質化あるいは粉状を呈して非常に脆い状態であったが、北東部で頭蓋骨、南西部で下肢骨の一部である大腿骨及び脛骨あるいは腓骨と思われる一部を確認した（第5章第1節参照）。なお、上肢骨や歯牙は残存していないかった。

埋葬姿勢としては、頭を北北東に足先を南南西に向けて下半身は仰向けで足を伸ばし、顔を西に向かって伸展位で埋葬されたと考えられる⁽¹⁾。人骨



第45図 土壙墓ST001 平・断面図・遺物出土状況図



第46図 土壙墓 ST002 平・断面図

分析の結果、被葬者は壮年男性の可能性が高いことが判明した。

なお、床面では鉄釘や木質は出土せず、土層断面観察でも明確な棺痕跡は確認できなかったが、写真版34-1を見ると、墓壙床面で周囲に比べて埋土がわずかに暗く、微粒の炭化物が長方形状に分布する範囲（第45図：炭化物分布範囲）が確認でき、棺痕跡と判断できることから木棺土壙墓と考えられる。

出土遺物として、被葬者の右脇腹付近で副葬品と考えられる完形の山茶碗が2点出土した。このうち北側の山茶碗（168）は底面を上に向けた逆位置で、一方の南側の山茶碗（167）は正位置の状態で据え置かれていた。出土遺物の帰属時期は167が初期山茶碗第4型式、168が尾張型第5型式に相当することから、遺構の帰属時期は12世紀後半と考えられる。他に副葬品は確認できなかった。

なお、被葬者の身分や階層を示唆する遺物は出土

しなかったが、墓壙規模が大きく木棺で埋葬されたと考えられることから、集落内では相当身分の高い人物であった可能性が高い。周辺に他の墓が確認できないことから単独墓の可能性が高く、いわゆる屋敷墓であろう。

ST002（第46図） 1区中央部で検出した平面隅丸長方形の土壙墓である。規模は長辺1.2m、短辺0.65m、深さは0.65mを測り、断面形は箱形を呈する。主軸方位はN-88°-Wである。

底面付近の埋土は炭化物と地山ブロックを斑状に含む褐色粘質土で、それより上部は地山ブロックを斑状に含む灰黄褐色粘質土である。埋葬人骨は出土しなかったが、底面付近で白い粒状の骨片や骨粉、炭化物が多く出土した。この骨片を分析した結果、ヒトの四肢骨の一部であることが判明した他、いずれの骨片も焼けて白色化していることから火葬骨の可能性が高いと判断された（第5章第1節参照）。

なお、壁面や底面が被熱していないことや焼土を含まないこと、また、土壙規模が大きく掘削深度が深いことなどから火葬墓とは考えにくく、火葬骨を土壙内に埋葬した火葬土壙墓の可能性が高いと考えられる。なお、第1次調査区域を含めて火葬施設とみられる遺構は確認できなかった。

底面から埋土中位にかけて土師器皿が4点（第46図）が出土した。このうち169・172が手づくね成形土師皿、170・171が口クロ成形土師皿である。169・171は古相を示しており、墓を埋め戻す際に混入した可能性があるが、170・172は概ね15世紀後半代の製品と思われ、帰属時期は15世紀後半と考えられる。重複関係からSK028に先行する。

第8節 性格不明遺構

SX002（第47図）1区南西部で検出した平面隅丸長方形状の遺構で、規模は長辺1.3m、短辺1.0m、深さは約0.3mを測る。断面形は碗形を呈する。主軸方位はN-73°-Eである。

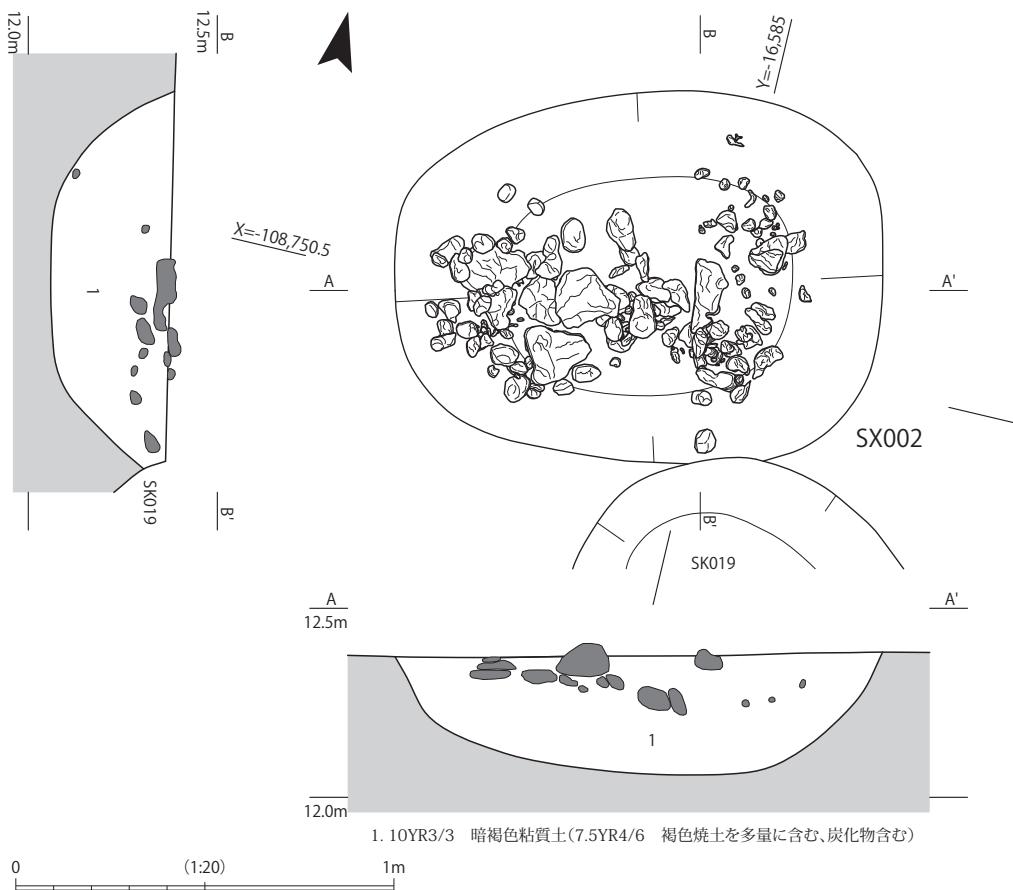
埋土は焼土を多量に含む暗褐色粘質土である。底

面や壁面に被熱の痕跡は確認できなかった。焼土はいずれも5～20cm大のブロック状で、植物纖維状の痕跡が確認できることから、スサ入り粘土が被熱した焼土塊と考えられる。炉壁の可能性が高いと考えられるが、遺構底面や壁面が被熱していないこと、また、金属滓や鍛造剥片なども確認できないことから、他所で破碎された炉壁が土坑内に廃棄されたと考えられる。

なお、SX002の北側に隣接したSK018でも同様の焼土塊と炭化物が多く出土しており、出土した炭化材の年代測定の結果、15世紀中頃から17世紀前半の年代を得ている。SX002もこれに近い年代が推定され、遺構の軸方位がSD004・029・030に一致することなどを踏まえると、帰属時期は16世紀から17世紀初頭頃と考えられる。

【註】

- (1) 頭位が北で顔が西を向き、足先がやや西を向くことから「頭北面西」、詳しくは「頭北面西右脇臥」（ずぼくめんさいきょうようが）で埋葬された可能性が高いと考えられる。「頭北面西右脇臥」とは、頭位を北に顔を西に向け右脇を下にした状態の姿勢で、釈迦入滅時の姿勢とされる。



第47図 性格不明遺構 SX002 平・断面図・遺物出土状況図

第4章 遺物

今回の調査で出土した遺物は遺物収納コンテナ(34ℓ)にして約20箱分にのぼる。時期としては縄文時代から江戸時代までの遺物を含むが、その大半が中世(平安時代末期から室町時代)の遺物である。

以下では、土器・陶磁器、土製品、石製品、金属製品・鍛冶関連遺物、縄文・弥生時代の遺物、人骨・動物遺体の順に報告する。

第1節 土器・陶磁器

本節では、今回の調査で出土した遺物のうち一部の土製品や石製品・石器を除く主に土器・須恵器・灰釉陶器・陶磁器に関して図示し得たものを優先的に採り上げ、各遺構で分類される器種組成と各遺物の主な特徴について記述する。

なお、各遺物の出土地区や法量等をはじめ各部位の所見は必要に応じて本文中に扱うことになるが、多くは出土遺物計測表(表12)を参照されたい。

掘立柱建物 SB04 出土遺物 (第48図-1・2)

SB04に伴う柱穴(SP307(1)・SP710(2))から出土したものである。いずれも古代末期灰釉陶器に関連する猿投窯の灰釉碗である。1は、口縁部に相当するが、器壁が薄く口縁部は僅かに外反する形状を有する。帰属時期は、H-72号窯式に相当する。2は、底部の破片資料であるが、底部外面の付高台は丁寧に成形・調整されている。帰属時期は、H-72号窯式から百代寺窯式に相当する。

掘立柱建物 SB05 出土遺物 (第48図-3)

SB05に伴う柱穴(SP209)から出土したものである。尾張型の小皿(3)である。比較的残存率の高い資料である。底部は糸切り未調整の平底を有し、口縁部の外反はほとんど確認できない。帰属時期は、尾張型第5型式に相当する。

掘立柱建物 SB07 出土遺物 (第48図-4)

SB07に伴う柱穴(SP144)から出土したものである。瀬戸窯の小皿(4)である。底部は糸切り未調整の平底を有し、体部は直線的で短く立ち上がる。胎土は砂粒が目立ち、器表面には長石の吹き出しが認められる。帰属時期は、尾張型第7・8型式に相当する。

掘立柱建物 SB12 出土遺物 (第48図-5)

SB12に伴う柱穴(SP159)から出土したものである。瀬戸窯の山茶碗(5)である。口縁部の破片資料で、内面は比較的平滑であるのに対し、外面には回転ナデによるロクロ目が確認できる。また、器表面には長石の吹き出しが認められる。帰属時期は、尾張型第8型式に相当する。

掘立柱塀・柵 SA03 出土遺物 (第48図-6)

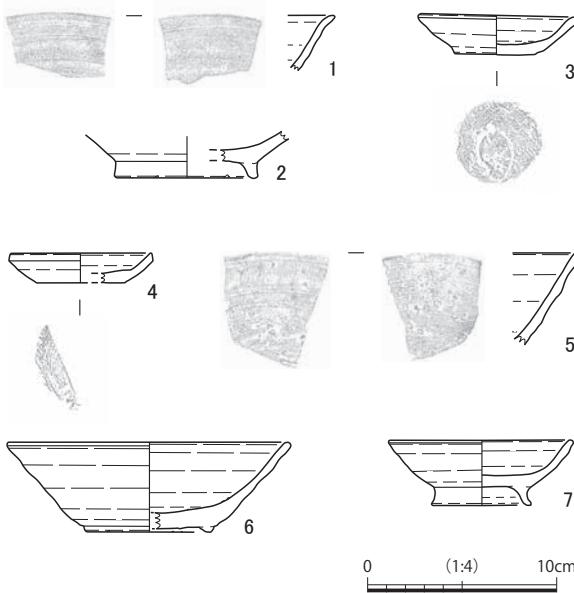
SA03に伴う柱穴(SP566)から出土したものである。尾張型の山茶碗(6)である。付高台の端部には少量の糰殻痕が認められる。体部は直線的で口縁部の外反はほとんど確認できない。帰属時期は、尾張型第5型式に相当する。

掘立柱塀・柵 SA13 出土遺物 (第48図-7)

SA13に伴う柱穴(SP718)から出土したものである。猿投窯の小碗(7)である。残存率が高く、全体の形状を細部まで観察できる。底部外面には通常の個体より高さのある脚状の付高台を有する点が特徴である。帰属時期は、初期山茶碗第3型式に相当するが、やや古式の様相を示している。

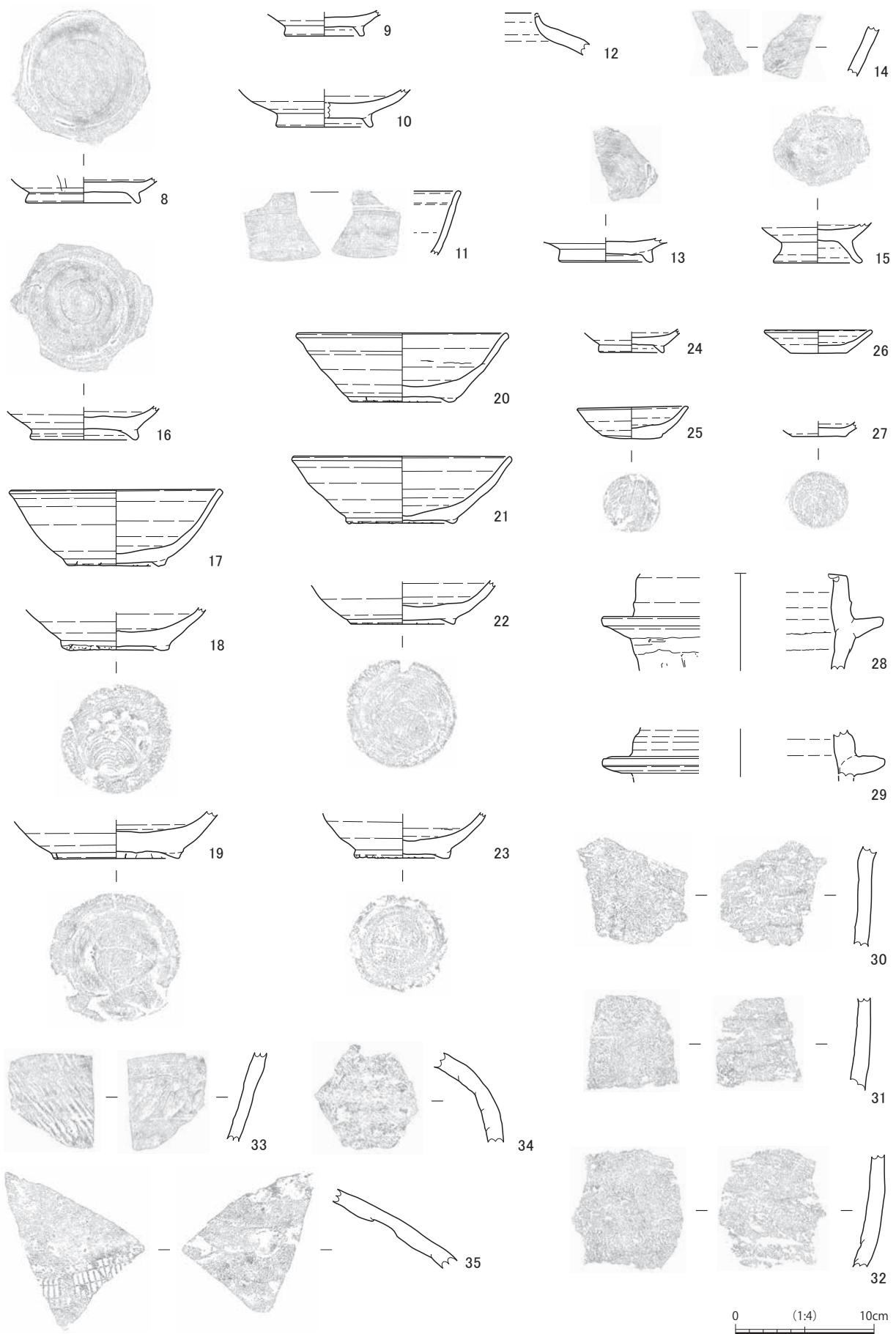
溝 SD001 出土遺物 (第49・50図-8~45)

合計38点を図示し得た。古代末期灰釉陶器に関連する遺物は、H-72号窯式から百代寺窯式までに相当し、古代猿投窯の灰釉碗(8~11、13)、短頸壺(12)の合計6点ある。初期山茶碗第3型式

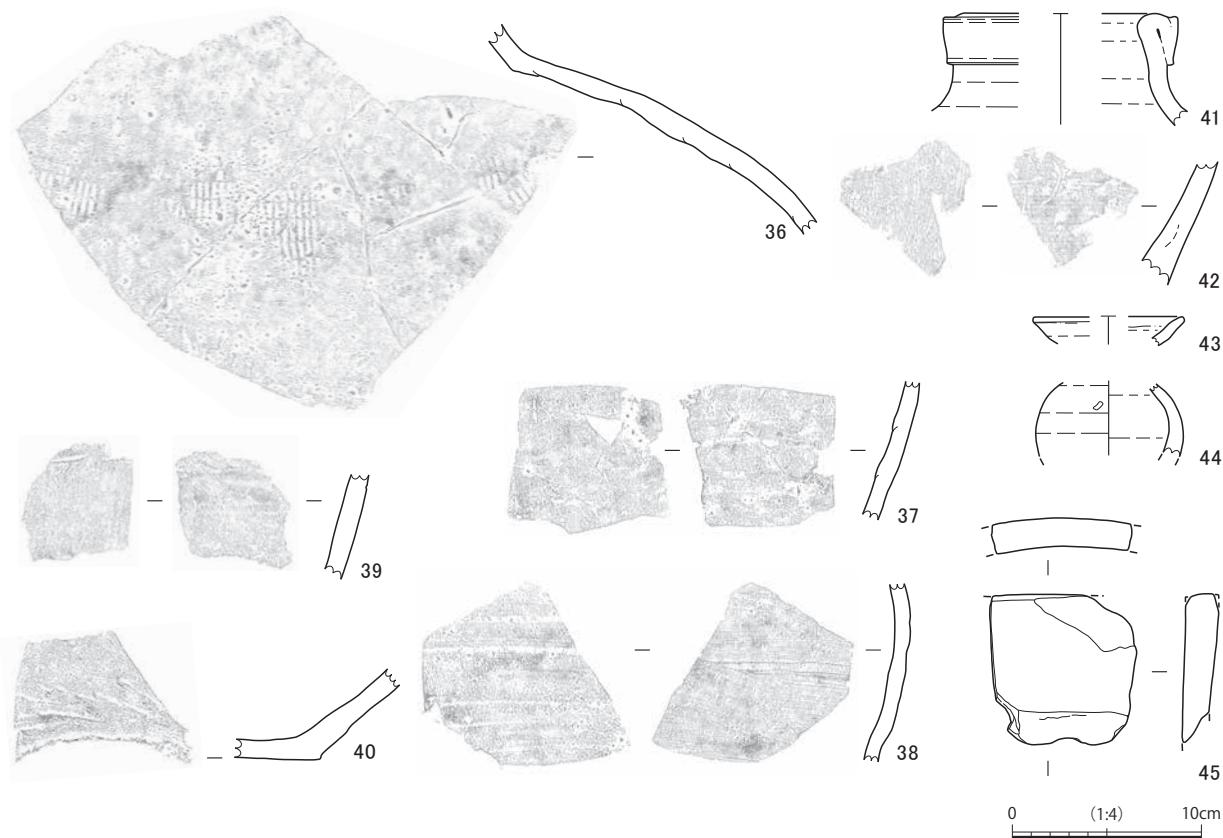


1・2:SB04 3:SB05 4:SB07 5:SB12 6:SA03 7:SA13

第48図 SB04・05・07・12、SA03・13 出土遺物実測図



第49図 溝SD001出土遺物実測図①



第50図 溝SD001出土遺物実測図②

は、短頸壺（14）、托（15）、山茶碗（16）、小碗（24）の4点、初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式までは、山茶碗（17～22）、小皿（25～27）の9点、尾張型第6型式は、山茶碗（23）が1点、他に常滑窯第3・4型式期の羽釜（28～32）が5点、12世紀後半から13世紀代と思われる常滑窯の甕（33～40）は8点を数える。一方で15世紀代の甕（41・42）は2点のみで、41は常滑窯第10型式期、42は常滑窯第9・10型式期に相当する。また、古瀬戸後期の縁釉小皿（43）は1点、他の詳細不明の資料（44・45）が2点ある。44は、小形の瓶類の胴部付近の部位と思われる。焼成が弱く土師質の仕上がりであるが、土器の可能性も考えられる。45は、瓦類と判断したがやはり土師質の仕上がりとなっている。44・45は、産地・帰属時期ともに不明である。

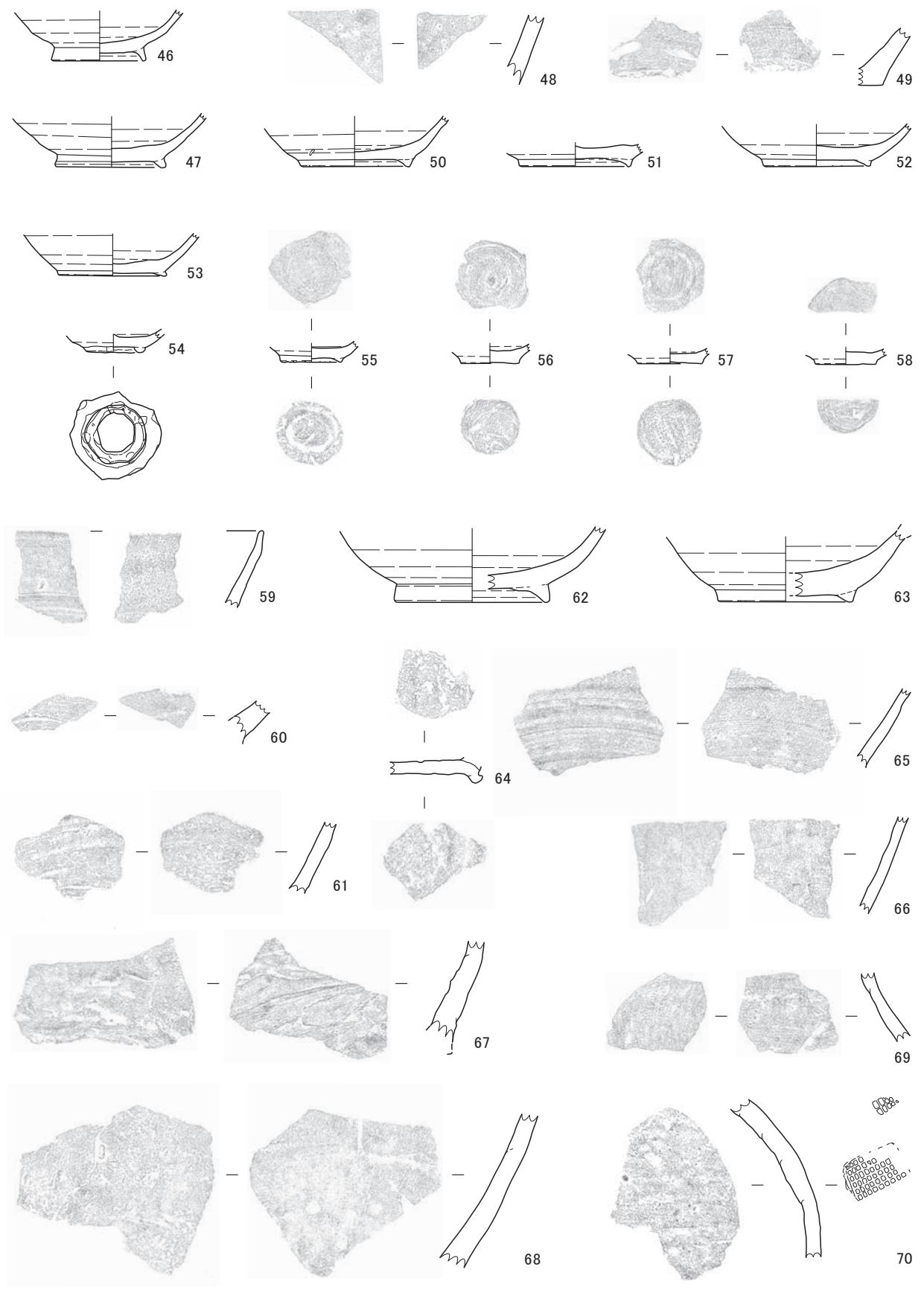
時期別の傾向としては、古代末期灰釉陶器をはじめとする11世紀から13世紀代までのものと15世紀代以降のものに分類可能であり、大半は前者が占め、後者に含まれるのは3点（41～43）のみに留まる。

溝SD008出土遺物（第51・52図-46～75）

合計30点を図示し得た。古代末期灰釉陶器に関する遺物は、灰釉椀（46）のみである。山茶碗類に伴うものは、短頸壺（48・49）、初期山茶碗第3・4型式の山茶碗（47、50～52）と小碗（54・55）、尾張型第5型式の山茶碗（53）と小皿（56～58）、片口鉢I類（59～65）など合計19点である。片口鉢I類は、7点を数え、猿投窯の初期山茶碗第3型式（59・62）、初期山茶碗第4型式（60・61、63）、尾張型第5型式（64・65）にそれぞれ相当する。常滑窯の甕（66～71）・広口壺（72）は7点、常滑窯の羽釜（73・74）は2点、他に時期・産地とともに不明ながら土師質の羽釜（75）も1点ある。帰属時期は、12世紀代を中心として概ね13世前半までに位置付けられるが、71は器表面が光沢のある赤褐色系を示す特徴等から15世紀代の可能性を示しておきたい。

溝SD010出土遺物（第53図-76～83）

合計8点を図示し得た。古代末期灰釉陶器に関するものは無い。猿投窯の初期山茶碗第3型式（76・77）、初期山茶碗第4型式（78）をはじめ尾



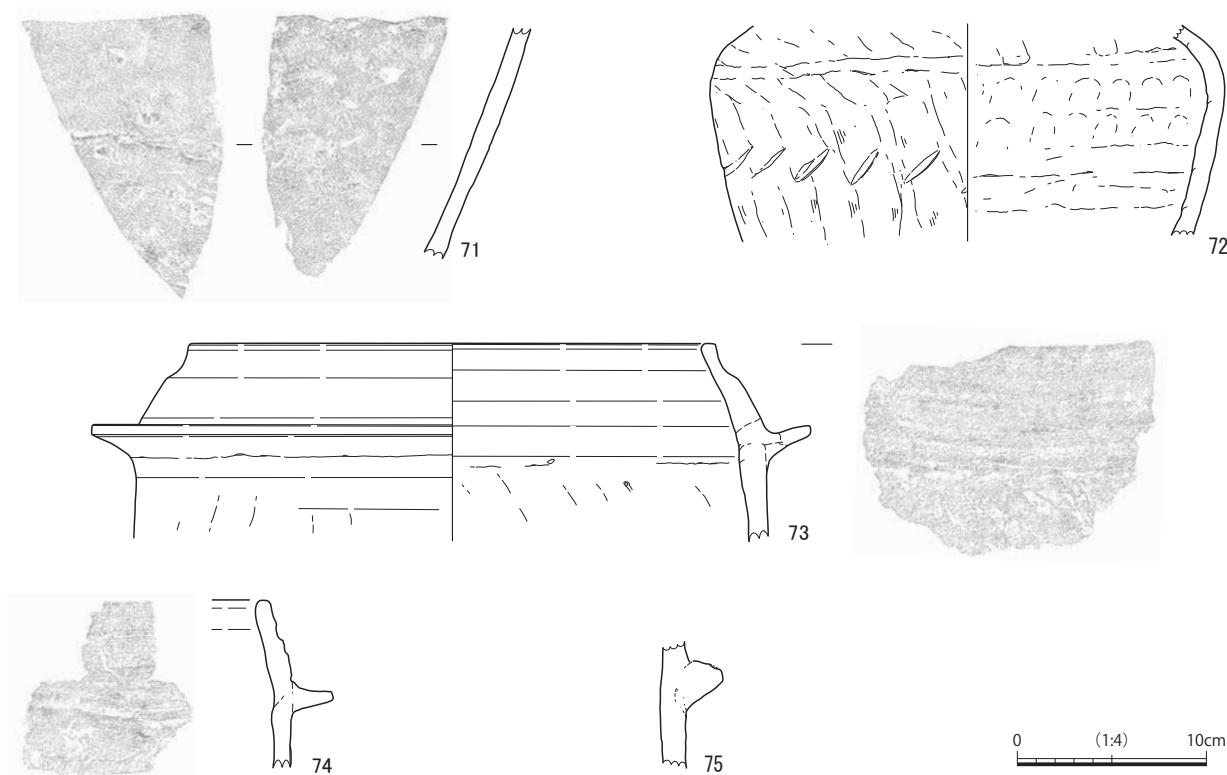
第51図 溝SD008出土遺物実測図①

張型第5型式の小皿（79）、猿投窯と思われる三筋壺（81）、常滑窯の羽釜（82）、常滑窯の甕（83）、他に古瀬戸後期の鉄釉合子蓋（80）がある。15世紀代の鉄釉合子蓋（80）を除けば、概ね11世紀末から13世紀初頭までに位置付けられる。

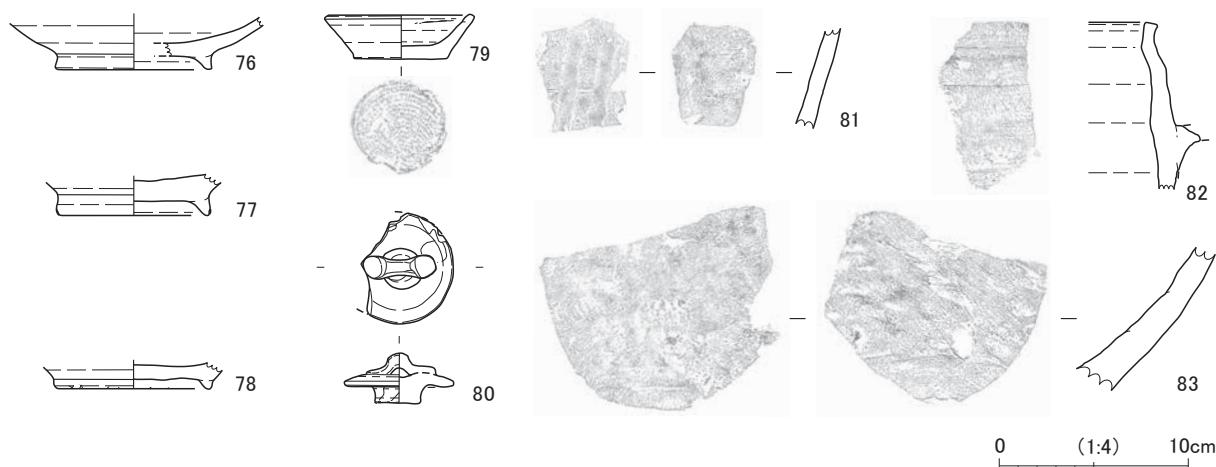
溝 SD025 出土遺物（第54図-84～103）

合計20点を図示し得た。全て、初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式までに相当する山茶碗類で占められる。山茶碗（84・85）は、初期山茶碗

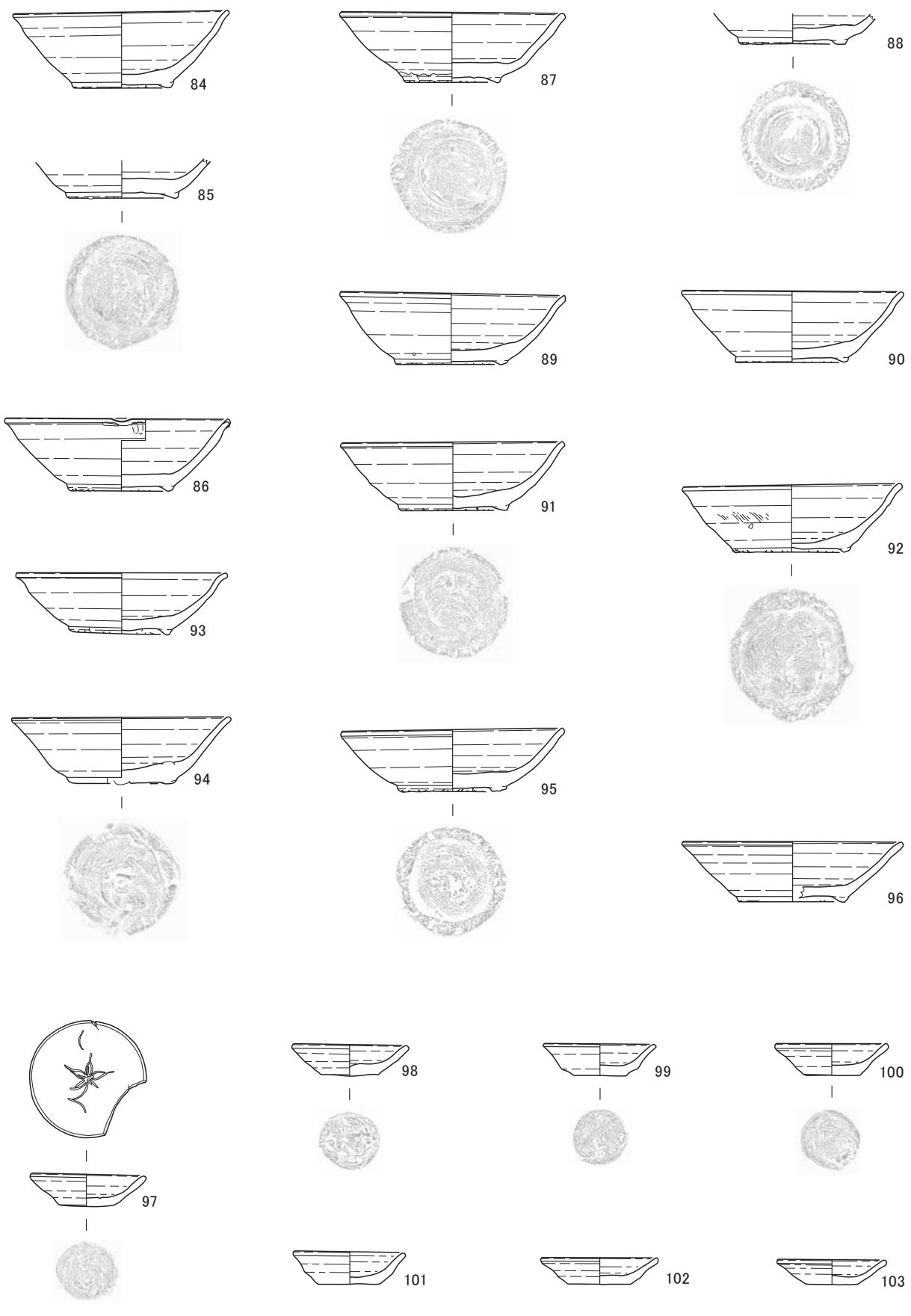
第4型式に相当し、同時期の片口山茶碗（86）は、口縁部の一か所に指で成形した注ぎ口を伴い、他の山茶碗と比較してやや大形の器形を有する点が特徴である。また、尾張型第5型式の山茶碗（87～96）と小皿（97～100）は、合計17点あり、中でも特筆すべき資料として小皿（97）が挙げられ、底部内面を対象として細い棒状の器具により葉の形状が五つの角からなる「楓」を意匠とした刻画文が流麗な筆致で描かれている。



第52図 溝SD008出土遺物実測図②



第53図 溝SD010出土遺物実測図



第54図 溝SD025出土遺物実測図

溝 SD003 出土遺物 (第 55 図 -104・105)

合計 2 点図示し得た。猿投窯の山茶碗 (104) と常滑窯の甕 (105) である。帰属時期は、104 が初期山茶碗第 3 型式、105 は 12 世紀後半代にそれぞれ位置付けられる。

溝 SD004 出土遺物 (第 55 図 -106～113)

合計 8 点を図示し得たが、いずれも破片資料である。帰属時期では、12 世紀代から 13 世紀初頭までのものと 16 世紀代のものに分類可能である。前者に含まれる猿投窯の片口鉢 I 類 (106) は、初期山茶碗第 3・4 型式に相当する。他に常滑窯の甕 (107～109)、常滑窯の羽釜 (110・111) がある。16 世紀代のものには、瀬戸大窯の鉄釉小皿 (112) と土師器の半球形内耳鍋 (113) がある。112 は、底部の資料であり糸切り未調整の平底を有する。113 は、体部中段から口縁部の資料である。内耳部は、欠落しているが、本来口縁部の内面側に相対して付設される。

溝 SD020 出土遺物 (第 55 図 -114)

1 点のみ図示し得た。猿投窯の小碗 (114) である。底部には、断面三角形の付高台を有し、その端部には粉殻痕が確認できない。帰属時期は、初期山茶碗第 3 型式に相当する。

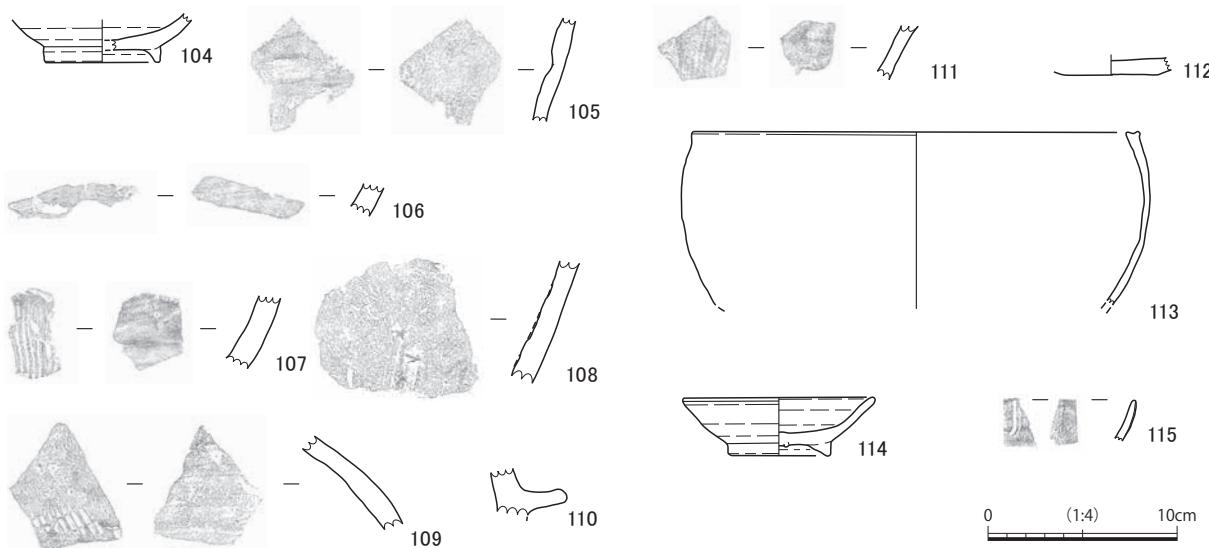
溝 SD030 出土遺物 (第 55 図 -115)

1 点のみ図示し得た。口縁部の小破片資料であ

るが、古瀬戸の入子 (115) と判断した。胎土は緻密であり、灰色系に発色している。器壁は、ロクロ調整により薄く仕上げられている。口縁部には縦長の細い輪花が施されている。帰属時期は、尾張型第 8・9 型式に併行する。

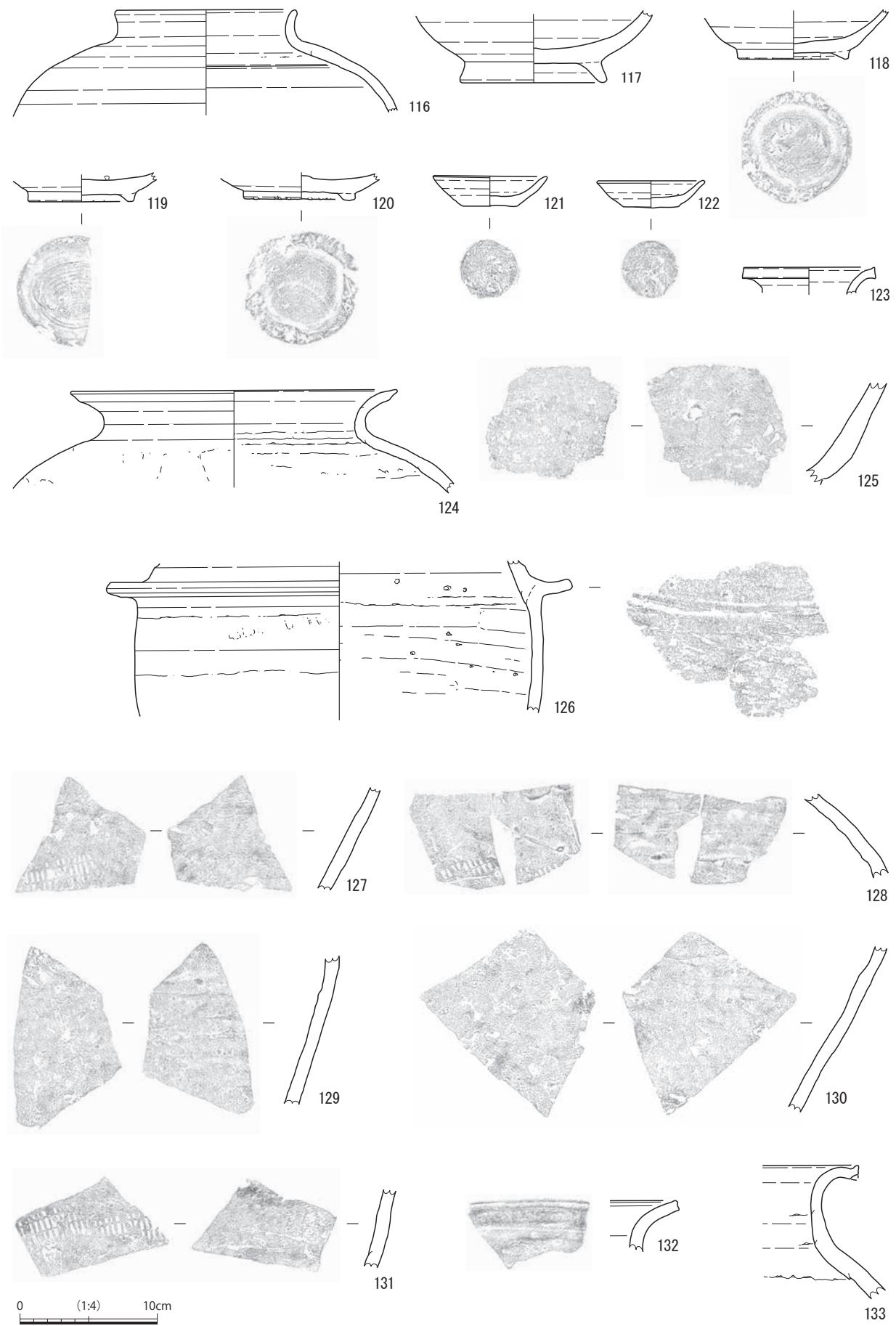
土坑 SK001 出土遺物 (第 56～58 図 -116～158)

合計 43 点を図示し得た。古代の清郷型鍋や土製支脚を除くと 11 世紀末から 17 世紀代までの長期間に帰属するが、大きくは 11 世紀末から 13 世紀代までの前半期と 14 世紀代から 17 世紀代までの後半期のものに分類可能である。前半期の初期山茶碗第 3 型式に併行するものは、猿投窯の短頸壺 (116) がある。肩部から口縁部まで残存する資料である。頸部はやや外反して短く立ち上がり、上端部は丸く仕上げられている。内外面とも横方向の指ナデ及び回転ナデにより器壁は薄く均一な仕上げが施されている。他に、同時期と思われる片口山茶碗 (117) は、山茶碗よりやや大形の器形を有する点が特徴である。山茶碗類には、初期山茶碗第 4 型式の山茶碗 (118～120)、尾張型第 5 型式の小皿 (121・122) がある。常滑窯の三筋壺 (123) は、口縁外端部を面取りし、縁帯状に成形している。帰属時期は、常滑第 2・3 型式期に相当する。常滑窯の広口壺 (124) は、全体的に薄手の器壁に調整が施され、内面には指圧痕が認められる。帰属時期は、

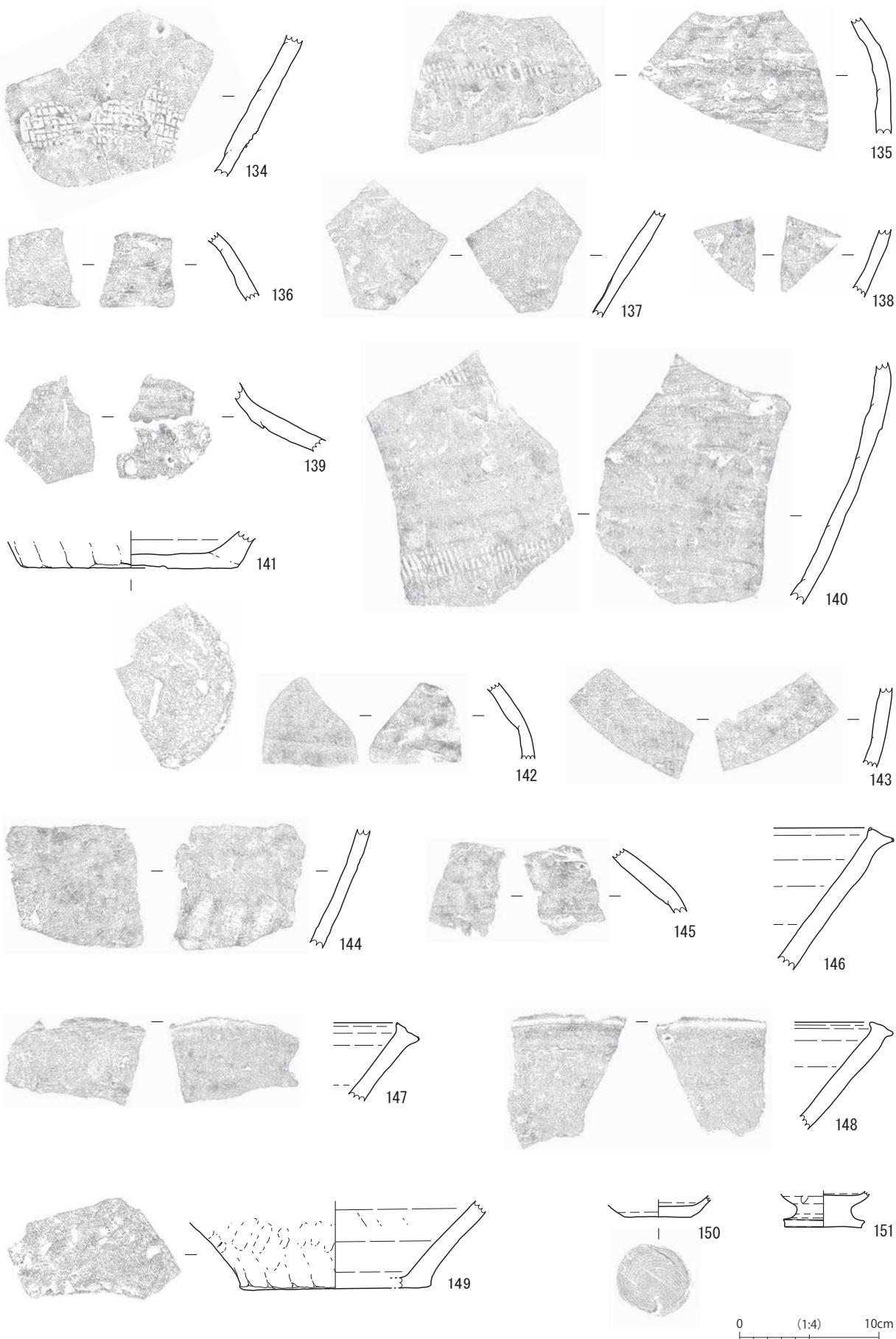


104・105:SD003 106～113:SD004 114:SD020 115:SD030

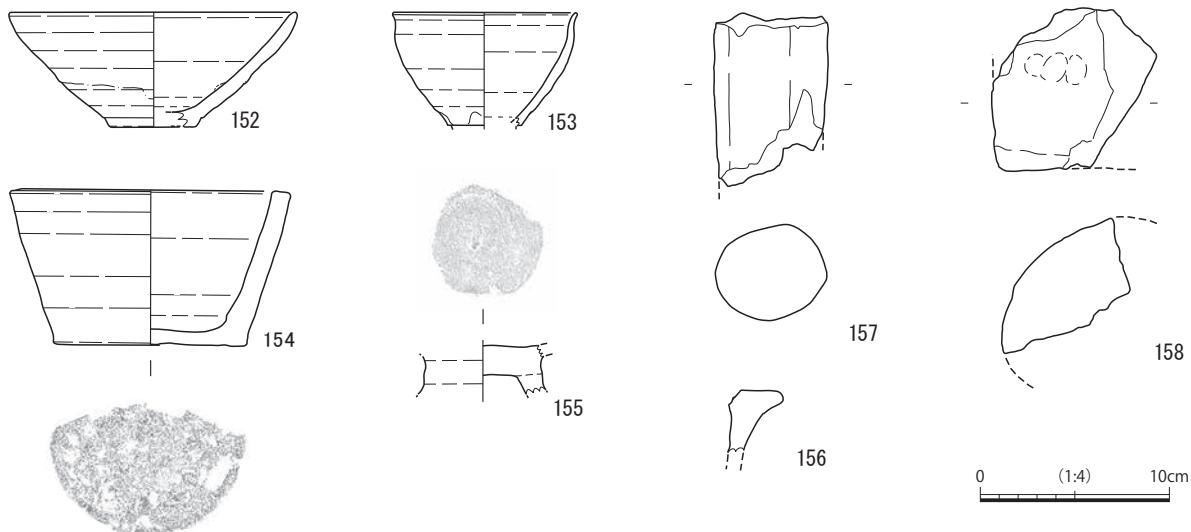
第 55 図 溝 SD003・004・020・030 出土遺物実測図



第56図 土坑SK001出土遺物実測図①



第57図 土坑SK001出土遺物実測図②



第58図 土坑SK001出土遺物実測図③

常滑窯における壺・甕生産の成立期でもある常滑窯編年第1b型式期に相当する。常滑窯の片口鉢I類（125）は、体部下半付近の資料であり、横方向のヘラ削り調整が施されている。帰属時期は、尾張型第5・6型式に相当する。常滑窯の羽釜（126）は、内面を横方向の粗いヘラ削り調整が施されている。帰属時期は12世紀代後半から13世紀初頭に位置付けられる。常滑窯の甕（127～145）は、127～131、134～140・142～145が胴部、141が底部の破片資料であり、127・128・131・134・135・140には印花文が連続して施されている。帰属時期は、口縁部資料の132が常滑窯編年第3型式期、133は第4型式期に、胴部破片資料の127～131は12世紀後葉、134～139が12世紀後半、140が12世紀後半から13世紀、141が13世紀後半、142～145は15世紀代にそれぞれ位置付けられる。片口鉢II類（146～149）は、口縁端部の形状が尖り気味に仕上げられている点が器形上の特徴である。146は、常滑窯編年第10型式期、147～149は、第11型式期にそれぞれ相当する。藤岡窯の製品には、山茶碗（150）があり、尾張型第10型式に相当する。瀬戸窯の製品には、古瀬戸鉄釉仏供（151）と古瀬戸の灰釉平碗（152）、瀬戸大窯の天目茶碗（153）がある。151は古瀬戸後I・II期、152は古瀬戸後II期、153は大窯第1段階前半にそれぞれ相当する。近世常滑窯の製品としては「赤物」と呼称される小形鉢（154）がある。砂痕の残る未調整の平底で、体部は直線的に

立ち上がり、口縁上端部は回転ナデにより平坦に仕上げられている。帰属時期は、17世紀代に位置付けられる。他に、155は、脚付きの器形と思われるが器種名・帰属時期ともに特定できない。古代に帰属する清郷型鍋（156）は、口縁部の破片資料、他に土製の支脚（157・158）などがある。

土坑SK009出土遺物（第59図-159）

1点のみ図示し得た。瀬戸の山茶碗（159）である。帰属時期は、尾張型第8型式に相当する。

土坑SK010出土遺物（第59図-160）

1点のみ図示し得た。古代猿投窯の灰釉椀（160）である。帰属時期は、K-90号窯式に相当する。

土坑SK020出土遺物（第59図-161）

1点のみ図示し得た。瀬戸大窯の天目茶碗（161）である。全面に鉄釉が施されている。帰属時期は、大窯第1段階前半に相当する。

土坑SK026出土遺物（第59図-162・163）

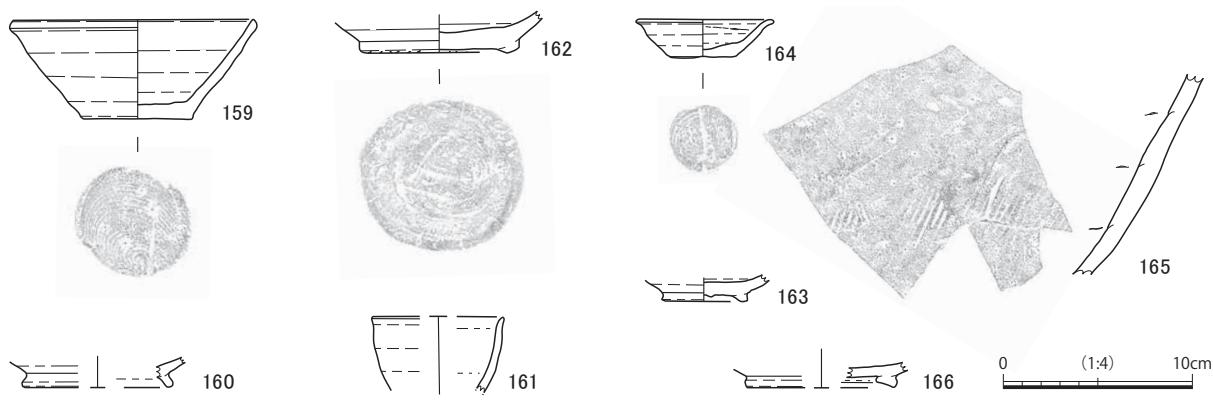
2点図示し得た。初期山茶碗第4型式の小碗（163）と尾張型第5型式の山茶碗（162）である。

土坑SK027出土遺物（第59図-164・165）

2点図示し得た。尾張型第5型式の小皿（164）と常滑窯の甕（165）で、164は12世紀後葉から13世紀初頭、165は12世紀後半代にそれぞれ位置付けられる。

土坑SK033出土遺物（第59図-166）

1点のみ図示し得た。古代猿投窯の灰釉椀（166）で、高台周辺の破片資料である。帰属時期は、K-90号窯式に相当する。



159:SK009 160:SK010 161:SK020 162・163:SK026 164・165:SK027 166:SK033

第59図 土坑SK009・010・020・026・027・033出土遺物実測図

土壙墓 ST001 出土遺物（第45図-167・168）

土壙墓 ST001 からは、副葬品として2点の山茶碗（167・168）が出土している。いずれも完形に近い資料で、全体の法量からほぼ同じ大きさの器形を有する点が特徴である。全体の形状は、糸切り未調整の平底の外縁に沿って、断面三角形を呈する付高台を有し、その端部には糀殻の痕跡が認められる。底部からの立ち上がりは緩やかで、口縁部に至っては僅かに外反が認められ、その端部は丸く仕上げられている。基本的には、ロクロ回転を利用した成形であり、口縁部付近はより丁寧な仕上げが施されている。焼成は良好であり、いずれも灰白色系の色調を呈している。胎土には小粒の石が混入している点と内面を中心とする使用的の痕跡がやや不明瞭である点等が共通する所見でもある。器形の特徴から猿投窯南部域あるいは常滑窯（知多半島北部域）の山茶碗に相当する。なお、形態上の特徴として、168の資料は底部内面立ち上がり付近の特徴がその中央付近に向けやや下降する点から167よりもやや新しい要素が含まれる点を評価したい。従って、167は初期山茶碗第4型式、168は尾張型第5型式にそれぞれ相当し、帰属時期は12世紀中葉から13世紀初頭までに位置付けられる。

土壙墓 ST002 出土遺物（第46図-169～172）

断片的な資料ながら土師器皿（169～172）が4点出土している。土師質な仕上がりである点は共通し、それぞれ形状の異なる器形を有する。169・172は手捏ね、170・171はロクロ成形である。

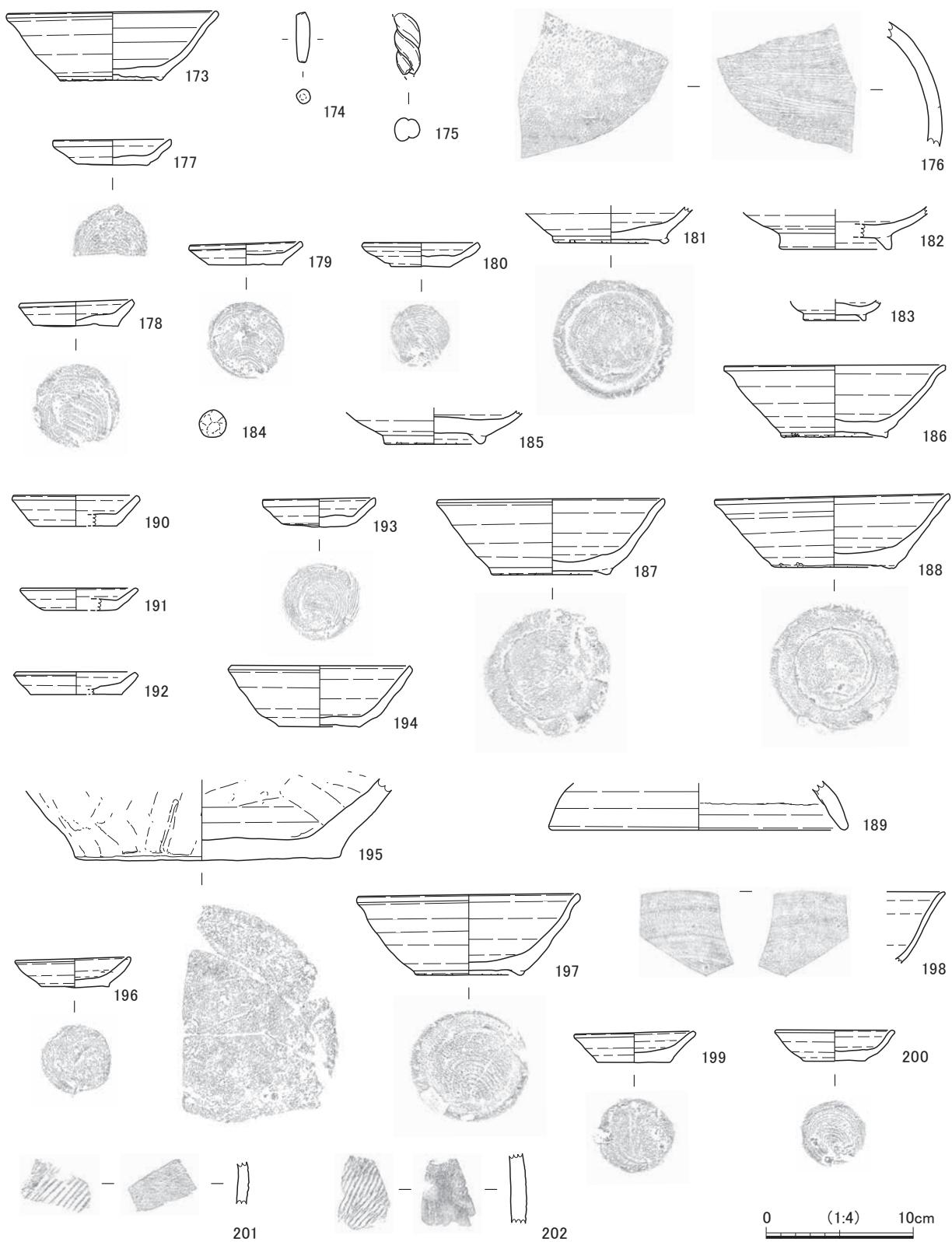
各ピット出土遺物（第60図-173～202）

ここでは、各ピットから出土した遺物について記述する。173は、尾張型第6型式の山茶碗である。174は、土師質の管状土錘である。手捏ねによる成形で、中心部には細い穿孔が認められる。175は、灰釉水瓶の把手と判断した。二本の粘土紐を撫り合わせて成形している。帰属時期は、H-72号窯式から百代寺窯式に相当する。176は、常滑窯の甕の肩部付近に相当する。帰属時期は、12世紀後半代に位置付けられる。177～180は、小皿である。177・178は尾張型第7型式、179・180は、瀬戸窯製品で尾張型第7・8型式にそれぞれ相当する。181は、尾張型第5型式の山茶碗、182は、初期山茶碗第3型式の山茶碗である。183は、初期山茶碗第4型式の小碗である。184は、猿投窯あるいは常滑窯の陶丸である。手捏ねにより球状に成形している。帰属時期は、尾張型第7・8型式に相当する。185は、初期山茶碗第4型式の山茶碗である。186～188は山茶碗である。186は、尾張型第6型式、187・188は、尾張型第5型式である。189は、猿投窯の経筒外容器の蓋と判断した。帰属時期は初期山茶碗第4型式に併行する段階と考えられる。190～193は、小皿である。190～192は尾張型第5・6型式、193は尾張型第7・8型式に相当する。194は、瀬戸窯の山茶碗で尾張型第9型式に相当する。195は、常滑窯の甕の底部である。12世紀後半代に位置付けられる。196は尾張型第5型式の小皿である。197は、尾張型第5型式の山茶碗である。198は、古代猿投窯の灰釉椀である。

百代寺窯式に相当する。199・200は、尾張型第5型式の小皿である。201・202は、古代猿投窯の須恵器の壺・甕類であり、いずれも胴部付近に相当する。外面は叩き目痕、内面は平滑に仕上げられる。

ている。帰属時期は8～9世紀に位置付けられる。

他に細片のため図化しなかったが、土師器伊勢型鍋（写真図版36-232 SP120出土）、土師器内彎形羽釜（写真図版36-231 SP378出土）がある。



第60図 各ピット出土遺物実測図

包含層出土遺物（第61図-203～221）

ここでは、包含層から出土した遺物について記述する。203は、古代猿投窯の須恵器の杯である。O-10号窯式に相当する。204は、H-72号窯式の灰釉碗である。205は、尾張型第5型式の山茶碗である。206は、常滑窯の甕の底部である。縦方向のヘラナデ調整が認められる。帰属時期は12世紀中葉である。207は、瀬戸大窯の茶入である。帰属時期は16世紀代に位置付けられる。208は、瀬戸窯の鉄絵皿である。登窯第1・2小期に相当する。209は、常滑窯の甕の口縁部である。常滑窯第6a型式期に相当する。210は、瀬戸窯の灰釉片口である。高台から体部下半付近は回転ヘラ削りによる成形・調整が施されている。帰属時期は、登窯第9・10小期に相当する。211は、尾張型第5型式の山茶碗である。212は、初期山茶碗第3型式の山茶碗である。213は、尾張型第5型式の小皿である。214は、藤岡窯の山茶碗である。尾張型第10型式に相当する。215は、初期山茶碗第3型式の山茶碗である。216は、尾張型第7・8型式の小皿である。217は、常滑窯の甕である。15世紀から16世紀代と思われる。218は、古瀬戸後期後半の天目茶碗である。219は、広東茶碗である。登窯第11小期に相当する。220は、瀬戸窯の鉄釉秉燭である。登窯第11小期に相当する。221は、鉄釉の鍋である。回転ヘラ削り調整で整えられた平底で、団子状に成形した三足を伴う。口縁部は受け口状を呈し、蓋を伴う可能性が高い。釉薬は、底部周辺を除いて施され、口縁部の受け口部分のみ拭き取りが行われている。なお、底部外面は、煤の付着があり黒色に変色している。帰属時期は、幕末を含む19世紀後半から20世紀前半頃と考えられる。

試掘調査に伴う出土遺物（第62図-222・223）

ここでは、本調査区隣接地での試掘調査⁽¹⁾により出土した尾張型の山茶碗（223）と常滑窯の羽釜（222）について記述する。この2点の資料は、今回の調査で出土した遺物の中でも主要となる器種であり、各遺構の中心となる稼働時期を示す所見も示されていることから、遺物の再実測を行い参考資料として掲載した。

山茶碗（223）は、回転ナデを多用した成形であり、糸切り未調整の底部には断面三角形の付高台を有し、端部には糊殻痕が認められる。体部は直線的であるが口縁部に至っては僅かに外反し、端部は細く丁寧に仕上げている。底部内面からの立ち上がりは、僅かな段差が認められ形態上の特徴と指摘できる。なお、内面には僅かながら使用の痕跡も認められる。帰属時期は、尾張型第5型式に相当する。

羽釜（222）は、底部を欠落しているものの、全体の形状が概観できる良好な資料である。基本的には、常滑窯における壺・甕の製作技法に即して、粘土紐の積み上げあるいは貼り付けにより器形を整え、体部外面はヘラナデ、体部内面は、横方向のヘラ削り調整が施されている。体部内面の強いヘラ削りは、器壁の厚さを調整する目的が含まれており、常滑窯での鍋・釜類に共通する製作技法でもある。鍔は、回転ナデにより形状を整え、体部に貼り付け、口縁部は、回転ナデを多用しており、やや内向きの器形を特徴とし、上端部には平坦面が形成されている。胎土は、砂粒の目立つ粗いものが使用されている。なお、底部外面の周辺は黒色に変色していることから、煤と思われる付着物の影響と考えられる。帰属時期は、常滑窯第3・4型式期に相当する。なお、山茶碗と羽釜はいずれも12世紀後葉から13世紀初頭に位置付けられる。

第2節 土製品

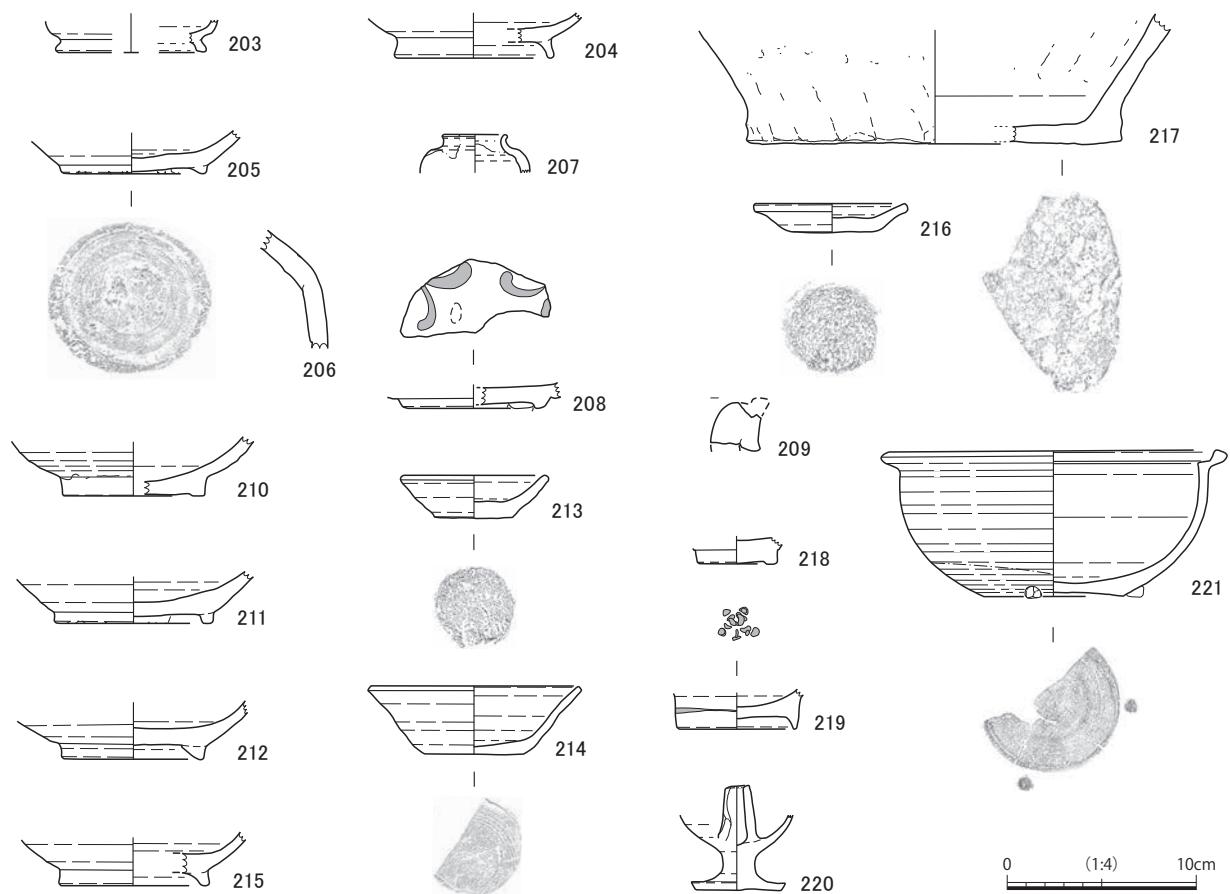
土製品には、土錘、土鈴、土製支脚（棒状土製品）がある。土錘に関してはSK001の項で既述したため、ここでは土鈴・土製支脚について述べる。

土鈴（写真図版40-237）

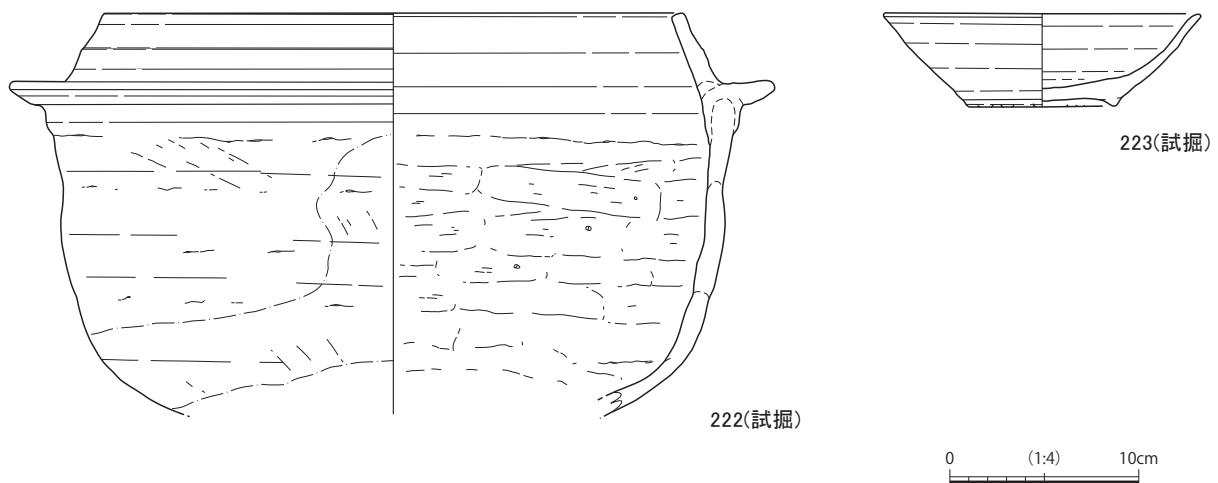
237は下半部を欠くが、中空で球状を呈し上部に紐孔を残すことから土師質の土鈴と思われる。直径1.5cm、重さは6gをはかる。1区中央部の溝SD004から出土した。

土製支脚（第58図-157・158）

157・158は土製支脚である。157は多角柱状の製品で、残存高9.2cm、最大径6.0cm、重さは274gを測る。摩滅のため調整は不明である。全體に強く被熱して赤褐色を呈する。158は円柱状



第61図 包含層出土遺物実測図



第62図 試掘調査に伴う出土遺物実測図

の製品で、残存高 8.6cm、復元径 12.0cm、重さは 371g を測る。外面と底面に指頭圧痕が残る。全体に強く被熱して赤褐色を呈する。いずれも廃棄土坑 SK001 から出土した。詳細な時期・用途は不明だが、共伴遺物からみて中世の遺物と思われる。

第1次調査区域では井戸 SE001、土坑 SK092 から類似品が出土している他、石丸遺跡に近い製塩遺跡の惣作遺跡、豊明市大脇城遺跡、東浦町天白遺跡などで類似品が出土している。

第3節 石製品

石製品には砥石がある。

砥石（写真図版 40-241）

241 は砥石である。側面と表面の 2 面に砥面が残る。長さ 4.5cm、幅 4.7cm、厚さ 1.5cm、重さは 50g をはかる。廃棄土坑 SK001 から出土した。

第4節 金属製品・鍛冶関連遺物

金属製品・鍛冶関連遺物には、鉄釘、鉄滓、炉壁とみられる焼土塊がある。鉄釘は調査区中央部の遺物包含層から 1 点出土したが、取上げ時に細片化してしまったため、図化できなかった。このため、以下では鉄滓・炉壁についてのみ記述する。

鉄滓（写真図版 40-238・239）

鉄滓は 2 点出土した。いずれも小塊で、238 は最大長 3.5cm、最大幅 2.5cm、重さ 24g、239 は最大長 3.0cm、最大幅 2.9cm、重さは 11g をはかる。前者は 1 区南東部の SD029、後者は SD029 北側に隣接する SK042 からそれぞれ出土した。SK042・SD029 周辺で炉跡は確認できなかったが、SK042 は鉄滓の他、炭化物や焼土を多量に含んでおり、周辺で小鍛冶が行われた可能性が高いと考えられる。

炉壁（写真図版 40-240）

240 は 5 ~ 20cm 程のスサ入り粘土の焼土塊である。全体的に強く被熱して明赤褐色を呈することから炉壁の可能性が高い。全部で 50 点程出土したが、本来の形状を復元できる資料は認められなかつた。また、鞴羽口などの取り付け部や金属滓が付着したものも見られなかつた。

1 区西側の性格不明遺構 SX002、土坑 SK018 から出土した。

第5節 繩文・弥生時代の遺物

繩文・弥生時代の土器（第 63 図）

224 は深鉢形土器の胴部片と思われる。摩滅のため不明瞭だが縄文が施される。1 区中央部の柱穴 SP622 から出土した。細片のため詳細な時期は不明である。

225 は深鉢形土器の胴部片と思われる。摩滅のため不明瞭だが条痕文が施される。掘立柱建物 SB04 の柱穴 SP658 から出土した。細片のため詳細な時期は不明である。

石器（第 63 図）

226 は下呂石を素材とする石鎌である。最大長 1.8cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.3cm である。縁辺部が直線的で脚端部は先鋒なものである。押圧剥離によって器面の成形が進められている。成形加工は主に実測図右面から左面の順で施されている。上端部は破損する。1 区中央部の柱穴 SP313 から出土した。

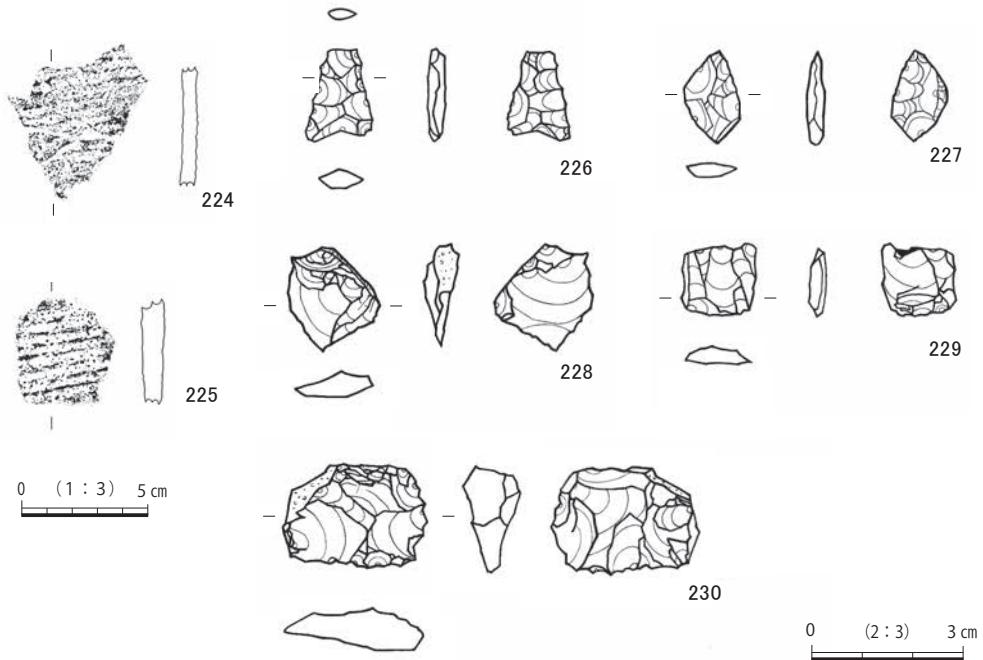
227 は下呂石を素材とする削器と分類する。最大長 1.8cm、最大幅 1.0cm、最大厚 0.4cm である。横長剥片を横方向に使い、押圧剥離によって器面の成形が進められている。元々の厚さが薄い素材剥片に対して、縁辺から押圧剥離を施しており、より厚みを減じようとする加工意図が認められる。実測図左面右下の白抜き部分は折れ面である。右面上側の成形では、尖頭部を作出する。削器と分類するが、石鎌など小形の剥片石器を志向している可能性がある。

掘立柱建物 SB04 の柱穴 SP710 から出土した。

228 は下呂石を素材とする剥片であり、最大長 2.0cm、最大幅 1.8cm、最大厚 0.5cm である。自然面を打面とし、背面にも自然面を打面とした剥離がある。自然面の形状とクラックから、素材が河床礫であると推定される。1 区南端の柱穴 SP733 から出土した。

229 は下呂石製の楔形石器である。最大長 1.3cm、最大幅 1.4cm、最大厚 0.4cm である。両極打撃が施されており、上下端部には階段状剥離が見られ、線状の加撃部が残されている。掘立柱建物 SB05 の柱穴 SP312 から出土した。

230 はチャートを素材とする楔形石器である。



第63図 繩文・弥生時代の出土遺物実測図

表4 繩文・弥生土器、石器観察表

No.	種別	器種	部位	遺構	法量(cm)			技法等の特徴	色調	備考
					口径	底径	器高			
224	土器	深鉢形土器	胴部	SP622	-	-	-	縄文 胎土：やや粗い 焼成：良	表面7.5YR4/4褐 裏面7.5YR3/2黒褐	
225	土器	深鉢形土器	胴部	SP658	-	-	-	条痕文 胎土：粗い 焼成：やや良	表面5YR6/8橙 裏面5YR6/6橙	
226	石器	石鏟	-	SP313	長さ1.8	幅1.3	厚さ0.3		7.5Y3/1オリーブ黒	下呂石製
227	石器	削器	-	SP710	長さ1.8	幅1.0	厚さ0.4		7.5Y 4/1灰	下呂石製
228	石器	剥片	-	SP733	長さ2.0	幅1.8	厚さ0.5		7.5Y3/1オリーブ黒	下呂石製
229	石器	楔形石器	-	SP312	長さ1.3	幅1.4	厚さ0.4		7.5Y3/1オリーブ黒	下呂石製
230	石器	楔形石器	-	SP616	長さ2.1	幅2.9	厚さ1.1		10Y3/1オリーブ黒	チャート製

最大長 2.1cm、最大幅 2.9cm、最大厚 1.1cm である。実測図左面に対して上部右側と下部左側に両極打法が施されており、特に上部右側にはステップと細かい剝離痕がみられる。左面左上には成形加工が加えられている。1区中央西側の柱穴 SP616 から出土した。

第6節 人骨・動物遺体

人骨・動物遺体には人骨・貝類がある。このうち人骨については、次章の第5章第1節で詳述しているため、ここでは貝類についてのみ記述する。

貝類（写真図版41）242から245はいずれも廃棄土坑 SK001 中・下層から出土した貝殻類で、オキシジミ（242）、マガキ（243）を主体に、ハイガイ（244）、ウミニナ（245）が含まれる。

これらはいずれも内湾の砂泥層、もしくは内湾の

岩礁や砂礫底のカキ礁に生息する貝類で、いずれも石丸遺跡に近い旧衣ヶ浦湾で採取された貝類とみられ、食物残滓として土坑内に廃棄されたと考えられる。第1次調査区域においても、廃棄後の井戸 SE001・003 から、オキシジミ・マガキなどを主体に、ハマグリ、ハイガイ、ウミニナ・イボキサゴ、アカニシなどが多量に出土しており、いずれも近くの居住域から廃棄された食物残滓と考えられる。

【註】

- (1) 大府市教育委員会 2017 『市内遺跡調査報告書～平成7～27年度の試掘調査・立会調査報告～』

第5章 自然科学分析

第1節 土壙墓 ST001・002 出土の人骨

新美倫子（名古屋大学博物館）

石丸遺跡の2023年度調査では、土壙墓ST001・ST002の2ヶ所で人骨が出土した。

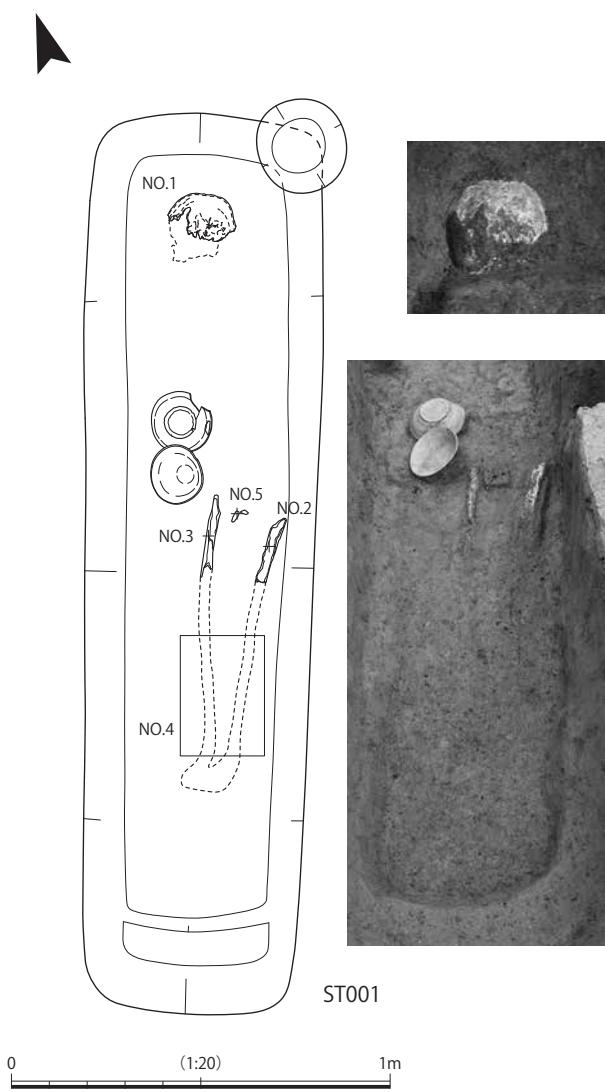
ST001（第64図）：細長い土壙墓から人骨が1体出土し、山茶碗が2点副葬されていた。所属時期は出土した山茶碗から見て12世紀後半のことである。出土した個体は頭を北北東に足先を南南西に向けており、下半身は仰向けて足を伸ばし、顔は西を向いていたと思われる。ただし、保存状況が悪く頭蓋骨の一部と下肢の一部しか残っておらず、上半身の部位は残っていないため、詳しい状況はわからない。残存していた頭蓋骨・下肢骨も取り上げ時には触れると粉状になるほどで、保存状態はきわめて悪い。

頭蓋骨（No.1）は右側の前頭骨の一部・頭頂骨・側頭骨・後頭骨の一部が取り上げられた。顔面や大後頭孔は確認できなかった。頸骨や歯も残っていなかった。側頭骨の乳様突起は残っており比較的大きいことから、この個体は男性の可能性が大きい。頭蓋骨の冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合はそれぞれごく一部分しか確認できなかったが、いずれも外面からは縫合が確認できるものの一部は癒合しており、内面ではほぼ消失していた。縫合の消失する年齢には個体差が大きいものの、これらの点から当個体の年齢は成人でありかつあまり若くない可能性がある。

下肢骨については、No.2は組織を見ると小さな孔が多く、ヒトの四肢骨破片と思われる。大腿骨後面の粗線の一部と思われる破片が確認できるので、大腿骨の中間部であろう。No.3はヒトの右大腿骨中間部であり、後面の粗線もかろうじて確認できる。No.4には長管骨の中間部破片が2点含まれていた。これらはNo.2やNo.3と同様に組織に小さな孔が多く、ヒトの四肢骨破片と思われる。出土位置から見て、脛骨あるいは腓骨の一部であろうと思われるが、保存状態が悪いため部位はよくわからない。

なお、頭蓋骨と下肢骨以外に、副葬された山茶碗の付近で骨片1点（No.5）が出土している。組織には小さな孔が多くヒトの破片と思われるが、保存状態が非常に悪く部位はわからない。

ST002（第46図）：ST002は長方形の土壙墓で、所属時期は室町時代のことである。埋土の底部付近からよく焼けて白色化した骨片が2点出土している。これらは骨の外面のしわの多さや内面の状況から見てヒトの骨片であり、形から見て四肢骨中間部の破片である。2点のうちの1点は脛骨か大腿骨の破片であろう。この土坑の底部付近からは、他に白色の粉状の物質と炭化物も出土したことがあり、上記の2点以外にも焼けた人骨が埋土中に含まれていたのかもしれない。



第64図 土壙墓 ST001 人骨等出土状況図

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史
山形秀樹・Zaur Lomtadze・三谷智広

1.はじめに

愛知県大府市の石丸遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2.試料と方法

試料は、SK018 から出土した炭化材 2 点（試料 No.518-1 : PLD-52571、試料 No.518-2 : PLD-52572）である。

測定試料の情報、調製データは表 5 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3.結果

表 6 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、第 65 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試

料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ : IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4.考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.45%) に着目して結果を整理する。

試料 No.518-1 (PLD-52571) は、1445-1503 cal AD (86.68%) および 1598-1617 cal AD (8.77%) で、15世紀中頃～17世紀前半の暦年代を示した。また、試料 No.518-2 (PLD-52572) は、1475-1526 cal AD (40.53%) および 1555-1633 cal AD (54.92%) で、15世紀後半～17世紀前半の暦年代を示した。いずれも室町時代～江戸時代前期に相当する。

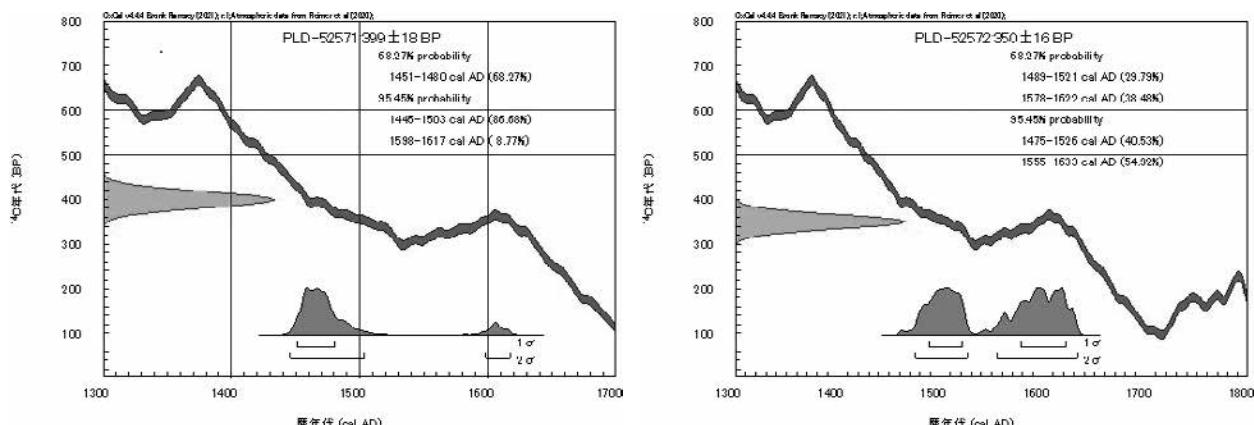
なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、2点とも最終形成年輪が残存していなかった。したがつ

表 5 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-52571	試料No. 518-1 遺構 : SK018 位置 : F22・G22	種類 : 炭化材 試料の性状 : 最終形成年輪以外 部位不明 状態 : dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)
PLD-52572	試料No. 518-2 遺構 : SK018 位置 : F22・G22	種類 : 炭化材 試料の性状 : 最終形成年輪以外 部位不明 状態 : dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)

表6 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-52571 試料No. 518-1	-23.80 ± 0.27	399 ± 18	400 ± 20	1451-1480 cal AD (68.27%) 1598-1617 cal AD (8.77%)	1445-1503 cal AD (86.68%) 1598-1617 cal AD (8.77%)
PLD-52572 試料No. 518-2	-25.63 ± 0.13	350 ± 16	350 ± 15	1489-1521 cal AD (29.79%) 1578-1622 cal AD (38.48%)	1475-1526 cal AD (40.53%) 1555-1633 cal AD (54.92%)



第65図 暦年較正結果

て、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

【参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代:3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第6章 遺構の変遷と総括

今回の調査は石丸遺跡の南端、第1次調査区南側隣接地の約1,160m²の範囲で実施した。

調査の結果、第1次調査において様相が不明瞭であった平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を多数検出し、本遺跡における中世集落の成立や土地利用の変遷を考える上で貴重な成果を得た。

以下では今回検出した遺構・遺物について、第1次調査の成果を踏まえつつ、各時期の様相をまとめることで本報告の総括したい。

第1節 遺構の変遷

検出した遺構は、溝で区画された屋敷地3区画、掘立柱建物13棟、掘立柱塀・柵13条、区画溝・溝27条、土坑28基（土壙墓の可能性がある3基含む）、土壙墓2基、性格不明遺構2基、柱穴・ピット532基である。

検出した遺構・遺物は、第1次調査と同様に縄文時代から江戸時代まで幅広い時期にわたるが、これらは大きく、I期：縄文時代から弥生時代、II期：古墳時代、III期：奈良時代から平安時代前半、IV期：平安時代後半、V期：平安時代末期から鎌倉時代、VI期：室町時代前半、VII期：室町時代後半から安土桃山時代、VIII期：江戸時代の8期に分けて考えることが可能である⁽¹⁾。今回検出した遺構の大半が中世（V期～VII期）に属すると考えられる。

以下、各時期の様相を述べる。

I期：縄文時代から弥生時代

第1次調査と同様にこの時期の遺構は確認できなかったが、縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての縄文・条痕文土器や下呂石製の石鏃・削器などが、中世掘立柱建物の柱穴などから出土した。第1次調査区域でもこれらと同時期と思われる石錐が出土しており、今後の周辺の調査でこの時期の遺構が発見される可能性も考えられる。

大府市域では桟敷貝塚で縄文時代晚期の深鉢形土器と石鏃が、共栄遺跡では石鏃がそれぞれ出土しているが、縄文時代の出土遺物は非常に少なく、今回の出土資料は市域の縄文時代を考える上で貴重な資料になると言えよう。

II期：古墳時代

今回の調査でこの時期の遺構・遺物は確認できなかったが、第1次調査区域において、古墳時代後期の製塩土器（篠島式VI類の類似品）と須恵器碗⁽²⁾が出土している。現段階でII期の遺物はこの2点のみであり、基本的に人間活動が希薄な時期であったと考えられる。なお、石丸遺跡に近接した製塩遺跡の惣作遺跡では、弥生時代中期から後期にかけての壺・甕類をはじめ、古墳時代から古代にかけての土師器、須恵器、製塩土器などが出土しており、旧衣ヶ浦湾沿岸部では製塩や漁業に関わる小規模な海浜集落が展開していたと考えられる。

III期：奈良時代から平安時代前半

第1次調査と同様にこの時期の遺構は確認できなかったが、出土遺物にO-10号窯式（8世紀）とK-90号窯式（9世紀後半）の須恵器碗・杯、また細片のため図化しなかったが、知多式製塩土器の脚部片が出土した。いずれも中世掘立柱建物の柱穴や土坑から細片化した状態で出土しており、この時期の遺構は中世の大規模開発で破壊された可能性が高いと考えられる。

第1次調査区域においても出土量こそ少ないが、O-53号窯式（10世紀前葉）の灰釉陶器碗・須恵器甕、知多式3・4類の製塩土器、また、当時の威信材である緑釉陶器なども出土しており、第1次調査区域から今回の調査区域にかけて小規模ながらも古代の集落が展開していたと考えられる。

IV期：平安時代後半

IV期になると遺物量が増加する（付論参照）。第1次調査区域と同様、この時期の集落の様相は不明瞭だが、H-72号窯式から百代寺窯式（10世紀後半～11世紀）の灰釉陶器の碗・杯・水瓶・短頸壺、初期山茶碗第3型式（11世紀末～12世紀前葉）の小碗・片口鉢I類などが、続くV期の区画溝や掘立柱建物の柱穴などから細片化した状態で出土しており、この時期の遺構の大半がV期以降の大規模開発で破壊された可能性がある。

第1次調査区域では初期山茶碗第3型式の山茶碗・片口鉢I類の他、清郷型鍋、また刻画文が施された12世紀初頭の猿投窯産突帯文四耳壺なども出土しており、先述のIII期に続いて古代の集落が

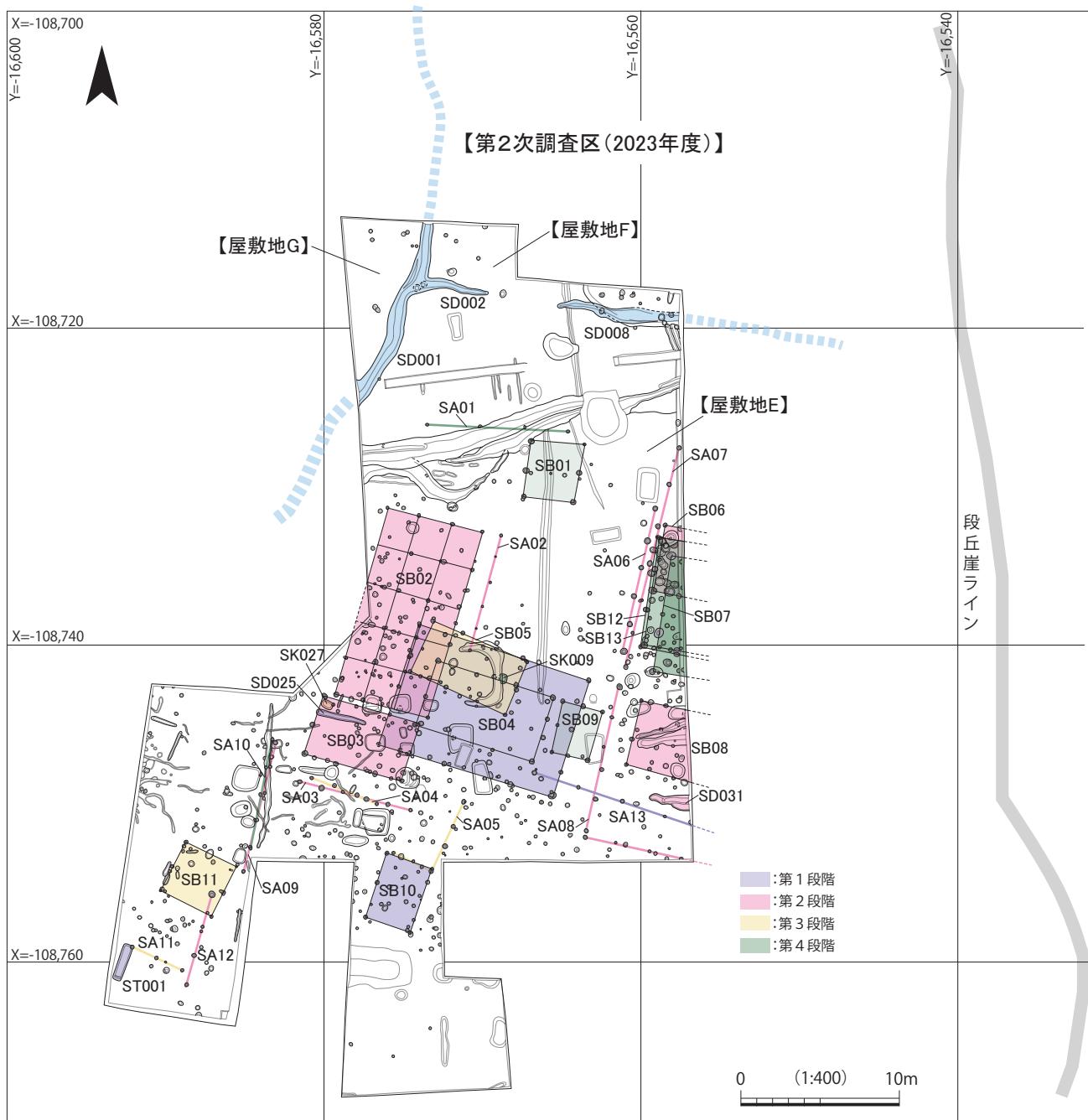
営まれていたと考えられる。

V期：平安時代末期から鎌倉時代

今回の調査区域の最盛期にあたり、非常に多くの遺構・遺物を検出した(第66図)。検出した遺構は、溝で区画された屋敷地3区画(E・F・G)、掘立柱建物13棟(SB01～13)、掘立柱塀・柵13条(SA01～13)、区画溝SD001・002・008、溝SD025・031、木棺土壙墓ST001などがあり、出土遺物には初期山茶碗第4型式から尾張型第8型式(12世紀中葉～14世紀前葉)までの山茶碗類、融着山茶碗、常滑窯産陶器(壺・甕・羽釜等)、土師器伊勢

型鍋・内彎形羽釜、中国産青磁蓮弁文碗などがある。

なお、第1次調査区域においてもこの時期の遺物(山茶碗類、融着山茶碗、常滑窯産陶器、土師器皿・伊勢型鍋、中国産青磁碗・白磁碗、中世瓦など)が多く出土したが、遺構に関しては、溝・竪穴状遺構・柱穴などが散発的に分布するのみで、掘立柱建物などを復元するには至らなかった。この理由として、第1次調査区域では室町時代(VI・VII期)の遺構が大半を占めることから、V期の遺構の多くがこの時期に破壊された結果とも考えられるが、遺構の重複が著しく掘立柱建物などを復元できていないだけの



第66図 V期の遺構分布

可能性もある。第1次調査区域の様相が不明瞭なため、第66図では第2次調査区域のみ表示した。

屋敷地の規模・構造 屋敷地Eは屋敷地の西辺をSD001、北辺をSD002・008で区画された屋敷地で、調査地東側の段丘崖と調査地南側の傾斜変換点をそれぞれ屋敷地の東辺・南辺と想定した場合、東西（北辺約36m、南辺約52m）×南北約50mのやや歪な方形状の屋敷地（面積約2,200m²）になると推定される。屋敷地Eの中央部は標高が12m前後で屋敷地Eでは最も標高が高く、眺望も優れているため居住域として相応しく、掘立柱建物や塀・柵が何度も繰り返し建てられている。

屋敷地北側には、掘立柱建物SB01と塀・柵SA01以外に遺構が分布しない空閑地がみられるが、痕跡として残りにくい庭や畠などに利用された可能性がある。屋敷地南西部には木棺土壙墓ST001が単独でみられ、いわゆる屋敷墓とみられる。なお、今回の調査で井戸や火葬施設は確認できなかったが、第1次調査区域では、調査区東側の段丘崖沿いで素掘り式の井戸を検出してお（第67図-SE003）、屋敷地Eの井戸も東側の未調査区域に存在する可能性も考えられる。

表7 V期の遺構変遷表

段階	遺構番号	構造・方向	方位	出土遺物・重複関係・建物方位から推定した遺構の帰属時期					
				初期山茶碗第3型式	初期山茶碗第4型式	尾張型第5型式	尾張型第6型式	尾張型第7型式	尾張型第8型式
	区画溝SD001	南北	N25° E						
	区画溝SD002・008	東西	N9° E (N81° W)						
第1段階	掘立柱建物 SB04	四面庇：側柱建物（東西棟）	N17° E (N63° W)						
	掘立柱建物 SB10	側柱建物（南北棟）	N17° E (N73° W)						
	掘立柱塀・柵 SA13	東西	N18° E (N72° W)						
	土壙墓ST001	南北	N17° E (N73° W)						
	溝SD025	東西	N16° E (N74° W)						
	掘立柱建物 SB08	側柱建物（東西棟）	N13° E (N77° W)						
第2段階	掘立柱塀・柵 SA08	南北-東西	N13° E (N77° W)						
	掘立柱塀・柵 SA07	南北	N14° E						
	掘立柱塀・柵 SA09	南北	N14° E						
	溝SD031	東西	N13° E (N77° W)						
	掘立柱建物 SB02	縦柱建物（南北棟）	N16.5° E (N73.5° W)						
	掘立柱建物 SB03	側柱建物（東西棟）	N16° E (N74° W)						
第3段階	掘立柱建物 SB06	不明	N10° E						
	掘立柱塀・柵 SA02	南北	N16° E						
	掘立柱塀・柵 SA03	東西	N15° E (N75° W)						
	掘立柱塀・柵 SA06	南北	N14° E						
	掘立柱塀・柵 SA12	南北	N16° E						
	掘立柱建物 SB05	側柱建物（東西棟）	N26° E (N64° W)						?
第4段階	掘立柱建物 SB11	側柱建物（東西棟）	N27° E (N63° W)						?
	掘立柱塀・柵 SA04	東西	N22° E (N68° W)						?
	掘立柱塀・柵 SA05	南北-東西	N25° E (N65° W)						?
	掘立柱塀・柵 SA11	東西	N25° E (N65° W)						?
	土壙墓SK027	東西	N28° E (N62° W)						?
	掘立柱建物 SB01	側柱建物（南北棟）	N8°-10° E						
第5段階	掘立柱建物 SB07	不明	N9° E						
	掘立柱建物 SB09	側柱建物（南北棟）	N12° E						
	掘立柱建物 SB12	不明	N9° E						
	掘立柱建物 SB13	不明	N8° E						
	掘立柱塀・柵 SA01	東西	N2° E (N88° W)						
	掘立柱塀・柵 SA10	南北	N11° E						
	土壙墓SK009	不明	N12° E						

※掘立柱建物の方位は、比較しやすいように、東西棟は梁（短辺）の方位、南北棟は桁（長辺）の方位を基準とした。
掘立柱塀・柵及び溝などの方位についても、東西方向に限り柱筋・溝に直交する方位を基準とした。

※矢印は建物方位から推定した帰属時期

のうち主屋とみられる東西棟の大型掘立柱建物SB004は、初期山茶碗第3型式の山茶碗を伴い、出土遺物や重複関係からみて最も古い段階に建てられた建物と考えられるが、これと建物方位が一致する付属建物SB10、塀・柵SA13、木棺土壙墓ST001、溝SD025が初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式の山茶碗を伴うため、SB04もこれらに近接した時期（初期山茶碗第4型式の12世紀中葉）まで構築時期が下る可能性が考えられる。屋敷地Eはこの掘立柱建物SB04の構築を機に屋敷地の本格的な開発が行われたと考えられ、この際に屋敷地を分ける区画溝SD001・002・008が開削されたと推測される。

屋敷地南西部に位置する木棺土壙墓ST001は、帰属時期から大型掘立柱建物SB04に関わる人物の墓の可能性が高く、副葬品は完形の山茶碗2点のみで被葬者の身分や階層を示す遺物は出土しなかつたが、墓壙規模が大きく木棺（伸展葬）で埋葬されていることから、集落内では相当身分の高い人物（壮年男性）であった可能性が強い。

次に第2段階の遺構には、南北棟の大型掘立柱建物SB02（総柱建物）、掘立柱建物SB03・06・08、掘立柱塀・柵SA02・03・06～09・12、溝SD031がある。建物方位は北から $13^{\circ} \sim 16.5^{\circ}$ 東偏し、SB06のみ 10° 東偏する。第2段階の遺構は出土遺物と建物方位からさらに2時期に細分でき、尾張型第5型式の山茶碗を伴い主屋とみられる東西棟の掘立柱建物SB08とこれを囲む塀・柵SA08、また、SA08の北側延長線上に位置する塀・柵SA07、SB08南辺に並行する溝SD031が先行し、その後に、尾張型第6型式の山茶碗と中国産青磁蓮弁文碗を伴う大型掘立柱建物SB02とSB02の東辺に並行する塀・柵SA02、掘立柱建物SB03とSB03の南辺に並行する塀・柵SA03、さらに掘立柱建物SB06とSB06の西辺に並行するSA06がそれぞれ建てられたと推測される。

第3段階の遺構には、尾張型第5型式の山茶碗を伴う掘立柱建物SB05・11、塀・柵SA04・05・11、土壙墓SK027がある。建物方位は北から $22^{\circ} \sim 28^{\circ}$ 東偏する。

屋敷地中央部に主屋とみられる東西棟の掘立柱

建物SB05が位置し、SB05からやや離れた南西部に塀・柵SA11を伴う付属建物SB11、南部に塀・柵SA04・05がそれぞれ位置し、さらにSB05の南西に土壙墓SK027が分布する。

この第3段階の遺構群は、出土遺物からみて第1段階の次に位置付けられるグループだが、建物方位に注目すると、第1・第2段階の建物方位が近似するのに対し、第3段階のみこれらと方位が大きく異なる傾向が認められる。また、第3段階の塀・柵SA011が木棺土壙墓ST001を切るなどの点から、第3段階の遺構群は第1・第2段階に近接した時期の建物とは考えにくく、第1・2段階に後出する遺構群と推測される。

最後に第4段階の遺構には、尾張型第8型式の山茶碗を伴う掘立柱建物SB07・12・13とこれに建物方位が一致もしくは近似する掘立柱建物SB01・09、塀・柵SA01・10、土壙墓SK009があげられる。建物方位は北から $8^{\circ} \sim 12^{\circ}$ 東偏する（SA01のみ 2° 東偏するがSB01北辺に並行する）。

屋敷地中央東寄りで柱穴の掘形規模が大きく、柱の根入れが深い点が特徴的な掘立柱建物SB07、これにほぼ重複した位置に掘立柱建物SB12・13が分布する。掘立柱建物SB07は倉庫などの特殊な建物になる可能性が高い。また、ここからやや離れた北西部に付属建物SB01と塀・柵SA01、南西部に付属建物SB09、SB12・13の南西に尾張型第8型式の山茶碗を伴う土壙墓SK0009が分布する。

以上、V期の遺構群は、建物方位・重複関係・出土遺物から大きく4段階の変遷があることは確実と言えるが、その場合の出土遺物から考えられる帰属時期は、第1段階が概ね12世紀中葉から後葉、第2段階が13世紀前葉、第3段階が13世紀前葉以降、第4段階が13世紀後葉から14世紀前葉頃と推測される。なお、遺構数は初期山茶碗第4型式から尾張型第5型式までが最も多く、尾張型第6型式以降に遺構数が減少する点は付論の出土遺物の分析結果にも符号する。

ところでV期の集落と同時期の遺物として、「藤井宮大明神御酒瓶子」と刻書された12世紀後半の短頸壺（写真図版41-246）⁽³⁾がある。石丸遺跡の南西約300mの横根町中村から出土したもので、

藤井宮大明神とは石丸遺跡の南約400mに位置する建久二年（1191）源頼朝の勧請とされる藤井神社のことである。出土した短頸壺の年代や藤井神社の「社伝由緒記」などからも創建は12世紀後半頃と考えられ、石丸遺跡のV期の集落と同時期に創建されたと考えられる。両者の関係性は直接的には証明できないものの、位置的にも近接しており、石丸遺跡の集落と密接な関係にあったことは想像に難くない。今後は文献史料⁽⁴⁾も踏まえつつ、より具体的にこの時期の集落の様相を明らかにしていく必要があろう。

VII・VIII期：室町時代から安土・桃山時代

VII・VIII期になると、第1次調査区域では、掘立柱建物、掘立柱塀・柵、井戸、竪穴状土坑・土坑、溝・堀、道路状遺構など、非常に多くの遺構が構築されるようになる（第67図）。屋敷地内には大型倉庫状の掘立柱建物などが複数棟分布し、一般の中世集落遺跡では出土しない瓦質土器の風炉・火鉢、花押の書かれた墨書き土器、古瀬戸の大型燭台、石硯が含まれるなどの特徴が見られ、一般農民や荘民の屋敷地ではなく、横根郷の開発領主（地頭クラス）あるいは開発領主と関連のある屋敷地の可能性が高いと推測される。

一方、第2次調査区域では、遅くとも14世紀後半には掘立柱建物は見られなくなり、これに代わって火葬土壙墓ST002（15世紀代）、方形土坑群（SK010・021・024・028・029・030・031・033）、溝状遺構SD011⁽⁵⁾などが屋敷地南西部に集中して分布するようになる。この際、埋没過程にあった区画溝SD001・002・008が再掘削されたと推測される。

火葬土壙墓ST002と方形土坑群、溝状遺構SD011の遺構方位に注目すると、先述のV期建物群が屋敷地の区画に沿った建物方位を基準としていたのに対し、これらは北あるいはこれに直交する方位を指向しており、遺構の軸方位に明らかな変化が認められる。方形土坑群の平面形は、主に方形あるいは長方形を呈し、規模はSK010・015・024・028・029・030が長さ0.9～1.4m×幅0.7～1.2m、やや大型のSK021・033が、長さ1.7～2.2m×幅1.1～1.7m、平面長方形のSK031が長さ2.2

m×幅1.1mを測る。いずれも出土遺物が少なく性格不明なものが多いが、このうちのSK031では、人頭大の礫とともに古瀬戸後期の天目茶碗が出土しており、平面形・規模などから土葬土壙墓の可能性が高いと考えられる。他の方形土坑についても、遺構方位が北（北枕を意識したものか）あるいはこれに直交する方位を指向するため、埋葬人骨や明確な副葬品が確認できない方形土坑についても、土葬土壙墓の可能性は否定できないと考える。なお、火葬施設は確認できなかった。

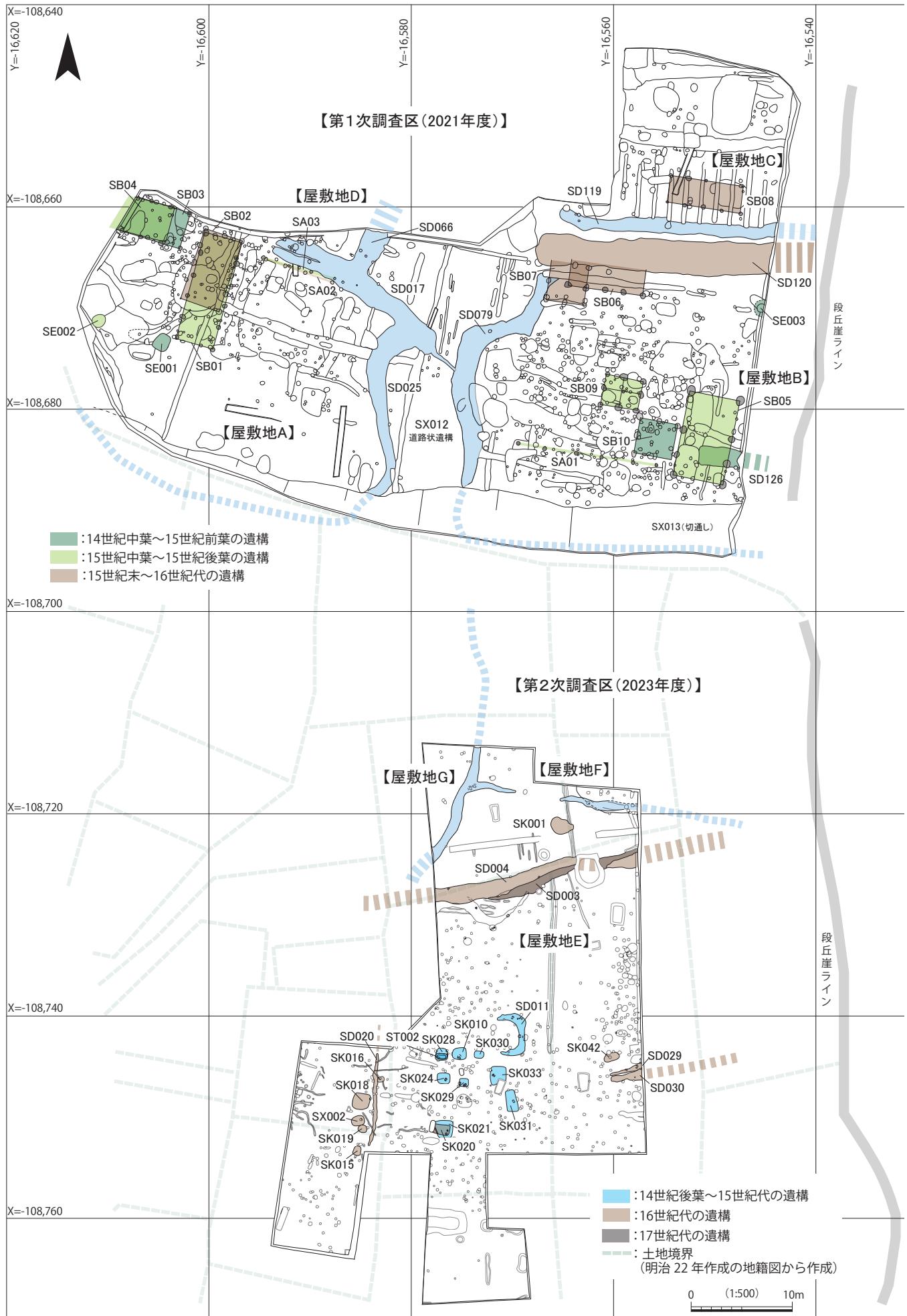
以上のように、概ね15世紀代になると、屋敷地Eの南西部では火葬土壙墓や土葬土壙墓などが分布する墓域（集団墓）として利用されたと考えられる。

続く16世紀代には、屋敷地の区画溝SD001・002・008は完全に埋没したと考えられ、新たに溝方位が異なる東西溝SD004が掘削される。この時期にはSD004の北側に廃棄土坑SK001、調査区南半部に東西溝SD029・030、土坑SK042、調査区西半部に南北溝SD020、土坑SK016・018・019・020、性格不明遺構SX002などが分布する。

遺構の軸方位に注目すると、北から72～79°東偏するグループ（溝SD004・029・030、土坑SK016・042、SX002）と北から12～20°東偏するグループ（土坑SK015・018・019・020）などがあり、遺構の軸方位に一定の方向性が認められる。

以上の遺構のうち東西溝SD004は、溝幅が最大約1.8mで比較的大きな溝だが、深さは0.4m程度それほど深くなく、第1次調査区域で検出された堀SD120（第67図）のような防御性を意図した堀とは考えにくいため、何らかの土地区画に伴う溝の可能性が高いと考えられる。これに隣接した廃棄土坑SK001では貝殻等の食物残滓が多く見られ、主に北西方向から廃棄されていることから調査地北西側にこの時期の居住域が存在した可能性が高い。

屋敷地南半部の性格不明遺構SX002やSK018では、炉跡は確認できなかったものの、炉壁と見られる焼土塊や炭化物が多量に出土したほか、調査区南東部の土坑SK042やこれに隣接した東西溝SD029では、鉄滓や焼土・炭化物が多く出土しており、周辺で小鍛冶が行われたと考えられる。



第67図 VI～VIII期の遺構分布

VIII期：江戸時代

江戸時代の遺構（第67図）には調査区北側で検出した東西溝SD003がある。VII期の東西溝SD004埋没後にはほぼ同じ位置に掘削されており、調査前の畠の耕地段差にはほぼ重複することから耕作関連の溝と考えられ、17世紀前半の瀬戸窯産の擂鉢を含む。これと同時期の遺物としては他に、廃棄土坑SK001上層から出土した常滑窯産の赤物鉢（154）や近世遺物包含層（整地層）から出土した瀬戸窯産の鉄絵皿（208）などがあるが、出土量は非常に少ない。

耕作関連の東西溝SD003及び近世整地層から17世紀前半の遺物が出土していること、また、17世紀前半頃から急激に遺物量が減少することなどから、第1次調査区域と同様に、17世紀前半頃から調査地周辺が耕地化していったと考えられる。

この時期の周辺の歴史的事象としては、17世紀初頭の元和年間（1615～1624）に調査地南側に隣接する普門寺（平安時代後期の十一面觀音菩薩像を本尊とする）が曹洞宗寺院として再興され、元和六年（1620）に第1次調査区域北側の極楽寺が淨土宗寺院として創建されるなど、周辺寺院の整備が進められたようである。この際に調査地周辺の居住域や墓域、生産域などの再編が行われた可能性がある。

第2節 まとめ

石丸遺跡の調査は、2021年の第1次調査（2,200m²）と今回の第2次調査（1,160m²）、また既往の確認調査などを合わせると、現在までに3,500m²程度の調査が行われたことになるが、これは石丸遺跡の面積（推定約27,000m²）の2割にも満たない調査面積であり、未だ遺跡の全容を把握するには至らない状況である。しかしながら今回の調査において、第1次調査では明らかにできなかった平安時代末期から鎌倉時代にかけての集落の様相の一端が明らかとなり、溝で区画された方形状区画の屋敷地が遺跡の南端まで広く展開し、その成立時期が12世紀中頃まで遡ることが明らかになった。

特筆すべき遺構としては、屋敷地Eの中心的建物と考えられる平安時代末から鎌倉時期初頭にか

けての四面庇付大型掘立柱建物SB04（東西約11.5m×南北約8m）と木棺土壙墓ST001がある。掘立柱建物SB04は、規模・格式の高さからみて一般農民層などの屋敷とは考えにくく、上級農民あるいは莊園管理者など、開発領主と関連の深い人物の屋敷であった可能性が高い。また、屋敷墓と考えられる木棺土壙墓ST001は、被葬者の身分や階層を示唆する遺物は出土しなかったが、墓壙規模が大きく、木棺（伸展葬）で埋葬されていることから、集落内において相当身分の高い人物（壯年男性）の墓であったと考えられる。

以上のように、石丸遺跡は縄文・弥生時代を含む古代から近世にかけて稼働した知多半島を代表する複合集落遺跡と評価できるが、各時期における集落の様相の変化は、集落の生産基盤や経営基盤の変化、また、政治的な理由による開発領主の転換などに起因すると思われる。この点については、今後、周辺地域の中世集落遺跡との比較検討、また、文献史料などを踏まえた上で、より具体的な集落像を明らかにしていく作業が必要であろう。今後の継続的な調査・研究に期待したい。

【註】

- (1)『石丸遺跡I』2022では、時期区分をI：縄文・弥生時代、II期：古墳時代後期～平安時代後期、III期：平安時代末期～鎌倉時代、IV期：南北朝～室町時代前半、V期：室町時代後半・戦国時代、VI：江戸時代の6期に分けたが、今回の調査成果を受けて時期区分を変更した。
- (2)『石丸遺跡I』2022では触れなかったが、須恵器の細片が1点出土している。
- (3)横根町惣作に位置する藤井神社の社宝で、現在は大府市歴史民俗資料館に寄託されている。
- (4)文献史料は非常に限られるが、今回の調査区域の元土地所有者である安藤家に伝わる『安藤氏由緒巻』（大府市歴史民俗資料館所蔵）などがある。文献史料として使用する際の信憑性の検証も必要だが、藤井神社創建の由来や今回の調査地を含む横根に関する記述も多い。この点に関して郷土史研究家の太田輝夫氏（ふるさとガイドおおぶ顧問）は、石丸遺跡で発見された遺構・遺物が平安時代末期に藤原宗重が保元の乱（1156年）に敗れて横根に逃げてきたとする『安藤氏由緒巻』の記述の時期と一致しており、安藤氏が代々所有してきた今回の調査区域一帯がその居住域（安藤氏本家）に当たるのではないかと推定されている（「石丸遺跡の歴史考」2021年11月25・12月2日神田公民館講演会資料等参照）が、この点は今回の調査区域で検出されたV期建物群の構築時期にも一致しており、非常に興味深い。

(5) 溝状遺構 SD011 を検出した当初は、周溝を伴う中世墓（塚墓）の可能性も考えたが、区画内で埋葬施設が確認できなかつたため性格は不明である。

・青木修「付論 土坑 SK092 出土遺物について」『石丸遺跡 I－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』2022 大府市 株式会社アコード

【引用・参考文献】

- ・加藤岩藏 1972『惣作遺跡』大府市教育委員会
- ・大府市 1988『大府市誌 資料編 自然』愛知県大府市
- ・半田市誌編さん委員会 1989『新修半田市誌』本文編上・中巻 愛知県半田市
- ・大府市 1991『大府市誌 資料編 考古』愛知県大府市
- ・田中城久 2017『市内遺跡調査報告書』『大府市文化財調査報告書 12集』大府市教育委員会
- ・後藤太一編 2020『棧敷貝塚』大府市教育委員会・ナカシャクリエイティブ株式会社
- ・愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 濱戸系』愛知県
- ・愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』愛知県
- ・愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』愛知県
- ・愛知県史編さん委員会編 2015『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』愛知県
- ・愛知県愛知県史編さん委員会編 2017『愛知県史 資料編 5 考古 5 鎌倉～江戸』愛知県
- ・鵜飼堅証・新美倫子・平井義敏他 2016『中条遺跡発掘調査報告書 1』刈谷市
- ・鵜飼堅証・岩月あすか・佐野郁乃他 2017『中条遺跡発掘調査報告書 2』刈谷市
- ・鵜飼堅証・河野あすか・佐野郁乃・平井義敏他 2018『中条遺跡発掘調査報告書 3』刈谷市
- ・鵜飼堅証・河野あすか・佐野郁乃・平井義敏他 2019『中条遺跡発掘調査報告書 4』刈谷市
- ・樋上 昇・鈴木正貴他 2013『下津宿遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 175 集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- ・岡本茂史 1994『腰前遺跡発掘調査概報』知立市教育委員会
- ・山本ひろみ編 1995『腰前遺跡発掘調査概報』知立市教育委員会
- ・大野真規編 1996『小針遺跡発掘調査報告書』知立市教育委員会
- ・大野真規編 1997『小針遺跡 II』知立市教育委員会
- ・奥川弘成・立松 彰 1998『ウスガイト遺跡の記憶』武豊町教育委員会
- ・中村毅編 2018『畠間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会
- ・清水正明ほか 2015『新編知立市史』3 資料編 考古（原始・古代・中世）知立市
- ・楠美代子・富野顕・青木修・川添和暁・新美倫子・堀木真美子 2020『天白遺跡発掘調査報告書 2』『東浦町郷土資料館調査報告第 15 集』東浦町教育委員会
- ・島軒 満・田中城久・青木修ほか 『石丸遺跡 I－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』2022 大府市 株式会社アコード
- ・北村和宏・鬼頭剛・堀木真美子ほか 1999『大脇城遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 86 集』財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

付論 第2次発掘調査の出土遺物について

青木 修 ((公財)瀬戸市文化振興財団)

令和5年度、石丸遺跡第2次発掘調査で出土した遺物について総合的な分析結果を提示するに当たり、各遺物の出土状況と検出された各遺構との相対的な解釈は、前章までの事実報告で詳しく記述されているので、まずはこれを参考されたい。

ところで、大府市東部の境川を臨む微高地縁辺部を基盤とした広大な敷地に登録される本遺跡は、中心域に相当する約2,200m²を対象とした第1次発掘調査の実施を受け、縄文・弥生時代を含む古代から近世にかけて稼働した知多半島を代表する複合集落遺跡としての位置付けを可能とした。対して、第2次発掘調査では、第1次発掘調査区の南側隣接域付近を対象として実施され、本書で紹介するように多くの注目すべき各種遺構群と本遺跡を取り巻く環境下にある猿投窯・常滑窯・瀬戸窯の各窯業生産地の製品が検出されたこともあり、第1次発掘調査の所見との相互検証を行い、改めて本遺跡としての位置付けを再確認する必要性が望まれた。

従って本節では、出土した遺物を基軸として、第2次発掘調査区域に展開する各種遺構群、特に大形掘立柱建物との相関関係を分析し、本遺跡の稼働期間に繋がる所見を提示したいと考えている。

まず、対象とする出土遺物は、縄文土器・石器等を除く概ね平安時代後半から鎌倉・戦国時代までと付帯的に江戸時代を含めた須恵器や灰釉陶器をはじめとする中・近世の陶器類を主として、各遺構あるいは調査区全体における出土分布の数量的傾向とそれぞれの特徴を示すことにより、主に平安時代末(古代末期)から鎌倉時代初頭における本遺跡の特徴と意義を提示すべく明確な評価ができるよう努めるのが主とした目的である。ただし、ここで提示する結果は、出土遺物の分布状況やそれぞれの特徴から各遺構を含めた調査区全体を俯瞰した内容が優先されるため、本報告で紹介された各遺構の位置付けを限定的に操作する意図は考えてないとご理解いただきたい。

さて、今回の調査では、掘立柱建物群をはじめ塀・柵の他、溝や土坑・土壙墓や柱穴・ピットなどが数多く検出されている点が本遺跡における特徴のひとつとして挙げられ、中でも大形掘立柱建物群の評価は、同時に本遺跡全体の位置付けを左右する重要な案件に繋がりかねないと考えても差し支えないであろう。

掘立柱建物群や関連する塀・柵の施設の多くは、通常ピット(柱穴)から構成されるため、時期決定にはピット(柱穴)の埋土から出土した遺物に依存する場合が多く、状況証拠として重要視される素材となる。ただ、ピット(柱穴)から出土する遺物は、比較的点数が少ない事例が多く、遺構の変遷や整合性、帰属時期を分析する上で、必ずしも有効的な手法になるとは限らない場合もある。一方で、溝状遺構(SD)や土坑(SK)では、様々な事由により廃棄された数多くの遺物が含まれることも少なくなく、器種組成の詳細な分析次第では遺構を取り巻く周辺環境を反映した様相を色濃く残すこともある。また、包含層から出土した遺物についても、各調査区の層位を明確に区分し、やはりデータの扱い次第ではあるが有効的な所見に繋がる場合も少なくないと考えている。

結果的に本調査では、掘立柱建物群や塀・柵等を構成する柱穴からの出土点数は少なかったが、溝(SD001、SD008、SD025)や土坑(SK001)など限定的とは言え、絶対的な出土量が認められ、先の大形掘立柱建物群の周辺環境を復元し、出土遺物を基にした帰属時期を考える上で有効的な所見を提示できることを検証したい。

以上の結果を踏まえ、本節で初めに登場する第1段階の遺物は、8世紀から9世紀代と思われる古代猿投窯の須恵器類であり、いずれも断片的な小破片資料に限り合計5点を数え、SK010(160)、SK033(166)、SP729(201)、SP360(202)、北半区(203)から出土している。時期が特定できる資料は、椀・杯と思われる器種に限られ、O-10号窯式(203)とK-90号窯式(160・166)に帰属し、いずれも客体的な資料と判断せざるを得ないが、本遺跡における当該時期の活動を確証するには至って無い。

付 論

次に登場する第2段階の遺物は、10世紀後半から12世紀前葉までの古代末期灰釉陶器から初期山茶碗第3型式に代表される陶器類であり、いずれも猿投窯の製品と判断した。やはり断片的な破片資料が多く散見できるものの、出土点数は灰釉陶器12点、初期山茶碗第3型式に相当するものは17点を数え、明らかに須恵器類と比べて増加傾向にある点が指摘できる。灰釉陶器類は、概ねH-72号窯式から百代寺窯式に帰属し、SB04(1・2)、SD001(8～13)、SD008(46)、SP759(175)、SP845(198)、北半区(204)から出土している。器種別では、椀(1・2・8～11・13・46・198・204)、水瓶(175)・短頸壺(12)に分類され、中でも百代寺窯式に相当する水瓶は把手の破片資料と観られるが、消費遺跡での出土例は比較的少ない特殊な器種のひとつに数えられている点で注目したい。

対して、初期山茶碗第3型式に相当する遺物は、SA13(7)、SD001(14～16・24)、SD008(47～49)、SD010(76・77)、SD003(104)、SD004(106)、SD020(114)、SK001(116・117)、SP069(182)、東壁トレーナー(215)から出土している。器種別では、山茶碗(7・16・47・76・77・104・182・215)、托(15)、小碗(24・114)、片口山茶碗(117)、片口鉢I類(106)、短頸壺(14・48・49・116)に分類され、山茶碗類が多い点は特徴である。また、SB04、SA13、

SD020は、大形掘立柱建物とその周辺に関連する遺構に分類され、出土遺物の評価を最大限に行えば、SB04の構築開始の時期はこの段階と推定することも可能であろう。

次の第3段階の遺物は、初期山茶碗第4型式から尾張型第6型式に帰属し、12世紀中葉から13世紀前葉までに想定され、時期的な中心は尾張型第5型式(12世紀後半)にあるが、尾張型第6型式に相当する13世紀前葉には急激な減少に転じる点を注視したい。また、器種別では、中世猿投・常滑窯を含む無釉の碗・皿類に共通する尾張型山茶碗類を中心として、常滑窯の壺・甕類の他に調理具として利用される羽釜等の製品が含まれる点に特徴がある。

では、屋敷地E周辺に限れば、大形掘立柱建物(SB02)に隣接し、東西軸が並行する遺構としてSD025が挙げられ、図示し得たものでも山茶碗(84・85、87～96)、片口山茶碗(86)、小皿(97～103)の合計20点を数え、初期山茶碗第4型式の山茶碗類(84～86)が3点、残りはすべて尾張型第5型式に帰属する。また、SD025に伴う山茶碗類の総個体数(表8参照)でも初期山茶碗第4型式が8点、尾張型第5型式は88点を数え、数量的な増加はデータから明らかに示されている。なお、小皿(97)には、器の見込みを対象として「楓」を意匠とした刻画文が施され、山茶碗類の中でも特徴

表8 SD025出土遺物点数表

SD025：山茶碗類

器種	産地	H72・百代寺	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式	第9型式	第10型式	第11型式	合計
山茶碗	猿投											0
	尾張/猿投・常滑			8	72							80
	瀬戸・藤岡											0
小碗 小皿	猿投											0
	尾張/猿投・常滑				16							16
	瀬戸・藤岡											0
片口鉢I	猿投											0
	尾張/猿投・常滑											0
	瀬戸・藤岡											0
瓶・壺類	猿投											0
	尾張/猿投・常滑											0
合計		0	0	8	88	0	0	0	0	0	0	96

SD025：常滑壺甕類

器種	産地	12世紀		13世紀		14世紀		15世紀		16世紀		合計
		中葉	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
広口壺・甕	常滑											0
												0
		1										1
合計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

的な事例として評価したい。

また、SB05 (SP209) からは、尾張型第5型式の小皿（3）と伊勢型鍋（13世紀）、SA03 (SP566) では、尾張型第5型式の山茶碗（6）と同時期の常滑窯の羽釜、SK026 は、初期山茶碗第4型式の小碗（163）と尾張型第5型式の山茶碗（162）、SK027 では尾張型第5型式の小皿（164）と12世紀後半代の常滑窯の甕（165）の他、混入品の可能性のある古瀬戸後期の折縁深皿がそれぞれ認められ、伊勢型鍋と古瀬戸製品を除けば概ね12世紀後半代の特徴を示している。

ところで、SB02 に伴う柱穴からの出土資料は、残念ながら図示し得るものは無かったものの、小破片資料ながら常滑窯の羽釜、中国産青磁蓮弁文碗（写真236）、山茶碗（尾張型第6型式）、伊勢型鍋（13世紀）が含まれ、SD025 の所見と比較して13世紀前葉以降を示す若干新しい要素が含まれていることもあり構築年代の設定には慎重な対応を必要とする素材となるかもしれない。

以上を踏まえて、SB04 と SB02 を対象とした遺構の検出状況における重複から SB04 が先行して存在したことが報告されており、出土遺物の視点からも同じ検証結果を提示することができることになる。つまり、SB04 は、10世紀後半代から12世紀前葉までに、SB02 は12世紀後半から13世紀頃までにそれぞれ構築されたことは概ね推察のとおりである。ただし、SB05 と SB02 は、遺構の検出状況から重複関係にあることは前章の報告に示されたとおりであるが、遺物の分析のみで新旧関係を明確に示す結果は得られなかった。

次に、調査区の南端付近から検出された土壙墓 (ST001) は、副葬された山茶碗（167・168）の生産地年代に照らせば12世紀中葉から13世紀初頭に位置付けられ、使用の期間を考慮しても12世紀後半代の構築時期が妥当である。つまり、SB02 の稼働時期と並行する可能性が高く、建物群と隣接する墓域の配置を考える上で参考になる事例である。

改めて、北半区に展開する SD001、SD008、SK001 の出土遺物点数表（表9～11参照）を示し、各遺構及び調査区全体の稼働期間を検証する。いずれの遺構からも総じて山茶碗類が数多く認められ、

初期山茶碗第3型式から第4型式、更には尾張型第5型式にかけて数量が大きく増加し、対して尾張型第6型式になると急激に減少する点で共通し、先に示した SD025 の所見とも類似する結果となった。

まず、SD001 からは、常滑窯の羽釜（28～32）と甕類（33～42）、SD008 でも羽釜（73～75）と甕類（66～72）の他、片口鉢I類（59～65）が若干目立つ傾向にある。中でも集落遺跡では特異な遺物として扱われる数点の山茶碗が融着した資料（写真図版38-233）は、尾張型第5型式に相当し、融着した個体から口縁部付近を対象として打ち欠いた様な痕跡が認められる。こうした資料は、通常窯場（窯跡）での焼成後に不良品として区分し灰原へ廃棄される場合が多いことから、本遺跡へは他の山茶碗類と一緒に持ち込まれた可能性が高く、その使用目的の解明には、類似例を含め更に詳しい分析が必要である。

対して、SK001 では、初期山茶碗類（117～120）をはじめ、尾張型第5型式の山茶碗類の中には先に示した融着資料（写真図版38-234・235）も認められ、他には12世紀代の常滑窯製品（123～140）があり、SD001 や SD008 の状況と類似する器種組成を示す部分もあるが、大きく異なる点としては、15・16世紀代の常滑窯の甕（142～145）や片口鉢II類（146～149）の他、古瀬戸後期の鉄釉仏供（151）・灰釉平碗（152）や大窯第1段階の天目茶碗（153）などの瀬戸窯製品、藤岡窯の尾張型第10型式の山茶碗（150）、そして17世紀代の常滑窯の赤物鉢（154）が認められる点にある。従って、土坑の稼働期間は12世紀から17世紀までの永きに跨ることになるが、本調査区全体の傾向を示している内容でもある。また、13世紀後半から14世紀代に帰属する遺物は、時期の確定できる資料が限られ、見方を変えればこの期間は断絶していたと考えることも不可能ではない。こうした結果は、第1次発掘調査で検出した土坑 SK092⁽¹⁾ の器種組成の内容と類似する項目が多くあることを注視しておきたい。ただし、以上の結果が存在しても、北半区（屋敷地E）の各遺構から出土した遺物は、屋敷地Eの稼働期間を直接的に決定し得るものでは無いが、帰属時期について大きな隔たりは認められ

付 論

ず、寧ろ消費された器種組成を反映している内容と考えた方が良いであろう。

最後に、第2次発掘調査区における出土遺物から観た遺構の変遷では、早ければ10世紀後半から12世紀前葉までの古代末期灰釉陶器から初期山茶碗第3型式の時期に掘立柱建物群の構築が開始され、その後は造り替えを含めて12世紀後半に最も興隆したと考えられる。そして13世紀前葉頃には、早くも衰微へと向かうことになり、総じて稼働期間は

短かった可能性も指摘できる。一方、調査区全体では、13世紀後半から14世紀代までの遺物量を鑑みても断続あるいは空白の期間が設定できることになり、15世紀以降は総じて遺物量が少なく閑散とした状況にあった。つまり、15世紀以降の中心となる活動は、第1次発掘調査区域にあるため、第2次発掘調査区域では小規模な遺構が展開する状態であったと考えられる。ところで、前章までに紹介してきた大形掘立柱建物群は、その規模に先行して

表9 SD001 出土遺物点数表

SD001：山茶碗類

器種	産地	H72・百代寺	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式	第9型式	第10型式	第11型式	合計
山茶碗	猿投	5	2									7
	尾張/猿投・常滑			13	37	1						51
	瀬戸・藤岡											
小碗 小皿	猿投	1	2									3
	尾張/猿投・常滑			1	3							4
	瀬戸・藤岡											0
片口鉢 I	猿投											0
	尾張/猿投・常滑											0
	瀬戸・藤岡											0
瓶・壺類	猿投	1	2									3
	尾張/猿投・常滑											0
	合計	7	6	14	40	1	0	0	0	0	0	68

SD001：常滑壺甕類

器種	産地	12世紀		13世紀		14世紀		15世紀		16世紀		合計
		中葉	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
広口壺・甕	常滑		6		2			1	1			10
片口鉢 II												0
羽釜			5									5
合計		0	11	0	2	0	0	1	1	0	0	15

表10 SD008 出土遺物点数表

SD008：山茶碗類

器種	産地	H72・百代寺	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式	第9型式	第10型式	第11型式	合計
山茶碗	猿投	1	3	2								6
	尾張/猿投・常滑			26	41	6						73
	瀬戸・藤岡											0
小碗 小皿	猿投											0
	尾張/猿投・常滑			2	5							7
	瀬戸・藤岡											0
片口鉢 I	猿投		2									2
	尾張/猿投・常滑			3	2							5
	瀬戸・藤岡											0
瓶・壺類	猿投		2									2
	尾張/猿投・常滑											0
	合計	1	7	33	48	6	0	0	0	0	0	95

SD008：常滑壺甕類

器種	産地	12世紀		13世紀		14世紀		15世紀		16世紀		合計
		中葉	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
広口壺・甕	常滑		8	1					1			10
片口鉢 II												0
羽釜			3									3
合計		0	11	1	0	0	0	0	1	0	0	13

当該地域周辺を含めても極めて特異な存在と評価される点に異論は無い。ただし、平安時代末（古代末期）から鎌倉時代初頭にかけて構築された拠点的施設としての位置付けは、それを特定し得るまでの出土遺物の分析結果は得られず、最終的には消費された遺物の器種組成と生産地年代を基にした各遺構に関わる帰属時期の特定に留まる結果となった。何より、これらの施設の背景にある人物像等の特定までには至らず、今後の課題として引き継がれることを

期待したい。

【註】

- (1) 青木 修「付論 土坑 SK092 出土遺物について」『石丸遺跡 I－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
2022 大府市 株式会社アコード

表 11 SK001 出土遺物点数表

SK001：山茶碗類

器種	産地	H72・百代寺	第3型式	第4型式	第5型式	第6型式	第7型式	第8型式	第9型式	第10型式	第11型式	合計
山茶碗	猿投		11	5								16
	尾張/猿投・常滑			45	91	12	1					149
	瀬戸・藤岡						2	2		1		5
小碗 小皿	猿投											0
	尾張/猿投・常滑				10							10
	瀬戸・藤岡											0
片口鉢 I	猿投		2									2
	尾張/猿投・常滑				1							1
	瀬戸・藤岡											0
瓶・壺類	猿投		1	1								2
	尾張/猿投・常滑			1								1
	合計	0	14	52	102	12	3	2	0	1	0	186

SK001：常滑壺甕類

器種	産地	12世紀		13世紀		14世紀		15世紀		16世紀		合計
		中葉	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
広口壺・甕	常滑	1	28		1			3	1			34
				2					1	3		6
			3									3
合計		1	31	2	1	0	0	3	2	3	0	43

表 12 出土遺物計測表

(単位:cm 残存率:%)

No.	器種名	産地	時 期	出土地区	遺構名	口縁部		底部		高台		器高	胴径	粉殻痕	糸切痕	板目痕	備 考
						口径	残存率	底径	残存率	高台径	残存率						
SB04																	
1	灰釉椀	猿投	H72号窯式	10世紀後半	I 21	SP307	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
2	灰釉椀	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	J 22	SP710	-	-	7.5	-	7.3	-	-	-	-	-	底部
SB05																	
3	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	I 20	SP209	8.1	70	4.2	100	-	-	2.1	-	-	○	-
SB07																	
4	小皿	瀬戸	尾張型第7・8型式	13世紀中葉～後葉	L 19	SP144	7.3	25	4.7	25	-	-	1.6	-	-	○	-
SB12																	
5	山茶碗	瀬戸	尾張型第8型式	13世紀後葉	L 20	SP159	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
SA03																	
6	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 22・23	SP566	14.7	30	6.8	25	6.5	25	4.7	-	○少	○	-
SA13																	
7	小碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	J 22	SP718	9.6	75	5.0	100	5.1	100	3.4	-	-	○	-
SD001																	
8	灰釉椀	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	H 17	SD001	-	-	7.9	100	8.0	100	-	-	-	○	底部
9	灰釉椀	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	H 17	SD001	-	-	5.7	50	5.6	40	-	-	-	○	底部
10	灰釉椀	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	H 17	SD001	-	-	6.9	30	6.8	30	-	-	-	○	底部
11	灰釉椀	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部	
12	灰釉短頸壺	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部	
13	灰釉椀	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	H 17	SD001	-	-	6.6	30	6.5	30	-	-	-	-	底部
14	短頸壺	猿投?	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半	
15	托	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	H 17	SD001	-	-	5.2	100	6.3	400	-	-	-	○	底部
16	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	H 17	SD001	-	-	7.7	100	7.6	100	-	-	-	○	底部
17	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	H 17	SD001	15.0	30	7.5	50	6.9	50	5.5	-	○	○	-
18	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	H 17	SD001	-	-	7.9	100	7.5	100	-	-	砂痕	○	底部 焼台直上焼成
19	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	H 17	SD001	-	-	9.4	100	8.9	75	-	-	○	○	底部 小石含む
20	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	15.0	25	7.9	45	7.4	45	5.0	-	○	○	-
21	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	15.6	30	8.0	60	7.7	40	4.8	-	○	○	歪有り
22	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	7.9	100	7.4	95	-	-	○	○	底部
23	山茶碗	尾張	尾張型第6型式	13世紀前葉	H 17	SD001	-	-	6.9	100	6.8	100	-	-	○	○	底部
24	小碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	H 17	SD001	-	-	4.7	30	4.6	40	-	-	-	○	-
25	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	7.9	30	4.2	100	-	-	2.3	-	-	○	○
26	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	7.7	5	4.1	40	-	-	1.7	-	-	○	-
27	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	3.8	100	-	-	-	-	○	-	底部
28	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鉢部
29	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鉢部
30	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部上半
31	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部
32	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部下半
33	甕	常滑	-	12～13世紀？	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
34	甕	常滑	-	12～13世紀	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
35	甕	常滑	-	12世紀後半	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
36	甕	常滑	-	12～13世紀？	K 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
37	甕	常滑	-	12～13世紀？	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
38	壺？	常滑	-	12～13世紀？	J 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
39	甕	常滑	-	13～15世紀	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半 赤色
40	甕	常滑	-	13世紀後半	J 21	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	底部
41	甕	常滑	常滑窯第10型式期	15世紀後半	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
42	甕	常滑	常滑窯第9・10型式期	15世紀	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
43	縁釉小皿	瀬戸	古瀬戸後期	15世紀	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
44	瓶類？	?	?	?	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土師質
45	瓦？	?	?	?	H 17	SD001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	土師質

No.	器種名	産地	時 期	出土地区	遺構名	口縁部		底部		高台		器高	胴径	軽穀痕	糸切痕	板目痕	備 考
						口径	残存率	底径	残存率	高台径	残存率						

SD008

46	灰釉碗	猿投	H72号窯～百代寺窯式	10世紀後半～11世紀後葉	K16	SD008	-	-	6.3	100	6.5	30	-	-	-	○	-	底部
47	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	K16	SD008	-	-	7.6	-	7.8	-	-	-	-	○	-	底部
48	短頸壺	猿投	初期山茶碗第3型式？	11世紀末～12世紀前葉	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	広口瓶胴部の可能性有
49	短頸壺	猿投	初期山茶碗第3型式？	11世紀末～12世紀前葉	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	広口瓶底部の可能性有
50	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	8.2	100	7.6	80	-	-	○少	○	-	底部
51	山茶碗	猿投	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	8.2	100	7.7	40	-	-	?	○	-	底部
52	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	7.8	100	7.4	100	-	-	○少	○	-	底部
53	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	-	-	7.7	100	7.5	90	-	-	○	○	-	底部
54	小碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	4.5	100	3.9	100	-	-	○少	○?	-	底部 使用痕有
55	小碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	4.6	100	4.2	100	-	-	○	○?	-	底部
56	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	L16	SD008	-	-	4.1	100	-	-	-	-	-	-	-	底部
57	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	-	-	4.5	100	-	-	-	-	-	-	-	底部
58	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	-	-	4.3	40	-	-	-	-	-	-	-	底部
59	片口鉢Ⅰ類	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	L16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部破片
60	片口鉢Ⅰ類	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部下半破片
61	片口鉢Ⅰ類	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部下半
62	片口鉢Ⅰ類	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	K16	SD008	-	-	10.7	30	10.8	15	-	-	-	-	-	-
63	片口鉢Ⅰ類	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD008	-	-	10.0	40	9.4	40	-	-	-	-	-	-
64	片口鉢Ⅰ類	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	底部
65	片口鉢Ⅰ類	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部上半
66	甕	常滑	-	12世紀後半？	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
67	甕	常滑	-	12世紀後半？	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
68	甕	常滑	-	12世紀後半～13世紀	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
69	甕	常滑	-	12世紀後半？	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
70	大甕	常滑	-	12世紀後半～13世紀	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	印花文
71	甕	常滑	-	15世紀後半	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
72	広口壺	常滑	-	13世紀？	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部上半～肩部
73	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	27.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	銚部最大径38.0cm
74	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
75	羽釜	土器？	？	？	K16	SD008	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	銚部破片

SD010

76	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	L16	SD010	-	-	8.1	10	8.0	10	-	-	-	○	-	底部
77	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	L16	SD010	-	-	7.9	20	7.8	10	-	-	-	○	-	底部
78	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K16	SD010	-	-	8.3	25	8.0	20	-	-	-	○	-	底部
79	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	L16	SD010	7.6	20	4.8	100	-	-	2.3	-	-	○	-	-
80	鉄融合子蓋	瀬戸	古瀬戸後期	15世紀	K16	SP010	5.5	60	2.4	100	-	-	2.7	-	-	○	-	-
81	三筋壺	猿投	初期山茶碗第4型式？	12世紀後半	L16	SD010	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
82	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	L16	SD010	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
83	甕	常滑	-	12世紀後半	L16	SD010	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半

SD025

84	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	G21	SD025	15.2	10	7.2	100	6.8	100	5.4	-	○	○	-	
85	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	H21	SD025	-	-	8.0	100	7.6	100	-	-	○	○	-	底部 小石混入
86	片口山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	H21	SD025	15.8	90	7.7	100	7.2	45	5.2	-	○	○	-	注ぎ口を伴う
87	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	G21	SD025	15.7	55	7.0	90	6.6	40	5.0	-	○	○	○少	
88	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	-	-	7.8	100	7.4	100	-	-	○	○	-	底部
89	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	G21	SD025	15.8	40	8.0	100	7.7	100	5.0	-	○	○	-	小石混入
90	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	G21・H21	SD025	15.5	40	7.9	100	7.8	100	5.1	-	○	○	-	
91	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	15.6	15	7.9	100	7.4	100	4.9	-	○	○	-	
92	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	G21・H21	SD025	15.3	100	8.4	100	8.1	100	4.8	-	○	○	-	
93	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	14.9	50	7.4	100	7.0	100	4.3	-	○	○	-	
94	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	15.4	25	7.8	100	7.4	40	4.8	-	○	○	-	小石混入
95	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	15.6	35	7.8	100	7.5	100	4.4	-	○	○	-	

No.	器種名	産地	時 期		出土地区	遺構名	口縁部		底部		高台		器高	胴径	柄殻痕	糸切痕	板目痕	備 考
							口径	残存率	底径	残存率	高台径	残存率						
96	山茶碗	尾張？	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	G21・H21	SD025	15.4	10	7.9	20	7.5	20	4.3	-	○	○	-	胎土：褐色系の色調
97	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	G21・H21	SD025	8.0	75	3.9	100	-	-	2.3	-	-	○	-	刻画文（紅葉）
98	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	8.0	100	4.1	100	-	-	2.3	-	-	○	-	
99	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	7.8	100	3.7	100	-	-	2.3	-	-	○	-	
100	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	7.9	40	4.1	100	-	-	2.3	-	-	○	-	
101	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	7.8	25	4.3	75	-	-	2.3	-	-	○	-	
102	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	E21・H21	SD025	8.2	25	4.5	75	-	-	1.9	-	-	○	-	
103	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	H21	SD025	7.6	30	3.6	100	-	-	1.8	-	-	○	-	

SD003

104	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	H18	SD003	-	-	6.1	30	5.9	20	-	-	-	○	-	底部
105	甕	常滑	-	12世紀後半	I18	SD003	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半

SD004

106	片口鉢I類	猿投	初期山茶碗第3・4型式	11世紀末～12世紀中葉	H18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部下半
107	甕	常滑	常滑窯第1b型式期	12世紀中葉	H18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
108	甕	常滑	-	12世紀後半	I18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
109	甕	常滑	-	12世紀後半	I18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
110	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	H18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部
111	広口壺	常滑	-	13世紀？	H18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
112	鉄釉小皿	瀬戸	大窯？	16世紀？	H18	SD004	-	-	4.4	-	-	-	-	-	-	○	-	底部
113	土師器内耳鏡	-	-	-	H18	SD004	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

SD020

114	小碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	G22	SD020	9.9	40	5.5	50	5.2	50	3.1	-	-	○	-	小石混入
-----	----	----	-----------	--------------	-----	-------	-----	----	-----	----	-----	----	-----	---	---	---	---	------

SD030

115	入子？	瀬戸	尾張型第8・9型式	13世紀後葉～14世紀中葉	L22	SD030	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
-----	-----	----	-----------	---------------	-----	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-----

SK001

116	短頸壺	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	J17	SK001	12.8	80	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部～肩部
117	片口山茶碗	猿投	初期山茶碗第3・4型式	11世紀末～12世紀中葉	K17	SK001	-	-	9.9	50	10.4	50	-	-	-	-	-	底部
118	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	J17	SK001	-	-	8.2	100	7.8	100	-	-	○	○	-	底部
119	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K17	SK001	-	-	7.9	55	7.4	55	-	-	○	○	-	底部 猿投？
120	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	J17	SK001	-	-	8.1	100	7.9	80	-	-	○	○	-	底部
121	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	J17・K17	SK001	7.6	40	4.0	100	-	-	2.0	-	-	○	-	
122	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	J17	SK001	8.1	90	3.9	100	-	-	2.2	-	-	○	-	
123	三筋壺	常滑	常滑窯第2・3型式期	12世紀後半	K17	SK001	9.4	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
124	広口壺	常滑	常滑窯第1b型式期	12世紀中葉	K17	SK001	23.5	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部～肩部
125	片口鉢I類	常滑？	尾張型第5・6型式	12世紀後葉～13世紀前葉	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	体部下半
126	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	銚部最大径34.2cm
127	甕	常滑	常滑窯第3型式期	12世紀後葉	K17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
128	甕	常滑	常滑窯第3型式期	12世紀後葉	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部上半
129	甕	常滑	常滑窯第3型式期	12世紀後葉	K17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
130	甕	常滑	常滑窯第3型式期	12世紀後葉	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
131	甕	常滑	常滑窯第3型式期	12世紀後葉	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
132	甕	常滑	常滑窯第3型式期	12世紀後葉	K17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部破片
133	甕	常滑	常滑窯第4型式期	12世紀末～13世紀初頭	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部破片
134	甕	常滑	-	12世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
135	甕	常滑	-	12世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部上半
136	甕	常滑	-	12世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部上半
137	甕	常滑	-	12世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半
138	甕	常滑	-	12世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
139	甕	常滑	-	12世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
140	甕	常滑	-	12世紀後半～13世紀	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
141	甕	常滑	-	13世紀後半	J17	SK001	-	-	15.2	25	-	-	-	-	-	-	-	底部
142	甕	常滑	-	15世紀？	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部上半
143	甕	常滑	-	15世紀	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部
144	甕	常滑	-	15世紀後半	J17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部

No.	器種名	産地	時 期	出土地区	遺構名	口縁部		底部		高台		器高	胴径	軋般痕	糸切痕	板目痕	備 考
						口径	残存率	底径	残存率	高台径	残存率						
145	甕	常滑	-	15世紀?	J 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
146	片口鉢II類	常滑	常滑窯第10型式期	15世紀後半	K 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
147	片口鉢II類	常滑	常滑窯第11型式期	16世紀前半	J 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
148	片口鉢II類	常滑	常滑窯第11型式期	16世紀前半	J 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
149	片口鉢II類	常滑	常滑窯第11型式期	16世紀前半	K 17	SK001	-	-	13.4	10	-	-	-	-	-	-	底部
150	山茶碗	藤岡	尾張型第10型式	14世紀末~15世紀前葉	J 17	SK001	-	-	4.8	100	-	-	-	-	○	○	底部
151	鉄釉仙供	瀬戸	古瀬戸後I・II期	14世紀後葉~15世紀初頭	K 17	SK001	-	-	-	-	5.4	-	-	-	○	-	台部
152	灰釉平碗	瀬戸	古瀬戸後II期	14世紀末~15世紀初頭	J 17	SK001	15.0	5	5.1	5	4.4	5	6.1	-	-	-	-
153	天目茶碗	瀬戸	大窯第1段階前半	15世紀末	K 17	SK001	9.6	15	3.5	10	-	-	-	-	-	-	底部欠落
154	赤物鉢	常滑	17世紀	K 17	SK001	14.6	40	10.0	50	-	-	8.2	-	-	-	-	脚部破片?
155	土器	?	?	?	J 17	SK001	-	-	6.1	-	-	-	-	-	-	-	?
156	清郷型鍋	-	-	-	J 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
157	土製支脚	-	-	-	J 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ274g
158	土製支脚	-	-	-	J 17	SK001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ371g

SK009

159	山茶碗	瀬戸	尾張型第8型式	13世紀後葉	J 21	SK009	12.6	100	5.7	100	-	-	5.2	-	-	○	○
-----	-----	----	---------	--------	------	-------	------	-----	-----	-----	---	---	-----	---	---	---	---

SK010

160	椀	猿投	K-90号窯式	9世紀後半	I 21	SK010	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	底部破片
-----	---	----	---------	-------	------	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	------

SK020

161	天目茶碗	瀬戸	大窯第1段階前半	15世紀末	H 23	SK020	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部破片
-----	------	----	----------	-------	------	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-------

SK026

162	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉~13世紀初頭	G 22	SK026	-	-	8.4	100	8.2	100	-	-	○	○	○	底部
163	小碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	G 22	SK026	-	-	4.4	100	4.3	90	-	-	○?	-	-	底部

SK027

164	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉~13世紀初頭	H 21	SK027	7.1	75	3.5	100	-	-	2.0	-	-	○	○
165	甕	常滑	-	12世紀後半	H 21	SK027	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部下半

SK033

166	椀	猿投	K-90号窯式	9世紀後半	I 22	SK033	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-----	---	----	---------	-------	------	-------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

ST001

167	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	E 24・25	ST001	15.3	100	7.7	100	7.4	100	4.7	-	○	○	○少	小石混入
168	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉~13世紀初頭	E 24・25	ST001	15.7	75	8.2	100	8.0	100	4.7	-	○	○	-	小石混入

ST002

169	土師器皿	-	-	-	H 21	ST002	12.0	40	-	-	-	-	2.6	-	-	-	-	手づくね成形
170	土師器皿	-	-	-	H 21	ST002	11.6	40	-	-	-	-	1.8	-	-	○	-	口クロ成形
171	土師器皿	-	-	-	H 21	ST002	11.6	30	-	-	-	-	2.5	-	-	○	-	口クロ成形
172	土師器皿	-	-	-	H 21	ST002	6.8	100.0	-	-	-	-	2.0	-	-	-	-	手づくね成形

各ピット

173	山茶碗	尾張	尾張型第6型式	13世紀前葉	I 15	SP005	14.1	25	7.3	60	6.8	30	4.6	-	○	○	○	
174	管状土錐	-	-	-	L 19	SP058	長3.4	100	最大径1.0	100	-	-	-	-	-	-	重さ3g	
175	灰釉水瓶	猿投	百代寺窯式	11世紀中葉~後葉	K 22	SP759	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	水瓶の把手	
176	甕	常滑	-	12世紀後半	I 19	SP196	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胴部上半	
177	小皿	尾張	尾張型第7型式	13世紀中葉	L 19	SP093	7.8	25	4.7	50	-	-	1.5	-	-	○	-	
178	小皿	尾張	尾張型第7型式	13世紀中葉	L 19	SP078	7.5	100	5.7	100	-	-	1.6	-	-	○	○	
179	小皿	瀬戸	尾張型第7・8型式	13世紀後半	L 19	SP078	7.5	80	4.9	100	-	-	1.5	-	-	○	-	
180	小皿	瀬戸	尾張型第7・8型式	13世紀後半	L 19・20	SP085	7.7	50	3.9	100	-	-	1.6	-	-	○	○	
181	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉~13世紀初頭	J 20	SP212	-	-	7.7	100	7.6	100	-	-	-	○	-	底部
182	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末~12世紀前葉	K 20	SP069	-	-	7.7	35	7.4	35	-	-	-	○?	-	
183	小碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	K 20	SP137	-	-	4.2	60	4.1	60	-	-	-	○	-	底部
184	陶丸	尾張	尾張型第7・8型式	13世紀後半	J 21	SP337	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ6g	
185	山茶碗	尾張	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	H 22	SP596	-	-	7	45	6.6	45	-	-	-	○	-	底部
186	山茶碗	尾張	尾張型第6型式	13世紀前葉	J 21	SP127	14.8	25	7.3	50	7.0	50	4.8	-	○	○	-	
187	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉~13世紀初頭	G 23	SP534	15.2	90	8.3	100	7.9	10	5.2	-	-	○	-	
188	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉~13世紀初頭	G 23	SP534	15.7	80	8.4	100	8.1	100	4.8	-	-	○	-	
189	蓋	猿投	初期山茶碗第4型式	12世紀中葉	J 22・23	SP722	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	外容器の蓋?	

No.	器種名	産地	時 期	出土地区	遺構名	口縁部		底部		高台		器高	胴径	柄殻痕	糸切痕	板目痕	備 考	
						口径	残存率	底径	残存率	高台径	残存率							
190	小皿	尾張	尾張型第5・6型式	12世紀後葉～13世紀前葉	L 19	SP120	8.3	25	5.5	30	-	-	2.1	-	-	○	-	
191	小皿	尾張	尾張型第5・6型式	12世紀後葉～13世紀前葉	L 19	SP120	7.7	25	4.9	20	-	-	1.5	-	-	○	-	
192	小皿	尾張	尾張型第5・6型式	12世紀後葉～13世紀前葉	L 19	SP120	8.0	25	6.1	20	-	-	1.5	-	-	○	-	
193	小皿	瀬戸	尾張型第7・8型式	13世紀中葉～後葉	L 19	SP120	7.5	100	4.4	100	-	-	1.9	-	-	○	-	小石混入
194	山茶碗	瀬戸	尾張型第9型式	14世紀前葉	L 19	SP120	12	40	5.5	55	-	-	4.1	-	-	○	-	
195	甕	常滑	-	12世紀後半	L21	SP066	-	-	17.8	25	-	-	-	-	-	-	-	底部
196	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	J 22	SP673	7.7	100	4.6	100	-	-	2.0	-	-	○	-	
197	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	K 23	SP731	14.7	60	7.5	100	7.2	80	5.4	-	-	○	○	
198	灰釉椀	猿投	百代寺窯？	11世紀中葉～後葉	H 24	SP845	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部
199	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	I 24	SP841	8.0	100	4.9	100	-	-	2.0	-	-	○	-	小石混入
200	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	E 25・F 25	SP369	7.9	100	4.1	100	-	-	2.1	-	-	○	-	
201	壺・甕類	猿投	-	8～9世紀	J 23	SP729	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胸部破片
202	壺・甕類	猿投	-	8～9世紀	E 24	SP360	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胸部破片

包含層

203	杯	猿投	O-10号窯式	8世紀後葉	I 16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	底部破片	
204	灰釉椀	尾張	H72号窯式	10世紀後半～11世紀前葉	1区北半部	-	-	-	8.2	20	8.2	10	-	-	-	-	-	底部
205	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	1区北半部	-	-	-	7.8	75	7.4	75	-	-	○	○	-	底部
206	甕	常滑	-	12世紀中葉	J 16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	肩部
207	茶入	瀬戸	大窯？	16世紀？	1区北半部	-	3.2	-	-	-	-	-	-	5.8	-	-	-	口縁部
208	鉄絵皿	瀬戸・美濃	登窯第1・2小期	17世紀前半	1区北半部	-	-	-	8.1	-	7.2	-	-	-	-	-	-	底部 鉄絵
209	甕	常滑	常滑窯第6a型式期	13世紀中葉	1区北半部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	口縁部破片
210	片口	瀬戸	登窯第9・10小期	19世紀	1区北半部	-	-	-	7.7	-	7.4	-	-	-	-	-	-	底部
211	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	J 16	-	-	-	8.4	60	8.1	20	-	-	○	-	-	底部
212	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	J 16	-	-	-	7.7	100	7.3	75	-	-	-	-	-	底部
213	小皿	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	1区南半部	-	7.5	70	4.1	100	-	-	2.3	-	-	-	-	
214	山茶碗	藤岡	尾張型第10型式	14世紀末～15世紀初頭	L 16	東壁トレンチ	10.9	40	5.2	60	-	-	3.6	-	-	○	○	
215	山茶碗	猿投	初期山茶碗第3型式	11世紀末～12世紀前葉	L 16	東壁トレンチ	-	-	7.8	25	7.7	25	-	-	-	-	-	底部
216	小皿	尾張	尾張型第7・8型式	13世紀後半	J 18	溝	7.8	70	4.4	100	-	-	1.5	-	-	○	-	
217	甕	常滑	-	15～16世紀	J 18	溝	-	-	19.5	10	-	-	-	-	-	-	-	底部
218	天目茶碗？	瀬戸	古瀬戸後期？	15世紀？	I 18	溝	-	-	4.3	75	4.0	75	-	-	-	-	-	底部：削出輪高台
219	広東茶碗	瀬戸	登窯第11小期	19世紀後半	J 18	溝	-	-	6.6	-	6.1	-	-	-	-	-	-	底部：染付
220	秉燭	瀬戸・美濃	登窯第11小期	19世紀後半	J 18	溝	-	-	-	-	7.4	-	-	-	-	○	-	鉄釉
221	鍋	瀬戸・美濃	-	19世紀後半～20世紀前半？	J 18	溝	17.2	25	7.3	50	-	-	7.8	-	-	-	-	鉄釉：三足

試掘

222	山茶碗	尾張	尾張型第5型式	12世紀後葉～13世紀初頭	試掘調査	-	16.5	75	8.3	100	7.7	100	4.9	-	○	○	-
223	羽釜	常滑	常滑窯第3・4型式期	12世紀後葉～13世紀初頭	試掘調査	-	30.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	銅部最大径40.6cm

写真図版



写真図版2
空中写真・全景写真②



1 1区北半部全景（南から） 中央部の住宅地が第1次調査区



2 1区北半部全景（垂直写真：上方が北）

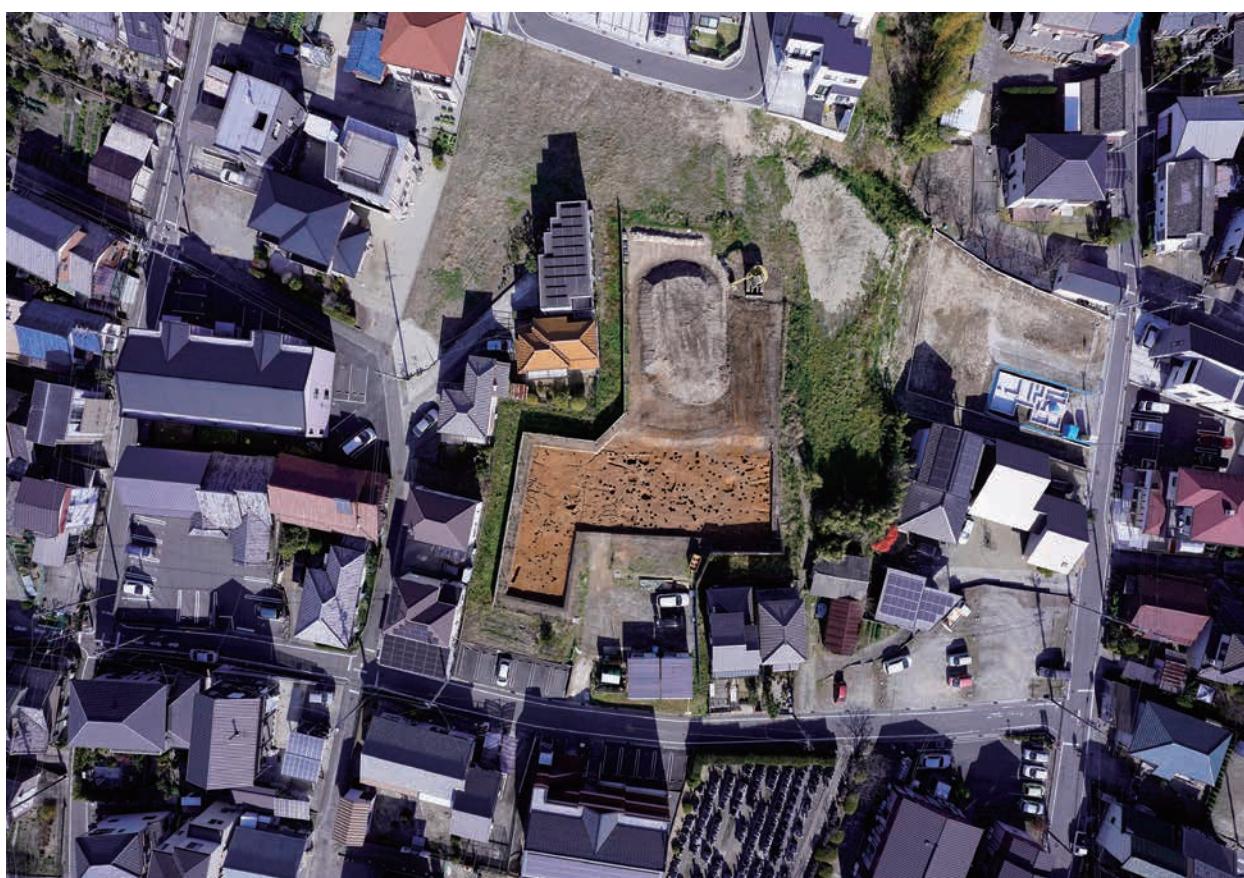


1 1区北半部全景（垂直写真：上方が北）

写真図版4
空中写真・全景写真④



1 1区南半部全景（北から）



2 1区南半部全景（垂直写真：上方が北）



1 1区南半部全景（南から）



2 1区南半部全景（垂直写真：上方が北）



1 2区全景（北から）



2 2区全景（北から）



1 掘立柱建物 SB01、掘立柱塀・柵 SA01（南から）



2 SB01-SP026 断面（西から）



3 SB01-SP027 断面（西から）



4 SB01-SP028（左）・051 断面（右）（西から）



5 SB01-SP031 断面（東から）

写真図版 8 挖立柱建物・塀・柵②



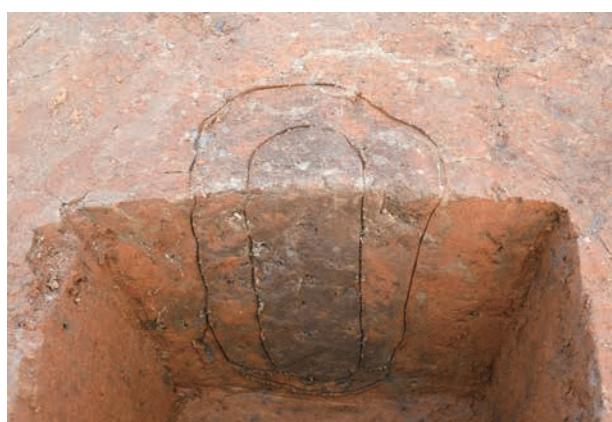
1 挖立柱建物 SB02・05、掘立柱塀・柵 SA02（垂直写真）



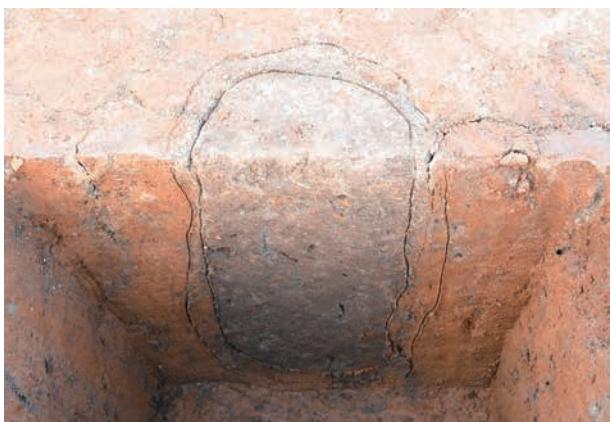
2 挖立柱建物 SB02・03・05、掘立柱塀・柵 SA03・04（垂直写真）



1 SB02-SP191 断面（南西から）



2 SB02-SP188 断面（南西から）



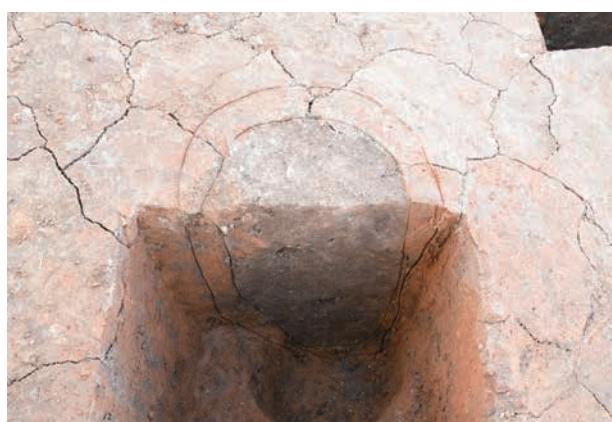
3 SB02-SP226 断面（南西から）



4 SB02-SP253 断面（南西から）



5 SB02-SP300（左）断面（南から）



6 SB02-SP233 断面（南西から）



7 SB02-SP221 断面（南西から）



8 SB02-SP584 断面（北東から）



1 SB05-SP330 断面（左端）（北東から）



2 SB05-SP335（左）・334（右）断面（南東から）



3 SB05-SP312（左）・313（右）断面（北西から）



4 SB05-SP327（左）・326（右）断面（南から）



5 SB05-SP237 断面（南西から）



6 SB05-SP684 断面（南西から）



7 SA03-SP521 断面（南西から）



8 SA03-SP566 断面（南から）



1 掘立柱建物 SB03、掘立柱塀・柵 SA03・04（北西から）



2 SB03-SP513 断面（南西から）



3 SB03-SP612 断面（南西から）



4 SB03-SP619 断面（北東から）



5 SB03-SP627（左）・628（右）断面（南西から）



1 掘立柱建物 SB04 (垂直写真)



2 掘立柱建物 SB04 (垂直写真)



3 SB04-SP134 断面 (北西から)



4 SB04-SP334 断面 (東から)



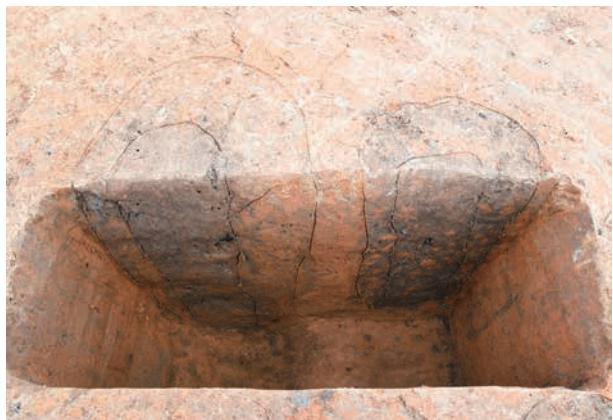
1 SB04-SP230（左）・231（右）断面（西から）



2 SB04-SP235 断面（南西から）



3 SB04-SP612 断面（南西から）



4 SB04-SP658（左）・659 断面（右）断面（南から）



5 SB04-SP627（左）・628（右）断面（南東から）



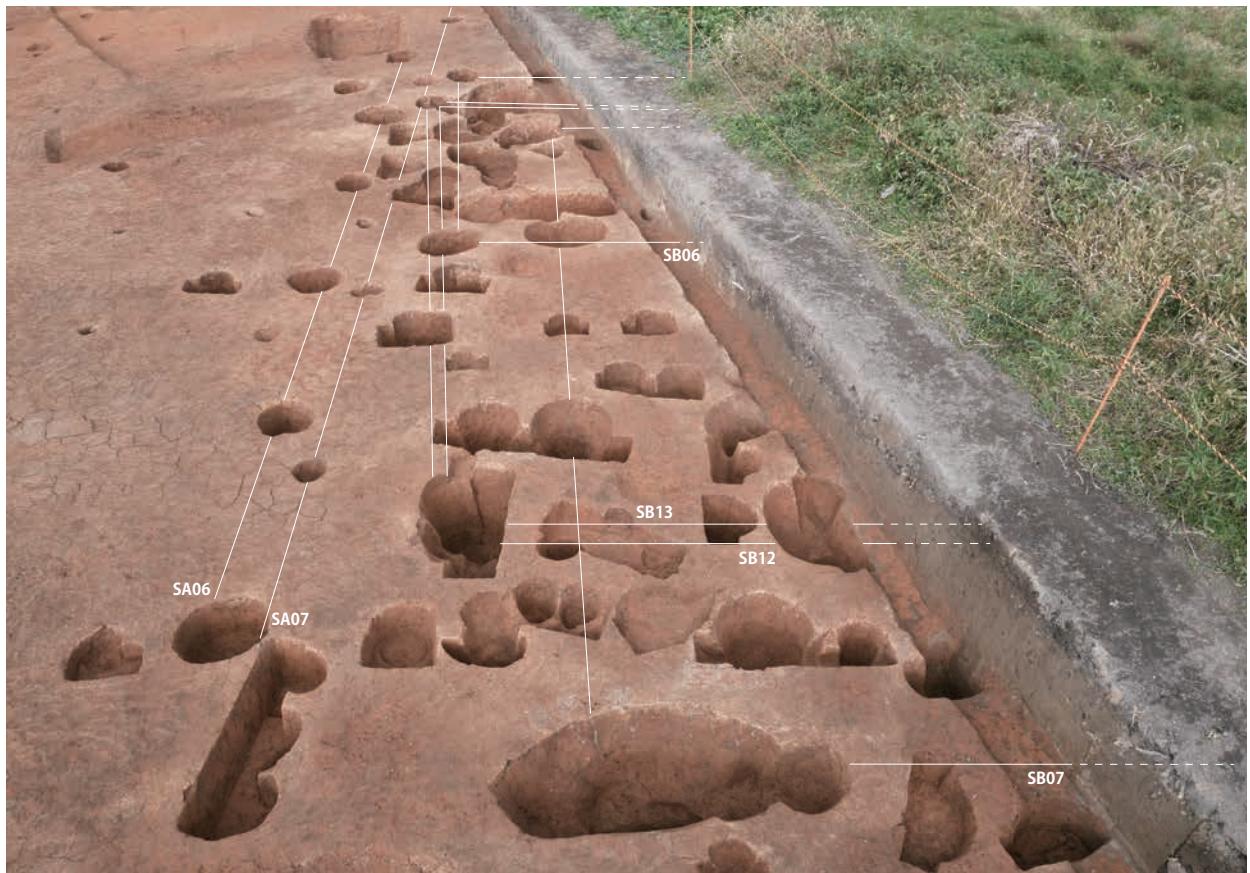
6 SB04-SP683 断面（南西から）



7 SB04-SP710 断面（南西から）



8 SB04-SP307 断面（南西から）



1 掘立柱建物 SB06・07・12・13、掘立柱塀・柵 SA06・07（南から）



2 掘立柱建物 SB06・07・12・13、掘立柱塀・柵 SA06・07（北から）



1 掘立柱建物 SB06・07、掘立柱塀・柵 SA06・07（東から）



2 掘立柱建物 SB07・12・13 掘立柱塀・柵 SA06・07（東から）



1 SB06-SP059 断面（南から）



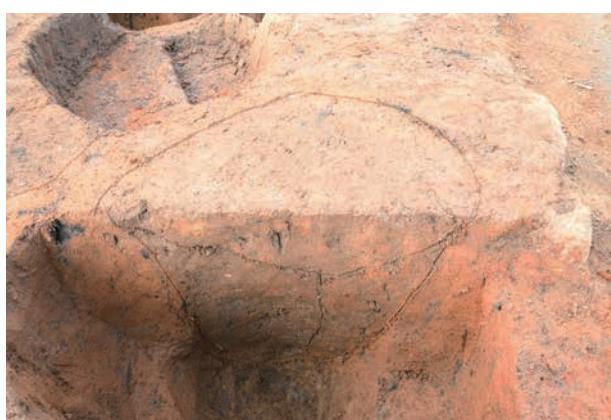
2 SB06-SP347 断面（南から）



3 SB06-SP073 断面（南から）



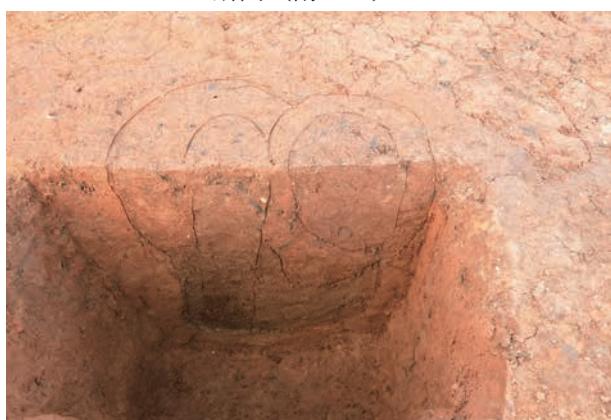
4 SB07-SP088 断面（南西から）



5 SB07-SP144 断面（南から）



6 SB07-SP890 断面（南から）



7 SB12・13-SP108（左）・107（右）断面（南西から）



8 SB12-SP159 断面（南西から）



1 SB13-SP145 (左)・142 (右) 断面 (南東から)



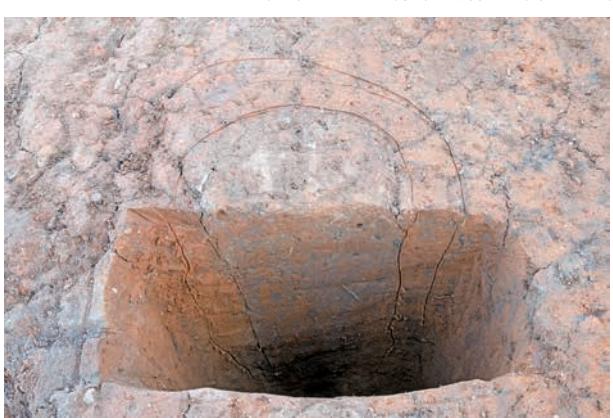
2 SB13-SP340 断面 (北西から)



3 SB12・13-SP116 (左)・117 (右) 断面 (東から)



4 SB13-SP121-2 断面 (南東から)



5 SA06-SP055 断面 (北西から)



6 SA06-SP056 断面 (北西から)



7 SA07-SP042 断面 (北西から)



8 SA07-SP115 断面 (南西から)



1 掘立柱建物 SB08・09、掘立柱塀・柵 SA08・13（南から）



2 掘立柱建物 SB08、掘立柱塀・柵 SA08（南から）



1 SB08-SP111 断面（北から）



2 SB08-SP762 断面（北西から）



3 SB09-SP133 断面（北から）



4 SA08-SP109 断面（南西から）



5 SA08-SP773 断面（南西から）



6 SA08-SP783 断面（北から）



7 SA13-SP744 断面（南西から）



8 SA13-SP718 遺物出土状況（西から）



1 掘立柱建物 SB10、掘立柱塀・柵 SA05（東から）



2 SB10-SP847 断面（北西から）



3 SB10-SP834 断面（北西から）



4 SB10-SP601 断面（南西から）



5 SB10-SP827（左）・826（右）断面（南東から）



1 掘立柱建物 SB11 (南西から)



2 SB11-SP429 (左)・428 (右) 断面 (北西から)



3 SB11-SP389 断面 (北西から)



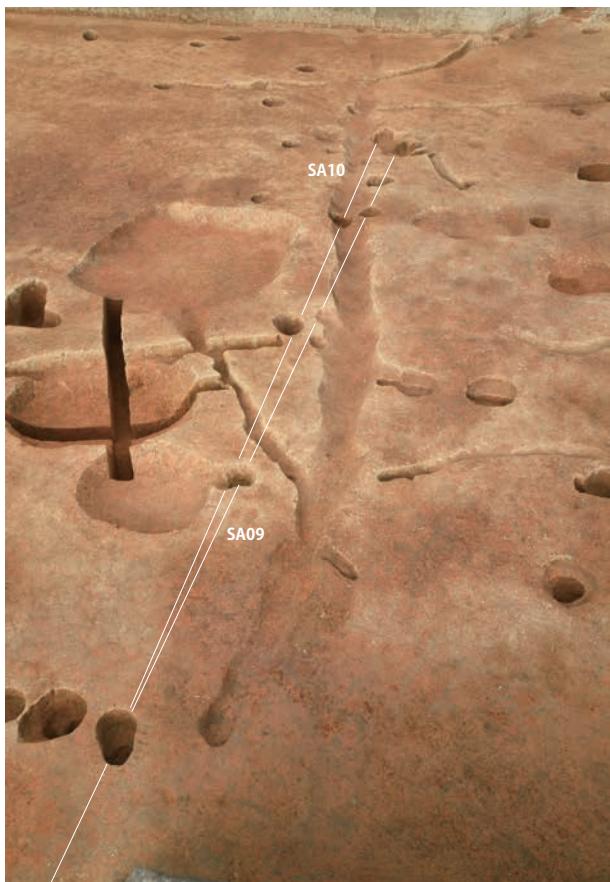
4 SB11-SP391 断面 (東から)



5 SB11-SP423 断面 (北西から)



1 掘立柱建物 SB11、掘立柱塀・柵 SA09・10・11・12（南から）



2 掘立柱塀・柵 SA09・10（南から）



3 SA09-SP430 断面（南西から）



4 SA12-SP375 断面（南東から）



1 区画溝 SD001・002（北東から）



2 区画溝 SD001（南西から）



3 区画溝 SD001 C-C' 断面（北東から）



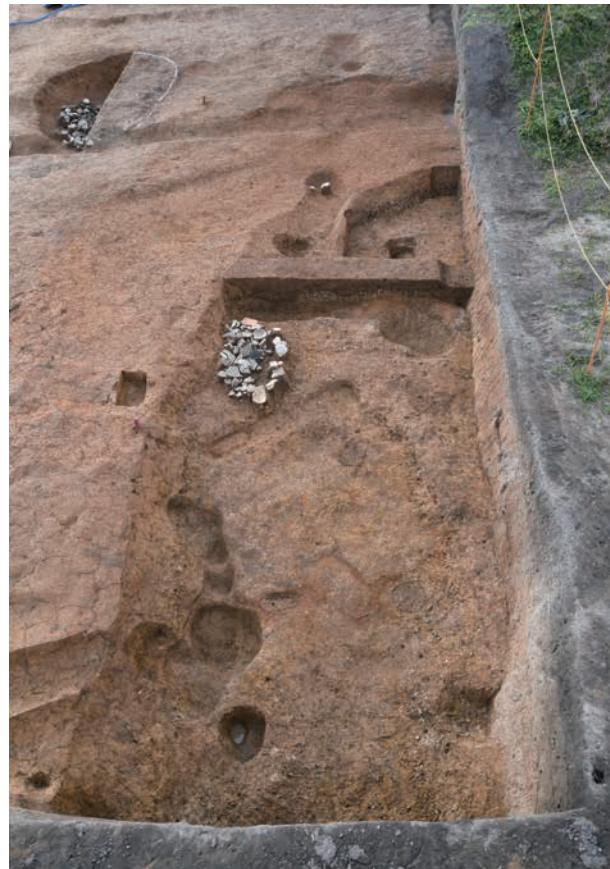
4 区画溝 SD001 遺物出土状況（東から）



1 区画溝 SD002 E-E' 断面（東から）



2 区画溝 SD008 遺物出土状況（南東から）



5 区画溝 SD008・010（東から）



3 区画溝 SD008 遺物出土状況（南東から）



4 区画溝 SD008 遺物出土状況（南から）



6 区画溝 SD008・010（東から）



1 溝 SD003・004・005（南から）



2 溝 SD003・004・005（南東から）



4 溝 SD003・004・005 断面（東から）



3 溝 SD003 遺物出土状況（北西から）



5 溝 SD003・004 断面（東から）



1 溝 SD025 遺物出土状況（南東から）



2 溝 SD025 遺物出土状況（南から）



3 溝 SD025 断面（南東から）



4 溝 SD025（南東から）



5 溝 SD031（西から）



6 溝 SD031 断面（東から）



1 溝 SD020 (南から)



2 溝 SD020 断面 (南から)



3 溝 SD030・029 断面 (東から)



4 溝 SD029 (左)・030 (右) (西から)



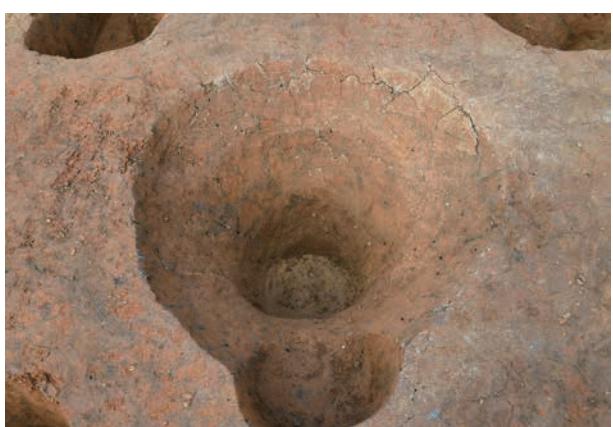
1 廃棄土坑 SK001 断面（南から）



2 廃棄土坑 SK001 遺物出土状況（北東から）



1 SK002 断面（南から）



2 SK002（南から）



3 SK009 遺物出土状況（南から）



4 SK009（南から）



5 SK010 断面（東から）



6 SK010（南から）



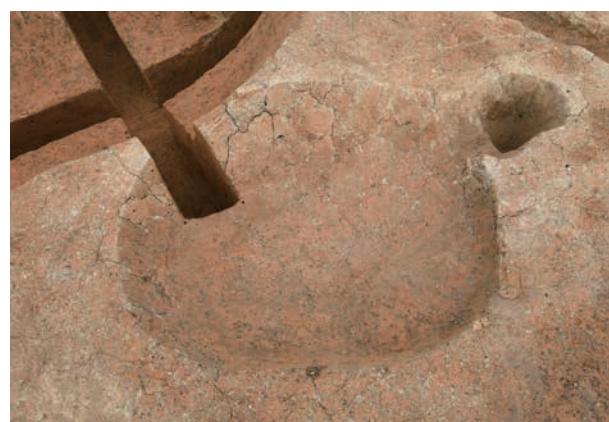
7 SK016（南西から）



8 SK018 断面（南から）



1 SK019 断面（南西から）



2 SK019 (南西から)



3 SK020・021 断面（東から）



4 SK020・021・041 (東から)



5 SK024 断面（南から）



6 SK024 (南から)



7 SK026 断面（東から）



8 SK026 (東から)



1 SK027 断面（北東から）



2 SK027（南西から）



3 SK028・ST002 断面（南から）



4 SK028・ST002（南から）



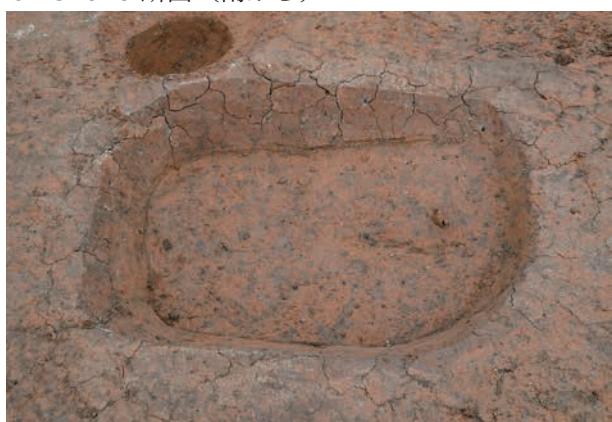
5 SK028・ST002（東から）



6 SK029 断面（南から）



7 SK030 断面（南から）



8 SK030（南から）



1 SK031 断面（南から）



2 SK031（南から）



3 SK033 断面（南から）



4 SK033（南から）



5 SK034 断面（西から）



6 SK034（南から）



7 SK039 断面（西から）



8 SK039（東から）



1 SK040 断面 (北東から)



2 SK040 (西から)



3 SK042 断面 (南東から)



4 SK042 (南東から)



5 SX002 検出状況 (南から)



6 SX002 出土焼土塊 (南から)



7 SX002 底面出土焼土塊 (南から)



8 同左アップ (南から)



1 土壙墓 ST001 遺物出土状況（垂直写真：上方が北東）



2 土壙墓 ST001 遺物出土状況（東から）



3 土壙墓 ST001 断面（北東から）



4 土壙墓 ST001（南西から）



1 1区北半部中央 西壁土層断面（東から）

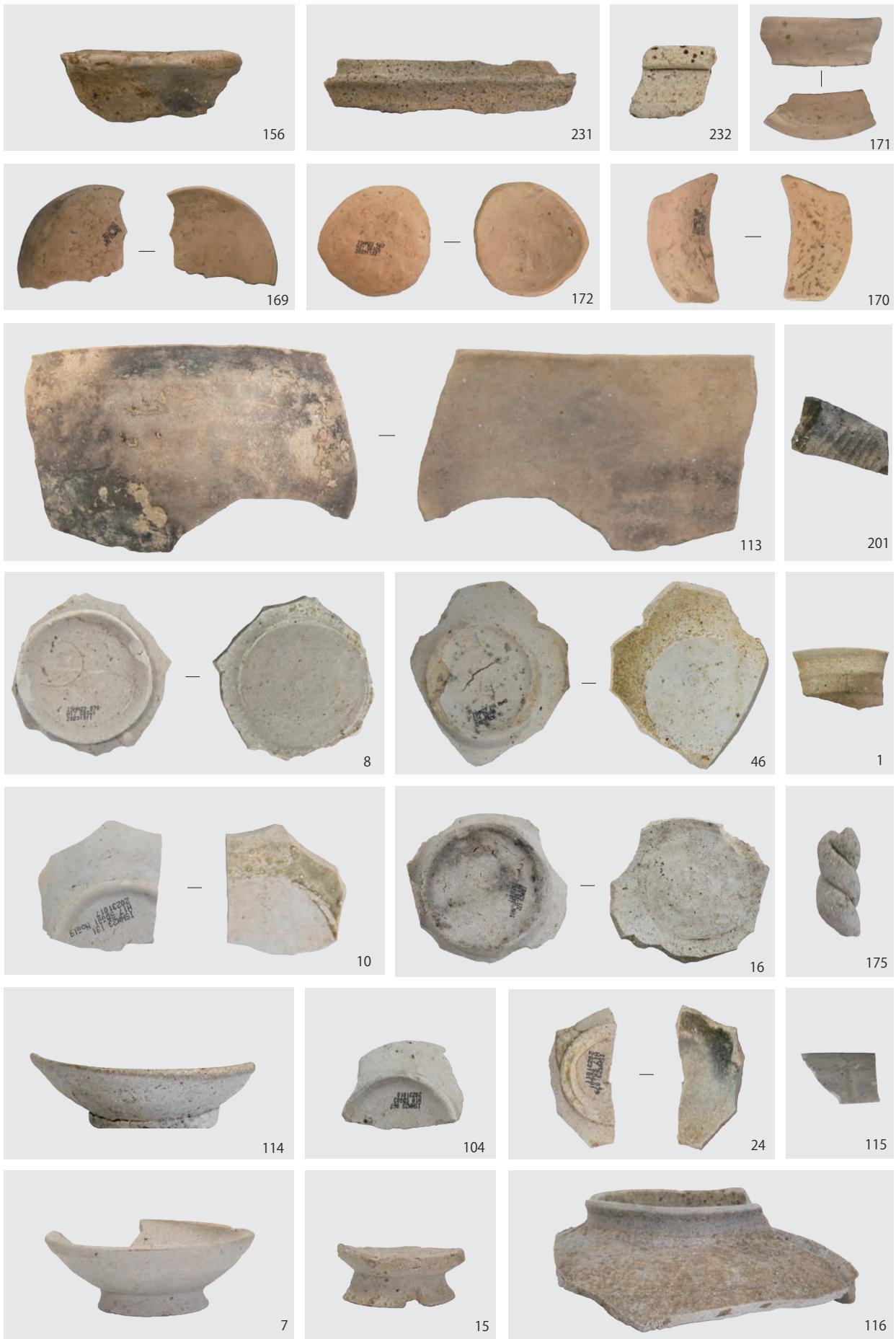


2 1区南半部南側 東壁土層断面（北西から）

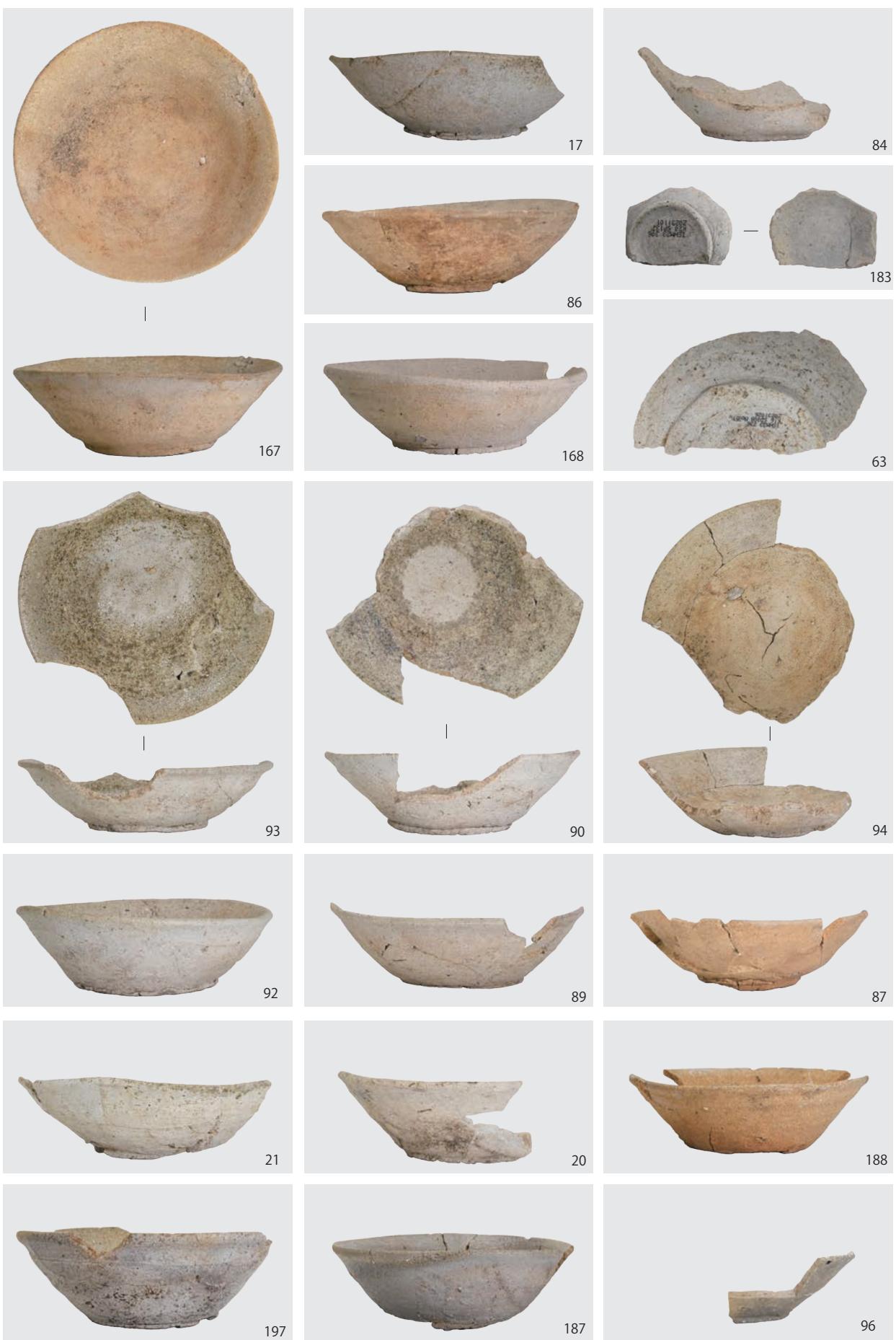


3 2区北半部 東壁土層断面（南西から）

写真図版 36
土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗類①



写真図版
37 山茶碗類②



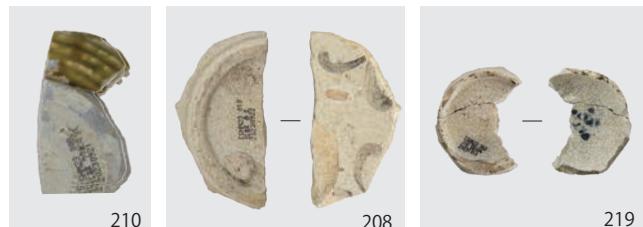




写真図版40 中世陶器②（常滑窯産）・近世陶磁器・土製品・石製品・鍛冶関連遺物



222



210

208

209



221



220

参考資料（試掘調査）



237



184



174



157



158



238



239



241



240

写真図版 41 繩文・弥生時代の遺物・動物遺体（貝類）・藤井宮御酒瓶子（参考資料）



参考資料 「藤井宮大明神御酒瓶子」銘短頸壺

報 告 書 抄 錄

令和7年3月 7日 印刷
令和7年3月 10日 発行

石丸遺跡 II

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

編集・発行 株式会社アコード名古屋営業所
〒498-0021 愛知県弥富市平島町大脇 12-3-202
TEL 0567-65-6082

監修 大府市歴史民俗資料館
〒474-0026 愛知県大府市桃山町五丁目 180 番地の 1
TEL 0562-48-1809

印刷 株式会社明新社
〒630-8141 奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地
TEL 0742-63-0661

